大正十五年五月十七日印刷
大正十五年五月廿二日發行

〔非賣品〕

日本古典全集第一回

榮華物語

中卷

編纂者　與謝野寛
同　正宗敦夫
同　與謝野晶子
裝幀圖案者　廣川松五郎

東京府北豐島郡長崎村一六二
發行者　長島豐太郎

東京府北豐島郡長崎村一六二
印刷所　新樹製版印刷所

印刷者　高瀬清吉

東京府北豐島郡長崎村一六二
發行所　日本古典全集刊行會
振替口座東京七三〇三二
電話番號小石川七〇九九

榮華物語　中卷　終

侍るなり」と聞え給へば、「尋常にも有らぬ人の大事にも有なるかな」とて御訪問に人奉らせ給ふ。此殿ばら退かで給ひぬ。院に參らせ給ひて、事の有樣ども申し給ひ、尼上に御消息聞え給ふ。御堂には、大納言殿より、「畏まり承け給ひぬ。日頃中納言のいと苦しげに物し給へるに、見給ひ扱ひつるに、籠りて物し給へば、みだり心地少し寛舒め思ひ給ふる程に、昨日より此處に侍る人の、いと重く煩ひ侍るめるも、靜心無う見給へ扱ひ侍るに、そが中にも、尋常にも有らず、月頃もあさましう惱ましげにてのみ過ぐし侍りつるに、また斯く侍れば、何事も思ひ給へられずなん。さても他人は宜しうのみこそ侍るなれ。こはやがて苦しげに物し給ふめれば、胸ふたがりてなん思う給へらるる」と申し給へれば、いみじういとほしき事かなと、また立ち返り、御消息聞えさせ給ふ。院にはやがて御法事は山の井にてぞせさせ給ひける。疎かならぬ程推し量り聞えさすべし。關白殿、内大臣殿より、僧前、然るべき事ども、皆聞えさせ給へり。日頃院方の限りとのみ何事も思し定めさせ給ふに、今に成りて、斯かる事どもの有れば、いとど僧の布施ども、數增さる事ども有るべし。僧どもいとおどろおどろしうて退かで給ふめりき。彼の大納言殿は例おはする所にも有らで、此頃は中御門に、今の肥後の守致光が家にこそ住み給へ。程なども狹き所にて、いと騷がしげなりとぞ。

き事なれど、罪深しと云ふ事をいと憂き事に思したりしかば、心苦しうこそは有らめ。くぬ島より初め、然るべき所所多く持たせ給へる宮なり。其れを好き御後見など有らば、いと目安くこそは有らめ。彼の大臣はいみじう戯しうて、故北の方亡せ給ひし程にも、便無き事ども聞えしや」など宣はすれば、「げに然る事ども侍る」など聞え給へば、院も「また有る節には御女の君をなん彼の大臣にもと宣ふと聞ゆるは」と宣はすれば、「東宮大夫こそ然樣に申すなれど、彼の大臣も、さして然樣に物せらるる事も侍らず、また此女も、まだいと幼う侍れば、何事も思ひ給へ掛けずなん。其中に母の世と共に篤しう侍るめれば、其れいといとほしき事に侍る。親無からん人の何事も然樣にはまだいと堪へぬ事多かりぬべきわざにこそ侍るめれ」など聞え給ひて、何事にか、御堂に召しければとて、打續き出で給ひぬ。御堂には「などかいと久しうは」とて、「彼の御法事はいと近う成りぬらんを、如何が定められたる」とのたまはすれば、「此二十日の程となん候ふ」と申し給へば、「日頃經ば何事も覺えねばなん。參るべけれど、參りても別に居たらんがいと輕輕なればなん、細かなる事どもをばえ掟て仕うまつらずや」とて、樣樣の物いと多く奉らせ給ふ由の御消息申させ給ふ。其次でに、「世の中いと心細ければ、斯かる里住せじと思ひ成りにて」などのたまはするままに、涙浮かせ給ふに、殿ばらもえ堪へ給はず。殿の御前、「中納言殿の赤瘡の後、餘病こそいとほしう聞け、如何が有る」とのたまはすれば、「怪しう侍らざなり。かの大納言靜心無う騷ぎ惑ひし、病められたりとなん承はる。昨日は彼の姫君こそ惱ましうし侍れ」と聞え給へば、「其れも此赤瘡ならん」などのたまはすれば、「然

さましかば、然りともこよなからまし。然樣に參り給ひて、思ふさまにおはせば、如何に嬉しからん。あさましう院の御名殘無きがいとほしきに、人のする事にもあらず、我心と無くて有るとは思ひながら、いと物狂ほしき事ぞかし」と宣はすれば「只今いと萬づにまだ幼くおはしますめり。げにこそ院のおはしまさねば、心憂く口惜しう、されども殿如何で猶此御事を儲立てんと深く思したり、誰も世平和まり侍りなば、とかくも侍りなん」と申し給へば、「また內の大殿の御匣殿なん東宮にはと云ふなめり。其れも然るべき事に候ふぞかし。大臣は如何でと思ひ給ふらん。然りとも殿の御心にこそ候ふらめ」と申し給へば、「殿は何れをも思し捨つべき事かは。げに然るべき事に侍れど、事の次で每には、今は唯だ姬宮の御事をのみなん思ふとこそ侍るめれ。東宮と固まりて皆おはしましつればこそ如何がと見奉れ、今は當りたる事にてこそは」と聞え給へば、「さらば何事にも仕うまつらんと思ふに、忌ま忌ましき事のみ有るぞ口惜しきや」と宣はすれば、「只今の事のやうにも仰せらるるかな」と打微笑み給ふ。殿ばら、「內の大臣は此東の對の宮をなん然樣にとこそは、卽ちより世には申すめれ。其れは如何が思し定めさせ給ふ」と申し給へば、「彼れは故宮のおはしましし折、然樣には彼の大臣も申されしと聞き、また宮も然もやと思召したりしに、あさましう月頃惱み給ひしかば、何事もえ思し立たずなりにしにやとなん見えし」と宣へば、「其れはさて如何がと思す」と聞え給へば、「ここに思ふやうは、さて物せさせ給はんも適へなん。女はいみじう思せど、高きも短きも、怪しうのみこそは人は申し思ひためれ。また尋常にては齋院などにこそは居給はめ。其れめでた

思すらん事、如何にと思ひ遣り聞えさせ給ふ。殿ばらも打泣かせ給ひて、「其れ然る事に候ふ。世の中定め無ければ、げに後れ奉らせ給ふやうも候ひなまし。いとほしう侍りなまし。女の御幸ひは唯だ斯からんぞ本意に侍るべき。其夜の御有様など世の例に添う侍るべきかし。殿も聞き奉り給ひて、いみじうこそ申し給ひしか」など聞え給へば、院、「春宮には一品の宮なん參り給ふべかなるなど、世には司召にすなるを、いで、其れ然も有りぬべき御事なれど、只今は、いつしかとさへ人の云ひ定むるも怪しからぬ事なり。此邊にも皆さまざま云ふなり。其れにても知りぬ、況いてともかくも人の申す」など宣はすれば、殿ばら、「いと物狂ほしき事にこそ候へ、萬づ誰れ誰れと有りとも、殿の御心より外に有べい事にも侍らぬに、只今は萬づ思されず、ひたみちに戀しさを思したるに、斯く世に人の物云ひ推し量り事の、いと事の外に心づきなう候ふなり」と申し給へば、「さて一品の宮は、兒にてほの見奉りにしが、いみじく美くしう見えさせ給ひしを、況して如何に生ひ成らせ給ひつらん。さても見奉り給ふや」と宣はすれば、「御心と見えさせ給ふ事は更に候はず、不意には自らほの見奉る折も侍り。いと美くしうこそはおはしませ。御髮の掛りざま、容體、御聲、氣はひなどしも、世に凡常は見え聞え侍らず。愛敬づき、貴にをかしう、美くしき御有樣にこそおはしませ。御顏などはえこそ見奉り侍らねど」と申し給へば、「然おはすらん。兒ながらもいみじう見まほしかりし御有樣ぞや。さても御長は幾らばかり」と宣へば、「四尺の御几帳に今少しは及ばせ給はぬ程に見えさせ給ふ」と申させ給へば、「哀れや、故院のいみじうし奉らせ給はんと思したりしものを、おはしま

は後に物など賜はしたれば、左衛門の内侍いと哀れに思ひけり。七日七日は諷誦僧供養せさせ給ひ、然るべき御具ども度毎に御誦經にしてせさせ給ひけり。院の女御の御法事いと近う成りぬれば、其事ども準備かせ給ふ。院は今は殿にともかくも申すべきにあらず、何事も唯だ此處にせさせ給ふべし。法眼どもなど日頃準備かせ給ひてければ、皆出で來にたり。僧綱なども外に煩かしう云ふべきにあらず、萬づ差し合ひたる御事繁きに、いと煩かしとて、唯だ親しき者どもにせさせんなど、殿ばらにも聞えさせ定め給ひける。「式部卿の宮、中務の宮など、然るべき事、云はぬ事など、恨み給ふめり。其れにも聞えてん」など宣はすれば、殿ばら、「げに然る事にて候ふ」とて、皆各然るべき事ども仕うまつり給ふ。次でに院の宣はく、「此御事の其折は片時有べうも覺えざりしかど、自ら程經れば、斯くて物を云ひ、何かと聞ゆるわざにこそ有りけれと、我ながらも心憂しや。さてもあさましう後れ奉りぬる事と、ひたみちに悲しう覺えしを、此頃の定にて思ひ遣らば、誰かは免るべき。されば如何にも如何にも、斯くて在る折に後れ奉る、なかなかいと好し。先だち奉る世も有らましかば如何に口惜しう、哀れに後ろめたう覺え給はまし。殿の御志の程も斯ばかりなりけりと見れば、唯だ如何にも如何にも志の限り仕うまつりぬべかめるなん嬉しき。唯だ此幼き人人の御有樣どものみこそいみじう心苦しけれ。他人を見んなど思はばこそ有らめ、此御爲めに疎かなる事も自ら出で來なん。今は唯だ斯くて在らんと思へば、堪へん程の限り育み奉りつべくなん。此幼き人人の御事に由りてこそ、尚侍の御事もいみじう覺ゆれ」など宣はせても、唯だ心弱げなる御氣色なり。また哀れ春宮に

に思召し置きつる事、一事も違はせ給はず、相偶はせ給ふ人はおはしましなんや。此三十年の程は實に思しむすぼほるゝ事無くて過ぐさせ給ひつるに、如何でかは斯かる事も混らせ給はざらん。此娑婆世界は苦樂共なる所とは知らせ給ひつらんものを、佛だに凡夫におはせし時、堪へ難き事を堪へ、忍び難き事を能く忍び給ひてこそは佛とも成り給ひ、衆生をも濟し給へ。今は此御女一所をこそ且つはいみじかりける我が亡者かな、許多の年月の念佛や徒らに成りぬらんと心憂く思召し、また抑返しては、是れいみじかりける善知識かな、樂ありて苦は有りとのみ知りたりつるを、樂も苦も共に知らせつる事と、萬づに方方に思し得て、眞心に念佛せさせ給はゞ、我が御爲めの善知識とも成り、亡者の御爲め、菩提の便りとも成らめ。年頃は驗者とこそ見奉り侍れど、あさましうはかなうおはしけり」と、世間の理を申し盡し給へば、「如何かは、然思ひ取りて侍るや。されど其れが唯だ戀しきなり」とのたまはするまゝにも、御目より水精を貫ぬきたるやうに續きたる御涙いみじうて、山の座主もよよと泣き給ひぬ。御念佛の折毎に、殿の御前皆參らせ給ふに、御涙もやがて度毎に續き立ちたり。いと悉う、「猶よろしき程に興じ聞えさせ給へかし」とのみ申す人人多かれど、聞し召し入るべきにもあらず。若宮の御乳母頼成が妻は煩ひて退かでにけり。其後は讃岐の守なりつるが女の、宰相中將の子生みたる、また大宮の御方の紫式部が女の越後の辨、左衞門督の御子生みたる、其れぞ仕うまつりける。大宮の御方には猶此程過ぐさせ給ふべきなりけり。哀れに鬱くしう見えさせ給へれば、つと抱き扱ひ聞えさせ給ふ。御堂の宵曉の御念佛もいみじう哀れなり。彼の小左衞門が

有様の、哀れに心細げなり。返す返すも見返らせ給ひて、法華経にまに念誦など忍びけり。たゞ御車返す返す哀れに見遣る。今宵の月はめでたきものと、昔より云ひ置きたれど、眞に明くはいと有り難うのみ有りけるに、今宵の月ぞ眞に夜半の空に昇りけん其夜の月斯くやと見えたる。風さへ涼しく吹きたるに、時時此あたり近う赤雲の立ち出づるに、我君の御有様と見ゆるに、為ん方無く悲しかりける。上の御前は御格子を下ろさで、やがて端におはしまして、「かの岩蔭は何方ぞ」など人に問はせ給ひて、其方ざまに眺めさせ給ふに、赤き雲の見ゆれば、先づ其れならんかしと、御衣の袖のみならず、御身さへ流れさせ給ふばかりなり。東宮は今宵も召したる事なればつゆ睡眠ませ給はず。彼の昔の楚王の夢を思し合せられて、あさましく思し惑はせ給ふも斯様にてやとぞ人申し云はせける。

　程も無く雲と成りぬる君なれば昔の夢の心地こそすれ

返す返すと云へど、猶思し掛けさせ給はざりつる御有様のみ心憂し。夜も明けぬれば、殿の御前には木幡へと思召せど、さまでは如何でかなど、人人聞えさすれば、木幡へは別當僧都、播磨守泰通、すべて然るべき人人ぞ参りける。殿は御堂におはしまして、やがて上の御方におはします。月頃は然ても此御有様にて過ぎつれば、慰むやうも有りつるに、今は斯くぞかしと思召すに、むげに思し萎れさせ給へれば、山の座主参り給ひて、「いみじく思召したる事なれば、聞えさするにつけても、心得きやうに侍れど、猶如何に思召し取らせ給へるぞ。今はとざま斯うざまに思してこそ慰めさせ給はめ。此世に御幸ひも御心掟ても、殿のやう

の女御崩せさせ給ふ。また斯くおはしまして、斯く一天下の震駭りたる、是れこそは天變なりけれ。今は何事の有るべきぞと見えたる。おはしまし著きぬれば、殿に年頃使はせ給ひて睦まじう思召さるるままに、今の信濃守やすより、大炊頭爲基、備後の前司きんのりなど、すべて唯だ斯樣の人をぞ萬づにさし預けさせ給へれば、げに火水に入りて仕うまつれど、さすがにしも知らざりける事にて、夜も更け鷄も鳴きぬ。あさましう月の明くめでたきに、許多の人人參り混みたるに、殿の御隨の哀れに悲しきにぞ許多の人もえ忍び敢へざりける。煙にて上がらせ給ふも、やがて靡きて、何れの雲とも御覽じ分くべくもあらぬに附けても、御胸塞がりて、分明にも御覽ぜられず。斯かる程に、船岡の南の方に、火こそ仄めきて、尋常ならず哀れなる事ぞ見ゆる。人人見やりて、「哀れ彼れ見よや、早や又斯くも有りけるは」など見やり騷ぐに、或る者の申すは、尚侍の殿に小左衞門とて、いみじうらうたき者に取り分き思したりしが、日頃彼れも煩ひてえ參らざりしに、此亡せさせ給ひし日ぞ參りて見奉りて、退かでにけるままに、同じ日やがて亡せにけるが、折しもこそ有れ、今宵しも此邊近うするなりけり。人人哀れなりける由を云ひ思へるに、女房車も隱かに問ひ聞きて、いみじう哀れに見遣る。高き短き斯程の御有樣にこそこよ無けれ。此事のさま、煙にて昇る程は見え分かぬわざになん有りける。殿ばらなどの哀れがりのたまはするを、殿の御前にほの聞し召して、「哀れ同ふべかりける事にこそ有りけれ、物などを遣るべかりけるものを、人よりも哀れと思したりしかば、同じ所にや參りたらん」と思召すも悲しうて、泣く泣く御覽じ遣れば、火のいと仄かにて、人なども多くも見えぬ

止み空晴れて、風打吹き、道なども唯だ乾きに乾くに、いとめでたし。是れにつけても、殿の御歩りきは昔もかく道いと遙き事に申し思へり。秋の日もはかなく暮れぬれば、道の程もいとゞ遙かなり。又えすがすがしうおはしまし通らじとて、宮宮、時に國の絹を青き時とて御供し申せば、少少の事こそ如何かはある。混して然ばかり嚴しき御有樣、いと所狹げなり。然るべき四位五位などの御供に仕うまつるは、さすがに御の裝束をしたるものから、畏たてげなる者どもも上に着たり。御車に附きたる人人、御前に火ともしたる人など、すべて二三十人の程の人の裝束は、皆同じさまに爲たり。殿の御前も、哀れに悲しう歎りたる御供の女房車多くも有らず、二つぞ仕うまつりたる。其れも御裝束はしう着たるが上に、またつ袍の衣、を着て、其れも涙に溺るばかりなり。御念佛の僧ども、山方、奈良方、然るべき所所、數知らず打群れ打群れ參り達り。月も曇り無くめでたし。何事もいみじう信調へさせ給へり。世の中の人は一條の大路より斯く道揃ひおはしまさ程なども、いみじき見物に思ひたり。關白殿は御忌の日に當らせ給へれば留まらせ給ひぬ。內の大臣ぞおはします。其れも然こそ悲しき事ぞかし。されど殿の御前のおはしますが後ろめたさに仕うまつらせ給ふなるべし。哀れに悲しとも疎かなり。おはします程の有樣、げに疎かに然るし。西に大宮よりさし過ぎ、東は京極を際に續き立ちたるを、又おはしましつる法興院までぞ有樣は續きたる程推し量るべし。また世の中を皆見たる女、翁、また斯かる樣なる事は見ずなどぞ、泣く泣く申し思へる。年頃いみじき天變とてののしりつるは、げに怪しくやは有りける。去年は皇后宮崩れさせ給ひぬ。立ちのぼる月には院

ろものをとて、山山寺寺の僧どもに湯浴むさせ給ふ程も、いとおどろおどろし。殿の御前思召し侘びては、

　かの世には我より外の親や有らん然てだに思ふ人を聞かばや

小式部の乳母、

　心だに此世に協ふものならば在すらん樣も行きて見てまし

是れのみならず、またまたも有るべし。歌は心を述ぶと云ひてこそ、をかしきにも、めでたきにも、哀れなるにも、さまざまの人の先づ詠み給ふものなめればなるべし。斯くて十五日に成りぬれば、其また夜に檢非違使ども召して、京極より上らせ給ひて、一條より西ざまにおはしますべく、道造り掃はすべき由仰事のたまはせても、岩蔭には萬づ運び仕うまつるべき由の仰事のたまはすとても、御淚を拭ひ敢へさせ給はず、おぼほれ泣かせ給へば、仰事承る人人の心の中どもも忍び敢へぬさまなり。殿の御心にも、此度ばかりの事にこそ有れ、今はいみじう思ふとも何事をかは仕うまつらんずると思召して、萬づ爲盡させ給ふ。日の暮るるままに、法興院の內ののしり騷ぎたる有樣、哀れ悲し。御參りや御產屋など度度ののしりし御準備の樣に引き違へ、悲しき事限り無し。此殿ばらをば更にも云はず、然るべき上達部皆參り混み給ひて、さすがにえ座には著き給はぬものから、然るべき所に立ちさまよひ、榑材木の上などにおはし並らばせ給へり。雨降りて日頃も煩かしげなりつるに、夜より雨細やかに降り出で、其人人濡解けたらんは然るものにて、殿を初め奉りて、如何でか步ませ給はんずらんと、世の中の蓑笠など數を盡し騷ぐ。申の刻ばかりに雨

乳の程のさま過りたらんやうに美くしかりしに、御乳の尖は打赤みたるに、御帶の程いと鮮麗なりしなど、萬づに戀しく、また如何でかは夢にだに分明に見え給はば、慰むやうも有りなんかしと、心憂く思召し入りたり。大宮いと恐ろしく思召して、御修法など御祈りどもの事掟てのたまはす。參り初めさせ給へりし折などは、我が御年も若う物恥かしう思召されしを、此年頃は萬づ打解け、心をかしう、有らまほしかりつる御中らひを、侍ひつる女房まで戀ひ聞えさせぬ無し。尚侍の殿の女房は、やがて若宮の御方にと、大宮より御事賜はす。其れにつけても夢の心地すべし。兒どもは湯瘦など云ふものして、日頃は痩するものぞかし。若宮はやがて肥えに肥えさせ給へるも、哀れに、物思し知る程なりせば斯からましやはと見えさせ給ふ。殿の御前は世の中を深く憂きものに思召して、「今は里住み、更に更に深う山に住まん」とのたまはせて、眞の道心發させ給へり。御乳母の夫播磨守泰通、はかなき魚、菓物、何の物も見ゆるをば夜夜中分かず、先づ先づと運び參らせし事の絶えにたれば、哀れに悲しく云ひ續け戀ひ奉る。殿の御前の今年は愼ませ給ふべき御年なれば、御命延びさせ給ふべきなめり。いと斯かる事を思召すはと、世の人申し思へり。世の重鎭にておはしませば、何れの民も唯だ殿の御命乞ひをのみ申し思へり。民部卿など參り給ひて、「猶少し思し慰めさせ給へ。此事のみ世に始めたる事ならず」と聞え慰め給へば、「さこそは思ひ給ふれ、備へ然らぬ人人も多くおはし侍れば、命は惜しくこそ侍れど、唯だ是非無う戀しきに、侘び侍るぞや」とのたまはするには、げに誰も誰も忍び敢へ給はず、また泣き給ひぬ。斯くて亡せ給ひぬる人は、いと煩かしう思さるな

も具しつつ御車を廻らせ給ふ。御饌など聞し召す。御まかなひは御乳母の小式部の君ぞ泣く泣く仕うまつる。哀れに悲しき事多かり。萬づよりも殿の御前のつゆ御臺も聞し召さず、弱らせ給ふを、いと恐ろしき事に且つは殿ばらも宮宮も歎かせ給ふ。上も我が御堂に渡らせ給ひて、何事をかは、唯だ涙に沈みて過ぐさせ給ひけり。春宮、中宮の大夫達參り給へれど、え上り給はず、殿の御有樣を誰も後ろめたく思し歎かせ給ふ。山の井の女御殿は、さても月頃然ばかり悩ませ給ひて、限り限りと見えさせ給ひつれば、道理におはしますに、此の御事ぞいとゆゆしう、思しも掛けざりつる事なるや。面白き櫻の咲き調ほりたるが、俄かに風に殘り無く散りぬるにぞ、いと善く似させ給へる。世の中に斯かる事は無きにしも有らず。其れは殿の御妹の院の女御殿と申しけるは、正月の庚申に鷄鳴くまでおはしまして、曉に御脇息に押掛らせ給ひて、やがて亡せさせ給ひにけり。其れは俄かにいみじき方こそ有りけれ、人の心を驚し惑はせ給ふ方は無かりけり。是れは月頃いみじう數限り無き御祈りいみじかりつるに、恐ろしかりつる御惱も怠らせ給ひて、めでたき男御子生れ給へる程などは、斯くあさましかるべしとは誰かは思し掛けつる。猶猶いと云ふ甲斐無くいみじきや。若宮のいと美くしく物きららかにおはしますに附けても、大宮はあさましう哀れに悲しき御形見、疎かならず思召さる。東宮には思し歎くとも世の常なり。其儘の覺束なさをだに、さばれ、斯くおはしますべかりけるに、いと氣近かりし御對面の日頃の程なども、昨日今日の事と思し出でられて、御涙も止まらせ給はず。京極殿にて何れの日ぞや、二藍の御衣に紅の御袴奉りたりし御胸のわたり、御

させ給ひて、六日の夕に法興院に渡らせ給ふなりけり。御車かき下ろして、おはします對の南の東の方より出でさせ給ふべきなりけり。さて御車にかき載せ奉る程など、殿の御前も物覺えさせ給はで、臥し轉ばせ給ふ。關白殿、内の大臣などは御衣櫃と云ふ物を擡かせ給ひながらこそ立ち躍り泣かせ給へ。參る女房も、留まる女房も、大方殿の内の人諸聲にののしりたるは、いとゆゆしう悲し。御車に四位五位仕うまつれるを、殿の御前、御車の後に歩ませ給ふ。いと哀れに果なく見えさせ給ふ。上の御前は、「あないみじや、許多の中を引き離れておはして、如何なる者の樣を見給はん」と泣き焦れさせ給ふ。法興院と此殿と遠からぬ程なれど、殿の御前、おはしましもやらせ給はず惑はせ給へば、片つ方の御手に、關白殿扶へ奉らせ給ひ、今片つ方は三井寺の僧都扶へ奉らせ給ひて、御腰をば内の大臣押し奉らせ給ふ。然るべき殿ばら、殿上はしまさせば皆仕うまつり給へり。いみじき事に山の座主の杖に掛りて、え歩みやらで、泣く泣く仕うまつり給へる程も、萬づ穩かならず見えたり。道すがら哀れいみじくておはしましぬ。法興院の北に渕富の坊と云ふ庵に、御車ながらかき下ろしておはしまさせ給ふ。其側なる屋にぞ殿の御前はおはします。日頃御几帳、御屏風の隔たりだに無くて、萬づに扱ひ聞えさせ給ひつれど、限り有るわざなりければ、御輿におはします程、いみじく哀れに悲し。女房おはしまさすやうに侍ひて、萬づ御裝束など例の作法に參り据ゑたり。殿の御前大殿籠らぬままに打おはしましつゝ御車の、御簾と云ふ物に押掛りて、何事にか有らん、打泣きて、泣く泣くのたまはせつつ明させ給ふ。其後、曉には懺法、夜さりには御念佛と、然るべき僧ど

ひ參りて、阿波の前司頼成が妻の、今の大貳の女なる、其れ據て御事ありしかば、卽ち參りにし、御乳母にて侍ふ。とまれ斯うまれ、大宮こそは取り扱ひ聞え給ふべけれど、日次でなど擇りてとなりけり。夜さりは殿の御車に御裝束せさせ給ふ。例の人の御歩りきに、此度は有るべけれど、またいと事の外なり。殿は唯だ臥し轉び泣かせ給ふより外の事無し。道理ながらも、いみじかりける御思ひかなと見えさせ給ふ。暮にはやがて納め奉りてこそは御車におはしますべければ、上の御前は御帳の内に入らせ給ひて、泣く泣く見奉らせ給ふ。斯くて亡せさせ給へれば煩かしう思召さるらんとて、小式部の乳母萬づに下り立ちて、御湯殿せさせ奉る。此度ばかりの御宮仕と思ひつつ云ひ續け泣く聲ぞいみじきや。上の御前の御身を探らせ給ふに、いと冷かにおはします。是れこそは例の人に變らせ給へる事に有りけれと、殿も上も、「我を捨てては何方、何方」と泣き喚ばせ給ふ事限り無し。御衣など着更へさせ奉らせ給へり。萬づ出だし奉らせ給ふ程ぞ、げにいみじきや。日暮れぬれば急ぎ立ちて入らせ給ふべき儀式持て參りたるも、又どよみたり。然るべき睦じき限りの人人して入れ奉る。殿も上も、目も昏れて見奉らせ給はず。「いであなあさまし、ゆゆし」とのみ同じ事をぞ繰返し云はれける。さて柩に入れ奉りて蓋を固めなどし奉る程は思ひ遣るべし。法興院に上の御前もと思召せど、其れはた便無かるべし。御送葬までこそ殿も彼處におはしますべけれ。御堂に歸らせ給ふべければとて、上の御前は我が堂にぞ渡らせ給ふ。程も遠からねど、さて火ともし時に成りぬと申せど、如何でかすがすがしからん。斯く成らせ給ふ事は萬壽二年八月八日、御産成りて五日、亡せ

しう経させ給へるやうなるを、殿の御前、上の御前、今ぞ泣かせ給ふ。「若宮、あながちに若う幼けなく稚き御身の、何方とて捨て離れては我等を捨てておはしぬるぞや、いみじき鬼神なりとも人の許さぬをば奪て行かざんなるものを、返し給へ、返し給へ」と泣き轉ばせ給ふに、御乳母小式部の君は、「此宮をば捨てさせ給ひつるか、御供に参らん、参らん」と泣きののしる。年頃仕うまつりつる女房の若きは若きにつけて戀ひ悲み奉り申す。年長たるは其方につけて云ひ續け泣きたる聲ども、げにげにと聞えて、すべて堪へ難く思ひて惑ふ人多かりき。明けぬれば、昔平君しに遣はしたれば、参りたり。然るべき事ども關白殿泣く泣く問はせ給ふ。殿の御前は大方物も覺えさせ給はねば、御禁くておはします。昔平も涙に咽びて、何事もすがすがしう申さで、漸許あらひて申す。「今日こそは先づ斂め奉らせ給ふべき日にて候ふめれ」と申せば、「然ばかし長くておはしますべきにもあらず、何方にか率て奉るべき」と問はせ給へば、「法興院に着き方に候ふめり、今宵法興院におはしまさせ給ふべう」申す。御葬送は此月十五日と定め申して、岩蔭にせさせ給ふべきなど、細かなる事ども申しつつも、哀れに悲しき御事どもにも念じ敢へず、上の袂の袖も絞るばかりなり。殿の御前に此事どもを悉しく申させ給へば、「然ば、夜さり参れ」と仰言給はりて退かづる程、一昨日、御蔵の職ありて男御子平かに生れ給へる、是れに障る事に何事なはとて、雜居はりて退かでし昔平とも覺えず、唯た二月の程に斯く斯くこそ有りけれと、泣く泣く退かでぬ。日暮し上がる程に、夜さりの事ども設けさせ給ふ。若宮は固ちより、雅樂頭に通る直盧におはしまさせて、内裏の女房、殿の宮旨など遣

ゆゆしとは是れをだに云はでは何事をかはと見えたり。關白殿、內の大殿、泣く泣く參り寄りて、萬づに抱へて御湯參らせ給へど、返しつつ聞し召さず。あさましき御事をば歎きながら、斯うおはします事をかまた騷がせ給ふ。關白殿の產養の物どもは、申の刻ばかりに持て混みて、樣樣立ち彷徨へど、斯かれば如何にと云ふ人も無し。また事の由をだにえ申さぬ程、さて是れを如何にせん如何にせんと持てさまよふ。殿の中親しきは道理なり、物の哀れをも知るまじき者ども淚を拭はぬは無し。斯く云ふ程に戌の刻ばかりに成りぬれば、殿も生き出でさせ給ひて、大方只今は御淚も出でやらず、在るにも有らでおはします。世のはかなさ是れにつけても哀れにいみじ。一昨日男御子生れ給へりとて、世にののしり、めでたう、內までも聞し召して羨しげに思召されたり。今日斯く思ひ掛けぬ夢を御覽じて、然は心憂きわざかな、何事も常ならぬ世は例の事ながら、猶此御事はすべてあさましう、如何なる者、斯くし奉りつらんと、萬づに佛神をつらく情無う覺え給ふ。秋の夜と云へど、人のとかく眠ることこそ有りけれ、やがて斯くて明けぬ。暫しは御枕も何も同じ樣にておはしまさせつれど、夜も隔てぬれば、いとあさましう思召しながら、御几帳、御屛風など樣殊に立て成させ給ひなどして、殿の御前にも、上の御前にも、御殿油を取り寄せて近う掲げて見奉らせ給へば、聊か亡き人とも見えさせ給はず、白き御衣の薄らかなる一襲奉りて、まだ御帶もせさせ給へり。御乳はいと美くしげにおはしますが、いたう硬るまで張らせ給へれば、白う圓く、をかしげにて臥させ給へるに、御髮のいと煩たう多かるを、いと緩う引き結はせ給ひて、御枕上に打置かれたる程、いとおどろおどろ

無う御調度どもに運び出させ給ひて、更にいと堪へ難げなる御氣色にて、末の類ばかりに成りぬ。雨さへいと強くて降れば、萬づ鳴り合ひたり。世の中には様々にゆゆしうさへ申すたれば、宮々の御使頻りて、春宮よりはた隙も無けれども、御返りはかばかしく聞えさせ給はず。殿の御前、御帳の中に見奉らするやうに、つと添ひ臥し給ひて、泣く泣く抱へ奉らせ給へり。大かた誰も誰も物覺ゆる人無し。弱らせ給ふ御氣色もやがて失せもて行くやうなり。「あないみじ、心憂きわざかな」と思しながら、萬づを修法させ給ふ程に、隣の類ばかりに、すべて唯だ數の聲ばかりにぞ通はせ給ふに、許多満ちたる僧俗、上下知るも知らぬも無く、觀音を念じ奉りて、額を著き、ののしる。えも云はぬ者まで涙を流して、「觀音、觀音」と申さぬ無く、唯だ額に手を當てて、立ち居禮拜し奉らぬ無し。今は加持の聲も聞えず、御讀經の聲も聞えず、「觀音」とのみ申しののしる。一人は一聲を申すだに如何がは驗おはするなるに、況して許多の人の同じ心に一時に念じ奉る程は然りともとこそは見えさせ給へ。然れどすべて限りに成り果てさせ給ひぬ。御年十九、あないみじ、あさましと思召す。殿の御前は、やがて差し退いて、あさましくて臥させ給ひぬ。主計頭守道、おはします對の上に御衣を持て上りて、萬づを申し續け招き奉る。すべて限りにおはしませば、大宰大ぼら、怠むなと僧達をも頼もしう云ひ行はせ給へば、僧も同じ人なれば、泣く泣くいみじ難しと思ひ、「觀音、觀音」と申しながらも、又いと御無う傳をも恨み申して、おげに心地も惱みにたり。上の御前は唯だ平持の御身に一つに隔がれて臥させ給へり。女房どもよみ泣きたる隙、制すべき方も無く、いみじく

物怪のゆゆしかりつれば、いみじう弱らせ給へるに、物もつゆ聞し召さず。御物怪その心地音無く、皆人弛みたり。且つは恐ろしと思召しながら、いと斯ばかりの御宿世なれば、誰も猛う心安く思されたり。日頃御湯殿も無かりつれば、明日ぞ御湯殿あるべければ、明日に疾く成れかしと、湯浴みて爽かに成らんとのたまはす。御前にも許多の人睡も寝ず、互に起きつつ、其事と無けれど萬づに仕うまつり明かす。關白殿には、明日の事をいみじく準備がせ給ふに、夜も明けぬれば、殿の御前、夜さりの御讀經立ち騷ぎせさせ給ふ。御讀經、御修法の僧などをも今宵は少し遠く退けさせ設備はせ給ふ。日頃埋もれたりし池、遣水なども、昨日皆掃はれて、心行く樣なり。萬づ設備ひ急がせ給ふ。若宮の御湯殿も今日は疾くなど催促し仰せらるるに、辰の刻ばかりに子持の御前いたう打嘔吐ばせ給ひて、いと苦しげなる御氣色おはしますを、御前に侍ふ人人、如何に如何にと見奉りて、殿の御前に「斯く」など聞えさすれば、僧なども遠く退けたれば御物怪のするなめりとて、御讀經また然るべき僧ども皆參りて、同心に、いとおどろおどろしく、例の物怪、さまざまの人人召し出でて、或るは傍より叫びののしり出でて、僧達皆邊邊に加持すれば、例の揺動り合ひたる樣も、どよみにたり。いたう日頃弱らせ給へるに、御物怪の取り憑き奉りにければ、すべて御氣色事の外にて、物もはかばかしくのたまはせず。堀河の大臣、女御などの御靈、すべてゆゆしき事どもをぞ云ひ續けののしり給ふ。御帳の外に御枕の傍の方にて、心譽僧都、權僧正など加持參らせ給ふ。御讀經にも聲好き僧どもの限りは御前近く侍ひて、聲も惜まず、また何れの時にかと道理にいみじ。御調度ども殘る

りて、世にめでたき気色にて皆退かでぬ。さて御産養は、三日の夜は関白殿せさせ給へり。五日の夜は入道殿、七日の夜は大宮せさせ給ふべし。皆御定め成りぬ。関白殿かねての御用意ありつる事なれど、また俄かなるさまに思召されて、急ぎ出でさせ給ひて、いみじき事ども掟てのたまはす。色紙などは兼て書かせ給へれば然様の事は心のどかなり。子持の御前の儀などは皆有べい様にし置かせ給ひて、唯だ物清るばかりの程に有れども、猶心慌ただしうて、手を分かたせ給ふ。女房の白き装束ども、白き衣一襲に綾物、羅などを上着にて、裳、唐衣、えも云はぬさまざまの物にして、箔細、斯かる事どもに通りにしかども、今見る折には珍らしう綺麗に見ゆる、例の事ぞかし。侍の者は更なりや、大宮の御方の女房さへ織り縫ふ縁渡されたるぞいみじき見物なりける。若宮の又の日の御湯殿の有様いみじうめでたきに、四の御前は世に慎ましげに思召して、御屏風の上よりさし覗かせ給へれば、若き人人、打米を散撒すれば、御前まいの程もをかしく見えさせ給ふに、子持の御前此御湯殿をゆかしう思召して、いわけなく立ち出でさせ給ひて見やり参らせ給へば、殿の御前は、「あな恐ろし、倒れさせ給ふな」と申させ給ふものから、哀れに堪くしう見参らせ給ふ程も、げに道理にめでたかりける。若宮の御湯殿はてて、御前にまそくり出させりたるを、殿同じく見参らせ給ふに、御侍の殿「斯くて侍るをば如何が思す」と見させ給へば、殿「いとめでたし。」とこそ見参れ」と聞えさせ給へば、「されど、其れよりぞ、え堪ふまじき心地し侍る。いと理無きぞ」と聞えさせ給へば、「あなゆゆし、斯くなのたまはせそ」と申させ給ふ。日頃赤瘡よりして、打続き御

しいみじと思して、また後の御事を如何にと思せど、先づ何ぞと、内にも外にもゆかしう思す程に、男御子にぞおはしましける。其程、殿の御氣色より初め、許多殿の内の人思ひたる有樣、唯だ我身一つの喜びに思ひたり。御蔭にも隱れ奉るべき其殿の内の人、ともかくも思し思はん、道理にいみじ。是れは何の物の數にも有らぬ卑しの下人の男さへ笑みまけ嬉しげに思ひたる樣、云へば疎かに、今一つの御事に由り、今人どよみののしりたる程に、程も無く平かにせさせ給へれば、かき臥せ奉る程いみじうめでたし。大宮の御前、我が御時、内、春宮の御折は、何とも思されざりしかど、世の響きまで、斯樣にいみじかりしを我はともかくも覺えざりしに、此御事を御覽ずる甲斐ありて、いと哀れにめでたう思されて、今は彼方に心安く渡り侍りなんとて、御殿に歸らせ給ふ程など、いみじうめでたしや。此御中らひは、何方にも珍らしげ無く餘り心安くやと、人は推し量り聞えさせたれど、是れしもぞいみじう耻かしう、心にくく申し交させ給ふ。是れを例にすべきなりけりと見えさせ給ふ。さて東宮より何時の程にかと見ゆるまで御佩刀持て參りたる程、いみじう何時しかと思召させ給へるにやと見えたり。御使祿賜はりて退かづる程、世の常の事ながら、其折は、あなめでたと可惜しう見えたり。御湯殿やがて今日の内に事あるべければ、御讀書の博士召し、弦打に五位十人、六位十人など召して、むげに夜に成りて、儀式有樣細かならねど思ひ遣りて在りぬべし。殿の御前は、若宮の御氣近き程に愼ましう思されて、少し御屏風などの隔てある程にて、有べい事ども關白殿を初め奉り然るべき殿ばら定めさせ給ふ。御祓の吉平、守道など聲も嗄れたりつる皆祿賜は

ふ程、げにいみじからん御贈物、何にすべきぞと道理に見えさせ給ふ。内藏の命婦、何れの御前達の御折も先づ物の上手に仕うまつるに、況いて此度は「小式部の君若き人なれば後ろめたし、我こそ此代りも取り重ね仕うまつらめ」と萬づ准備ぎ仕うまつる。今や今やと思し急ぐに、心より外の事は、斯樣の事にこそ有めれ。返す返すも心もとなく思召す。院には、此事ども聞し召して、堀河の大臣、女御やなど、さし續き、いと恐ろしき氣はひにおはすらんを、返す返すかたはらいたく、苦しう思し遣らせ給ふ。此方には然樣におはしまさん、道理なり。此御折斯かれば、殿如何に我をも心づき無く思すらんと思召すも、尋常なるよりは、煩かしう思召さるるにも、他事ならず、此御宮、若宮などを思ふにこそ斯く苦しけれなどぞ思召されけるに、はかなく過ぐる月日につけても、物のみ哀れに思し續けらる。萬づよりも此御事の心もとなきを、只今は世の中に滿ちたり。御祓の音などの喧しささへいみじうて、何の事もつゆ聞えやらず、鳴り合ひてこそののしらせ給ふめりしかとぞ。

楚王の夢

尙侍の殿はいみじき御誦經どもを御前にと殘り無く取り拂ひ出でさせ給ふ。世の中の人殘り有らじと見るまで、許多廣き殿の内隙も無し。あないみじと思す程に、申の刻ばかりに、御子生れさせ給へる、あな嬉

納言も如何にと思しつるに、月頃いみじう細り痩せて、在りし人にも有らぬ御有樣を、如何にと恐ろしくて、樣樣の御祈りをぞ爲盡させ給ふめる。尙侍の殿の御瘡乾れさせ給ひつれど、御物怪の氣色のいと恐ろしくて、まだ御湯殿も無し。斯かる程に月も立ちぬ。此月には必ずおはしますべければ、今や今やと待ち思召さるる程に、二日の夕つ方よりいと惱ましう思したれば、御修法、御讀經など、さまざまの御祈りの僧、心を合せて聲も惜まず圍繞し奉る程の搖り合ひ、いと喧囂し。殿の御前、「まだしきに、いといたうな愼りそ、眞の折にこそは」とのたまはするものから、我が御心地もいと慌ただしげにおはします。白き御具ども近く取り寄せ、女房達白き裝束ども、里なるは取り寄せなどして、萬づ其程の御用意、いと限り無し。東宮にも聞し召して、御使ども隙無し。されど其夜も過ぐさせ給ひつ。又の日まで惱ませ給ふ。御物怪ども數知らず出で來て、ののしり騷ぐ。各驅り移して、僧ども、預り預りに加持しののしれど、喧囂しくのみ有りて、つれなくおはします。東宮、宮の大夫達、限り無く覺束なく思せど、え參らせ給はぬ程ぞ心もとなくいみじう思されける。堀河の大臣、女御、さし續き出で來てののしり給ふさま、いと愛たて恐ろしう生憎げなり。世の人、家の內に殘りたらんや。交らひせざらん人こそは、女などは殘らめと見ゆるまで、いといみじう、國國の守などまで參り集りたり。大宮も此方に渡らせ給ひて、同じ御心に見奉らせ給ふ程など、えも云はずめでたき御中らひなり。年頃の人人、いづ方にも睦まじう思召す限り、近く侍ひて扱ひ聞えさす。春宮より御使隙無し。日頃も惱ませ給ひつれば恐ろしうて、萬づの御調度ども取り出でて、御誦經に運び出でさせ給

聞奉るとて院の詠ませ給へると、人の語り侍りし。まことにや、覺束なし。

別れにし春のかたみの藤ごろもたち重ね着る我ぞ悲しき

御法事は八月十餘日にぞ思し掟てさせ給ふ。尼上、殿は唯たともかくも、院の御心に任せ聞え給へり。只今尚侍の御事を如何に如何にと靜心無く思さるらん。「唯だ此處に掟てつとも、事ども缺くべきにあらず。今は法事などの事を準備かせ給ふべき。絹など只今出で來侍りなんとす」など申させ給ふ。夜さりぞ尚侍の殿此方に出でさせ給ひて、いと苦しう思召したりとて、殿にはのゝしり立ちて、いみじく思し騷がせ給ひて、今年は斯う尋常ならぬ人の月足らずなどして、尋常よりも誤るなれば、如何に如何におはしまさんと、思し歎かせ給ふも道理なり。七月廿餘日の事なれば、何も此頃は相撲にて、いと[illegible]なるに、斯しも斯く惱ませ給ふも世にいみじき事に思されたり。東宮、内などには唯だ氣色ばかりにて怠らせ給ひて侍り。この尚侍の殿は此月などにこそは然おはしますべきに、いといと恐ろしき御事たりと歎かせ給ふに、物怪いと多く出でこさせ給ひて、平かにおはしませど、日頃苦しう思されて、いと堪へ難げなる御有樣に成りつれど、晦日には怠らせ給ひぬれば、世に嬉しき事に思し喜びたり。されど、また程も經ければ、御湯などもなかりし。時時御物怪の氣色ぞおはしますを、いとど恐ろしき事に思召さる。院は女房の[illegible]亦、銀河の[illegible]の、「尚侍の殿の御部屋に、必ず參りて見奉らん」と有りしを人知れず常に恐ろしう思し出でさせ給ふ。中納言殿の北の方も、月頃尋常にもおはせざりければ、折節[illegible]を如何に如何にと、大納言殿も思し歎き、中

思しのたまはせける。尼上も月頃御心落れてはかなき菓子だにも聞し召さで、消え入り消え入りせさせ給へば、削り氷ばかりを御前に置きて、人人ぞ勸め參らせける。今年は此女御殿の御事斯かれば相撲も止まりぬべしとぞ有める。院徒然に思さるるままに、姫宮の美くしうおはしますを御覽じて、年頃此二所の御事を戀將事にのみ打語らひ聞えさせ給へるも、萬づに思し出でて戀しく、いみじく思ひ聞えさせ給ふにも、涙のみこぼれさせ給へば、「哀れ、何ぞや、幾ばくも有るまじき世に、本意を遂げでや止みなまし。今は何事も誰が御侍りとか思はん。唯だ此姫宮の御事をこそは」と思召すに、樣樣哀れも盡きせずなん。宮は、「殿の御前、行末遙かに請べく常ならぬ御心掟ても、唯だ一所の御爲にこそは有りつれ、今は如何がは」など夜はつゆ御殿籠られぬままに、萬づを思し續けて、起き明し歎き暮らさせ給ふ。此夏は故宮の御方に附けつつ、然るべき嚴ばら懺ひ給へり。また此頃は道理の御樣なれば、世の中の人、氣ざやかにえ忌み敢へぬさまなめり。殿の御前、「院を年頃大かたにこそ思ひ聞えつれ、まめやかに思召したるが、いと哀れにも」と思ひ聞えさせ給ひつつ、見ゆる御菓子など度毎に夜夜半分かず奉らせ給ふ。御忌に籠りたる僧どもにも然るべき精進の物何かと常に問はせ給ふ。云ひもて行けば何時も同じ事なり。斯く眞心に思しあつかはせ給ふこそ、いみじかりける御幸ひなりけれと、思し慰めつつぞ過させ給ひける。堀河の一の宮の御乳母さへ亡せにしが、いと哀れに思ひ聞えさせ給ふに、二の宮は法師に成し聞えさせ給はんと思して、醍醐の座主は花山院の御子におはしませば、醍醐にぞ時時通はし聞え給ひける。萬づ心のどかに思し殘させ給ふこと無げなり。此女御の御

かせ給へりければ、僧も俗も數知らず參り混みて、えも云はず嚴めしくて、嚴殿と云ふ所におはしまさせ給ふ。後一條院の故宮のおはしましし屋通ふに見遣られて、悲しさ取り重ねて、いみじう思召さる。院の御心地更におはしまし遣られず。悲しなど云ふ事は、然は是れにこそ有りけれと、あさましくいみじき事ども、有り有りて思ひつるかなと、御袖の雫も所狹きまで思召さる。宮の御供に仕うまつれる人、此度の御供に參りて、人知れず思ひける。其夜は人にも云はで、後に人に語りける。其人は知らず。

夏の夜を分けし其夜も袖濡れき秋の草葉も露ぞこぼるる

とぞ覺えける。はかなき重服と成らせ給ひぬ。殿の御禊も此頃御心地惱ましく思召されて、此御送りも得せさせ給はで、いみじう思し明させ給ふ。此御供にも儀式樣細かに推し量り聞えさせ給ひつつ。院は故宮の御供にも、此女御の御送りも、ひたたけて歩ませ給ふ事、又無き事になんおはしましける。其れにつけても、「やんごとなき身とも成らましかば、宮の御供にも、此御折も、覺束なさをぞ思ひやり聞えまし。そが中にも此度は志の限りは見え奉りぬめり」と宣はすれば、此殿ばらも、また仕うまつる人も、「女の幸ひとは是れをこそは云はめ、一生幾ばくも有らぬに、世の中のめでたき事には太上天皇とこそは申すめるに、斯く下り立ちて扱ひ聞えさせ給ふ事、いといみじく忝なく、めでたき御事なりや。唯だ口惜しき事は、姫宮、若宮などの御有樣、え見果てさせ給はず成りぬる事こそいみじき事」など申し思ふ程に、夜もはかなく明け、事も果てぬれば、還らせ給ひぬ。此殿ばらも院の御氣色の疎かならぬを、實に女の御本意に斯くぞかしとぞ

もいと恐ろしく思さるゝなり。山の井には愛無くやと思召せど、然るべき御中らひにて頼みにしも有るまじかりければ、此十一日にぞ吉き日なりければ、其れにとかく爲たてまつらせ給ふべし。尼上いと思し歎けど、とかく熱き程に、日頃に成らせ給はんも憂たて有べければ、斯くともと思すもいと哀れなりなども疎かにぞ。其日に成りぬれば、内にも外にも、此準備をせさせ給ふにも御心惑ひて、はかばかしく思し掟てせさせ給ふべくも見えさせ給はず。其日に成りぬれば、院の御車に装束せさせ給ふ。院且つは物をのたまはするものから、御聲も惜ませ給はず。是れに故宮の御事はいみじき事に思召ししかど、其れは大方の口惜しさこそ侍りけれ、是れは様様萬づに片時思し離るべき心地せさせ給はず。月のいみじう、曇り無う、風さへ涼しきに、京出でさせ給ふ程はいと忍びて、唯だ例ざまにぞおはします。殿なども聞し召さんに、斯く立ち混み數多の御中なれば、萬づいと凶凶しう思されんも道理なれば、唯だ常の御歩りきの様にせさせ給ふ。御先に火ともしばかりにて、此殿ばらなどは歩み著かせ給へり。院おはしませば、大藏卿、入道の侍從など、源賢阿闍梨など、大原の入道君など、萬づ事削がせ給ひしかど、また如何でかはとて、仕うまつらせ給ふ。御先に二町ばかり先立てて、阿彌陀の聖の「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と口稱遙かに聲打上げたれば、然ばかり悲しき事の催しなり。おはしまし遣らず、涙に御身ども洗がせ給ふ。然らぬ折だに、此聖の聲はいみじう心細う哀れなるに、況して思ひ遣るべし。斯かる有様は、人がちにていみじきだに猶いと悲しきに、萬づいみじく忍び給へれば、人聲もせず、密かにおはし過ぐる程、一條の程にてぞ萬づ例の作法の事どもを仕置

をせさせ給ひて、身の徒らに成り侍りぬる事なん有る」とのたまはせて、泣かせ給へるさまなれど、御涙も出でさせ給はず。殿の御前泣く泣く、「然やは思ひ侍りし。今は限りにこそおはしますめれ」とて、御髪下ろして尼にと成し奉らせ給ふ。右馬の入道殿ぞ成し奉らせ給ひける。殿の御前、泣く泣く、「斯くは思ひ奉りけんや。禿におはしましし折は、尼削ぎ居丈にとこそは見奉りしか。哀れに悲しき事」と、云ひ續け泣かせ給へば、院の内もどよみ泣きたり。御髪削がせ給へる、麗はしき鬘のやうにて、六尺ばかりなり。戒受けさせ給ひて、殿の御前の御袈裟、尼上の御衣など、唯だ御上に取り覆ひ奉らせ給ふ。唯だ萬づ夢の心地のみせさせ給ふ。東宮、中宮の權大夫殿、權中納言殿など、哀れにいみじう思し惑ひ、物に當り給ふ。御物怪ども、いといみじう「爲得たり」と、堀河の大臣、女御、諸共に「今ぞ胸開く」と叫びののしり給ふ。斯くて夜に入りぬれば、殿の御前、「今夜も侍りて見奉らまほしけれど、心地も例ならず侍れば、見捨て奉る事」と泣く泣く歸らせ給ふ。道よりも御使やがて續き參る。夜の程も月に明し、大殿籠られぬままに「只今如何に如何に」と有る御使頻りにて、日頃の覺束なさを悔しう思さる。曉方に、「只今なん果てさせ給ひぬる」と有る御消息を聞し召す御心の程、思ひ遣り聞えさすべし。山の井には更にいとゆゆしき御讀經ども、この殿ばら云ひ續け泣かせ給ふ。げにいといみじう見えさせ給ふ。さてもあさましかりける堀河の大臣の女御の御有樣かなと、殿も、院も思召せど、後の悔と云ふ事のやうになん。折しも中將殿の上も御物怪にいみじく惱ませ給へば、是れをいと恐ろしき事に殿の御前思さる。其れも此同じ御物怪の思ひの餘りなるべし。其れ

し。斯くて、心のどかに暫しおはしまさせまほしう、大宮も殿の御前も思召したれど、秋の節分にいと疾く入りぬべければとて、七月三日内裏に還らせ給ふ。いと飽かぬ御有様どもなり。尚侍の殿いたく湿めらせ給ひて、眺めがちにおはしますを、東宮如何にと見奉らせ給ふ。なかなか覚束なかるべき事どもを思し聞えさせ給ひて、帰らせ給ふ程などぞ、いと理無く見えさせ給ひける。御贈物、上達部、殿上人の禄など、疎かならず。内よりは「疎しく」など覚束なさを日日に聞えさせ給へど、大宮、尚侍の殿の御事を見奉らせ給はんとて、猶暫し里におはしますなるべし。尚侍の殿の御祈り、さまざま残る無くせさせ給ふ。斯く云ふ程に、今年は赤疱と云ふもの出で来て、上中下分かず病みののしるに、初めの度病まぬ人の此度病むなりけり。内、東宮も、中宮も、尚侍の殿など、皆病ませ給ふべき御年どもにておはしませば、いと恐ろしう、如何に如何にと思召さる。七月六日、院より、殿の御前に、「今は限りに成らせ給ひにたり。今一たび見奉らんとなんのたまはする」と有れば、日頃も今日今日と思召しながら、日次でなどの悪しかりつれば、すがすがしうも思立たせ給はぬに、御使さへ頻りなれば、未の刻ばかりに山の井に渡らせ給ひて、見奉らせ給へば、唯だ影のやうに成らせ給へるものから、御色の白く麗はしく光りかにおはします。いと恐ろしく其れも如何に如何にと見奉らせ給ふ。殿の御前は、あさましく今まで見奉らせざりける事と、塞き敢へず泣かせ給ふ。尼上も院も、いみじう哀れに悲しと見奉らせ給ひて、殿「さても如何が思さるる」と申させ給へば、「何事をか、ともかく思ひ侍らん。唯だつらしと思ひ聞えさする事は、此院の御事を、斯からで侍らばやと思ひ侍りし事

て、七八月に當らせ給ひて、月頃土御門殿におはしませば、其御有樣も靜心無く思されて、少しも隔たり有るさまに思さるゝ方の事をば、自ら今今と思召しつつ日も過ぎもて行くに、大宮も唯同じ殿におはしませば、春宮さまざまの消息などを明暮聞えさせ給へば、殿の御氣色に然ぞ思召すらん、いと心苦しき御事なりとて、如何で此頃の程に行啓あらせんと思して、準備かせ給ふ。六月二十五日吉き日なりければ、其日と思し準備かせ給ふ。今は其日に成りて渡らせ給ふ。大宮は土御門殿の寢殿におはします。東の對に尚侍の殿おはします。西の對に東宮おはしますべき御設せさせ給へば、中門より西の廊の西ざまに行きたるを、東宮の殿上にせさせ給へり。東の築土に添へて、新しう板屋を造りて、尚侍の殿の侍にせさせ給へり。渡らせ給へる儀式有樣思ひ遣るべし。大宮、尚侍の殿の女房、いみじう裝束きたり。春宮先づ寢殿におはしまして、其れよりやがて尚侍の殿の御方に渡らせ給ふ程、云へば疎かなり。御供に仕うまつれる殿上人、此方彼方、御簾ぎはえも云はず恥かしうて、いとど汗に成りて、面赤む心地しけり。庭より仕うまつりたり。尚侍の殿は、七月に當り給ひて、御腹いと高らかにて、苦しげに見えさせ給ふ。二藍の御衣に透かせ給へる御髮の程、御乳のあたりなど、わざと作りたらん物めきて、をかしげに、らうたげにおはします。御額ぎは猶さやかに見えたるなど、樣樣御目留まり、をかしく見奉らせ給ふを、恥かしげに思召して、打解けぬ御氣色を我さへ恥かしく思召さる。斯くておはします程、殿ばら夜晝參りもて遊び奉らせ給ふ。殿の御前も、外の御歩りきこそ苦しく思召さるれ、氣近ければ紛れ渡りつつ見奉らせ給ふ。萬づ見奉らせ給ふ甲斐ありてめでた

入道殿を初め奉りて、世の中におはしける人、參らぬ無く參り混み、萬づの物をぞ奉りける。唯だ帝、春宮、宮宮ぞえおはしまさざりける。此牛佛、何と無く心地惱ましげにおはしければ、疾く亡せ給ふべきとて、斯く人參り混みて、此聖は御影像を描かせんとて急ぎけり。斯かる程に、西の京にいと尊く行ふ聖の夢に見えけり。「迦葉佛當入涅槃の段なり。智者尊く結緣せよ」とぞ見えたりければ、いとど人人參り混む程に、歌詠む人もあり。和泉、

　聞きしより牛に心を掛けながらまだこそ越えね逢坂の關

人人あまた聞ゆれど、同じ事なれば書かず。日頃此御繪書かせて、六月二日其御眼入れんとしける程に、其日に成りて、御堂のめぐりを、此牛見巡り歩りきて、もとの所に歸り來て、やがて死にけり。是れ哀れにめでたき事なりかし。御像に眼入れける折ぞ果て給ひにける。聖いみじく泣きて、やがて其處に埋みて念佛して、七日七日に經佛供養しけり。後に此書きし御像を內裏にも宮にも拜ませ給ひける。斯かる事こそ有りけれ、眞の迦葉佛、此同じ日ぞ隱れ給ひける。今は寺の彌勒供養せられ給ふ。此聖も準備ぎけり。草も誰も誰も探りて參りける中に、參らぬ人など有りければ、其れは罪深きにやなどぞ定めける。さて彼の院の女御の御惱いみじかりければ、法性寺や何處やと歩りかせ給ひつつ、御修法行はせ給ふ。萬づに院も入道殿もせさせ給ふに、つゆ其驗無かりければ、思し歎かせ給ふ。此頃入道も、御風など起らせ給ひて、さまざま惱ましう思さるれば、すがすがしくもえ渡り合ひ見奉り給はずなど在るに、尙侍の殿の、尋常にもおはしまさ



事、又の月の十餘日にせさせ給ふ。中宮に七僧の法會麗はしくせさせ給へり。三條の宮にてせさせ給ふ。其程の御有樣思ひ遣るべし。御願文、大内記菅原忠貞ぞ仕うまつりたりける。此おはします御有樣を仕うまつりたるが、いみじく哀れなりけり。唯片端を學びたり。「黄金の車ながら寄せて、玉の扉を閉ぢてより以來、供奉するや何者ぞ、獨り鶴の月の曉の影、啓せんするや誰の人ぞ、唯だ林の鳥の夕の聲」など、いみじく哀れなり。斯くて御諷誦など、さまざまにて果てぬ。今日の御願文を或人聞きて誦みける。誰と知らず。

　　月のかげ林の鳥の聲ならで行き問ふ人の無きぞ悲しき

宮宮の御服ども哀れにぞ。斯かる程に、山の井には、女御殿の御惱、月日に添へていみじければにや、影のやうに成らせ給ひにたり。萬づに思し靡かせ給ふ。此頃聞けば、逢坂の彼方に關寺と云ふ所に、牛佛現れ給ひて、萬づの人參り拜み、見奉る。年頃此寺に大きなる御堂建てて、彌勒を造り据ゑ奉りける。其や、えも云はぬ大木どもを、唯だ此牛一つして、運び上ぐる事をしけり。哀れなる牛とのみ御寺の聖思ひ居たりける程に、寺の邊に住む人、借りて明日使はんとて置きたりける夜の夢に、「我は迦葉佛なり、此寺の佛を造り、堂を建てさせんとて、年頃するにこそ有れ、尋常の人は如何でか使ふべき」と見たりければ、驚きて、「斯う斯うの夢なん見つる」と云ひて使はで返してけるを、世に聞えて、皆人拜み騷ぐなりけり。牛も黑くて、細やかにをかしげにぞ有りける。繋がねど行き去ることも無く、例の牛のさまにも似ざりけり。

歸る有樣、祭の歸さなどの心地して、物騷がしく見ゆ。やがて其夜二條院に歸らせ給ひて、西の廰、淸涼などの格子下ろして、院、宮宮おはしますべき方方分ちたれば、皆人ら住み給ひぬ。ゆゆしげなる御裝飾の有樣なり。頼宮は有るか無きかの御氣色にて明かさせ給ふ。又の日の二日ばかり有りて、宮の内侍、命婦など云ふ人の許に、如何なる心地して歸りけんなど問ひたる御返事に、

思ひ遣れ胸やは明くる暗闇み空の夜の戸を閉ざしより

とぞ思ひやりける。宮宮と成らせ給ふも、げにいみじき事なれど、是れは格異りて、いみじき事の樣なり。頼宮は月日の過ぐるままに、有るか無きかに思召させ給ふに、人人、女房の中には、自ら程經れば、をかしき事も有り。此相住法師の君の所より、中納言の君に、

煩せぬ深山送りの悲しさに雲の林は立ちや添ひけん

と有れば、

有りとてや人は問ふらん送り置きし雲の夜居に添ひにしものを

とぞ有りける。道理にぞ有りける。さて後後も、宮宮、西の院におはします。七日七日の御事ども、限無くいみじくせさせ給ふ。御念佛果てまで有るべく、此西の院の僧達に、御前語はす。是れは彼のおはします周圍に參りつつ仕うまつるべきなり。御法事の御經は院の御手づから書かせ給ふ。御佛は式部卿の宮、其れは自ら思し掟てさせ給ふ事も有るべし。帥中納言、左衞門督の御方にて、皆計らひ給へり。斯くて御法

せ給ふべきにもあらねば、忍びて渡し奉らせ給ふ。院もやがて斯くておはします。然るは女御殿の御惱も如何がとのみ見えさせ給へど、如何でかは出でさせ給はん。此宮も去年より斯く惱ませ給ひつるが、斯くおはしますにつけても、いとど如何に如何にとのみ思し亂れさせ給ふ。西の院には其日に成りぬれば、然るべき御有様、日一日準備がせ給ふ。西の院の戌亥の方に築土築き籠めて、檜皮葺の屋、いとをかしげに造らせ給ひて、其處に納め奉らせ給ふべきなりけり。院などの一夜も今宵も歩ませ給ふなど、疎かならず見えさせ給ふ。御念佛の僧など數知らず多かる中にも、四の宮の御方より奈良、仁和寺などより參り混む、哀れなる御氣はひも遠からぬ程を、齋院に御耳留められて、頻みに御殿籠らず、萬づ思し知らせ給ふ。此邊に多くの人滿ちたり。さて其屋に御裝飾をいみじくせさせ給ひて、やがて御車ながらかき据ゑておはしませ給ふ。御殿油明く掲げて聞し召し物など參り据ゑたりて萬づ斯くと今は見奉らせ給ひて、宮宮、院など萬づを宣はせつつ泣かせ給ふさまなど、いといみじう、云ふにも疎かなり。さて人人夜明けぬべしなど申せば、出でさせ給ひて、おはします屋の妻戸打固むる程、さし退きたる人人の心地だにいといみじう哀れに悲しきに、況いて道理にいみじう見えさせ給ふ。雲煙と成らせ給はんは、あさましながらも云ふ方無くて止ませ給ふを、是れは哀に云はん方無し。女房達など此度ばかりこそ御供に參らめと、皆慕ひ聞えさせて參りつれど、いと遙かに見やり參らせて、退きてなん車ども引き立てたるに、おはします屋の戸閉づる音に、在る限り聲を合せて、云ひ知らぬ音なひどもなり。月いと明くて、御供の法師、俗の人は限り有れば何事も思ひたらで、急ぎ

いと哀れに悲しう心細く覺えさせ給ふべし。四の宮斯くておはしませば、仁和寺の僧正いと後ろめたく思ひ聞えさせ給ひて、夜晝分かぬ御仲あり。何事もすべて殘ること無けれど、終に三月晦日に花と共に別れさせ給ひぬ。いみじう悲しとは聞えさするも疎かなり。宮の内の有樣思ひやるべし。おけに大人におはします院などだに、いみじう思召す。況して后宮に思召し入りたる、道理に見えさせ給ふ。御年なども只今はいみじく若くおはしますべきにもあらざりつるに、あさましく口惜しう心憂くのみ、誰も思し歎かせ給ふ。御乳母の式部の宣旨、八十ばかりにて、萬づに哀れなる者に思召し育ませ給ひつるに、後れ奉りたる程、言へば疎かにいみじきに、何事も無くて唯消えに消え入りて、物も覺えねば、息子の衛門の大夫致方來て、萬づに慰め、湯飲ませなどすれど、嘔吐しつつ惑ふ。道理にいみじくなん。月立たば墓など云ひて、騷がしかるべければ、如何になど思召して、月朔三四日の程に雲林院の西の院と云ふ所におはしまさせ給ふ。やがて其夜、入棺と云ふ事せさせ給ふに、他人參り寄るべきにあらず。宮司、入道の君、大藏卿など候ひ給ひて、萬づに仕うまつり給ふ。哀れにめでたし。入道の君、御身に觸るる事どもも皆せさせ給ふ。此院の御掟に伴ひ御有樣なれば、院も東宮も京は御車にて仕うまつらせ給ふ。故院の御時、心寄せ仕うまつりし人々、只今の院の殿上人など、いと數多仕うまつれり。いとおどろおどろしき御裝ひなり。さて西の院にぞおはしまさせて、御車ながらかき下ろして、おはしまさせ給ふ。四月十四日に納め奉らせ給ふに、御葬送にや、其の時のさまにておはしまさせ給ふまじきなめり。皆西の院に出で給ひなどもおはしまさず。后宮も皆

設させ給ひるにつけても、物のみ哀れに思召すべし。世の中に天變など頻りにて、人の物云ひも憂たて恐ろしければ、然るべきやんごとなき邊の御愼みども繁きにも、倘侍の殿の尋常にもおはしまさねば、如何に如何にと、いみじき事どもをぞ爲させ給ひける。關白殿の若君は、然もこそ有らめ、御容貌さへ斯く珍らかにおはしませば、愛護き聞えさせ給ふ甲斐ありてなん。

嶺の月

斯くて皇后宮の御惱、去年よりは頼み少なく成らせ給へば、所を更へて試みさせ給ふべく人人申せば、然はとて大藏卿の家へ渡らせ給ひぬ。さておはしましたれど、同じ事にのみおはします。院より初め、宮宮も、いみじき御祈り始めさせ給へど、同じやうにのみおはしまして、限り限りとのみ見えさせ給ふに、宮の宣はするは、「早や忘れて止みぬべかりつるものを、此姫宮の御有様見果てでは、え行きやらぬ事」と歎かせ給ふ。御前に侍ふ人人、宮宮の御涙止め難きに、姫宮の泣いて塞き敢へさせ給はぬ程、哀れにいみじく見えさせ給ふ。院、「いと斯くな思召しそ、世の中に侍らん限りは、誰を誰れと思ひ侍るべき身ならばこそ」など聞えさせ給ひて、御直衣の袖も潮解げにおはしませば、宮の御前「さこそは頼もしく思ひ聞えさすれど、猶心苦しうなん。さばれ、今は斯くも思ひ聞えさせじ、罪いみじからん」など、いと弱げなる御氣色に、萬づ

れば知り候はず」とて、退かり出でさせ給ふ。殿の宣旨、御乳母の數に入れさせ給ひつ。先づ哺し御湯殿などは宣旨して參らせ給ふ。いといみじうめでたし。彼の母君は、其儘にまた直常ならず煩ひてなん惱し給ふとか。其れも大殿よりぞ訪らはせ給ふ。目覺ましきまでめでたくなん。大宮土御門殿におはしませば、常に迎へ奉らせ給ひて、抱だき愛くしませ給ふ。内の大い殿は母無き子どもを數多持て扱ふをば、「我は一人居すべかりける」など興無げにこそ思しのたまはすと人語り侍りしか。そは然る事にやとぞ。二月晦日に成りぬれば、栗田殿の二位の宰相をば、此頃左衛門督とぞ聞ゆめる。其姫君に三條院の中務の宮聟どり奉らせ給ひつ。御識り無き御中らひにぞ人聞ゆめる。いとほしき事は、皇后宮去年より惱ませ給ひて、ともすれば限り限りと見えさせ給ふぞいみじき。其れにつけても、唯だ此東宮の御事を思召すに、安くも思召されぬなるべし。内の大臣こそ然樣に思し聞えさせ給ふめれど、いと慎ましうのみ思されながら、更も、今年の春は過ぐしてやなど思さるるに、此宮の斯く今や今やとのみ見ゆる御有樣なれば、如何でかはとぞ。三月十餘日に、大宮の御八講あるべしとて、女房もいみじう準備き、世の中にも御捧物準備きののしるめり。院は宮の御惱をいみじう思し歎かせ給ふ。此院の女御殿もいと苦しげにせさせ給ひつつ、月日に添へて影のやうにのみ成らせ給へば、方方如何にとのみいみじう思し歎かせ給ふ。入道殿よりも、斯くおはしませば御修法、御讀經なども隙無く思し掟てさせ給ふ。堀河の大臣、女御やなど引き連れて、いとおどろおどろしき御氣はひ有樣にてののしり給へば、いとほしう、かたはらいたうのみ思召す。斯う云ふ程に、一二の宮も皆

何事にかとて急ぎ參らせ給へれば、世間の御物語なりけり。除目今日明日に成りぬれば、然樣の事どもたるべし。「斯うて如何にぞや、昨日の宮の大饗如何が有りし」と問ひ聞えさせ給へば、侍りしやう、然か然かと一一に申させ給へば、いと快う打笑ませ給ひて、「さてさて」と問ひ聞えさせ給ひて、女房の服裝など問ひ語らせ給ひて、有りし事ども聞えさせ給へば、いみじう腹立たせ給ひて、「あさましう珍らかなる事どもなりや。衣は七つ八つをだに安からぬ事と思へば、中宮、大宮などには皆申し知らせて、いみじき折節にも唯だ六つと定め申したるを、過またせ給はぬに、此宮こそ事破りにおはしませ。すべてすべて、更に更に承らじ」と、過ぎにたる事をのしらせ給ふも、さすがにをかしく思さる。「然るにても、大臣は斯うやは在すかるべき。朝廷の御後見は如何なる人のするわざぞ。何でう然る事を見て、唯だに在る人か有る」など、いとおどろおどろしう、むづからせ給ふ。いと理無き勘當なりとぞ申し給ふ。返す返す珍らかなりし月の有樣とぞ、東宮、中宮權大夫殿達など參らせ給ひても申させ給ふ。斯くて、あさましき事は、此廿五日の夜、四條の宮は燒けぬ。然るは尼上など今は彼の宮にこそ住ませ給へば、いみじき事なりや。大納言殿思し立つ事も有るに、いとをしきわざかなと思して、又の日より、先づ對一つを急ぎ合はせ給ひてせさせ給ふ。斯くて關白殿の若君、此月廿八日に大殿に渡らせ給ふ。其夜の有樣思ひやるべし。いとわざと禮に事事しう持てなさせ給へり。大殿や上など土御門殿に待ち迎へ、いみじく愛くしみ奉らせ給ふ。ともかくも云ふべきにあらず。唯だ大臣の幼なかりし折に違はずとぞ愛くしませ給ふ。關白殿「今はいと心安し。斯く參らせつ

今日は萬歳千秋をぞ云ふべき」などのたまふも有り。裝束をかしく亂れ給ふ。やや堪へ難げに御氣色ども見ゆるもおはすべければ、心苦しうて、御祿ども取り出でさせ給ふ。暗ければ見えねど、いみじうせさせ給へりとぞ聞き侍りし。殿ばら出でののしらせ給ふ。さて關白殿内に入らせ給ひて、御前に申させ給ふ。「今日の事、すべていと事の外に怪しからずせさせ給へり。此年頃、世の中いと斯ういみじう成りにて侍る。また一年の御堂の會の御方方の女房の服裝どもただぞ世に珍らかなる事どもに侍りしかど、其れは夏なれば事限り有りて筋無かりけり。何でう人の衣か、二十着たるやう侍ふ。更に更にいと怪しからずおはします小野の宮の大臣、中宮大夫など、いと恥かしき上達部も、すべて斯かる事をなん聞き見ざりつるとぞ申されつる。其れは然るものにて、見目のおどろおどろしう燦かたる事はまた世に珍らかに候ひつるわざかな」と、返す返す同じ事をせさせ給ふ程の御氣はひ、氣近う愛敬づき恥かしうおはします。今日の一の上とも覺えさせ給はずなん。「今御堂に今日の事ども問はせ給はば、此女房の衣の數に由り、御勘當侍らんずらんと思ひ給ふこそいと苦しう候へ。宮宮に善き事候へば打笑ませ給ひて、いと善しと思召したり。斯樣に例ならぬ事候へば、先づ追ひ立てさせ給ふに、いと輕輕に候ふなり。大宮、中宮は、女房の服裝、衣の數六つに過ぐさせ給はねばいと善し。此御前なんいと麗たておはしますとこそ常に候ふめれ」など申し置かせ給ひて、出でさせ給ふ。女房達居竦みて、立つ心地いと佗びし。各然るべきには陣に車寄せて騒ぎ、然らぬは、局局に皆行きて物も覺えで寄り臥しぬ。斯くて其夜も更けぬれば、又の日御堂より、關白殿疾く參らせ給へと有れば、

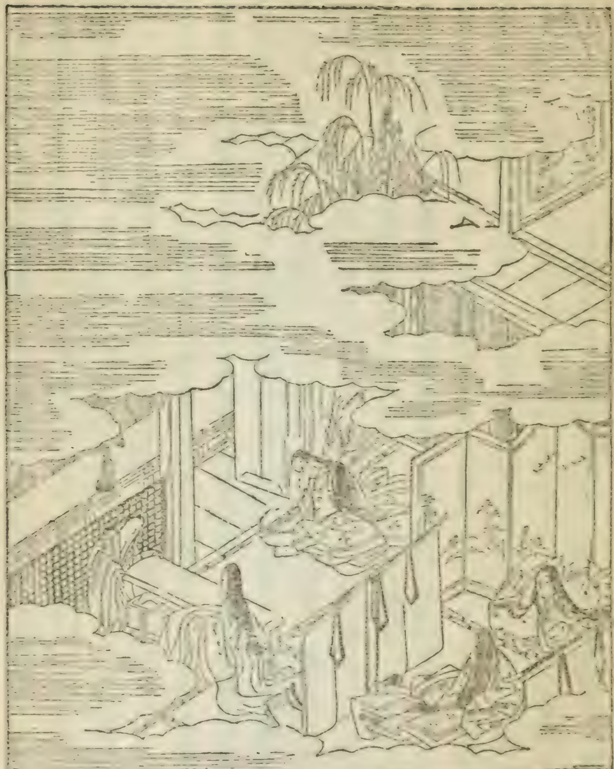
でたき事ども、年經ぬる人は自ら見ぬものなり。未だ今日の女房の服裝のやうなる事こそ見侍らね。唯だ斯かる事はあさましう怪しからずぞありける」など申し給へば、關白殿打微笑ませ給ふ程も、御簾の内には何事ならんと、漫ろはしう思ふべし。「一日關白殿の大饗をぞ殿の有樣より初め、えも云はずめでたしと思ひしに、彼れは闇の夜なりけり、今日は明かなる鏡に差向ひたる心地してこそは我が恥かしければ、然樣にこそは覺え侍れ。男の所は女房遠にて、いと心安しかし。先づ今日は萬づの事の餘りいたう用意はるるに、いと佗びしや」などのたまふも、いと樣樣をかし。まことや、辨の乳母の姪こそは今日やがて大人に成させ給へば、殿ばらなど參り集り給ひぬれば、先づ宮の御兄人の中宮權大夫殿は、大盤所の方より入らせ給ひて、裳の腰結はせ給ひけり。御杯ども度度に成りて、殿ばらの御物恥も少し忍び難げなり。日の暮るる程に所所の柱松どもに、また手每に點したる光どもなどの晝と見ゆるに、また女官どもの爲たり顏に、怪しの服裝ども備め立てて、物愼ましげも思ひたらぬ氣色にて御殿油手每に參り渡す程なども、然る方にをかしう、惡所などに斯かる者出で來なんやと見ゆるに、衞士の何ぞやを狩衣の摸似にして着て、何でふ事か侍るめると思ひたる氣色して、入り居て、扶う畏き居たる程、いみじう氣高う目留まりて御覽ず。殿ばら今は御遊に成りて、いみじうをかしきに、夜に入りたり。物の音ども心殊なり。御杯に花か雪かの散り入りたるに、中宮大夫打誦んじ給ふ。「梅花帶レ雪飛二琴上一。柳色和レ煙入二酒中一」、また誰れぞの御聲にて、御杯の繁ければ、「一叢寒菊霽雲外夜、數盃温酎雪中春」など、御聲どもをかしうてのたまふに、何か、

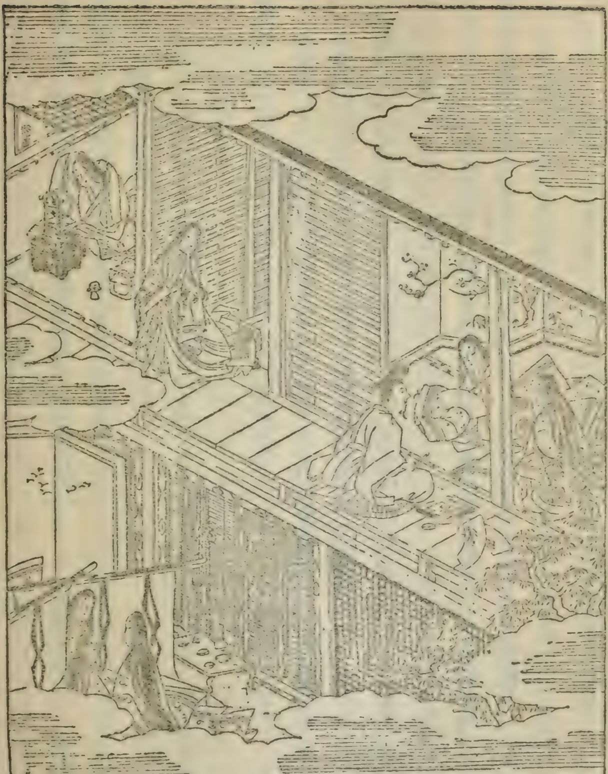
鏘たり。或るは綱などの一重は皆打ちたるも有めり。唐衣どもの色、皆また此間に色どもを取り交しつつ着たり。裳は皆地摺大海なり。御几帳ども、紅梅、萌黄、櫻などの裾濃にて皆繪書きたり。緒ども青くて耀けり。殿ばらあさましう目も彩にて、互に御目を見交して憚れ給へり。今日も四條大納言、内の大臣參らせ給はず。故上の御忌月なりければ、内の大臣はむげに參らざらんに覺束なくゆかしとて、御直衣にて内に參らせ給ひて、女房の中に混らせ給ひて、衣の褄、袖口つくろはせ給ふ。髮掻き撫でなどせさせ給ふを、女房、なかなかいと佗びしう、「身より汗あゆ」などは是れをや云ふらんと佗びしう覺えて、面赤む心地すれども、身は冷えたり。大方の有樣に御前の御覽ずるを、恥かしう如何に如何にと、人の容貌、裝束より初め衣の有樣、匂ひなどを御覽ずらんと、佗しく各思ひつつ、此並み居て口惜ふ人人の目は闇に紛らしても、さばれ誰とも知られ來らねば、御靈會の細男の手拭して顏隱したる心地するに、此内の大臣の微笑み紛れさせ給ふぞ、いみじう佗びしき事なりける。此殿ばらの御香り、匂ひ、さまざまめでたく吹き入れらるるに、また内には梅花をえも云はず焚き出で給ふ。今日の侍從は左右大臣にも劣りめべくなん人人思されける。御前には、東の廊の前の方に、やや西に出でて、樂人どもも侍ふ。御前の火焚屋の下の前の、人集き氣はひの風に散りくる香りもめでたし。例の作法の舞人四人づつ出で來て、萬歳樂、太平樂など舞ふ程、いみじう面白し。樂の音などを折からにや優れてめでたう聞えたり。樂人ども御前の方の御簾をば打目守り操ぐる心地も、興ありて、物の音いと面白し。小野の宮の大臣、關白殿に差し寄り聞え給ひて、「面白き事ども、め

ひて、猶いと顔細かに愛敬づき給へる樣なり。人よりは殊になつかしう見え給ふ。大將兼け給へれば、其御闕身も華やかに爲たて給へり。誰も先づ東の對の母屋に西向に著き給へり。殿上人は南の廂に著きたり。母屋は南を上にし、廂は西を上にしたり。事ども調ほりぬる程に、皆例の作法にて、御前の方に西の對まで見渡し給ふに、更にも云はず、衣の褄重なりて打出だしたるは、色色の錦を枕草子に造りて打着たらんやうなり。重なりたる程、一尺餘ばかりに見えたり。あさましうおどろおどろしう、袖口は圓み出でたる程、火桶の小やかならんを据ゑたらんと見えたり。萬づあさましうも耻かしうも、許多の人如何に見るらんと、すずろはしうて面赤み給ふべし。拜禮果てて、左大臣にて關白殿只今おはしませば、其れを先として、いと麗はしう寬舒に歩みて、寢殿の東面の御階より上り給ひて、南の階の東面を一の座にて關白殿、次に小野の宮の右の大臣著き給ひぬ。次に中宮大夫など、さし續き並み居させ給ひぬ。皆御茵に居給ひて、北向に居させ給へれば、御下襲の後どもは高欄に打掛けつつ居させ給へり。掻練襲、柳、櫻、葡萄染、若うおはする殿ばらは、紅梅の濃き淡き織物などにても着給へり。色色に見え耀き照り渡りたる程いみじうをかし。おはしまし居て、此御簾際を誰も御覽じ渡せば、此女房の服裝どもは、柳、櫻、山吹、紅梅、萠黄の五色を取り交しつつ、一人に三色づつを着せさせ給へるなりけり。一人は一色を五つ、三色着たるは十五づつ、或るは六つづつ七つづつ、多く着たるは十八二十までぞ有りける。この色色を着交しつつ並み居たるなりけり。或るは唐綾どもを着たるも有り、或るは織物の堅紋、浮紋など色色に從ひつつぞ着ためる。上着は五重などに

に着せさせ給ひて御覽ぜし程に、左衛門え動かで、すくみて立ちて侍りしは」など云ふも聞きも入れず、心一つを騒ぎ立ちたり。斯かる程に、日やうやう辰の刻ばかりに成れば、上より此人人遲く參り給ふと咎め仰言、侍ひの人人、或るは刀自、水仕女など一一に云ひ渡す。されど例の事ぞとて、我身どもの事を、返す返す磨き居たり。餘り日高う成りぬと、仰言度度に成りぬれば、參り集る殿上人、やがて几帳差し、また行きて道掃ひなどして參る程、衣の裾など取らせて參るを見れば、扇もえ差し隱さず、衣の褄たく厚ければ、嫋やかなる氣も無し。唐衣はやがて着つるままに綻びて出でぬれば、理由無くて好むと無けれど、斑紫の絲して掛けためる。斯くて參り混み集る程を見るに、御前の方思ひ遣り參らせ、奥ゆかしげなり。さて參り混みぬれば、寢殿の御階の間に、御几帳麗はしく立てさせ給ひて、其西の間より、渡殿より、また西の對、東南面まで、一間に二人づつ居たり。御階の東の方より東ざまに折れて、水の上の渡殿まで居たり。數は知らず推し量るべし。御簾に斑紫の絲して編みたり。緣など例の樣ならず、心殊に目留まりてせさせ給へり。斯樣にて並み居たる人の有樣、云はん方無うおどろおどろし。未の刻ばかりに、上達部參り集り給ふ。大かたの空は晴れたれど、雪打散りていみじうをかしう見えたるに、御前の砂子えも云はず面白きに、遣水などの音もをかしき程に流れたるに、殿ばらなどの參り給ふ。然るべき御隨身などの、いみじう調和しき樣して、中門の程に弓杖つきて居たる程など、唯だ繪に書きたると見ゆ。關白殿參らせ給ふさま、御隨身おどろおどろしうめでたしと見ゆる程に、小野の宮の大臣の參り給ふを見れば、御年の程よりはいみじく若く見え給

著きたる人人は、局ながら萬づを爲準備ぎたるに、里の殘りの人人は參りて、臺盤所にて、はかなく屏風几帳ばかりを引きつぼねつつ、隙も無く居たり。また各の得意どもは、其局局に往きつつぞ居たりける。局局にはまた物縫ひ騷ぎて、「あないみじや、頭をだにこそ修飾はね」など云ふ者あり。また爲果てたるは、齒黑め附けなど、心のどかに我身の化粧を爲驕くも有り。扇なども賜はせたらんは、窮相にぞ有らんかしなど思ひて、然るべき人人に云ひつけ、我が繪師に書かせなどしたる人は、其心もとながりをし、或るは衞んのは細何かし給へる、まろが物の思ふ樣ならぬ、打物の艶定め、織物の紋を持て騷ぐに、色許されなどしたる人は爲たり顏に思ひて押退けたる樣なり。然らぬが是れをもどかしげに思ひて、心の限りは劣るべき事かは、唐衣とすれども、斯くすれども、無紋にて在るは、堅紋も猶物けざやかに浮ばぬ歎きを爲たり。明けぬれば、所所の御格子上げ、妻戸押明け、半蔀明け開きて、或るは髮をつくろひ、顏を磨きなど騷ぎたり。また見れば、いみじう大きなる袋包みなど持て騷ぎ、取り入れさまよふ。また見れば、長持辛櫃の蓋に、いとおどろおどろしう疊み入れて、打重ねて、二人など舁きて持て來る者あり。人一人が幾つを着るべきにか有らんと、見る人人驚みたり。やうやう日射し出づれば、わざとならずをかしきさまにて、食ひ物ども里より持て來て食ふも有り。また其れに目を見やらず、扇を貫き、薰香を焚くも有り。局の人人「あないみじや、氣上げさせ給ふな。此日頃物騷がしう思召して、物も聞し召さず、今朝だに猶御湯漬にても唯だ少し聞し召せ」許多の御衣どもは、如何か擧げさせ給はんずる。御覽ぜずやはありし。昨日上の御前の取り重ねて、左衛門





けるほどに、男君生れ給ひぬべしと云ひ喧騒れば、殿にかたはらいたくて、御前には得おはしまさねど、覺束なきの御使頻りなりけり。斯かる程に、いと平かに男君ぞ生れ給へりける。殿聞し召すに、あさましきまで思されて、御産養など言はす程ぞめでたきや。大殿も嬉しき事に思召して、七日だに過ぎなば大殿の北の政所迎へさせ給ひて、其處にて養ひ奉らせ給ふべく思召しける。産屋の程の事どもは、然るべき國の守どもに仰せられて、皆其處より儲ののしりたり。然ば世に斯かる幸ひ人も有りけりと喧騒るも、げにと見えたり。入道殿より斯くのたまはせたり。

　年を經て待ちつる松の若枝にも嬉しく逢へる春のみどり子

御返し聞えず、覺束なし。御乳母我も我もと望む人ありけれど、故伊賀守[illegible]と云ひし人の女、遠江守惟經が女、紀伊前司成章が女ぞ只今は參りたなる。殿はおはしまして御覧じければ、限り無く思されけり。殿の上は、宮宮の刀自、なま女にても、此御子をただに生みたらば、我が在る折に疾く見んなど思しのたまひければ、是れは況して卑しからぬ人なれば、斯く思召すさまなりかし。斯くて権中納言殿の宮には、二十二日の夜さり、二十三日の産養などにぞ里の人人參り混む。二十二日に権中納言殿の東の對などの御裝束、関白殿の大盤に隣に劣るべきには有らねど、御引出物の程異なり。また上達部初めは東の對に著かせ給ひて、殿は御前の南面の簀子にこそはおはすべければ、然様の事ばかりこそ異るべけれ。其日に成りぬれば、日頃いつしかと待ち思ひたりつる若き人人は、また人の衣の色匂ひにや劣らん勝らんの競み、胸痛ましかるべし。局して侍ひ

て、唯だ麗はしうとのたまはするに、正月二日臨時客とて、其日、女房數を盡して色色を着たり。御几帳朽木形なるに、螺鈿いみじう青やかなるも、木の芽春は埋木も無きにやと見ゆ。はかなく、正月七日も過ぎぬれば、關白殿の大饗は二十日なるべし。此宮のは廿三日と定めさせ給ひて、我も我も劣らじ負けじと挑き寫讀りたり。關白殿年頃御子と云ふもの持たせ給はぬ歎きを、入道殿、上思召したるに、故式部卿の宮の御子の右兵衛督は、關白殿の上の御伯父の子にこそはおはしけめ。其君、人に女しきさまにぞ見え給へりし。有國の宰相の女の腹に女君二人生ませ給へりしを、母も亡せ給ひければ、父君は年頃とかくし歩りき給ひて、其れも亡せ給ひにしかば、其女君達、今はむげに大人に成り給ひて、いとほしげにて在りと聞かせ給ひて、關白殿の上、知らぬ人かはとて迎へさせ給ひて、殿の御まかなひ、御髪參りなどに、二所ながら侍はせ給ふ程に、姉君は致仕の大納言の御子の則理を語らひたりける程に、尾張の守に成りにければ尾張へ往にけり。弟の君はわざと名も附けさせ給はで唯だ侘み給ふままに、對の君とぞ召しける。此君に關白自ら睦まじく成らせ給ひにけり。御志の有るさまに目覺ましき事ども有りければ、上、他人よりは、然てはなど、目覺ましげなる御氣色など、かたはらいたくて、やうやう里がちに成り行けば、然るべきにや有りけん、他事は上の御氣色に隨ひ聞えさせ給ふに、此事ばかりは其れに障らぬさまに、ともすれば、御歩りきの次でにも立寄り給ふ。書などもかき紛れおはします程に、尋常にもあらず成り給ひにけるを、世の人いとめでたき幸ひ人に云ひ思ひけり。此頃ぞ子生むべかりければ、關白殿、然るべき事など思し掟てさせ給ひ

せ給ふ。此程に殿の御前興福寺に参らせ給ひて、七日籠らせ給ふ。国の守も頼はさしと思召して、京より萬づ具せさせ給ふ。七日が中にやがて八講会をさせ給ふべければ、油、燈心まで持て参らせ給ふ。仏の御帳、何くれ、仏の御具ども、いみじう率調へ持て参らせ給ふ。御誦経、御作法などいみじうせさせ給ひて、山の御具せさせ給ひて、出でさせ給ふとて、寺の別当、所司どもに、様様品品に従ひて被け物を給はす。萬づ装束させ給ひし甲斐無く、其日より、宮宮、内、東宮、院よりなどの御使頻りに続き参り集りたるに、御迎の人人いと多う参りたれば、本意無しと思しむづかりて出でさせ給ふ。御心の中に、何事も験有り、嬉しく思召さるる事多かるべし。斯くて師走の廿九日は、内の大い殿の上の御果て、法興院にてせさせ給ふ。此度ばかりと思召したる御有様思ひ遣るべし。斯くて御衣の色更ふる折に、内の大い殿の御同腹、

今はとてかたみの衣脱ぎ更へて色かはるべき心地こそせね

とのたまはする。大い殿も、大納言殿も、いみじう泣かせ給ふ。道理なりや。

若枝

はかなくて萬壽二年正月に成りぬ。空の気色も引き代へ心のどかなるに、枇杷殿には今年大饗せさせ給はんとて、準備せさせ給ふ。小一條院まだなせんと云ひ思ひたれど、此度の事には物狂はしく、様悪しきこと無く

いと厚く入れさせ給ひて、三つづつに、裳、袈裟、袍衣、野袴など、皆縑をせさせ給へり。扇、塗骨に紫貼りて、然るべき法文を侍從大納言書き給へり。帶には紫の絲をば、唐の組にて添へさせ給へり。やがて我れおはしまして、配らせ給ふとて、「斯くやんごとなき折の御事に、斯かる老僧の言添へ申すは、なかなか事損ふやうなれど、唯だ此法華經に結緣の志の深くてなん。此衣どもは、風病の重さに、なさけなく爲集めて侍るを分ち奉るなり」とのたまはせて、配らせ給へば、僧達いみじう畏まりて申し給ふ。「年頃公私の然るべき折參り仕うまつる中に、此度の御布施のやうにめでたき事はなん、又見給へざりつる。年頃の風病ことわり申して罷り去りぬめり」と申し給ふ。「其中にも、其中にも此帶こそいみじきものにて侍るめれ」など、口口甲斐ありて申し給ふ。斯くて其御遊びいみじう面白くて果てぬれば、祿ども賜はりて、日暮れぬれば、殿ばら、御前の簀子にて遊ばせ給ふ。有りつるだにをかしかりつるに、況いて人に由り殊異なりと云ふやうに、心殊にいみじう面白きに、此僧達は聲打擧げ物誦んじたれば、極樂の菩薩達も斯くやと思ひやられて、めでたきこと限り無し。若き僧達に然るべき君達の打添へ給ひける聲どもぞ、誠に尊くめでたき。其日も暮れぬれば、明日ばかりと口惜し。又の日朝座夕座果てて、僧達例の有樣の事どもにて退かでぬ。內よりは今は御準備も果てぬらんとて、疾く疾くと頻りに御文參れど、此事に由り、衣更への事どもまだ爲させ給はざりつれば、押返し準備がせ給ふ。大宮はやがて高陽院より入らせ給ひしかば、少し心のどかに思召して準備がせ給ふ。十月十七八日の程にぞ入らせ給ふ。月立ちては、また五節の程の女房の服裝ども準備が

に中し思へり。女房の服装ども、日日に更れり。色色皆紅、紫などなり。御几帳、紅葉の裾濃に秋の繪を書きて、簾の縁れせさせ給へり。土御門殿にてせさせ給ふ。上の御方の女房劣らぬさまなり。其有様、聞いと儀り難くめでたし。内にさへ斯う爲たてさせ給へる折は、心殊に氣高う面白う、出で來する人に似たり。をかしきこと外にも似ず見ゆ。其日に成りて事始まりて、御堂の有樣を見れば、かの鷲峯山の涌出の塔も斯くこそはと、めでたう輝き見えたり。高さこそ四天王宮まで至らねど、飾り磨き、清きことは耀ける程、其時にに遇へる心地す。其中に釋迦、多寶、座を分けて並ばせ給へる程など、二人の如來の光に、御前より初め奉り、見佛聞法の人、皆照され奉りたりと見ゆ。色々の衆綵に下繪書かせ給へり。表紙の繪に經の中の心ばへを皆書かせ給へり。大進賴常はいみじき細工の、心に入れ、手を盡して仕まつらん程いみじうめでたし。殿の御前、是れを斯く人知れず爲たてさせ給へる程を、返す返すめで奉らせ給ふ。實はらもいみじう感じ申させ給ふ。上達部、殿上人、殘り無く參り給へり。事ども始まりて、山の座主乾德寺をいみじう愛で申し給ふ。いとめでたう尊くて、塔の中の二世尊の出だし給ふ所の評議とも思ひ成され給ふこと限り無し。日頃過ぎもて行くを、如何に寂寥しと思召さる。四日には御遊び有るべし。尋常なるよりはと思召して、かねて樂人どもに召し仰せられたり。おどろおどろしう、爲たては有らで、なつかしうをかしう仕まつるべき御事を罷にせけり。其日は、殿の御前、斯かる事の結願し申さねば本意無しとて、此十二人の僧達に、また例直裝束賜はす。其れは此今様の「つやつや」と云ふ衣を、有るか無きかに染めさせ給ひて、綿を

參らせ給はぬをなん思召す。殿ばらも同じ心に思し聞え給ふ。大宮は今日明日內裏に入らせ給ふべきを、殿猶暫しと留め奉らせ給へれば、え速速しからず思し滯らせ給ふ。殿の御有樣も御覽じ捨てさせ給ひ難げなり。內にも、春宮にも、此事を戀しう思し出でさせ給ふ。御門など例の門にはあらず、樓を造らせ給へるかし。此事ども月日に添へていみじうなん。殿の造りざまなどの斯うめでたきにつけても、他事無く、女君達のおはせぬ事をこそは思召すべかめれ。姬君も同じ事に思ひ聞えさせ給へど、いさや、物の隔てある心地のみせさせ思ふも道理になん。月日の過ぐるにつけても此事を思召さるべし。斯かる程に中宮里におはしませば、內より疾く疾く入らせ給ふべき由、御消息度度に成りぬれど、年頃多寶の御塔を一尺ばかりに造り磨きたてさせ給ひて、やがて御持佛にと思し掟てさせ給へりける、出で來給へりければ、此供養せさせ給はんとて、その御準備なりけり。女房の服裝どもも例の事どもなれば、煩たく喧騷る。萬壽元年九月廿三日より始めさせ給ひて、五日の程懺法御讀經なり。僧正は山の座主、さては講師十人を、一方は僧綱、一方は凡僧なり。五日の程思し掟てさせ給へる御心の程いとめでたし。僧どもの法服例の麗はしき樣にあらず、夜の御裝束どもをぞせさせ給へる。薄鈍の綾の袿五つに、單衣は良き衣をせさせ給へり。上の衣も袈裟などには、僧綱のは羅をせさせ給へり。凡僧には縁をせさせ給へり。帶、扇までも御心ばへあり。包ませ給へる衣筥には、黃金して砂子を卷きためり。包ませ給へる包み紙、香染の羅の包みどもなり。何事もすべて御心に入れ、めでたうせさせ給へりと見ゆ。請僧達の法服は例の事なり。此度の御有樣をいと甲斐ある樣

菊の花池のしら波たちかけて世世に流れて匂ふべきかな　中宮権大夫（能信）

いとどしく千代を限りて澄む水に久しく匂ふしら菊の花　閑院右衛門督（實成）

匂ふより匂ひを添ふと水底に澄みてぞかをる白菊の花　皇太后宮大夫（道方）

しら波の花もろともに岸の菊千とせの秋ににほふ宿かな　権中納言（長家）

菊の花匂ふあたりの水の面は千代まで澄まん影ぞ見えける　左兵衛督春宮権大夫（公信）

萬づ代の菊に色添ふ我が君の千年の程を思ひこそやれ　皇太后宮権大夫（資平）

盡きもせず匂へる岸の菊なれば君が千代こそ思ひやらるれ　右兵衛督（經通）

盡きもせず匂へる岸のしら菊を千年の鶴の居るかとぞ見る　左大辨（定頼）

岸に咲く菊の匂ひを久しとも君が千代にぞ知るべかりける　源宰相（朝任）

ゆくすゑに匂はん程は菊の花下の流れを汲みてこそ知れ　閑院頭中將（公成）

池水ににほふと見えし菊のはな松の友とも成りにけるかな　左頭中將（顯基）

流れゆく末の世までに盡きもせずさして匂へる岸のむら菊　辨義忠

今宵の上達部の祿、宮の御方よりせさせ給ふ。例の設けの物どもなり。主人の殿、杯勸めて、昨日に盡きにけりとて、上の御方より五重三重の織物の袿、小袿などをぞ奉らせ給ふ。夜更けていみじう醉ひ亂れつゝ出で給ひぬ。今日の事のいみじう物の榮無く口惜しかりつるは、内の大臣の參り給はぬ、四條大納言の

と、大原の千年を松の風に吹き傳へ、朝夕に喜ばしきこと、有栖川一たび澄める水の心のどけき世に、多くの政をさへ行はせ給ふ左の大臣も、妹背の山の雲隔たらぬ御中らひなり。ここに百敷の東裏ばくも失はざる程に、古より勝れたる所あるに、新しく花の甍を造り續け、玉の臺を磨き成して、珍奇しき草木を掘り植ゑ、佳所ある巖、石を立て並らべて、萬づ世を呼ばふべき山を疊み、四方の海を心に任せ給へる池の水を湛へしめ給へるを御覧ぜさせ給はんとて、長月の十日四日に特別に渡らせ給へるが故に、我が天皇も昨日行幸せさせ給ひて、ひねもすに御遊び有りて、明くる今日は心のどかに、秋の空も曇り無く、夜はの月かげも隈無く照せり。今あまたの上達部、殿上人參り集ひて、「岸の菊久しく薫る」と云ふことを題にて和歌を奉らせ給ふ。此事を書き記るさん事は僞政なりと仰せ給はす。詞の林も老木となりて、花の匂ひも忘れたり。詞の泉も淺くなり行ければ、人並ならぬ木莖を哀れと思召して、新玉の年立ちかへる春の縣召に洩らされず、數まへさせ給へと申す。

緑なる松の齢をあらそふは汀に匂ふ白菊の花

我が宿の岸に匂へる菊の花ひさしき君が影ぞ見えける　關白殿（教通）

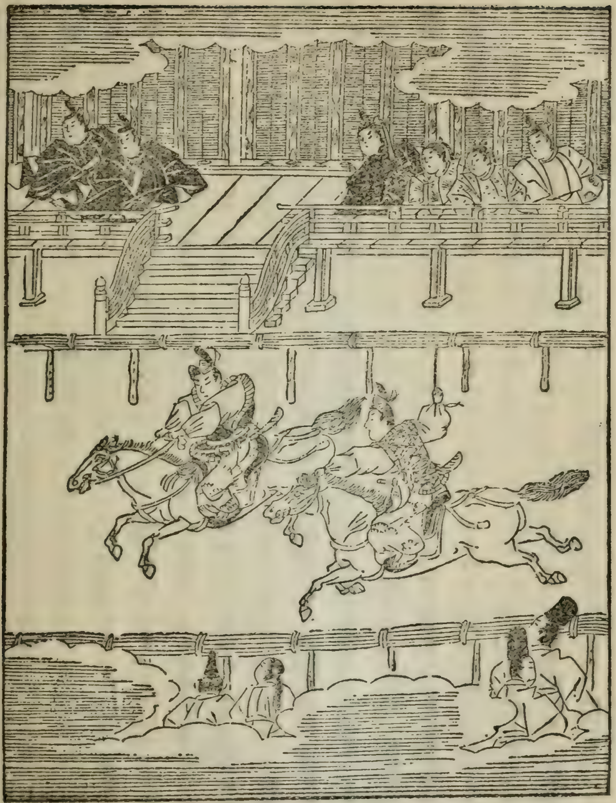
落ち積り淵とも成らん岸近み波間に見ゆる菊の白露　中宮大夫（齊信）

岸のおもに波織り掛くる菊の花いとど匂ひぞ久しかるべき　民部卿（俊賢）

をちこちの岸に枯れせぬ菊の花幾世の秋に逢はんとすらん　東宮大夫（賴宗）

番なり。生よろしき折のだに乗人も馬もいみじう競みて賴みにやは出づる。馬の心地もいといみじう世にめでたしと思ひて、ともすれば、出でては引き入れ引き入れする程、いといみじう心もとなく見えたり。然てのみ有る程も久しければ「やや」と度度仰せらるれば、出で初めて、度度に成りて、左右互に勝負する程の亂聲の音も、はしたなげなるまでをかし。勝負の乗人の被け物の程など、方分きて競みたり。又やがて此殿の舍人ども方人して、東宮の帶刀ども相混りて、馬弓射させ給ふ。勝負の舞などもをかしうて果てぬれば、樂所の物の音ども暗うなるままにいみじう面白し。中嶋にぞ樂所はせさせ給ひける。上達部、殿上人なども、いにしへ中頃などの事覺え給ふは、「また上りても斯かる事は見ずなんありし」など、いみじうめで興じ聞え給ふ。事ども果てて夜に入りて還らせ給ふ。御贈物ども御心の及ばせ給ふ限りせさせ給へり。上達部の祿、殿上人の被け物など、世に類ひ無きまでせさせ給へり。家司ども、樣樣に喜びしたり。二十日の日に昨日の事を戀しう思さるるに　飽かずめでたかりし事を聞えさせ給ふに、上達部參り給へれば、主人の殿、いみじうもてはやし聞えさせ給ひて、大御酒など聞し召して、やがて宮の御方に參らせ給へり。夜更くるままに、月面白く曇り無くて照りわたりたるに、「昨日の事、尋常心地にのみ思ひて、書き留めずば口惜しかるべし、爲政ばかりぞ仕まつらん」と殿仰せ給ひて、御前に召し出でて書かせ給へば、式部少輔文章博士內藏權頭善滋爲政書き記るし奉る。

大后の宮、天の下に三笠山と戴かれ給ひ、日の本には榮木と立ち榮えおはしましてより、行末賴もしきこ



るべし。日頃雨など降りつれど、今日しも空晴れ月曇り無く明けるに、女房の裝束、袖口、夜目にも著く、云へば更にめでたうおはしましぬ。寢殿の南の端のつまに御輿寄せて下りさせ給ひぬ。御供の上達部、殿上人、皆隨身など參りて祿なども賜はりて退かで給ひぬ。さて日頃おはしますに、同じ月の十九日駒競べせさせ給ふ。日頃だに有りつるを今日は取り分きめでたし。帝のおはしますべき大床子、寢殿の南の廂に立てて、御座設ひたり。巳の時ばかりにぞ行幸ある。御階に御輿寄せて下りさせ給ふ。さておはしまして居させ給ひて、春宮おはします。陣の外にて事の由奏して、御車陣にてかき下ろして、筵道參りて下りさせ給ふ。西の對の中の妻戸より入らせ給ひて、西の對の簀子より通りて、渡殿の簀子を渡らせ給ひて、寢殿に南面より入らせ給ひて、御座に著かせ給ひぬ。東宮の御座は平座なり。御簾の内の有樣思ひ遣られて繁まし。宮の御前に待ち見奉らせ給ふらん思ひ遣り聞えさせぬ人無し。入道殿は東の對の北の方に宿りて文殿あり、其處に御座設けたり。然るべき僧ども多く具しておはします。宮の女房の有樣、寢殿の西南面より西の渡殿まで、すべていとおどろおどろしう、紅葉襲の色を盡したり。常の事どもなれば云ひ盡さず。西の對には上達部皆著き給ひぬ。然るべく皆饗など聞し召し參りて、やうやう舞人ども[illegible]き出でたり。蘇芳菲、駒形など、さまざま舞ひ出で、今は東の對に渡らせ給ふ。またその庭にて大床子におはします。少し去れて東宮おはします。平座なり。主人の大臣を初め奉り、上達部、殿上人、皆引き連れて、東の對に參り給ふ。何れの殿ばらも皆御裝束めでたき中に、關白殿の御下襲の菊の單表かかやきて、目留まりたり。競馬十

例の作法にて滅おでぬ。御堂供養の有様前々に異ならず。此佛の御後ろ、東の方に眞に戸を立てたり。佛の御後ろには、雙林をさやかに描きわたして、紫の錦綾の御帳にて、泥して繪書きて、瑠璃の御經したり。いみじう鍮かしう見えたり。

駒競べ

はかなく九月に成りぬ。關白殿、高陽院殿にて駒競べせさせ給ひて、行幸行啓あるべき御準備あり。いとどしき殿の有様をいかさまに繕ひ磨かせ給ふ程、云へば疎かにめでたし。此世には、冷泉院・京極殿などをぞ人面白き所と思ひたるに、此高陽院殿の有様、此世の事と見えず。海龍王の家などこそ四季は四方に見ゆれ、此殿は其れに劣らぬ様なり。例の人の家造りなどにも違ひたり。寝殿の北南西東などに皆池は有り。中島に釣殿建てさせ給へり。東の對をやがて馬場の御殿所にせさせ給ひて、其前に北南ざまに馬場をさせ給へり。門も遙に面白くめでたきこと、心も及ばず、形容び盡すべくもあらず。をかしう面白しなどは是れを云ふべきなりけりと見ゆ。繪などよりは是れは見所ありて面白し。大宮は京極殿におはしませば、九月四日の夜やがて高陽院殿に渡らせ給ふ。常よりも御輿寄にめでたうて渡らせ給ふ程の儀式有様、御装ひ殊に常ならず、常の行啓に勝れたり。女房出車二十輌あり。此殿の草木も懐かしう思されて、斯く修築させ給ふな

母屋の柱には十二大願の心を繪に書かせ給へり。六觀音の御前の方の柱には觀音品の偈の心を皆書かせ給へり。飯室の阿闍梨の手を盡し給へる程思ひ遣るべし。南より北ざまに七佛、藥師並ばせ給へり。端端に日光月光立ち給へり。ひまびまに十二神將身長七尺ばかりにて、色色の衣を着、さまざまの顔、心心の氣色にて、持たる物皆殊異なり。見るに且つは笑ましう、且つは恐ろしげなり。一一に見奉りて、隨願藥師經の文を思ひ出で奉る。「一聞我名、衆病除愈、乃至速證、無上菩提」と有り。一度御名を聞きてだに斯かり、況んや七佛を見奉らん程思ひ遣るべし。また七佛藥師經に云はく、「若し我が名を聞く事有らん者、惡趣に墮ちば、佛の神力を以て、また名號を聞かしめて、却りて人趣に生れて、菩薩の行を修し、速かに圓滿する事を得しめん」と宣へり。況いて見奉る程を思ふに疎かならんやは。また六觀音は六道の爲めに具召したり。本誓を思ふにいと哀れなり。「大悲千地獄、大慈正餓鬼、師子馬頭畜、大光面修羅、天人准胝人、大梵如意天」とのたまへり。斯く思ひ續け拜み奉るにも六趣に輪廻する事あらじと頼もしく成りぬ。其中にも、如意輪の御思惟の氣色も哀れに見え給ふ。「難斷煩惱、即能斷除、自然智慧、發起慈心、隨類示現、以大慈悲」また「難度衆生、能度相現、悲哀衆生、慈如一子」などのたまはせたる程、おぼろげならずかし。許多の佛の現れ給へる、且つは何處より來り給へるにか知らまほしきに、無量義經の文に云はく、「戒定慧解知見生、三明六通道品發、慈悲十力無畏起、衆生善業因緣出」と宣へり。殿の御前の御心の中より、現れ給へりと知りぬ。堂莊嚴、佛供など前前の如し。事ども果てぬれば、百餘人の僧達祿賜ひて、樂人ども

植木どもを生し並めたるに、空より色色の花降り紛ひたるに、銀黄金の香爐にさまざまの香を焚きて薫じ合せたる程、えも云はずめでたし。祇陀林におはしまして、御前の庭を唯だ彼の極樂淨土の如くに磨き、玉を敷けりと見ゆるに、許多の菩薩舞人どもに、例の童部のえも云はず樣樣裝束して舞ひたり。此樂の菩薩達、金銀瑠璃の笙や、琵琶や、簫の笛、篳篥など吹き合はせたるは、此世の事とゆめに覺えず。唯だ淨土と思ひなされて、えも云はず哀れに尊く悲し。事ども果てぬる際に、被け物、入道殿御棧敷より樣樣殘り無くせさせ給へるに、山の座主の御心掟てもさまざまめでたく、色色にせさせ給へり。此宮こそは御覽ぜず成りぬれば、後に佛舍利ばかりをぞ、內にも宮にも奉りける。先年に山の座主慈惠僧正、母の御爲めにとて、吉田と云ふ所にてぞ同じ事し給ひける。其時は、いみじう世に珍らしき事にぞ思ひて、今の世語にしけるを、是れは彼れに云ふべきことにもあらず。其折の事、今の世の事と同じ口に云ふべきならねば、是ればかりめでたきこと無くなん。斯くて五月にも成りぬれば、例の殿の三十講とて準備がせ給ふ。五月五日童部の藥玉附けたるを御覽じて、內大臣殿の御匣殿、

　年ごとのあやめの草に引きかへて淚のかかる我が袂かな

はかなく過ぎて六月にも成りぬれば、廿六日、彼の藥師堂の供養、例の事どもえも云はずめでたし。御堂の有樣、例の日も耀きて、如何にも見分き難し。大宮、殿の北の政所おはします御局、此御堂の北に寄りて廂に皆御簾掛けたり。御堂の造りざま、犬防のさまなど、西の御堂に異ならず。藥師佛の御前の片方の

見えたり。佛の御有樣を見奉りて、山の座主「無量百千劫、淨修身口意、如此普散種得、如此難持身」と誦んじて拜み奉り給ふを、大殿の御前を初め奉りて、上達部、殿上人、同じく拜み奉り給へば、院の中に、許多滿ちたる人人、身の成らんやうも知らず、「南無」と拜み奉る。口は異なれど、聲は同じく聞えて、涙止め難し。佛の御階を昇らせ給ふ折に、左には山の座主、右には殿の御前立たせ給ひて、御手を取り奉らせ給ふ。御階の有樣、彼の持地菩薩の構へ給へりけん金銀水精の三つの階に劣らず見えたり。佛の南の階より、西向に北さまに並ばせ給へり。事ども果てて、僧どもに祿賜はり、樂人被け物賜ひて退かでぬ。此程にいよいよ御堂をめでたく磨き建てさせ給ふ。四月に成れば、賀茂の祭とて世騒ぎたるに、また山の座主、山の舍利を女はえ拜み給はぬ事いといと口惜しとて、舍利會せんとて、舍利を先づ下し奉り給へれば、世の中の人人參り拜み奉る。祭果てて、四月廿日餘りに舍利會せさせ給ふ。法興院より祇陀林と云ふ寺に渡し奉り給ふ。其の有樣を、日頃いみじう調へののしりて、小一條院、入道殿などの御棧敷を初め、然るべき殿ばらの御棧敷ども、いといみじく造りののしりたり。先づ其御棧敷の有樣ぞいみじき見物なる。其日に成りぬれば、三百餘人の僧の梵音錫杖の音など、いと樣樣にて、いみじくめでたく裝束き調へて、御輿二つを前に立て奉りて、定者左右よりいみじくをかしげにて歩みつつ來たるに、御輿に附きたる者ども、頭には兜と云ふ物して、色色のおどろおどろしういみじき唐錦どもを着て持ち奉れり。樂人、舞人、えも云はぬ菩薩の裝束にて、左右に分れたる僧達に續きたり。御輿のおはします法興院より、祇陀林までの道の程、いみじき寶の

品に「及見諸佛、此非小緣、是れ朧ろげの緣にあらず」と見えたり。また過去の阿育王の時に「誰か佛を見奉る者」と有りければ、一人の大臣ありて申しけり。「波斯匿王の妹」と申しければ、召して問はせ給へば、「實に佛を見奉れり。世に勝れたる者なり。空に昇り給ひて後、七日まで、その御足の跡猶光りき」とこそ申しけれ。今我等有緣の佛を見奉りつ。是れ朧ろげの緣にあらず。是れを緣として極樂淨土に往生して諸の佛を見奉らざらんやと、見佛聞法の緣深き心地して悲しくなん。仰ぎて見れば、法性の空晴れねど、希求の霞靆す。樂の聲、六鼓の音、げに六種に大地も浮きぬべし。池に色色の蓮華並み寄りて、風涼しう吹けば、池の浪、苦空無我の聲を唱へ、諸波羅蜜を說くと聞ゆ。院の中、道俗男女涙を流し、喜び拜み奉る。十方の諸佛菩薩の極樂に參り集まり給へらんも、斯くやと見えたり。樣樣に思ひ湧けど、隨喜の涙一つ色なり。關白殿を初め奉りて、萬づの殿ばらおはします。麗はしく裝束きておはしまし並めば、十六の大國の王などのやうに見えさせ給ふ。內大臣殿、按察大納言などぞ參り給はぬも口惜し。今日の行香に四位五位庭に侍ふ。日の光、佛の御光に照り合はせ給へれば、見佛聞法の許多の人人も皆金色に見ゆ。殿の御前、我が御所爲とも覺えさせ給はず、涙は雨と降らせ給へども、空は曇らず。上達部の歡喜の御袖も潮解げなり。東は經藏、宮の女房、西は鐘樓の邊まで、宮宮の女房車ども三つ四つづつ、乘りこぼれ亂れ出でたり。柳、櫻、藤、山吹こき交ぜをかし。是れも其方にをかしくめでたし。佛やうやうおはしまし寄る程に、御階の左右の傍より、童部の鳥の舞したる程、まことに孔雀、鸚鵡、迦陵、頻伽の遊び亂れたると

たる障り無き辰の刻ばかりに渡し奉らせ給ふ。丈六の七佛、藥師、皆金色におはします。日光、月光皆立ち給へる御姿どもなり。六觀音同じく丈六にておはします。佛を見奉れば、獅子の御座より御衣のこぼれ出で給へる程、いみじく艶かしく見えさせ給ふ。渡らせ給ふ程は、力車と云ふものを二つ並べて、一佛をおはしまさせ給ふ。今日は其車の上に大きなる蓮華の座を造らせ給ひておはしまさせ給ふ。仰げば寶蓋空に有り。此蓮華の上、一一の色に隨ひて千の光明かかやけり。佛此座の上におはしまして、三十二相、八十種好あらたにて、大定智慧の相現じ、威光朝の日の如し。普賢色身無邊にし、六道自在無量にして、慈相神通殊勝たり。鳥瑟紺細やかに、慈悲の御眼蓮の如く開けたり。葉の壺鎮にて皆持たせ給へり。また六觀音、金色の相好圓滿し、三昧月輪相現じ、無數の光明かかやきて、十方界に遍滿す。所有の色には皆く一切衆生を利益せんと思したり、同じく色色の蓮華を座にせさせ給へり。大悲を初めとして、大梵淸淨に至るまで續きて居させ給へり。御車に附き仕うまつる者ども、頭に蓮華の冠し、茜の衣を着たり。佛の前後左右には諸僧威儀具足して圍繞し奉れり。諸の寶の香爐には無價の香を焚きて、諸の世尊に供養し奉る。樂の聲、笙、笛、琴、箜篌、琵琶、鐃、銅鈸を調べ合せたり。菩薩の姿にて舞ひ續きて、佛の安詳と莊嚴しく歩ませ給ふに隨ひて、諸僧、梵音錫杖の聲を唱へて、讚を誦して渡る。空より色色の寶の華降りて、馨薫天の樂を調べ佛の功德を讚歎す。此場に參り會ひたる人人、聽ろげの功德の身と覺ゆ。過ぎにし方も、今、行末も、今日の佛に遇ひ奉らずなりぬる人、前佛後佛の衆生の心地す。いみじう口惜し。彼の法華經の序

夫殿の中姫君、まだ稚くおはせし折より取り放ち養ひ奉らせ給ひにける程に、今年八つ九つばかりにぞ成らせ給ひにける。此殿の御有樣を、いみじう口惜しう心細く思召したり。其れに從ひて大夫殿の歎かしう思すべし。斯くて山の座主院源召して御戒受けさせ給はんとて、其御用意あり。御裝飾など本のやうなれば、押返し然るべき樣の御具ども、宮司準備ぎ仕うまつる。御帳より初め改めさせ給ふ。一條院萬づにし奉らせ給へりし何の御調度どもも、皆此姫君の御料にと取り納めさせ給ふ。大宮も如何でと思し準備がせ給ふ。道の御事なれば、然樣にしておはしまさん折は、同じ心にて覺束なからず思し聞えさせ給ひける。世に有らまほしき御有樣にておはしませば、然るべき人人なども、皆志し參るべき樣になん侍る。さるは御年などもまだいと若くおはしけれども、げに同じくはとばかり、行末を兼ねて思召すこと、哀れにめでたくなんとぞ。

鳥の舞

斯くて御堂の東に北南さまにて、西向に十餘間の瓦葺の御堂建てさせ給ひて、年頃造り磨かせ給ひつる御佛、南殿より渡し奉らせ給ふ。萬壽元年三月廿餘日の事なり。やがて其れに御堂供養と思召しけれど、上の御兄弟の大原の入道の君の二月に亡せ給ひにしかば、上の御喪におはしませば、御供養は六月五日に定めさせ給へり。佛の渡らせ給ふ其日に成りて、祭の霞の絶間より紫の雲筋絶えず搖曳きけり。日麗かに照り

ども多く、西王母が桃の花も時節知りたる樣なるもをかしくて、所所風流者多く見えたり。斯かる程に、一條院の一品の宮、年頃いみじう道心深くおはしまして、御才などはいみじかりし御節にておはせませばにや、一切經讀ませ給ひ、法文ども御覽じて、聊か女とも覺えさせ給はぬ御有樣なるに、尼にておはしまさんも斯ばかりの御修行にこそは有らめなど思しながら、猶愛無き事なり、何事に障るべきぞなど思召しけるにや、三月に俄かに尼に成らせ給ひぬ。此宮の中は更なり、大宮、内、東宮まで聞し召して哀れに思召し聞えさせ給ふ。さるは此正月に大宮の京極殿におはしまししに、行幸ありしに、宮も其處に渡らせ給ひて御對面ありしに、いみじう哀れに物を思し知るさまの御物語など有りて、今よりは内におはしますべく聞えさせ給ひて、年頃の御裝束なさを慊しう思ひ聞えさせ給ふに、斯かる御事を聞し召して、哀れに口惜しう思召す。殿の御前泣き參らせ給ひて、萬づ哀れなる事を返す返す聞えさせ給ふ。一故院も斯樣にてぞおはしましたんものとぞ思召したりしかし。齡久しとても幾ばく侍るべきわざならず、今は唯だ佛に成らせ給ふべきなり。現世後生めでたくおはします事なり。波斯匿王の女心を發せる、人も數へず髮を削ぎしに、誰かは深く勸めし、有り難く昔の事覺えたる御心掟てなり。世に侍る人は萬づにつけて罪をなん造り侍る。まして子など侍らば、いとこそ物思ひけるわざに侍りけれ。女房達忠實に善く善く仕うまつり給へ」など、哀れに濃かに聞えさせ給ひて出でさせ給ひぬ。師中納言は「かねて斯くと仰せらるるとも制し申すべきにも侍らぬに、心憂く知り侍らで」と、いみじう泣き給ふ。大宮よりも殿よりも、御裝束ども奉らせ給ふ。宮より、東宮大

敢へぬまで物も覺えず惑ひおはしまして御覧ずれば、彼の長者の家の心遣せさせ給ふ。我れこそ急ぎおはしましぬと思召せど、世の中の人いつの間にか參り集りつらん、御堂の上に數知らず上りたり。木を掛け渡せる階ども、許多の廣き中に滿ちたり。我は唯だ佛の御前におはしまして「助け給へ」と額を著かせ給ふ。許多の僧俗數知らぬ人、御堂にて額を著き、大聲を擧きて申し喧騒りたり。此方の僧坊の西東を並びて滿りたるか、其僧坊より火の出で來たるなりけり。許多の人人火を滅しとも思へらず惑ひ騒ぐにや、皆に續けで、燒上り御堂の隔ての中門までぞ燒けたりければ、許多の人人身の成らんさまも知らず惑ひつればにや、また佛の御しるしにや、西の風、南の風吹きて、殘りにも附かず成りぬれば、僧坊二つぞ燒けにける。是れにつけても佛の御有樣を殿にも僧達など疎かならず申し聞え給ふ。佛の御しるし、殿の御前の御心の中の念の程を見せ知らせんと思して、佛神の自ら有らせ給へる事と見えたりなど、いみじう有り難げに世人も申し思ひたりけり。斯くて高松殿の姫君は、六條の故中務の宮の御子の、ますず宮と申し、關白殿の上の御弟におはしませば、やがて殿の御子に傳し奉らせ給ふ。三位中將にてぞおはする。春宮の大夫、中宮の權大夫、中納言達、いと心得ず怪しき事に思し咽びたれど、殿の御前にせさせ給ふやう有るべし、制し聞え給はんに力無ければ、え申させ給はず。今の大貳惟憲が家、土御門なるにて壻どり奉らせ給ふ。其程の御有樣推し量るべし。女君快からぬ御氣色なれど、男君其れをも知らず顏にて、澁澁し思いたる樣もをかし。二月晦日の事なりけり。されど三月にぞ御所顯ありける。三日に成りぬれば、所所の御前供參り、今めかしき事

や。御匣殿の御乳母をこそは斯く云ふべかめれ。いと斯く怪しからぬにつけても、物若やかに輕々しからぬ人は、出でて走り往ぬべかりし。されど大人に成りにたれば、聞き入れぬさまにて、自ら佛神おはすればと、心のどかに思ひたる氣色も、また押返し然るべき人人は更に有るべき事ならず思されたり。唯だとてもかくても亡せ給ひぬる人の御身一つこそ哀れなれ。今は小二條殿に今日明日渡らせ給ふべしとて、物運びなどせさせ給ふ。年頃此家をめでたき所と思して先づ斯かる折渡らせ給へるに、押返しあさましければ「何して」と云ふ事のやうに、つらくあさましう思さる。為任が家にて平かにせさせ給ふとて、殿の御前、加階、御衣など賜はせし程、云へば疎かにめでたかりし事ぞかし。猶萬づに哀れに定め無き世なりや。大納言殿は四條の宮へ渡らせ給ふ。尼上は君達の御有様の心苦しさに、今は御行ひにとのみ思せど、いとほしくて添ひて渡らせ給ふ。何れの殿の御歩きにかは一つ御車に奉らざりし、此度こそと、哀れに悲しうて、また押返し泣かせ給ふもいといみじ。後撰集に有るやうに、

　ふるさとに君は如何にと待ち問はば何れの山の雲と答へん

と有る歌先づ此折に思し出でさせ給ふ。殿は其儘に御精進にて、御行にてのみ過ぐさせ給ふに、安からず氣色だち音づれ聞ゆる人人あまた有れど、只今聞し召し入れず。哀れに月日に添へて戀しくのみ思ひ出で聞えさせ給ふ事限り無し。斯かる程に二月晦日方に、殿の御前、御堂近き邊に御方違におはしまして御精進りたるに、人參りて俄かに騒がし奉りて、「御堂に火出で來て候ふ」と申せば、殿の御前、御車にもえ奉り

の君、然るべき人人具して木幡へおはす。殿には待ち奉らせ給ひて、尼上逢はせ給ふ。同じ如響動み泣きたり。哀れにゆゆしかりける正月なりや。朔日に殿いとのどやかに御歩りき無くて、君達の御戴餅せさせ給ひて、いみじう御心地よげに、思す事無げなりしを、大納言殿など見奉り興ぜさせ給ひし程に、何時ぞと思し分かれぬや。世の中ばかりあさましう心憂きものは無かりけり。今初めたる事には有らねど、猶いと珍らかにのみ思さる。御忌の程など、いと哀れに徒然なる事ども多かり。殿の御夢に在りしながらの御樣にて、白き御衣あまた着させ給ひて、

ともし火の光はあまた見ゆれども小倉の山をひとり行くかな

とのたまひて、やがて失せ給ひぬと御覽じて、大納言殿にも斯う斯うと聞え給ひて、所所に御誦經奉らせ給ふ。はかなく御忌の程過ぎて、二月廿餘日、御法事長谷にてせさせ給ふ。七僧百僧など、其程の御有樣、有るべき限りせさせ給ふ。哀れに悲しうて過ぎもて行く。返す返す此御事のあさましさを疎かならず思し慈ふ。御匣殿、御年はいと若けれど、御心深く萬づを思したる程も、いと哀れに、行末推し量られさせ給ひて見えさせ給ふ。其れにつけても、殿はいとど疎かならずこそは思ひ聞えさせ給ふめれ。年頃殿の御心の好色しき事の止ませ給はで、宮宮にも物のたまはする人人あり。殿の内にも、はかなく思し附きなどして、上も打解けたる御氣色無く、侍ふ人人も善からぬさまに、はかなく云ひ思ひ過ぎにし、然やうの類ひにも譯しからぬ人人に思ひ云ふべかめれど、其れ有べき事にあらず、猶いと昔も今も、人の心ぞ心憂きものはある

匣殿の大人び給はんを見てなど思ししに、斯くあさましう心憂く思し亂るとも疎かなり。斯くてのみやはとて、此月の十四日に御葬送あるべし。いみじながらも只今までは御手水、御膳と準備ぐにつけても、名殘ある樣には思さるるを、此後いとど如何にと思召されて、其日に成りぬれば、早朝より他事あらんやは。其御準備を内にも外にも、有るかぎり思し準備ぎて、また諸僧に泣かせ給ふ程、道理にいみじや。暮れぬれば殿の御車に御裝束す。御車の輪などに絹卷きなどするを見るにも、世の常の有樣は斯くや有りしなど、いみじき事ども多かり。さて御車寄せたれば、殿、大納言殿、内供の君など、睦まじく思す人人などして、舁き乘せ奉り、率て出で奉る。此度ばかりの事と思召せば、殿の御車に殿人の有る限り、五位十人ばかり附けさせ給ふ。御心の中には、是れ有るまじき事なり、世にやんごとなき事には殿人接へたる人をこそすめるに、後の謗り有りなんと思しながら、御心志、また世におはし長らへ給はましかば、御匣殿、人並並におはしまさましかば、如何にめでたき御有樣ならましなど思さるるに、何事も儲殘させ給ふべきやうも無し。殿、大納言殿など、え云はぬ物を着させ給ひて、御車の後に歩ませ給ふ。辨の君も仕まつらんと思しのたまへど、御忌の日なるに合せて、またゆゆしう思して止め奉らせ給ふ。出でさせ給ひぬる名殘、火を打消ちたるやうに人騒がせぬに、此處彼處哀れにいみじき事どもを云ひ續け泣かせ給ふ。いみじう哀れに悲し。御匣殿、中務君、太房君などぞゆゆしき物は奉る。大人は然るものにて、いと小さくて着させ給ふ御有樣ども、哀れにいみじう心憂きや。さて夜一夜とかくし明かさせ給ひて、曉に歸らせ給ふ。御骨は内供

たり。如何なる事にかと心もとなき程に、此巫女唯だ泣きに泣きて、「上こそや、など隱れ給ふぞ」と云ひて、車の後の方に唯だ寄りに寄りて、「哀れ如何がし給はんずる。え仕うまつらで止み侍りぬる事、必ず死ぬべき道理も侍らざりつれど、斯く成りにしかば、哀れに心憂くこそは」など云ひ續け泣かせ給へど、はかばかしき事も無し。左近の乳母には胸をかき開けて、「乳飮まん」とのたまはすれば、乳母と知り給へると見るになん猶あさましきものにこそありけれと、哀れに悲しういみじうて、泣く泣く歸らせ給ふ心も無しや。此物怪の然ばかり在りし折聞えける事など、今ぞ思し合はせて、心憂くあさましう思さる。斯くて二三日ある程に、前の相撲の守たかよしと云ふ人參りて、「夢に見え給ひつる事こそ侍ひつれ。亡き此御有樣は人の仕まつりたる事にこそ有べけれ。御帳の御座の下などを御覽ぜば楊枝にしてなん置きたると見え侍りつるなり。眞に楊枝候はば眞とこそは知らせ給はめ」と申せば、いと睦まじう思召す人人行きて見るに眞に有りけり。然ば夢にも見ゆるものなりけり。あさましう心憂くいみじとも疎かなり。殿と尼上、打語らひ給ひつつ、打泣き打泣き過ぐさせ給ふ。殿の、御身の成らんやうも知らず泣き惑はせ給へば、內藏の命婦參りて、御堂の御消息、上の御消息など萬づに聞え慰むれど、身の有らばこそとのみ思召させ給ふに、御物怪などの事も傳の殿の北の方のしわざと云ひて、貴船の現れてなど申して、今さへ然やうに云ふもかたはらいたく思さるれば、げに此頃ぞ後悔しき大將とも聞えつべし。大納言殿、姫宮の御事をあさましう思し折、本意も遂げなんと思したりしかど、此上の御有樣の見る甲斐ありておはしつれば、萬づを思し慰め、滯りて、御

らでと、口惜しう思ふ程に、さこそとののしりしかど、やがて絶え入らせ給ひぬ。あさましくゆゆしなども世の常なり。萬づの物は此二三日の程の御有様に殘り無く爲なさせ給へるに、またまたいみじうせさせ給へど、甲斐も無し。然べき僧達皆退かでて、良海内供ばかりぞ留まりて侍ふ。上の御兄弟の内供の君、日頃御枕上にて、はかなき御藥物參らせ給ふ起き臥しも、萬づに仕うまつり給へるなども、すべていとあさましき事なり。尼上つと抱だき奉り給ひて臥させ給へり。御胸がちに乳などもいと張りて、いみじう哀れに見えさせ給ふ。いと怪しう所所赤みなどして憂たてげにおはしますは、世の人の云ふ有樣にて亡せさせ給ひぬるにやあらんと、哀れにゆゆしう思すにつけても、殿も大納言殿も、え見奉らせ給はず、いとあさましう聲ども擧げてののしり泣かせ給ふもいみじきに、御匣殿は十一なり、中姫君は九つばかり、唯だ此二所、物の心知らせ給へるさまに云ひ續け泣き給ふ。他君達は走り遊び諍ひなどせさせ給ふ。哀れに心憂し。此日頃斯ばかりいみじかりつるに、ゆめに云ひ置かせ給ふ事無かりつ。大かた物を云はせ奉らぬ御物怪なりけり。あさましう心憂く、いみじき僧都の靈に計られ給ひぬる。されど其れ然べきにもあらずと思すにも、行く方無き御心地どもなり。猶いと覺束なく侘びし。のたまはん事をも聞かん、また神の眞言をも御らんとて、左近の乳母、泣く泣く御口寄せに出で立つに、尼上も「病我れも行かん、若し昔の御氣色も見えんに對面せずばいと心憂かるべし」とて、忍びて物し給ふ。年頃睦まじう思召す女房一人添へておはして、尼上には此人の衣の裾を引き掛けて、おはするやうにも有らずもてなして、巫女をば御車の口の方に載せ

加持參りたる際どもも喧騒り滿ちたり。すべてあさましう苦しげなる御心地に靜心無き人人多かり。御物怪人人に移しののしる。されどはかばかしき事云はず。辨の定額の君、大内記義忠など呼び寄せて云ふ事どもも有れども、物怪の云ふことなれば誰も其れを眞と思すべきにあらず。貴船のおはするとて、いみじう恐ろしき事ども有れど、然りともなど思す程に、年頃此殿には小松の僧都の靈と云ふ事ありて、初めは此御齋屋などの折はいと恐ろしかりしかど、其れを萬づに云ひのままにせさせ給ひし程に、いみじき御得意に成りて、其れぞ此年頃何事もいと能く告げ聞えさせつるも、其等も音無きを殿は怪しく覺束なく思召す程に、御湯參らんと有れば持て參りたりけるを聞し召して、やがて物ものたまはせず成らせ給ひぬ。柿浸しの汁を物の葉に附けて參らすれど、すべて御口も塞がせ給ひて筋無ければ、心譽僧都參りて、抑へて加持參り給ふに、嘗し有りて御口動かせ給へば、御湯などつゆばかり參らす。例は然も無きに、御自ら物怪唯だ出で來に出で來れば、いとかたはらいたしと思召して、猶人に驅り移さばやとのたまはすれば、許多の僧心を合せてののしり、加持參りて、他人にも驅り移せど、猶御心地同じやうなれば、集りて加持參る程に、例も憑き憤らひたる女房に小松の僧都現はれて、「此加持止めよ、あなかしこ、あなかしこ、過ちすな、唯だ低聲こそ善からめ」と云へば、殿、「此物怪の斯く云ふは有るやう有らん。此加持止めて經に成れ經に成れ」とのたまはす。斯く云ふは正月五日なり。殿いみじう制せさせ給へば、加持止めて、許多の僧低聲に讀みたり。其程のおどろおどろしさは推し量るべし。心譽僧都も誰も、御物怪の堪へ難げなりつるものを、唯同じ事加持を參

もあらで日頃過ぐさせ給へるが、今日明日に成らせ給ひにたれば、例の三條に爲任が家に渡らせ給ふ。年頃は小二條にこそは住ませ給へるに、物の諭繁く、人人の夢にも騒がしう、また自らも物心細く思されて、如何にと哀れにのみ思し亂るるに、渡らせ給ふとても、また此度を見んとすらんやと打泣かせ給ふもゆゆし。御前なる人人は恐ろしう思ひ聞えさせたり。殿の人人は更なり、外の人も此御有樣を夢などに見つつ聞えさすれば、大納言殿、尼上など靜心無く思さるるに、渡らせ給ひぬれば、いとど御修法、御讀經など種種に立てさせ給ふ。豫てよりも今年來年は斯樣なる御有樣ならば限りなりとのみ思したるに、賴もしげ無くのみ覺えさせ給ふ。いと恐ろしう思し見奉らせ給へど、十二月の晦日ばかりにいと平かにて男君生れ給ひぬ。御心地なども中中例よりはいと輕やかに、御湯ゆでなどせさせ給へば、誰も今ぞ心のどかに思し見奉らせ給ふ。若君の御乳母は豫てより申ししかば、五節の君、故參河の守方隆が女、衞門の大夫致方が讀で參りたる。御產屋の騒がしき紛れに年も暮れにけり。正月などの事ども思す事無げなるに紛れ給ひ、殿の御歩りきも無かりければ、心のどかに君達の御戴餅など聞きにくきまで祝ひ聞えさせ給ふ。正月六日には七日の夜なれば珍らしげなき御事なれども、年の初めとていみじき頃なれば、いとどめでたし。今日は七日にて御湯殿あるべければ、また夜さりの御湯殿の事どもなど、さまざま喧騷る程に、俄かに打嘔吐ばせ給ひて、御氣色いと苦しげなりければ、いと恐ろしうて、然るべき僧達日頃の御祈りに打倦み心地よげなるに、俄かに斯くおはしませば、皆參り集りて加持參る。殿の内の僧は然るものにて、外の然るべき殘り無く召し集めて

う餘りに見えさせ給ふ。いつも物のめでたき中にも、さは是れを御賀とは云ふにこそ有りけれ。是れをめでたきものの例には云ひ語るべし。前前の昔の御賀どもも、いと斯くしもやとぞ推し量らるる。其後、殿の御前、七大寺巡りに歩りかせ給ふ。さまざまに御心の暇もおはしまさぬに、御有樣の盡きもせぬを世の例に語り續け書き置くべきやと見えさせ給ふ。されど斯樣の折參り見るには、心慌ただしうて、其儀式たしかに見覺え難う、また音ばかりに傳へ聞く人、はた況いて如何でかは、いと書き續け難げなる事どもなれば、唯だ片端ばかりをだにとて有る物摸ねびなるべし。いみじう哀れなりける事は、後に聞きしかば、源少將雅兼の君は此舞人に差され給へりけるが、身に物の音してえ舞はざりしかば、良頼の君をさし代へさせ給へりけるに、彼の筑紫に帥の中納言此十二日より俄かにいみじう煩ひ給ひて、「あはれ我が今日死ぬるをも知らで、明日少將は御賀に舞ひかなでんとすらん」と、度度のたまひて、其日の暮に亡せ給ひにけり。親子の契の哀れなること、彼の君の煩はせで、然樣にも物し給はましかば如何にいとほしからましと、いみじく哀れにこそ聞き侍りしか。筑紫にはおはせぬ人の御族のおはして惡しかりけると聞き侍りし。

後悔大將

斯くて內大臣殿の上、今年二十四ばかりにや、此程に君達五六人ばかりに成り給へるを、また今年も尋常に

老いたる人は涙も落ちけり。やうやう夜に入る程に、上達部南の簀子に參りて遊び給ふ。堂の樂よりも是れは面白きこと限り無し。月も漸く出でて遙かに見やらるるに、所所の柱松、また手毎に點したるなど、いみじう明きに、また殿ばらの御杯も數多度に成りて、杯の光も鮮明に見ゆる程に、

萬づ世と今日ぞ聞えんかたがたに深山の松の聲を合せて　四條大納言（公任）

有り慣れし契も絶えて今更に心濁しに千代と云ふらん　殿の御前（道長）

雛鶴の下りゐる山を見つるかな是れや千年の例なるらん　小野宮右大臣（實資）

君が爲め千代や重ねん菊の花ゆくすゑ遠く今日こそは見れ　關白左大臣（賴通）

數ふればまだ行末ぞ遙かなる千代を限れる君が齡は　内大臣（教通）

枝しげみかたがた祈る千代なれば常磐の松もいとどのどけき　中宮大夫（齊信）

珍らしき今日の圓居は君がため千代に八千代に唯だ斯くしこそ　侍從大納言（行成）

紫の雲の中よりさし出づる月の光ぞのどけかりける　春宮大夫（賴宗）

今日は然は殘り久しき萬づ代の數知り初むる始めなりけり　中宮權大夫（能信）

立ちまさる秋の深山のかたがたに萬づ代しるき君が行くすゑ　權中納言長家

是れより下は夜更けぬれば止めつ。上達部の御祿の有樣など晴ければ見えねど、「闇の夜の錦にや」とまでなん香りは隱れ無きわざなれば、えも云はず沁みかへりたり。今は宮宮還らせ給ふ御有樣ども、いと莊麗し

樣なれど、色織りざまも異りてをかしう見えたり。殿ばら、殿上人、寢殿の前の庭の平張に皆著き給へり。事ども果つる際に、經通の右兵衞督の子、陵王舞ふ。いみじう美くしくをかしき程に、殿の御前は寢殿に隱れ居させ給ひて御覽じけるを、高欄の際に出で居させ給ひて、もてはやし御覽じ興ぜさせ給ふ。然るべき人人、皆物脫ぎ給ふに、また東宮の大夫殿のすまひ君、落蹲舞ひ出で給へる、此君、有りつるよりも小さうおはするに、折れ返り舞ひ給ふ程、そこら廣き庭に、人とは見え給はで、鳥などの翔けるらんやうに見え給へば、內にも外にもいみじうもてはやし興ぜさせ給ふに、殿の御前「老法師の衣の色はゆゆしけれど」とて、薄鈍の袙の御衣一襲を脫がせ給ひて、此君に被け奉らせ給へれば、此君の御舞の師、右近の將監正方打被きて、いともてはやし舞はせ奉れば、關白殿立たせ給ひて、東の對の南の簀子の下にて御衣を脫がせ給ふに、御汗に附きてえ脫がせ給はねば、是れ彼れ參りて、とかく引き放ち奉れど、更に脫がれねば、唯だ袙の御衣の袖を引き切りて、持て行きて被けたれば、その御衣の袖に頭を差し入れて、頸に掛けて、有りつる御衣をば肩に掛けて、落さで舞ふ程、さは云へども父好用が子には有りと、殿ばら興じのたまはせて、許多の殿ばら御衣を脫がせ給へば、皆はえ被き敢へねば、唯だ此君の舞ひ給ふ所の庭に脫ぎ集めさせ給へれば、木の下に色色の紅葉の散り積りたると見えて、いみじうをかし。正方も餘りに成りて、傷損ひにためり。

故女院の御賀、此殿にてせさせ給ひしに、この舞人どもは關白殿と東宮の大夫殿とぞ舞はせ給ひし。明後年殿の御賀には內大臣殿の君達ぞ舞はせ給はんずらん。此度はまだ小さうおはしませばなめりなど申して、生

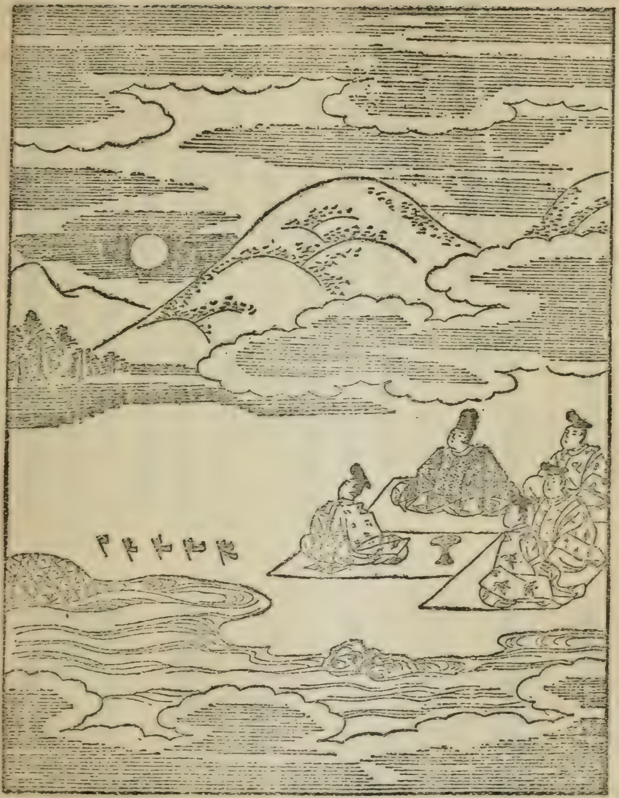
どろおどろしきまで赤う見えたる程など、氣高うめでたし。人人の忙がしき様子の風に木木の紅葉の少し散りて、御前の池に浮び流れたるも、彼の昆明の池の水の春秋の色の流れ變るらんも斯くやと見えたり。伊勢が「散りかかるをや曇ると云ふらん」と詠みたりけんも覺え、「錦張り置き錦」と、觀教法師の詠みたりけんなどにぞ先づ思ひ比へられける。御前近き遣水は清く涼しく澄みて、黄河の水の澄み初めたるにやと行末遙かに見えたり。萬づの事六十をせさせ給へるに、僧も六十人を撰び召したり。御屏風の歌新しう詠ませ給はず、古き質の歌どもを書かせ給ふに、侍從大納言いみじう書き給へらんも、漫ろに笑ましう思ひ遣らる。斯くて事始まりぬれば、僧綱は寢殿の南の廂、凡僧は東の渡殿に侍ふ。さまざまの事ども有るべき限りにて、舞の樂、龍頭、鷁首漕ぎ出でたり。此世の事とも見えず、いみじうめでたし。事ども果つる際に、萬歳樂、家の子の君達舞人にて四人舞ひ給ふ。左衞門督の御子の右馬頭兼房の君、前帥の御子の四位の少將經輔、同じ兄君の藏人の少將良頼、左兵衞督の御子右近少將兼康。良頼に帥の中納言の御子の源少將經季が舞されたりつるが、俄かに惱む事ありて舞はず成りぬる代りに召されたるなりけり。侍從は源大納言の御子の右近の少將顯基、皇太后宮の權大夫資平の御子の左近の少將資房、朝任の源宰相の御子の右近の少將師良、近江守濟政の朝臣の子の右馬助資通などなり。資通は藏人の侍從にて、五位にて舞ふべきを、侍從は衞府ならねば俄かに右馬助にに成させ給へるなりけり。挿頭の花ども、銀、黄金の菊の花を造りて、此君達皆挿したり。有るが中にも、良頼、資通などは藏人なれば、むら菊を織りたる二重織物の上の袴、ふ[illegible]へ同じ

など、生かたはらいたく思召すに、今日は所を得、うけばり裝束きたるも道理に見えてをかし。大宮の女房は寢殿の南面、西の渡殿かけて打出でたり。皇太后宮のは西の對の東面なり。殿の上の御方は寢殿の東面、中宮の御方は東の對の西面、尙侍の殿の御方の女房、東の對の西南かけて打出だしたり。御方方の女房の溢れ出でたる服裝ども、千年の籬の菊どもを匂はし、四方の山の紅葉の錦を裁ち重ね、すべて形容ぶべきにもあらず。いろいろの織物、錦、唐綾など、すべて色を更へ、手を盡したり。袖口には銀、黃金の置口、繡物、螺鈿をしたり。御几帳ども、いろいろ樣樣なり。此宮、あの宮、同じ色、一つ樣にもあらず、聞えさせ合せ給へらんやうに見えて樣異り、いみじうめでたし。敷島や此國の事とは見えず、高麗、唐土などにやとまでぞ見えける。殿の有樣、中嶋などの大木皆燃えにし後は、いとこよ無けれども、今生ひ出で植ゑさせ給へるに、木ども前栽などは、今少し生ひ行く末頼もしげに見えたり。此頃は懷かしう今めかしくをかしき事、四尺の屛風の繪めきたり。其れだに、爲氏、常則などが書きたらんは古代なるべし。弘高、賴輔などが書きたらんは猶飽かぬ所ありぬべし。是れはいみじうこそ艶めかしうをかしけれ。所所の草前栽の打靡枯れて如何にぞや有るに、一もと菊、むら菊などの、或るは盛りに、或るは衰ろひたる、また花の無き程なればにや、今日はいとどめでたさ增さりぬべし。木木の紅葉も折知りめでたきに、綠の松に蔦の紅葉のめでたくて懸かりたるに、檀のえも云はず照りて押張り出でたるも、今少し近うて見まほしげなり。庭は遙遙として、礒立の砂子などのやうに燦めきて見えたり。所所の幄舍、屛幔などの色けざやかに、綱の色のいとお

とのたまへりければ、唯だ是れを興じて止ませ給ひにけりとぞ人語り侍りし。

御賀

治安三年十月十三日、殿の上の御賀なり。土御門殿を日頃いみじう造り磨かせ給へれば、常よりも見所あり、面白き事限り無し。春秋の花の匂ひぞ盛りならねど、所所の草前栽の霜枯、山の紅葉、色を盡したるも、殊更めき、わざと作り立てさせ給へらんやうに見えたり。庭の砂子なども外のには似ず見ゆ。其日に成りぬれば、大宮、尚侍の殿はやがておはします。日の麗かに射し出でたる程に、皇太后宮渡らせ給ふ。御輿など有れど、一品の宮の奉らぬが悪しければ、唐の御車にて渡らせ給ふ。二所奉りて、五の御方仕うまつらせ給へり。女房の車多からず、十五ばかりぞ有る。袖口、衣の重なりたる程、浦の濱木綿にやあらん、幾重とも知り難し。斯くて渡らせ給ひぬる程に、さし續き中宮おはします。其れは御輿にて内裏より出でさせ給ふ。御供の女房前の車の如し。御前達のおはします所、寢殿の中に、各御地敷装ひて、御前參りつつ、三の宮、一品の宮、尚侍の殿おはします。次にまた少し引き退けて、上の御前の御料装ひたり。御装束仕うまつる殿人、宮人、見つる有様を思ひ參らするに、おはしまして、並み居させ給へらん御有様、聞えさせん方無く、思ひ云ふにも疎かにめでたし。上の御方の女房、前前は宮の女房に劣らぬ樣の装束を、上の御前



池水のみぎは増さりて見ゆるかた幾世澄むべき影にか有るらん　祭主輔親

外よりも影さやかなる宮の月いとど光を添ふる秋の夜

曇り無き君が御代には天つ空照りこそ増され秋の夜の月　爲政

うちはへて濁らず澄める池水は千代に一たび逢ふと聞きしを

秋の夜の月のひかりの勝れるは宿から見ゆる色にざりける　式部丞經長

いにしへも斯くや有りけん今日のごと長くも澄める池の水かな

女房の中より、題二つを一つに詠みて、

天つ空ひかりを添ふる水の面に千代澄みぬべき秋の夜の月

斯かる事を聞し召して、御堂より奉らせ給へる。

ふる里を出でにし後は月かげぞ昔も見きと思ひ遣らるる

宮の御返し、

そむけども其方ざまにぞ月影は有りふる里ぞ戀しかりける

同じ頃、内の大殿、大井に御祓しにおはしましたりける程に、日暮れて月いと明く出でたり。「秋の夜の月に向ふ」と云ふ事を詠ませ給ふに、

月の出づる峰を映せる大井河このわたりをや桂と云ふらん　右大辨定頼の君

いにしへも斯ばかり澄める秋の夜の月は見きやと人に問はばや　左兵衛督（公信）
はるばると君が住むべき宿なれば通ひてすめる池の水かな　右兵衛督（經通）
月かげはいつとも分かぬものなれど秋の光ぞこころ殊なる
君が住む宿の池水にごり無く流れて見ゆる千代の影かな
ふく風に雲や晴るらん月かげの見るにもまさるひかりなりけり　權亮（兼房）
影見てぞ行末までも知られける澄む池水も心あるらし
越へのみ歸ると聞きし雁がねの羽かずも見ゆる秋の夜の月　左大辨（朝經）
いにしへも今も稀れなる君が代に水さへ澄める宿にもあるかな
秋しまれさし添ふ色の殊なるに紅葉やすらん月の桂も　左頭中將（朝任）
のどけしと君や知るらん池水の一たび澄める影を見しより
いつと無くさやけく見ゆる月なれど猶秋の夜に似るものぞ無き　右頭中將（公成）
ながき世の宮の御前の池水は澄むべきほどぞ久しかるべき
久方の月の桂や今宵より下葉もみぢて濃さ增さるらん　藏人侍從（資通）
君が代はいつとも分かぬ池水の澄みわたるべき物にやはあらぬ
光添ふ月とぞ見ゆる吳竹の行末ながき秋の宮には　右少辨義忠

宇治川の底に沈める魚(うろくづ)を網ならねども救ひつるかな

と仰せられたるに、講師達は是れを詠じて、御返し仕うまつらず成りにけり。いみじう削(そ)がせ給へれど、鐵邊(へ)に殿ばら、然(さ)るべき人人多く參り給へれば歸らせ給ひぬ。まことと宇治にては、實方(さねかた)の中將の詠み給へりける歌こそ其折に靜(しづ)りぬべかりけれとこそ人申しけれ。

宇治川の壽代(ちよろ)の氷魚(ひを)も此頃はあみだ佛(ほとけ)に寄るとこそ聞けとこそは有りけれ。八月には大宮の御前(おまへ)土御門殿におはしませば、前栽(せんざい)掘り植ゑさせ給ひて、其次(ついで)に、然(さ)べき上達部、殿上人參り集り給へり。大御酒、御箜篌子の事も有りて、題二つを出ださせ給ひて、歌二つづつ奉らせ給ふ。「秋の月の光さやかなり」、「池の水長く澄む」と云ふ意(こころ)どもなり。

月影の如何ばかりなる頃なれば秋は明くるも知られざるらん　　春宮大夫（頼宗）

池水(いけみづ)、

池水に流れぬものと聞きしかど行末長く澄みぬべきかな

秋の夜に秋の宮にてながむれば月の光を添へてこそ見れ　　中宮大夫（齊信）

わが君の千代のまにまに萬づ代も流れて澄める池の水かな

天つ風雲吹き拂ひ常よりもさやけさ增さる秋の夜の月　　權中納言（長家）

我君の宿なつかしみ萬づ代を池もろともに住みわたるべし

て六月一日に成りぬれば、一條院の御八講圓教寺にて行はせ給へば、其れも殿の御前、萬づに知り行はせ給ふ。晦日に成りぬれば、また法興院の御八講、いみじう暑き頃、僧達差し合ひて暇無き心地すべし。音聞きこそ所所なれど、唯だ殿の御前にのみ扱ひ行はせ給ふ。圓教寺の御八講は殿ばら皆參らせ給へり。殿の御前も參らせ給ふ。法興院などにも僧ども召し集めさせ給ふ。斯くて、此御八講も七月十六日の程にぞ果てける。日頃久しき事にて、「例のやうに疎き人などに物は云はじ、煩かし」と仰せられて、唯だ僧の事どもも、家司どもにぞのたまはせ托けさせ給へる。されども、事限り有りて、猶其外の事よりは、殿方の事はいとこよなくて、僧どもなど、いとおどろおどろしくて退かでぬ。又の月の二十日の程に宇治殿におはします。其處にて御八講せさせ給ふなりけり。年頃の御逍遙所に爲させ給へりしかば、その懺悔と思して、法華經、四卷經など書かせ給ふ。阿彌陀の曼陀羅など書かせ給ひて、五人の講師を具しておはしまして、五日の程、講行はせ給ふべきなりけり。僧は此講師達、俗は親しう使はせ給へる四位五位の殿上人など四五人ばかり具して、萬づを削がせ給ひておはしましぬ。僧饌など此殿に仕うまつるべき仰せ事豫ねてより有りければ、皆いみじく仕うまつり設けたり。さて五日が程いみじう哀れに尊し。講師達中中心のどかなる所にて、尊く哀れに仕うまつる。十千の魚、十二部經の首題の名字を聞きて皆忉利天に生れたりと有り。況んや五日十座の程講ぜられ給ひ、法華經の功德をいみじう說き盡す、いと尊し。事ども果つる日、いみじき御功德と思召して、殿の御前、

もさへぞ、をかしう御覽じける。この田人どもの歌ふ歌を聞し召せば、

五月雨に裳裾濡らして植うる田を君が千年の御藏にせん

また聞し召せば、

植うるより數も知られず大空を藏にぞ積まんみまくさの稲

とぞ歌ふ。歌さへ作り出でたりければ、御厩の司の心ばへを、殿ばらいみじう興ぜさせ給ふ。誰みん誰と知らず、時鳥の鳴きわたるを、女房、

早苗植うる折にしも鳴く時鳥死出の田長とうべも云ひけり

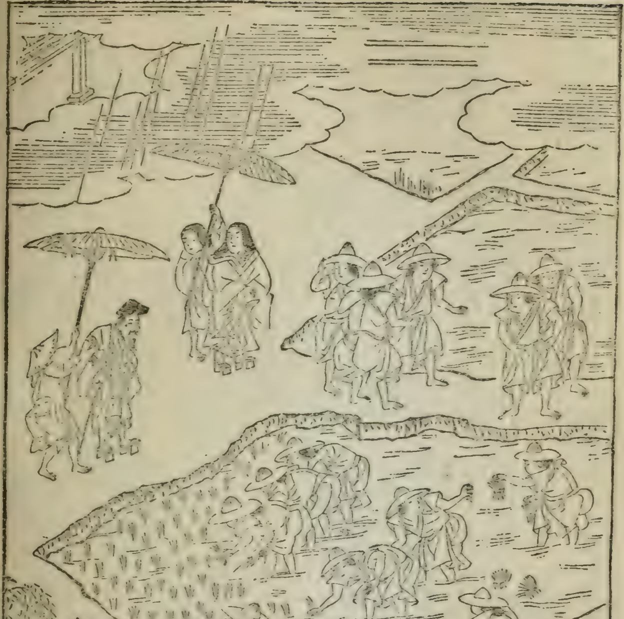
また誰にか、

ほととぎす雲井なる音に聞こゆればしぼりもあへず田子の袂は

など云ひてぞ見ける。事果てて御厩の司召して、御前にて、いみじう感ぜさせ給ひて、物被けさせ給ひけり。斯樣に思し殘させ給ふこと無く、御心を遣らせ、興ある御有樣どもなり。斯くて殿の御前、斯ばかり御萬づに[illegible]させ給ふ事どもは、何時か裝束なく後ろめたく思さるらん。月頃經佛など設けさせ給ひて、御四十九日行はせ給ふ。此月の朔日より始めさせ給ふ。佛は極樂淨土の曼陀羅に、法華經一部、阿彌陀經四十九卷をぞ供養せさせ給ひける。七日七日は、裝束一具、然るべき物など御誦經にせさせ給ふ。宮宮、殿ばら、御引物など云ひ盡すべからず。心殊に急ぎ度の御法事にて、導師達いとど心に入れて仕うまつる。斯く

の方の馬場の御門より歩み續かせて、埒の内より通して北ざまに渡すべし。丑寅の方の築土を壞して、其れより御覽じ遣るべきなり。東の對にてなん御覽ずべき」と、仰せ事承りて、今二三日の程に何わざせんと思ひて、其日に成りて、彼の隅の築土壞させ給ひて、東の對に大宮の御前を初め奉りて、殿の上渡らせ給ふ。然るべき人に女房達侍ふ限りは參る。さて御覽ずれば、若う汚げも無き女ども五六十人ばかりに、裳衣と云ふ物いと白う着せて、白き笠ども着せて、齒黒め黒らかに、紅粉赤う化粧させさせて、續け立てたり。田主人と云ふ翁、いと卑しき衣着、破れたる大笠さして、紐解きて、足駄穿きたり。卑しき樣したる女どもに、黒き掻練着せて、白土と云ふ物塗り附けて、鬘せさせて、笠させて、足駄穿かせたり。また田樂と云ひて、卑しきやうなる鼓腰に結ひ附けて、笛吹きて、拍板と云ふ物突き、さまざまの舞して、卑しの男どもも謡うたひ、心地よげに誇りて、十人ばかり有り。其が中に、此田鼓と云ふ物は、例の鼓にも似ぬ音して、こぼこぼとぞ鳴らし行くめる。親しう物し給ふ殿ばらは、東の簀子にて見給ひ、若き君達四位五位などは、高欄に押掛りて見興じ給ふ。又いと大きなる桶、折櫃どもに、是等が食物どもなるべし、持て續きたり。さまざま珍らしきものどもをのみ持て續けたれば、いみじう御覽ず。さて行き着きて、今は植ゑ喧騒るを御覽じ遣るも、いみじうをかしう思召さる。有りつる樂の者どもも、路の程愼ましげに思ひたりつる、彼處にては、我が儘にののしり遊び奏樂でたるさまどもぞ、いみじうをかしく御覽ぜられける。折しもこそ有れ、雨少し打降りて、田子の袂どもも潮解げなり。何時の程にか來集まりけん、世人數知らず並み立ちて見る顏ど





ゝをかし。中の時ばかりに、百餘人の僧麗はしく装束きて、行道して、池の周圍を廻る程、植木の中を分くると見えて、いみじう尊くめでたし。日の入る程にぞ點し付けたる。四町が内に火點さぬ所無し。萬燈會にはあらで億千萬燈とぞ見えたる。此中に入り滿ちたる徒歩人數知らず多かり。世の中の聖僧ども然ながら參りたり。賀茂の祭の一條の大路にだに出で來てののしる前阿彌陀佛と云ふ法師ばら、臂を捧げてののしる阿彌陀の聲さへぞ尊かりける。今夜の燈火の光、十方淨土の佛の世界に到るらんと見えて、上は非想非非想までに至るらんと見え、下は極惡の衆生も皆照さるらんかしとぞ見ゆめる。盲ひたる者は斯かる事有なりと尋ね參り、耳聞かぬ者はえ聞かねども光を尋ねて參りて、すべて明かなる眼を開き六根淸淨を得たりと覺え、此中の佛性の煩惱に覆ひ隱されつるも、今宵の光にや光り出で給ふらんと喜ばれ、冥きより冥きに到る衆生の煩惱も、嬉しき會の燈明に逢ひぬと喜びを成したり。法興院の萬燈會をこそいみじき事に人の云ひしかど、是れはいと事の外に嚴めしうめでたし。阿闍世王の十萬石の油して爲けんも、えや勝らんと見えたり。又の日早朝までなん燃えける。御堂御堂の佛の照され給へるは東方の萬八千の世界までも照さるらんと見えたり。斯くて此頃は是れをいみじう珍らしき事に世の人も云ひ思へり。斯くて、加茂の祭なども過ぎて五月に成りぬ。大宮、土御門殿におはしませば、殿の御前何わざをして御覽ぜさせんと思召して、此殿の御厩の秣の田は殿の北わたり淸和院のもとにぞ植ゑける。此頃植うべかりければ、御厩の司を召して、「此田植ゑん日は例の有樣ながら、修飾ひたる事も無くて迂闊がましくも、をかしくも、有りのままにて、此南

り。また明日も人人參り給ふべき御設けども有り。明日までは三日なれば同じ事せさせ給ふ。十日の程には御堂に萬燈會せさせ給はん事思召して、親しきにも疎きにも、殿ばらに「火ともすべき燈臺一基して給はらん」と申させ給へば、院々初め奉りて、皆我も我もと、劣らじ負けじと騷がせ給ふ。其日に成りて皆詣でつつ參り集りて、御堂御堂の經藏、鐘樓まで明け開かせ給へり。いみじう掃ひ磨かせ給へる池のめぐりには、寶樹どもを廻りて立て並めさせ給へり。七寶をもて皆造りたり。其れに皆銀黄金の網を掛けて火を點したり。輪燈は飛ぶ車の形を造りて、水車の形を作り、羅網燈とては或は班紫の組いろいろにして結び亙したり。孔雀、鸚鵡、舍利、加陵頻「迦ノ字脫シタルカ」などの形を造りて點したり。池には色色の蓮を造りて其れが上に點し、また各佛の現れ給へる樣をして、其御光どもをし、鴛鴦や鴨や水鳥やなど、多くの事どもを爲たり。また寶籠の形、寶蓋、華鬘などの形に點したり。すべて見るはめでたけれども、我れ一人にあらず、のどかに見る事ならねば、一つに目を留むと思へば、また傍は見失ふ心地して、更に更にはかばかしう覺え語るべきやう無し。四位五位の物まめやかなる人人は、殿下燈とて、經藏、鐘樓などまで、所所に麗はしう點し亙して、いみじき風吹けども更に何とも見えず、「我等が爲出でたるこそめでたけれ、めでたけれ」と心を遣りて爲たり顏したり。各舊い眷屬も唯だ我君我殿のみこそ勝りたれとのみ云ふもをかしくなん。昔賀陽親王と云ふ人こそ細工はいみじかりけれ、其れもがなと云ひ出でけり。上達部、殿ばら、御堂の簀子に居給ひて、「我こそ勝りけれ、人のは劣りたり、劣りたり」など、聞き憎きまで論じ定め給ふ

は、下仕まで、程程に附けて被物、腰差、さまざま賜はせ、食物は更なり、また贈物などのも、すべていと残る人無く給はせけり。内より、大宮の御前に御消息あり。一品の宮の御乳母三人加階賜はせたるなりけり。御使に大宮より禄賜はす。また皇太后宮の御方より例に添へてめでたう捧げ給ふ。辨の乳母、命婦の乳母、中將の乳母なり。大殿聞し召して、「有らまほしう、めでたう見召し寄らせ給ひける御心かた」と、悉う愛くしう思ひ聞えさせ給ひて、物忌もえ待させ給はず成りにけり。斯くて又の日、大宮の御方の女房、御撫子を包はしたる、いみじうめでたし。皇后の御方の女房は八重山吹を折りたれば一つにをかしう見えたり。三日までおはしますべけれども、日次いでの惡しければ、二日の夜さり還らせ給へば、一品の宮の御贈物に、銀、黄金の御筥どもに道風が手づから書きたる古今二十卷、御子左の書き給へる後撰二十卷、道風が書きたる萬葉集などを添へて奉らせ給へる、世に無うめでたき物どもなり。圓融院より一條院に渡りたりける物どもなるべし。世にまた類あるべき物にもあらずかし。さて上達部、殿上人遊びて暮し給ひて、夜さりはやがて御供仕うまつり給ふ。昨日の御禄は然るものにて、今日の御供の人人に大宮より禄あり。一品の宮の御乳母三人、大宮の御乳母を初めて、女房殘り無く被物賜らせ給ふ。上達部、殿上人、宮の大夫を初め奉りて女房までに皆物被けさせ給ふ。情を交はし、めでたう中要ある御中らひどもなりと、上下愛で聞えさす。渡らせ給ひぬれば、枇杷殿にも、御設けいみじう仕うまつりたれば、御送りの上達部など暫し侍ひ給ひて罷り出で給ふに、また然べき禄、大袿など、例の公ざまの禄ども有り。殿上人など皆例の有様な

は男におはしませば、樣殊なり。是れはいと細かに美くしう、明暮我物にて見奉らまほしう思されけり。典侍「只今の御有樣ながら、上に並び聞えさせ給へらば、如何に雛遊の樣にてをかしうおはしまさん」と啓すれば、宮宮笑はせ給ふ。斯くて御髮上げさせ給へる御灯影、似るもの無く、めでたく美くしうおはします。御腰結はせ給ひて、いと眠たげなる御氣色なれば、御帳著せさせ給へれば、夜更けて明日もとて歸らせ給ふ。また此宮の御送りにおはします。御贈物に、えも云はずめでたき御裝ひどもの中にも、色色の織物、綾、羅など、五重襲ね三重襲ねなどに爲重ねさせ給ひて、唯だ押卷きつつ、衣の長たる櫃どもに入れて、えも云はず爲重ねたる樣、蒔繪、置口には樣異り、珍らしうをかしげなる十ばかりに入れさせ給へる程、百卷ばかりは有るべし。今の世の色紙は帖にしたためる、是れは古への色紙の色めでたきやうに見えて、樣殊にめでたくぞ有りける。御前の物など、すべて沈、蘇枋、紫檀の折敷に、銀黄金の御皿どもを例のさまには有らで、彼の縣盤の面を海の心地にして、山や洲濱の形に造りて、樣樣の物どもなど盛りたり。唯だ銀黄金してせさせ給へり。大宮の御前には手も觸れで見物にて御厨子の上に並め居ゑさせ給へり。御髮上げの典侍の今宵の局えも云はず、やがて一具しつらはせ給へる物一つ取り散らさず賜はせ、贈物には衣筥二つにさまざまの裝束二領づつ、然るべき物ども添へさせ給へり。今宵の御前の物どももやがて賜ひたり。局には屛風、几帳、二階、硯の筥、櫛の筥、火取、半挿、盥、鼻まで、殘り無う賜はる。斯かる事自ら前前も有りしかど、此度の御髮上げの典侍の賜り給へるやうなる例は無くやとぞ人人申しける。大宮の女房、宮

物の御几帳に、折枝を繍ひたり。紐は斑紫の唐組なり。御帳同じさまなり。御屏風などいみじうめでたし。我が御有様こそ限無うめでたしと思召しつれ、此度の御調度ども珍らかにいみじう御覧ぜらる。御几帳、御屏風などの骨どもも皆螺鈿蒔絵をせさせ給へり。御屏風ども五尺には本文を書かせ給へり。色紙形に、侍従大納言その文どもを優に勞しう書き給へり。四尺には唐の綾を張らせ給ひて、色紙形に、薄丹に同じ人草に書き給へり。下絵に映えたる御手、すべて云はん方無くをかしげなり。唐錦の縁に錺たり。御具どもの蒔絵螺鈿の際際に玉を入れさせ給へり。大方え形容び讃さず、御簾の縁には青き大紋の織物をぞせさせ給へる。大殿油の仄かなるに、姫宮いと眠たげにおはしますに、殿の御方より、時過ぎぬべしとのみ申させ給へば、大宮の御乳母の典侍大納言近う取り寄せて侍ひ給へば、大宮の御前、姫宮を見奉らせ給ふに、いみじう美くしげに御髪の懸かりたる程、尋常ならずぞめでたう見えさせ給ふ。雛などを作り立てたるはをかしげなれど、嬌やかならねば口惜し。絵はめでたう書きたれど物云はず動かねば甲斐無し。是れは雛とも絵とも見えさせ給ふものから、らうたげに美くしう艶めかしう匂はせ給へれば、御目外へ遣らせ給はず見奉らせ給ふ。御乳母達など近うはえ参らず、皆御几帳、屏風などの後ろに侍ふ。今は白き御衣ども奉り更へて、御髪上げには内の御乳母宰相の典侍参り給ふ。近江の三位ぞ参るべけれど、其れは此一品の宮の御乳母に参りたりしかば、御乳母の数に入りて侍ひ給へれば、其れは珍しげ無くて召さぬなりけり。典侍見奉るに誠に美くしうおはしませば、めでたう見奉る。大宮、内、春宮をこそ清らにおはしますと思召しけるに、其れ

唯だ宮の侍どもも仕うまつれり、二宮の侍の長どもも歩み連れ仕うまつれり。土御門殿、枇杷殿の遠からぬ程なれど、さすがに麗はしく裝束きて、深き沓を穿きつつ仕うまつれり。其れもやんごとなからねど、皆四位五位の子どもにて、皆面赤み恥かしげに思へり。この御供の人人の見給ふべきをば然るものにて、道の物見車などのいと多かるが見るぞ、いと侘びしかりける。土御門殿には大宮おはしませば、御車をば陣より舁き下ろして手引にて入らせ給ふ。下りさせ給ふ所には關白殿、内大臣殿立ち添ひて下ろし奉らせ給ふ。今日は枇杷殿の女房色色を著たり。其れに摺裳の樣など皆さまざまなり。大宮の女房、寢殿の南より西まで打出だしたり。藤十人、卯の花十人、躑躅十人、山吹十人ぞ有る。いみじうおどろおどろしうめでたし。枇杷殿の宮の女房は西の對の東面より南かけて打出だしたり。殿の上は寢殿の東面に寄りて、少し西に寄りて、南面二間ばかりに押出だしたり。大殿は宮の御方の不斷の御讀經の座に忍びておはします。斯くて萬づの儀式に日暮れぬれば、殿の御方より時成りぬ時成りぬと、度度御消息あり。有るべきやうは大宮寢殿におはしませば、其方にぞ賓客の御方は渡らせ給ふべけれど、西の對の御裝飾の玉を磨かせ給へるを御覽ぜさせんの御心にて、殿の御前の御定のままなるべし。大宮西の對に渡らせ給ふべければ、皇太后宮は中の渡殿より通らせ給ひて寢殿へ渡らせ給ひて御迎あり。此度は諸共に二宮打續きて渡らせ給ふ程、あなめでたと見えさせ給ふ。皆御裳、小袿など奉りたり。御髮一許上げさせ給へり。云へば疎かなり。御有樣ども繪に書かまほしう、物語に書き續けまほしうなん。斯くて渡らせ給ひて、御裝飾を御覽ずれば、藤の裾濃の織

況いて御調度どもゑ皆持て參り仕うまつれば、えも云はず華美に新しく輝けり。殿上人、藏人參り込みて騷すれば、げにいみじき見物なり。女房達つる衣調へ、今は唯だ御一つゑ急き騒ぐ程に、御前には中宮より、尚侍の殿より、關白殿、内大臣殿よりなど、いみじう清らなる御衣箱どもに裝束一具、同じ贈物など然べきさまにて皆調へさせ給へり。御使ども、禄送りなど、騒がしきに紛れて無し。院よりも得ならず儲けさせ給へり。僧なども皆有めれど書かず。出だし車ども皆率て參りて、殿ばらなど參り集ひ給へれば、響み騒く騒がしうて、ゑ御覽じ分かめなるべし。式部卿の宮、中務の宮より清らいみじき人どもぞ有める。女房の數、大人、若きなどの選め皆選り揃り集めさせ給へり。斯かる公事には然るものにて、各儀式めたる事どもはなかなか儘ざまにて、其れを持たる人も有りけり。大殿御心の限りは準備がせ給へども、御身を忍隠しきものに思召して、えおはしまし見奉らせ給はぬままに、唯だ關白殿を其事後の事と催め聞えさせ給へ、ば、早朝宮に參らせ給ひて、女房の事まで疾く疾くと催し急がせ給ふ。時成りぬれば、彼の土御門殿の裝束の事見奉らんとて急ぎ出でさせ給ひぬ。殿ばら皆參り集り給ひて、關白殿もおはしましたり。卯の時にと有りつれど辰の時ばかりに渡らせ給ふ。大宮は御輿にておはしますべけれど、一品の宮の車に奉らん御便無ければ、院の御車にておはします。御車に宮の御前、一品の宮奉りて、五の御方仕うまつり給へり。次衣の御車十五あり。車の有樣云ふ方無し。えも云はず磨きたり。御供に關白殿、内大臣殿、小野の宮の大臣も初め奉りて、いみじう多く仕うまつらせ給へり。殿上人更にも云はず、參りたる御車に總べて常の人仕うまつらず、

妹背山よそに聞くだに露けきに子戀の森を思ひやらなん
いみじう哀れに思しきとなん聞き侍りし。

御裳著

四月には枇杷殿、一品の宮の御裳著とて、春より萬づに準備がせ給ふ。殿の御前、御物の具どもえも云はずし調へさせ給ふ。尋常ならぬ御事どもを思し準備がせ給ふ。御裳著の腰は大宮の結ひ奉らせ給ふべければ、此宮に更にも云はず、彼の大宮の女房の裝束どもたど、三日の程の事なれば、いみじき御準備なり。治安三年三月一日にぞ奉りける。其日の早朝、土御門殿に渡らせ給ふべきなり。一品の宮の御乳母達、何わざをせんと準備ぎ立ちたり。御乳母などは物まめやかに大人しうすべけれども、唐衣、裳の腰など、山を立て水を流し、置口をし、螺鈿蒔繪をし、筋を遣り、珠を入れ、すべて得も云はぬ事どもしたり。若き人々、はた醉いて物狂ほしきまで心のままに爲たり。大宮には故宮の御贈物や何やと、萬づをかき集め準備がせ給ふ。有る限りの女房、聞けならぬは皆仕うまつり、今は年など老い、宮仕など物憂くて里に居たるは、此頃御前のまめわざに參りなどしてなん侍ひける。晦の日の夜さり、然るべき女房參り込む。また一日の曉などにぞ參り集りける。土御門の西の對にて御裝束などに仕うまつらせ給ふ。常のだに有るを、此度は

四五人居て御佛ゝ造り奉り、御堂とて數多の工人どものしりて造り奉る。此頃は專ら御堂の事ども思し掟てさせ給ふあり。斯かる事どもゝ里人覺束なからず見聞き喜びて退かでて、尼君達に必ず喜び聞えんとて退かでぬ。はかなく、とに斯くに世の準備にて過ぎもて行くに、來年は上の御賀や姫宮の御裳着やなど、さまざまの御事ども有るべければ、今より其御用意あり。はかなく年も暮れぬれば、土御門殿に大宮おはしませば、正月朔日、行幸、行啓など、さまざま今めかしうて過ぎもて行くに、司召に成りぬれば、殿の三位中將、中納言に成り給ひぬ。大納言殿いとど今一しほの色増さりて甲斐あるさまに思さるべし。其月は司召の喜び恨みにて過ぎもて行くめるに、中宮の大夫の大炊御門焼けにし後は、この枇杷殿に中納言殿住み給ふに、二月廿餘日に、はかなう火出で來て焼けぬ。いみじう怪しからぬわざかなと、外人も聞ゆべし。また外へ渡らせ給ひぬ。加茂の祭も遠からぬ程にて口惜しく思さるべし。大炊御門もあさましくて焼けにしに、また如何なる事にかと、返す返す思せど甲斐無し。御堂よりも萬づ細やかに推し量り聞えさせ給ふ事ども有り。宮宮よりもさまざまの御裝束どもも有れど、片端なるべき事にも有らぬわざになん。三月ばかりに四條大納言都督に參り給へり。歎さに和泉河の下にて、「此處ぞかし、御前の歎きに姫宮の御事聞き侍りしは」とて、定頼の君、

見る毎に袖ぞ濡れける和泉河遠き事聞きしわたりと思へば

大納言打泣かせ給ひて、

實に仕うまつるべし」など、召し仰せらるるも、さまざまめでたし。また見れば、陸奥國の守の奉れる御馬奉て參りたるなど云ひて、いみじき黑駒や、さまざまの毛どもなど、いみじく優しく爲立てて、十ばかり牽て參るめり。萬づに申し盡すべき方無し。また參りて見れば、かの十方諸佛雲集院、他方道俗菩薩院、緣覺十二因緣院、聲聞四諦習學院など、さまざま有らんやうに、或所を見れば法華經の不斷の御讀經とて、然るべき何阿闍梨、何くれの供奉など四五人居て、讀み響かせば、其處に立ち止まりて聞き奉れば、哀れに貴くて、此處に只今多寶如來出現し給はんかしと覺えて、「願我生生諸未來、常得値遇法華經、爲諸衆生開演說、引攝西方安樂國」と打拜み奉りて、また或所を見れば、長日御修法とて、阿闍梨、伴僧十二人ばかりして、白き淨衣を着て行ふ。或所を見れば大般若の御讀經とて、年老いやんごとなき僧達十人ばかり居て讀み奉る。また或所を見れば、五大力菩薩を懸け奉りて、仁王經を講じ奉る。或所を見れば曼陀羅を懸け奉りて、阿彌陀の護摩、除障の護摩などを行ふ。また或所を見れば、藥師經、壽命經などの御讀經、また或所を見れば僧二三十人ありて、涅槃經六十卷など轉讀して讀む。また或所を見れば、をかしげなる小法師七八人ばかり聲を合せて、倶舍を誦んじ唯識論を語ぶ。また或僧坊を見れば、美くしげなる男子ども、千字文を誦んじ習ひ孝經を讀む。斯うやうにして、各所所聲を調へ讀み誦んじののしれど、此處の聲、彼處の聲、皆さまざま紛れず。其言彼の言と聞き分かれて、哀れに貴くめでたき事、淨土も斯くこそはと推し量らるるに、又いと尊し。或所を見れば湯槽の湯沸かして、僧二三十人浴み喧譟る。また或所を見れば佛師

尼佛」とのたまはせたる御有樣には有らで、いと恐ろしげに見えさせ給ふ。不動尊に、されど少し溫和かせ給へる心地す。其れも金剛童子の劍を持すれば、「一持秘密咒、生生而加護」の御心もいと哀れにて、また「見我身者、發菩提心、聞我名者、斷惡修善」なども確かならず聞えさせ給ふ。一一に云ひ聞かせて、また戌亥の方の別院の、上の御前の御堂の方に率て參りたれば、南の方には唐撫子をさながら植ゑさせ給ひて、籬を結はせ給へり。濃く薄く彩へたる程めでたし。東の方にはさまざま色色の草薔薇、籬を繞させ給へり。北南の廊、渡殿などをば、然るべきやんごとなき僧ども賜ふ、佛いとをかしげにておはします。斯くて又室て行きて見すれば、此御堂の東の方に、五間ばかりの檜皮葺の寢殿に廊、渡殿などして、周圍に立蔀籬めて、其れぞ尼の御方なりける。遙かに見參らすれば、然るべき殿ばら、君達、或は烏帽子、直衣、或は袍、或は狩衣姿にて、然るべき僧綱達相混りて、四位五位達率して聞し召し、大饗など參るべし。御園子所の方を見れば、さるべき下臈男どもや、何くれの供奉達、また袂上げたる下法師ばらのつきづきしき五六人、地火爐のもとに居並みて、食事の事準備くめり。また長櫃と云ふ物に、御菓子、御進物持て續き參りたれば、御前にて、東宮より初め、宮宮、院などまで分ち參らせ給ひて、また院の内の僧房どもに配らせ給ふ。また御國の受領どもの絹綿、さまざまの染草など、持て續き參らせたれば、同じ宮宮に分ち參らせ給ふ。御堂の中の僧達に賜はせ、また佛師、工人などに賜はせなどせさせ給ふ。また干飯など云ふものを召し出でて、池掘り木ども挽く者に賜ふ。かの信解品の窮子のやうなる召し集めては、「今冬などにぞ賜はすべき、忠

聲いと好くて、「十方佛土之中、以西方爲望、九品蓮臺之間、雖下品應足」と云ふ許を、常よりも哀に誦まうり
て、云ひおき給ひけん内記の聖も哀れに思え給ふ。月の飽くまで澄めるも、かの多武峰の少將の、「澄まし
くも」とのたまひけんも、げにと見えたり。斯くて退かでて、打休みたる程に、或る聖人來て、「まろ、御
堂へ率て詣うで給へ、善く云ひ聞かせつつ見せ給へ、一二度見奉りしかども、何とも知らぬ、いと甲斐無
し」と云へば、「この後夜に參りて只今なん出で侍りつる。暫しおはせよ、今」と云ひて、寺門の心のどか
なる程にぞ率て參りて見する。三昧堂より初めて、阿彌陀堂に率て參りて、かの龍樹菩薩の十二禮拜を思ひ
て、「稽首天人所恭敬、阿彌陀仙兩足尊、在彼微妙安樂國、無量佛子衆圍遶」と拜み奉りて、「南無西方十六
想觀阿彌陀如來、南無極樂界會阿彌陀如來、南無觀音勢至、光佛、南無無邊光佛、南無清淨光佛」と申し、廊を渡り
て大佛堂に參れば、中尊高く嚴めしうおはします。摩訶毘盧遮那と是れをなん申すとて、普賢經の文を云ひ
聞かす。「釋迦牟尼佛を毘盧遮那と名づけ奉る。一切の所に遍じ給へり。其佛の所住の所をば常寂光と名
づく。常波羅蜜の攝成の所、我波羅蜜の安住せる所、淨波羅蜜の有相を滅する所、樂波羅蜜の身
心相に所住せる所、有作無作の諸法の相を見ざる所、如なり、寂なり、解脱なり、乃至般若波羅蜜なり」な
ど息ひつづけ言ひ聞かす。又廊を渡りて五大堂に參りたれば、三井寺の別當僧都、朝廷の御修法行ひ給ふ。
伴僧二十八、皆淨衣染めたり。方方の聲いみじうおどろおどろし。佛を見奉れば、降三世軍荼利は立ち給
へり。大威德金剛夜叉不動尊は奥の方に居させ給へり。金剛夜叉は釋迦佛と聞き奉るに、「第十六釋迦牟

して退かでぬ。阿彌陀堂に參りたれば御懺法の折なりけり。あな嬉しと思ひて、御階に上りて佛を見奉れば、無量の光明耀きて十方界に遍じ給はんと見え給ふ。彼の往生要集の文を思ひ出づ。七寶の階に跪づきて萬德の尊容を目守り、一實の道を開きて普賢の願海に入る。歡喜の涙を流し、渇仰骨を徹す。頭首して聞けば六根懺悔の處なりけり。いみじう尊し。殿の御前の御聲は數多に交らせ給はず、あな尊と聞えたり。事果てて聲好き僧どもの「過去寶王佛、眉間白毫相、彌陀尊禮拜、滅罪今得佛」と誦んじたる、いみじう尊く面白し。この尼君達の常に例時に參り會ふ事を、僧達皆目喜し申す程に、例の花の尼、露掛かりながら花をもて參りたり。この尼君達、「いみじき志は有れども、この宮仕こそえ爲ましけれ、口惜しき事」など云ひ合へり。この尼君は御堂始めの年より斯く花を持て參れば、哀れがらせ給ひて。今は萬づを知らせ給ふなりけり。昔宮仕へなどしければ、老いたれど、端雅なる樣したり。御前なる阿闍梨、眞讀ながら取りて、承仕召して取らする折に、云ふとも無くて、此尼、

朝まだき急ぎ折りつる花なれど我より先きに露ぞ置きける

と云へば、阿闍梨打笑ひて、斯う斯うなん申すと申せば、殿の御前、返しせよとのたまはすれば、阿闍梨、

君が爲めつとめて花を折れとてや同じ心に露も置きけん

と云ふに、僧達、「此尼君は現世後生めでたき尼なり、今は說經の所の座居なども、御堂の尼と云ひて所得てこそ有なれ」など申す。斯くて明うならぬ前にと急ぎ退かづれば、細殿の東の方より目標りて入來なり。

たる、いみじうめでたく見ゆれば、かの靈鷲山の頂の空も思ひ遣られたり。また池の鏡のやうたるに影を留めたる月も、いみじうめでたく見ゆれば、若き人、

羨まし斯ばかり澄める池水に影ならべたる有明の月

交野の尼君、

大空と池の水とに通ひ澄む有明の月も西にこそ行け

武隈の尼君、

池水に澄める有明の月を見て西の光を思ひやるかな

觀無量壽經の十六想觀、思ひ出でられて比較へられ給ふ。池の周圍、中島、御堂御堂の御前の前栽に、露の、玉のやうに開きて見ゆる、佛の瓔珞に思ひよそへられてめでたし。蟲の聲聲寄り合はせて鳴くも、尋常ならず聞ゆ。西の中門の南の方に、檜皮葺の小やかなる御堂あり。「彼れは三昧堂ぞかし、いざ參らん」とて行けば、御燈の光ほのかに見えて、轉法輪の座に御居たり。普賢いと小やかにて象に乗りて立たせ給へるも、嚴めしうおはします佛よりも斯く一所立たせ給へる、現れ給へらん姿、思ひやられてめでたう見えさせ給ふに、聞けば、法師品の「清淨光明身」の偈をぞ讀むたる。いと眠たげなる聲に、後ろの方より貝をいとおどろおどろしう吹き出でたれば、「嬉しき貝の聲に目を覺ましつる」と云ふ。尼達、責し上げて、簀子に居て、涙かづきて、「我昔所造諸惡業、皆由無始貪恚癡、從身語意之所生、一切我今皆懺悔」など讀

了知、三世一切佛、諸佛甚深妙、心法無量如來」と打誦んじて退かでぬ。この尼達、聞き咲われねば、宗家には行かで、中宮職に宿れる尼君の許に詣りぬ。物など食ひて打臥すとても、唯た此御寺の事を云ひて、美ましう嬉しきものに思へり。下つ方に住める尼ども、「今後はくにもあらず、斯かる浄土の邊にこそ住りて、朝夕に佛をも見奉らめ」とて、尚寺の北南に參り住めば、我をさかしらする素田で來て、「などか此わたりにしも住み給ふべき。かの法成寺まで通り續けらるべしとて、年頃住める人だに寺近き邊に、通り居られたりとも聞えたれなんものを」と云へば、「さにこそ、なほ知りたまひそことぞ云ひつつ臥ける。佛の御法の折に參り會はんと思ひて、夜の明くるも何時しかと心もとなく、日も暮れして聞く程に、鷄の鳴くも嬉しくて、武隈の尼君、

法を思ふ心の深き秋の夜は鳴く鷄の音も嬉しかりけり

山の井の尼君、

いにしへはつらく聞えし鷄の音の嬉しきさへぞ物は悲しき

と云へば、尼君達、「如何なればつらく思されしぞ」と云へば、「若くて、昔をかしき人と打臥して物語でしに千夜を一夜にと思ひしに、鷄の鳴きしは如何がつらかりし」と云へば、げにとて笑ふ。此中に若き人一人まじりたり。夜深く參りて、また語かはんに退かでなんとて、わざとならず、しどけなげなる衣の襟を取りて參る程もさすがにをかしう見ゆ。南の大門より入りて參れば、八月廿餘日の程にて、有明の月の澄み昇り

ら、一つあらはれたる尼なり、三時の花の香仕うまつる。如何に功徳得らん」とのたまはすれば、殿の御前もいみじき尼なりとのたまはす。西日の程に成れば、御堂の金物、所々の御階の金物どもきらめきて、池の面に映れるもめでたし。風少し打吹けば御念佛の聲に響きて池の浪も「苦空無我、無常、七菩提分、八聖道」を唱ふと聞え、山の音も同じ聲に答ふれば、草木すら皆法を說くと聞ゆ。御念佛果てて、聲好き僧の教化申したる、いみじう尊きに、東宮の大夫殿參りたる香染の御衣を被けさせ給ふ。果てぬれば、殿の御前、御堂の事など仰せられて、「人人皆退出で給へ、心のどかに念誦せん」とのたまはすれば、殿ばらも、皆方方に歸らせ給ひぬ。殿の御前御念誦せさせ給ふ。その程、僧の局局に、僧一人侍ひて經讀み奉る。斯かる程に入相の鐘おどろおどろしければ、文頭の尼君、

今日暮れて明日もありとな賴みそと撞き驚かす鐘の聲かな

あまた有れども書かずなりぬ。暗く成りぬれば、承仕法師參りて、御前の燈籠に火灯す。佛の御光いとど輝き增さりて見奉る心地もまばゆし。殿も御念佛果てて出でさせ給ふとて、佛拜み奉らせ給ふままに、「面善圓淨如滿月、威光猶如千日月、聲如天鼓倶尸羅、故我頂禮彌陀尊」。人人御迎に參りたれば出でさせ給ひぬ。この尼君達、「あはれ此世の事とは見えぬものかな、人の心の中に淨土も有ると云ふは誠にこそ有めれ、殿の御前の御心の中に許多の佛の現はれ給へるにこそ有めれ」など云ひて、尼君、「若し人は

色にして、玉の瓔珞を垂れて立たせ給へり。各宝蓮華を捧げて立たせ給へり。四天王立たせ給へり。一佛の御有様かくの如し。況んや九體並ばせ給へる程、心に思ひ口に述ぶべきにあらず。觀經の偈に云はく、「若有聞法者、未發菩提心、一得聞佛名、決定成菩提。」また「往昔の無數劫に苦を受けて、生死の中に流轉して、未だ佛の御名を聞かざりし故なり。然るを我等斯ばかり佛を見奉りしかば、豈に空しからんや」と思ひて拝み奉る。また蓮の絲を村濃の組にして、九體の御手より通して、中臺の御手に聞ぢめて、この御念誦の所に東ざまに引かせ給へり。常に此絲に御心を掛けさせ給ひて、御念佛の声絶えさせ給ふべきにあらず。御臨終の時、此絲を引かへさせ給ひて、極楽に往生せさせ給ふべきと見えたり。九體は是れ九品往生に當てて造り奉らせ給へるなるべし。北の廂の渡殿かけて、御障子どもに、功徳の心ばへ有る繪ども書かせ給ひて、御簾ども懸け亘して御几帳など立して、宮司、上の御前などの御局と見えたり。この御堂の御前の池の方には、高欄高うして、其下に薔薇、牡丹、唐撫子、紅蓮華など植ゑさせ給へり。御念佛の折に參り合ひたれば、極楽に參りたらん心地に斯くやと覚ゆ。やうやう西日の入る程に、尊者の御念佛とて、方方より僧達參り集まる。遅く參るをば衣仕、堂童子など行きつつ、催し參らす。其時に成りぬれば、殿の御前おはしましぬ。此殿ばら、また外のなども數多參り給へり。をかしき頭、宮都など仕うまつれり。おはしませば、此御堂の僧達下り侍ふ。御念佛始まりぬれば、殿の御前を初め奉り、僧二十人ばかり侍り給ふ。殿ばら皆高欄に掲りておはす。遣水に花の有れば、例の尼君のかと仰せられて散らさせ給ふ。此花を御覧じて、殿ば

景色ある御脇息置かせ給へり。御持經なべてならぬさまに儲させ給へり。是れ唯だ御行ひの御料なるべし。母屋の中の柱の下に時知る具ども置かせ給へり。少し引き入りて母屋に佛おはします。中の間の左右に高座あり、中に禮盤立てたり。佛の御前に螺鈿の花机に、高坏一つに佛器一つを居ゑて盛り奉らせ給へり。各佛の御前に一鉢奉らせ給へり。さまざまの名香を奉らせ給へれば、いみじう香ばし。色色の花の枝など折りて奉らせ給へり。佛を見奉れば、丈六の阿彌陀如來、光明最勝にして第一無比なり。烏瑟の御頭は緑の色深う、眉間の光毫は右に旋りて宛轉せること五須彌の如し。青蓮の御眼は四大海を湛へ、御唇は頻婆果の如し。體相威儀いつくしく、紫磨金の尊容は、秋の月曇り無く、無數の光明新たにて、世界遍ねく明らけし。微妙淨法の身に色色の相好を具足し給へり。光中化佛無數億にして、光明互に照し交せり。是れ即ち無漏の萬德の成就し給へる所なり。智慧慈悲の相は眼に有り。梵音の相は口に有り。弘誓の相は面に有り。愛敬の相は齒の光に有り。神通の相は勢ひに有り。妙好高貴の相は形體に有り。方便無量の相は容貌に有り。十力無畏の相は起居するに有り。大定智悲の相は息に有り。眞如寂靜の相は腕に有り。實には寂滅にして唯だ名のみなり。此故に正に知るべし、所觀の衆相は即ち是れ三身即一の相好光明なり。諸佛同體の相好光明有り。萬德圓融の相好光明なり。色即是空なるが故に、是れ眞如實相と云ふ。空即是色なるが故に、是れを相好光明と云ふ。一色一香中道にあらずと云ふ事無し。受想行識もまたまた此くの如し、衆生の三道、彌陀佛の萬德と、固より空寂にして一體無礙なりと云ひき。左右には觀音、勢至同じく金

り。寶蓋に寄生して須臾刹那も御寶前に在り消えぬ。或時は目を塞ぐ間は圓を寶蓋に暈を結ぶ
程なりけり。或は八功德の池の大浪みて、色色の蓮生ひたり。其上に佛現れ給へり。さに是れ諸佛の初
めて開くる蓮ならんと見えたり。或は三十二相顯に見え、六通三明備へたり。佛を見奉ると聞くこと
歷歷分明なり。是れこそは觀無量壽經の蓮なめれと見ゆ。萬づめでたし。御には是れ不退へれば長く三途八難
の怖れを免れたり。命は壽た無量なれば長に生老病死の苦無し。心と事と相應へば愛別離の苦も無し。
睦しく見えて怨憎會の苦も無し。白業の報なれば求不得の苦も無し。金剛の身なれば五盛陰の苦も無し。一
度に上品蓮臺の身に寄まぬれば永く三界の苦輪の海を離れぬ。後ろの御堂の扉繪を見るれば、繪のやう
に、如何なる人の書きさへ映りて見ゆれば、この觀音の扉繪、

餘り無く畫ける御の繪に圖樣を讃嘆へいみじうぞありける

東の廊の中の間に尼殿の御前の觀音の御前は阿さ給へる。三尺ばかりの御障子を一面に廻へ立給ひて、北
南東の方に立てさせ給ひて、上にも同じさまにて廂ぞ給へり。一所おはしますばかりの程にて、内の御
座の高さ四寸ばかり上りたり、前には花机二つ三つ造りつづけさせ給ひて、上に一尺ばかりの佛立たせ給
へり。御前の多寶の塔おはします。其れに法華經納めさせ給ふべし。黄金の佛等をあめ込ませ給ひて、瑠璃の壺
に閼伽水、金銀など入れさせ給へり。おひいろいろに見えそめでたし。火舍に香を焚か給へり。花
の具など有り、其上に供養法の折の御座なるべし。其れより北の方に坐に塗籠まて、上に御屏風立て、

る世に近くも遠くも見來る人さへ、皆唐國の人に祈られたる心地なんしけるとぞ。

玉の臺

御堂あまたに成らせ給ふままに、淨土は斯くこそと見えたり。例の尼君達、明暮參りて拜み奉りつつ、世を過ぐす尼法師多かる中に、心有る限り四五人契りて、この御堂の御時に逢ふわざをなん爲ける。打連れて御堂に參りて見奉れば、西に寄りて、北南ざまに東向きに十餘間の瓦葺きの御堂あり。垂木の端端は黄金の色なり。萬づの金物皆黄金なり。御前の方の犬防は皆黄金の漆のやうに塗りて、違ひ目毎に螺鈿の花形を居ゑて、色色の玉を入れて、上には村濃の組して網を結ばせ給へり。北南の傍の方、東の端端の扉毎に繪を書かせ給へり。上に色紙形をして詞を書かせ給へり。遙かに仰がれて見え難し。九品蓮臺の有樣なり。或は年頃の念佛に由り、或は最後の十念に由り、或は終りの時の善知識に遇ひ、或は乘急の人、或は戒急の者、行ひの有樣に隨ひて九品の迎へを得たり。是れは阿彌陀如來雲に乘りて、光を放ちて、行者の許におはします。觀音、勢至、蓮臺を捧げて共に來り給ふ。諸の菩薩聖衆、音樂伎樂をして喜び迎へ取り給ふ。行者の智慧のけしき外外にして、忍辱の衣を身に着つれば戒香の匂ひ沁み薫りて、慈悲の瓔珞身に懸けつれば、五智の光かがやけり。黄金の絲やかなる光透りて、紫磨金の柔らかなる膚さた

や御酒据ゑて、暫しこそ有れ、皆醉ひ亂れ給ひて、御畏まりも無きまでなれば、「いと不便なる事なり、退でて夜さりの御遊どもにこそ參り侍らめ」など申させ給ふ。殿の御答へ、「此度の御供に參り給へる人には、然るべうしろし侍らんこそ善からめ、異常の事はいと便無う侍らん、昨日に皆祿被きしかど、唯だ御車の内に見えつる御衣どもや善う侍らん」と聞えさせ給へば、奉りつる御衣どもを皆取り出でさせ給ひつつ、疎くおはするにも、睦じきにも皆奉らせ給ふ。色、匂ひ、香り、異常にあらず、是れいみじう醉ひ亂れ給へるに、しどけなく引き掛けつつ、裝どき給ふ御有樣ども、昨日祿はしかりし事どもにも勝り、今めかしう見えたるに、御遊さまざまなるに、文集の樂府の文を覺え給ふ。「織者何人ぞ、衣者誰ぞ、越溪寒女漢宮姬なり、織爲雲外秋雁行、染作江南春水色、春衣一對直千金、汗沾粉汚不再著」など、種種の御遊どもして誦んじ給ふも、耳留まりてめでたう聞ゆ。人に取らすれば、本意無う忝しとて、皆各被きつつぞ引き亂れて出で給ふ程、げに「土に引き泥を踏みて、少しも惜む心無し」とにもこそ有りけれと見ゆ。斯くて亂れよろぼひ給ふ程、繪に書かまほしくをかしくなん。さて出で給ひて日暮れぬれば、また御迎に參り給へり。中宮内に入らせ給ふ。皇太后は枇杷殿に歸らせ給ひぬ。大宮、尚侍の殿、殿の上などは、西殿におはします。各仕うまつり給へる殿ばら、殿上人、皆例の作法の祿ども有り。樣樣方方の贈らせ給ふ程の御賂ひなど、いみじうめでたし。唐土の人は、「人を賂ふとては暇有れ」とぞ云ふなる。只今此殿の御前の御有樣に、日本の國には更にも云はず、唐國までぞ祈り申しけんと見えさせ給ふ御中らひにてこそはおはしますめれ。斯か

見れば聞えさせん方無くめでたし。香りなどは侍ふべき方無し。御車に地下の人侍りつかず、唯だ殿上人の限りなり。手引にておはします。殿ばら[illegible]らせ給へるに、一つ家より外の上達部、[illegible]に有りとある今日はえ交り給へらじとて、むらむらに後れ給へり。この御車の内の有様を、あさましう世に珍らかなる事の例に此殿ばら聞え給ふ。唐土にも三千人の后おはすやう有りけり。此朝廷には七人までおはすべき道理有りなれど未だ有らじ。同じ大臣の御女の三人とだに后にて並ばせ給へるはおはせざりけり。況いて三所おはしますに、今一所に東宮女御にて、今日明日と聞えさするばかり、后がねにておはします。また一品の宮と聞えさすれども、后と等しき御位にて年官年爵を得させ給ふなど有れば、世にいみじう、未た昔にも有らざりし御幸どうなりやと、打語らひ聞え給ひつつおはす。斯くて阿彌陀堂には今日[illegible]させ給へば、いみじう嬉く哀れに聞し召す。御堂に皆参らせ給ひつつ、僧共も御堂をも見奉らせ給ふに、いみじう嬉くめでたう思召さる。供養の日などはいと物騒がしければ、心長閑にもえ見奉らせ給はぬに、いと嬉しく思召さる。殿の御設へ、御堂御堂の僧ども召して御誦經ども申し上げさせ給ふ。宮宮、御傍の殿、各綿五十屯づつ御誦經にせさせ給ふ。一宮にしおはしまさず、數多の御方方におはしませば、殿の御設いとおどろおどろし。僧どもに昨日の殘りの物、大褂など皆被けさせ給ひて、かねての御設けも無き事どもなれど、世に珍らかなる御心掟てどもと見ゆれば、わざと思はぬ事どもをだにこそ書き續け語り傳へつべかりけれ。さて歸らせ給ひぬれば、此殿ばら、皆御堂の簀子に御圓座敷きて居させ給ひぬ。然るべき御菓子、御酒など參らせ給ふ程に、や

もしうめでたう見奉らせ給ふ。今宮の御顔を帝の御覧ぜば、嬉しう思召さるべし。何事も聞えさせ給ひて、一品の宮の御有様を見奉らせ給へば、三尺の御几帳に類ひぬ間も無くさせ給ふめるに、御髪は余らせ給ひての御丈三尺ばかり余らせ給へれば、いみじう面白うめでたう、御髪と申し広げたるやうにて、御丈に二三寸ばかり余らせ給ふ程にぞおはします。いみじう嬉らかに愛敬づき、様に香りも云はずおはします。今年十一にこそおはしますらめ。見奉らせ給ふに、御形ならず、美くしう聞えさせ給へるも、今の世の人は斯くのみこそおはしまし在るわざなめれ。昔物語にも斯くこそはと見えさせ給ふ。大宮の御様は美しう、斯うやうにて見奉らせ給へらましかばと、いみじう美くしう見奉らせ給ふ。斯かる程に、甥たげに思召して大殿ごもりぬ。御前の御物語の事ども、え承はらねば書き続けず。をかしき事も有るべけれど、空言多く云はらばこそ口惜しけれ。斯くて今宵は苦しう過さるれば、皆大殿ごもりぬ。又の日、日さし出でて、巳の時ばかり、昨日の上達部参らせ給ふ。昨日は晴にし給ふ御装束なりしに、今日は褻ばら、君達・皆直衣にて参り給へり。昨日より今日の御有様、いみじう優めかしうをかしきに、殿上人どもの装ひかへれ参る程、物めでせん人は消え入りぬべし。斯くて聞召し初め奉りて、三日ばかり、昔おはしまさふ。然るべきは残り無く参り給へり。未の時ばかりになりて、御車寄せ奉る。既に大宮、皇太后宮参りつ。また御前には中宮、内侍の殿参りて、中には一品の宮おはします。宮の御座は同じうは少しゆかしき心地すれば、宮の御前ありたるに白ら宮のわざとならず僅かに外れて出でたる袖の匂ひ、右の昨日の御装束どもの珍らかに見えしに、また

尼君達に見えさせ給へり。大方何れの人も、いみじうこそ思したりつれ。宮宮など今は還らせ給ふべきを、殿の御前、今宵は留め申させ給ひて、明日此御堂心のどかに拜ませ給ひて、明日の夜さり還らせ給へと申させ給へば、いと善き事とて、皆留まらせ給ひて、やがて東の御局にさし集りおはします。御堂御堂の飾どもも取り收めず、同じ事ながら有り。女房達、何れの宮宮のも退かでぬ。唯だ何方にも集ひさせ給ふまじきぞ二三人ばかりづつ、留めさせ給ひて、皆御局局の後ろの方に近く侍ふ。いと苦しう思召せども、今宵の御有樣こそは昔見えさせ給ふめれ。御堂御堂の御燈明ども參り渡したるに、佛の御光に御堂の飾もてはやされ、めでたう御覽ぜらるるに、晝はいみじう騷がしう思召されつるに、心のどかなるに、月も曇無く照り渡りて、御堂御堂の御燈明に、佛の照らされ給へる程など、近う見奉らせ給ふ。また西東の御堂など見奉らせ給ふ程、いみじくめでたう、尊く思さる。彼の六宗論に交ひたるやうに、夜の靜かなるに、所所の御社どもの金物きらめきたるさへ、めでたう御覽ぜらるるに、今日は十四日なれば、三昧堂には常行三昧行はせ給ふを、やや遠き程なれど、物誦んじ、額づきなどするは、あらはに聞し召されて、いみじう尊う思召さるるに、事果てぬなりと聞し召す程に、阿彌陀堂に殿の御前おはしまして念佛せさせ給ふを、見奉り泣かせ給ふにも、此世より行末までも哀れに頼もしう見奉らせ給ふ。阿彌陀佛は念じ奉る人をば二十五の菩薩も守り給ふなりと、唐の大師ののたまへり。また念佛して極樂を願む人、若し參る事危ぶみ有らば、藥師如來、八大菩薩を遣ひて、極樂に送りとゞけ給ふなりなど、思し合せ見奉らせ給ふ。殿の御前の御有樣、何れの御前達も[illegible]

續け渡させ給ふ。關白殿の御前、殿の家司、殿上人、同じ事せさせ給ふ。また大宮の大夫兵部卿、事を行ひて、宮司、內、東宮の殿上人、藏人などかい寄りて、續け渡したり。また次々皇太后宮、中宮などの宮々大夫達、行事して、宮司、諸大夫達、五位なども取りて、さまざま續け渡したり。次に侍從の殿の御方のは、春宮亮泰通など寄りて行事して、同じ事し渡して、今は誰うにこそと思ふ程に、小一條院の御方よりとて、判官代ども、殿上人達見えて續けたり。すべて此後には又有らぬ事なり。いみじき願主の御心なりとぞ、外の人どもは、とてもかくても有りぬべし。是れに皆我が御子御孫にて、斯くせさせ給ふ事は、更に更に末に皆にも有らざる事なり。希有の中の希有の事なり。今行末も有り難くやと、見思ふ人多かり。供僧綱、然るべき上臈僧綱などのは、やがて御弟子ども取りつつ、いと目安し。凡僧などのは然るべきにも有らねば、唯だ我身一つに抱き挿れたる、見るに心苦しう豊かにしげなり。餘りに成りぬれば、殿の御前の布施、袈裟などは、持て續けて賜らせ給ふ。すべてあさましく目も心も及ばず、珍らかにいみじかりつる日の有樣や、世の中の例に語り續くる人多かるべし。其が中にも、耳近く見聞きたる人は善く覺えて書くらん。是れに物も見えぬ尼君達の、思ひ思ひに語りつつ讃めければ、如何なる僻事か有らんと、かたはらいたし。日暮るる程にぞ、內、東宮還らせ給ふ。御贈り物ども、上達部の御祿、殿上人の被け物など、いみじう御心に入れ、賜はせたる樣に爰せさせ給へり。今日の講師の山の座主は律師に內より僧正を賜ふ。院源仕うまつれる律師には僧綱に成させ給ひつ。修造に仕うまつれる工人ども、皆判官にて、國々の掾など賜たり。殿の家司の官

音、沈水の香充ち薫れり。色色の花、空より四方に飛び紛ふ。此僧達の樣、姿ども、唯だ彼の靈山の法會に菩薩衆の參り集り給ひけんも斯くは得やと見ゆ。三世の諸佛の說法の儀式も斯うこそはと、歡喜の淚止め難し。舞臺の上にて樣樣の菩薩の舞ども數を盡し、また童部の蝶鳥の舞ども、唯だ極樂も斯くこそはと推し量り思ひ遣り比へられて見る程ぞ、いとど今日の事めでたき。孔雀、鸚鵡、迦陵、頻伽など見えたり。樂所の物の音ども、いとどいみじう面白し。是れ皆法の聲なり。或るは天人聖衆の伎樂歌詠するかと聞え、香山大樹緊那羅の瑠璃の琴に擬らへて、管絃歌舞の曲には法性眞如の理を調ぶと聞ゆ。事ども始まりぬれば、左右に分れて行道す。此方彼方の御堂、大繞りにて、やがて繞れば、此行道の程にぞ殘る人無く見奉る。斯くて殿上人二十人立ちて行香す。豫ねてより撰ばせ給へるにや、容貌、人より殊に見えたるども立ち續きたり。華筥此持たる僧どもの裝束の色に調へさせ給へり。其色の濃紫の組み、身長と等しく結び下げたり。行道總りて、左の方は五大堂の南の庇に著きぬ。右の方は阿彌陀堂の東の庇に著きぬ。其次ぎ次ぎは例の作法の事ども推し量るべし。講師の山の座主、いみじう仕うまつり給へり。御願文打讀み、內、春宮、宮宮、殿達の御誦經など、一一に誓ひ申し給ふ。隨喜の說法聞くままに、歡喜の淚いや增さりなり。萬づにいみじうめでたく尊し。殿の御前いみじく樣樣の淚こぼれさせ給ふ。事ども果つる際に、朝廷の御祿、左右の藏人頭を初め殿上人二十人ばかり立ちて、先づ講師を初めて、七僧、次ぎに百五十人の僧に被け渡す。大將、衾などなり。あなめでたと見えたるに、東宮大夫事を行ひ給ひて、春宮の殿上人、藏人まで立ちて、同じく

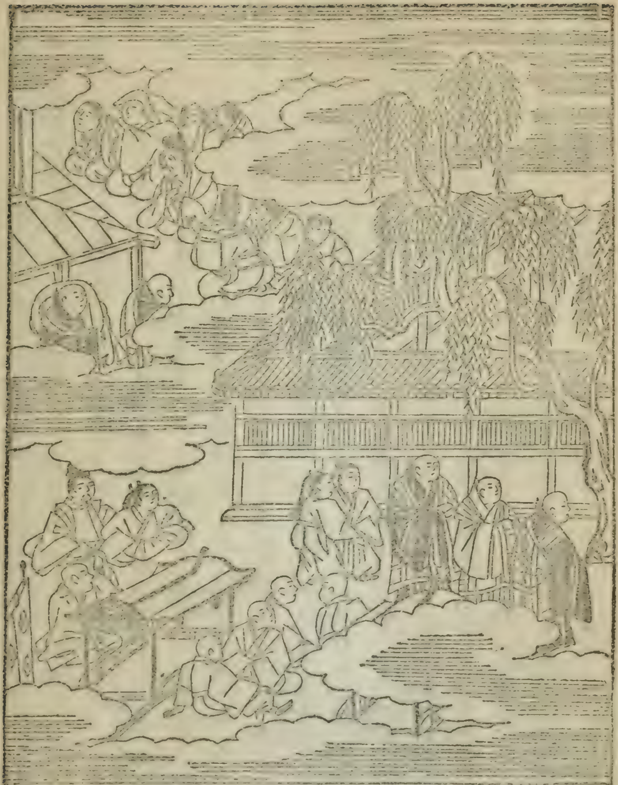
童べ見えを、或は浄土に生るるなり。其講の儀に、今日の講の菩薩らの様なり。斯くて、仕丁の御前には、
仁和寺の僧正、興福寺の僧正、山の座主、山階寺の別当僧都などを初め、御供に二十人、三十人具しつつ、色々の
僧どもの、装束清げに、身なり等しく容姿しきを十廿人つづき立ちたり。仕丁どもも、装束いみじう清らにして
て、楽器どもを執きたり。色々の袍どもを好めかし遊びたる気色いみじう、いみじく清らしう見えたり。ま
た十余ばかりの小法師のいとをかしげなるが、色鸞はしう装束つきたる二三人具して、三衣筥、草座など云
ふ物ども持たり。また卵の殻の造り立てたるやうなる三四人具したり。各御前く引き具して参り給ふ。
中大童子、さまざまの装束どもして調へたり。一人の御供僧うやうなり。各々乗りたる様推し量るべし。ま
た笑、袈裟も、或るは赤く、或るは青くなどしていみじう、次に僧しき法師ばら五六人ばかり出で来て、道
を清め気色だつ。楽人と云ふ者出で来たり。講師読師の率げられて座に坐りて参り給ふなりけり。衆僧に
導らへて、講師読師の前に、玄蕃、兵部、僧正、衆などは、左右に列引きて歩み続きたり。御所の楽人ども
云はずおどろおどろしきに、童子の、子どもの引き連れて舞ひ出でて、待ち迎へ奉る程、此世の事とも見え
ず。次に此道、南の庭より左右調へて並び続き、各御前に舞楽立てて、許多の楽器ども集ひ集る程、とさまかく
も云はれで舞ひ出で来る。僧の袈裟ども、皆紫青、緑紅、皆品品に従ひて色色なり。法服は綿の袈裟は唐
土より此度の御堂の會にとて心ざして、持て参れる物どもなれば、錦に常に似ず、玉を貫き掛けたれば、紺
さは更にも云はず、いみじき見物なり。銀、黄金の香爐に、さまざまの香の香を焼きたれば、隙の中、稀

光の中の化佛無數億にして、無量莊嚴具足し、寶鐸、寶鈴、諸の瓔珞、上下四方の光明照し輝けり。中央最上地の上に、大寶蓮華の座あり、翡翠の寶臺を成し、百寶の色相葉に具せり。八萬四千の葉あって無量妙法具へたり。葉葉毎に百億の大寶摩尼を飾れり。大千界の日輪を集めたるが如くして、無漏の萬德莊嚴せり。如來此座の上にして、法報應化、隨形相好具足し給へり。無見頂の頭より千幅輪の趺まで具へ給へり。相好申し盡すべからず。左右の寶座には彌勒、文殊ぞおはします。文殊はかの淸涼山には一萬の菩薩衆と共に、誓多林には六千の比丘を具し給へれど、此處には一所おはします。また梵天、帝釋おはします。梵王は鵝と云ふ鳥に乘らせ給へり。殿の御前には御八十の賀にやと見奉る。四天王儼めしくて立たせ給へり。極樂世界是れにつけても如何に如何にと、いとどゆかしく思ひ遣り奉る。毘首羯磨もいと斯くは得や造り奉らざりけんと見えさせ給ふ。佛の御前に螺鈿の華机、同じ螺鈿の高坏どもに、黄金の佛器どもを居ゑつつ奉らせ給へり。七寶をもて花を造り、佛供同じく七寶をもて飾り奉れり。火舍どもに色色の寶の香どもを燒かせ給へれば異香薰じたり。所所に寶幢幡蓋懸け連ねたり。皆是れ七寶をもて合はせたり。黄金の鈴柔らかに鳴り、日の午の時ばかりに成る程に、鐘の聲頻りに鳴り、響き世に勝れたり。上方衆寶の國土、下金光佛刹を限りて開けらんと覺えたり。此見佛聞法の人人、日に當りて立ち竦み、頭痛う思ふに、物の聞こえず苦しきに、此鐘の聲に事成りぬと聞くに、皆心地爽しうて、苦しかりつる心とも覺えず、彼の天竺の祇園精舍の玻璃鐘の鐘の音に、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂と聞ゆれば、病の僧此鐘の聲を聞きて、

の底に見えたり。柔らかなる花ぶさ傾きて落ちぬべし。緑真珠の葉は青き盛りなる夏の緑の樹の如し。金銀の葉は浅き秋の紅葉の如し。琥珀の葉は仲秋の黄葉の如し。白瑠璃の葉は冬の庭の雪を帯びたるが如し。斯様にして紺瑠璃色なり。風の植木を吹けば、池の波金玉の岸を洗ふ。七寶の橋は金玉の池に横はれり。鴛鴦の若木の蔭に遊び、孔雀、鸚鵡、中の洲に遊ぶ。此御堂を御覧ずれば七寶所成の寶殿なり。寶幢、寶珠の瓦青く葺き、瑠璃の壁白く塗り、瓦光りて空の影見え、大象の礎石、金銀の棟、金色の扉、水精の基、種種の雑寶をもて荘厳の飾とせり。色色交はり輝けり。扉押開きたるを御覧ずれば、八相成道を書かせ給へり。釋迦佛の摩耶の右脇より生れさせ給ひて、難陀、跋難陀、二つの龍の、空よりして、湯浴びし奉りけるより初めて、悉達太子と申して、浄飯王宮にかしづかれ給ひしに、御出家の本意深くおはしますを、父の王是れをいたいみじき事に思して、隣の國國の王の一つ女を取り集めて、五百人添へ奉り給へりけれど、聊か其れに御心も留まらねば、四方の四門を見せ奉らんと思して、百官引きて出だし奉らせ給ふに、淨居天現じて生老病死を現じて見え奉りたる繪、御年十九の壬申の年、二月八日の夜中に出で給ひて、出家せさせ給ひて、御厩の御馬を徒らに車匿が牽て歸り參りたれば、王夫人、許多の采女、宮の内揺すりて泣き、また降魔、成道、轉法輪、忉利天に昇り給ひて、摩耶を教化し奉り給ふ、娑羅雙樹の涅槃の曉までの繪を書き現はさせ給へり。柱には菩薩の圓成就の繪を畫き、上を見れば諸天雲に乗りて遊戲し、下を見れば紺瑠璃を地に敷けり。漸う佛を見奉らせ給へば、中臺の尊高く厳めしうおはしまして、大日如来におはします。

にかき居ゑためり。斯くて佛の御前に御座裝ひて、内の上も春宮もおはします。殿の御前も御簾の方におはします。佛の御前の庭に講師、讀師の高座、左右に立てて、上にえも云はずめでたき白蓋覆ひたり。中に禮盤立てたり。内の御前若く華やかに、艶めかしく、云はん方無く見えさせ給ふ。東宮いみじく艶めかしく、華やかに美くしくおはします。御樣も御心も有り難くめでたくおはしますを、さし並べて見奉らせ給ふらん大宮の御心の中、涙ぐましく思ひ遣り參らせぬ人無し。皆斯く勝れめでたくおはしますも、他事無く、大宮、殿の御前の幸ひのめでたくおはします故にこそ。今は宮宮の御前に饗ども參らせ給へり。女房の中に、をかしき檜破子など、いと今めかしう、見所ありて爲させ給へり。上達部、殿上人など、皆饗參らせ給ふ。迦葉尊者の室にも未だ有らざる臥具を敷き、賢護長者の家にも有る事稀なる飯食どもなり。宮宮御方方の御心地も、殿ばらの御心地も、彼の忉利天上の億千歳の樂、大梵王宮の深禪定の樂も、斯くやとめでたし。すべて今日殘り給へらん殿ばら、誰れかはと見えたり。御前の方には、をかしげなる殿上童、慣れ仕うまつる中に、内大臣殿、春宮の大夫の君達、いと美くしうて御鬢頰姿にて交らせ給へるを、關白殿には羨ましく思召さる。のどかに院の内の有樣を御覽ずれば、庭の砂子は、水精のやうに輝らめきて、池の水清う澄みて、いろいろの蓮の花、浪より生ひたり。其上に皆佛現はれ給へり。佛の御影、池の面に映じたり。東西南北の御堂御堂、經藏、鐘樓までの影映りて、また一佛世界に見えたり。池の周圍に植木あり、枝毎に皆羅網懸かれり。花蕊柔らかにして、風無けれども動く。綠眞珠の薄き葉は瑠璃の色なり。琥珀珠の燦やかなる枝は池

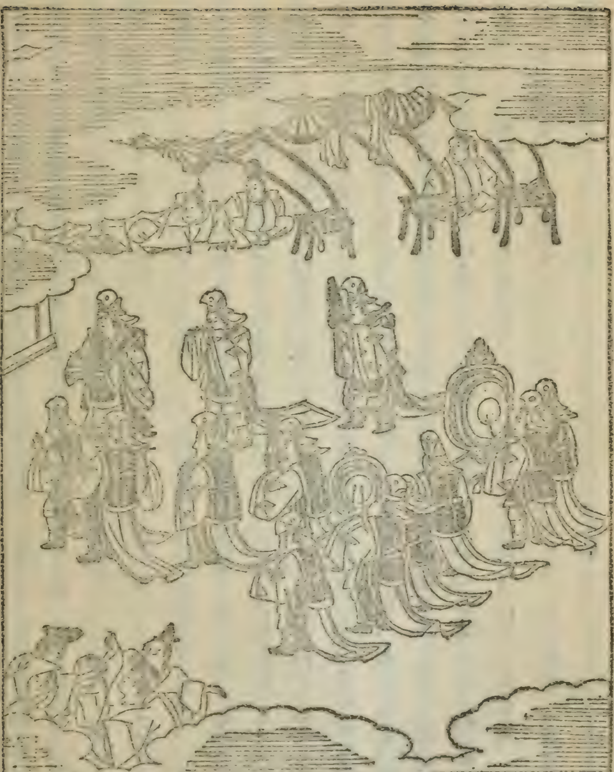




御經堂の南を渡らせ給ひて、阿彌陀堂の簀子よりおはしまして、東の渡殿に御座の所装ひておはします。次の渡殿に、東宮の御座は設させ給へり。御供の內侍ども、あざましく清らなる、御前まで仕うまつらで、三位中將の御佩刀執らせ給へれば、御筥は左の頭の中將執り給へり。內侍、御方方の御覧ずるを憚るなるべし。入道殿、關白殿、內大臣殿おはしましまして、待ち迎へ奉らせ給ひ、降らせ給へば、御輿の此方より降らせ給ふ。上の御前、佛の御前に參らせ給ひて拜ませ給へば、入道殿見奉らせ給ひて、御涙せきも止めず泣かせ給へば、氣近う見奉る人人、え拭ひ敢へぬ樣なり。帝の御有樣のいみじう調にり、めでたくおはしますを、大宮の御前、泥いて如何に見奉らせ給ふらんと思ひ遣り參らする人人、欷歔もよよなり。帝おはしまし所におはしませば、殿の御前を初め奉りて、關白殿、內大臣殿、皆侍ひ給ふ。內大臣殿、御前にて、行幸の程の物見車の、いみじう愛で申しつる際どもの聞え候ひつる事と、奏し給ふ。御乳母の典侍達、然るべき女房ども、皆簾上げて、御儀參らする有樣尋常ならず、いみじうせさせ給へり。少時ありて、春宮の行啓あり。車の由奏して、御車かき下ろして、中門の外より筵道敷きて、歩み入らせ給ふ。御車に閑院の大臣仕うまつらせ給へり。宮いみじう御麗やかにめでたうて入らせ給ふ。行幸に有樣異なれど、いみじう今めかしう心殊なり。大夫より初め、宮司、殿上人仕うまつれり。さて御休息幕に入らせ給ひぬ。上達部は、今日の御堂の東の廂に着き給ひぬ。殿上人、諸大夫は西の廊の前なる平張に着きぬ。樂屋は中島に居たり。御誦經の者、同じく中島に平張して、朝廷より初め宮宮の誦の唐櫃ども、色赤く、おどろおどろしくて、皆此御堂の側の方

の、かしづき入れ奉り給ふ程、猶前の世の御行ひ知られて、いみじき御樣なり。若く華やかに御容貌も愛敬づき、ものものしくおはしますものから、また艶めかしく、かたがためでたく見えさせ給ふ。內大臣殿、世の次位の一の人と思ひ申したるも、げにと覺えさせ給ひて、貴に、染み深き方に進ませ給へり。皆優めかしく亂れさせ給ひしも、世の色花に當宮の女房より初めて思ひ申したり。御年などいみじく若くともおはしましながら、人よりは異る御勢、いと更なる御身なれど、めでたし。卑しの者どもの御前近く參れば、かたはらいたく見る程に、法住寺の太政大臣の御子の別當公信を、關白殿、御前に召せば、いみじく謂和しく畏まりて、御前に侍ひ給へば、彼れ少し退けさせよとのたまはすれば、赤き衣着たる者ども出で來て、弓杖して唯だ打ちに打てば、どよみて逃げ喧躁る程に、殿の御前、さすがに心苦しげに御覽じ遣らせ給へり。拂ひ止めば、また同じやうに立ち混みぬれば、力無しとて打笑はせ給ふ。此中に法師袈裟着たる者ぞ田舍人なめりと見えたる。斯くて亂聲をさへ爲合はせたれば、いとどいみじうおどろおどろしく、如何なるにかと思へば、行幸のおはしまし寄れば、此門の人人拂はれて逃ぐる音の聞ゆるなりけり。やうやうおはしまし寄る程に、御覽じ遣らせ給へば、經藏、鐘樓、南の廊などの、朝日に照り輝きたる御覽じ遣られたるは、いとあさましう、御目も及ばずおはしまして、大門入らせ給ふ程に、左右の船の樂、龍頭、鷁首舞ひ出でたり。曲を合せて響無量なり。笙を吹き、絃を彈き、鼓を打ち、功を歌ひ德を舞ふ。御覽ずる御心地、此世の事とも思されず。入らせ給ひて、西の中門の北の廊の南の端に、御輿寄せて下りさせ給ふ。關白殿の





南の廊の方などに立ち並めど、其れも其の大門の外に轅打ちて、許多の僧の其庭より参るべければ、近くは寄り参らせず。行幸行啓をだに見んとてぞ立ち並みためる。斯くて日麗らかに射し出づる程に、御方方の女房達の侍ふ御簾際の程見渡せば、御簾の有様より初め裾まで世の常ならず珍らかなるまで見ゆるに、朽葉、女郎花、桔梗、萩などの織物、綿綿布などの袙襲の御几帳、斑濃の裾どもして、さまざま心ばへ有る繪を泥して書かせ給へり。えも云はずめでたき袖口、衣の褄どもの打出だし渡したる見るに、目輝きて何とも見分き難し。其中にも、紅梅襲の単衣などの輝き渡るに、桔梗、女郎花、萩、朽葉、草の香などの織物、羅に、或るは綿綿布結び、唐衣などの云ひ盡すべうも有らぬに、唐紅の三重の袴どもも皆綾なり。枇杷殿の宮の御方には、また此いろいろの織物、羅どもを、同じ襲にて袴の上に重ねさせ給へり。また是れ無かりつる事と、いみじう珍らかなり。此御方方、聞え合せさせ給へるにも有らず、皆心心にさせ給へるに、同じ色ならぬ程など、いみじうをかしう見えたり。是れにまた、殿の上の御方、劣りげ無し。是れのみならず、院の女御の御方、関白殿、内大臣殿などの御方方、いみじうせさせ給へり。見渡したるに、是れこそは日本國のいみじき大事なりけれと見るに、云はん方無き心地すべし。天人などの飾りも斯様にこそはと推し量られてめでたし。樂所の物の音ども吹き立てたる、えも云はず面白し。此物見る者ども、あないみじと見奉ずる程、上達部皆参り集ひ給ひて、御下簾高欄に打掛けつつおはす。関白殿参らせ給ふ程は、御隨身どもの気色、云ひ遣る方無くて、然るべく事美しき人人御供に侍ひ給ふに、また此本よりおはする上達部

たまはすれば、此ネも云はぬ老人ども擲はれて、「彼の會の日はえ參るまじければ、野ら構へて今日參りたるなり、我が君や、實語にし侍らんずるなり、助け給へ」と、手を擦るも哀れにて、え際やかにも道はず。斯くて萬づの事を辞調へさせ給ひて、十三日の夜さり、督の殿、大宮、西殿におはしませば、一つ御車に一度ら奉り給ふ、女房車ども皆此御堂の西の廊に下ろさせ給ふ。御前達は此堂の西の廊、未申の方かけて皆おはします。督の殿の女房やがて同じ方の廊に下りぬ。皇太后宮の御迎へに關白殿參らせ給ふ。中宮は內におはしませば、內の大殿、上達部、殿上人、諸大夫など、各分れ分れ參る。何れも御具は所狹ければ、皆廊の御車にてぞ渡らせ給ふ。御有樣いと莊嚴ほし。中宮の御車には二條殿の御方侍ひ給ふ。皇太后の御車には一品の宮おはしまし、五の御方仕うまつり給へり。宮宮の女房、各二三人づつぞ侍ふ。大宮のおはしましつるやうに、西面の大門より入らせ給ふ。大宮おはしませば、御車は中門の外より手輿きにて入らせ給ふ。有りつる同じ御廊に入らせ給ひぬ。皇太后宮、中宮の女房、春宮の女御、北の政所の御方方、皆東の廊に侍ふ。南の方なる廊には小一條の院の女御殿おはします。阿彌陀堂の南の廊には關白殿の上おはします。金堂の下の廊には內大臣殿の上おはします。また春宮大夫殿の上、中宮の權大夫殿の上の御棧敷も有り。經藏の南の廊には、三位中將殿の上の御車三四引き續けて、えも云はず亂れ乘りこぼれて、女房車などの侍ふも、見るに今めかしういみじ。殿の御前は、東の築土壞させ給ひて、世の中の車ども參りて、物見るべきやうに掃てさせ給へり。然るべきやんごとなき車ども立ち混みぬれば、平人の車寄り着くべうも有らねば、此

多くの輪宝を持て参る。大方御堂の中をば世にも云はず、院の周囲まで、世の中の上下立ち群みたり。高うに幄屋立てさせ給ふままに、院の内、金剛界の勝地と見えてめでたし。国国の受領ども、皆御仕事の物、国国持て参り込みたるを御覧ずれば、総て仰せられたるよりも猛し進み、えも云はずめでたうして持て参りたり。我も我もと、劣らじ負けじと思ひたる気色どもをかし。七宝は降りに降り、四方より来る宝えて、目も及ばぬ御有様なり。御堂の御堂の會に高うに指導させ給へれど、此度は行幸、行啓もあるべう思し捉てさせ給へりければ、其御用意有様、設けの物ども、いと心異なり。上達部、殿上人の装束、衛府、随身、御人の設け物まで、いみじう清らに興ずるに、また七僧百僧の法服どもなど、すべて世の中に満ちたる珍しき御装束なり。御前達も陸奥の御随身を大事に思へり。我身の装束ども、童子、法師ばらの口装までも思ひ操り思ひ急ぎたり。すんごとなく未だ若やかなんなどが、急ぎ装くは道理なり。年なども老い、おしく若るべじき僧などの急ぎ装ひは云へば疎かなり。二三日かけては間無く云ふ事をさせ給ふ。彼の日になりて人もあるべくも有らざなれば、今日だにとて、老いたる、若き、参り集ふ。七八十の翁、嫗、我はかりの参らじするものにて出で立ちたる程、いみじう哀れなり。御堂の上童の四十に余る程はさて、今日彼の日の事ども整ひ整く新りども、四方八方の御領にも、いみじき事ども有りつれば、昨日今日を積り無く晴れて、日頃の名残儀式さ宝への中とすれば雨降りて、此程の御有様、如何に如何にと申し思ひて、此頃には御前の御無し。此事を謹しき者ども繰りたるまで御前近う立ち並みたり。人人、いと目出し、頼れ少し

別れにし人に代へても見てしがな　類似て返る波も有りけり

など、いと哀れなる事もいと多くなん。御堂には、殿の御前、安き時も大殿籠らず、いみじう思し急がせ給ふ。宮には多くの女房侍へど、三十人ばかり參るべきなり。多くの綾織物を此宮、彼の宮、同じ樣樣には織らせさせ給はず、さまざまの紋交りたるをば、いみじく口を固め、語らせじの御心を得て、宮司たどもいみじく制し云ふ。折ふしの物合、讀み詠のやうにて、をかしき世の御有樣どもなりけり。萬づ聞えさせ盡すべき方も無くてなん。

音樂

御堂供養、治安二年九月十四日と定めさせ給へれば、萬づを靜心無う、夜を晝に思し營ませ給ふ。池を掘る翁の、怪しき影の映れるを見て、

曇り無き鏡と澄む池の面に映れる影の恥かしきかな

と云ふを聞きて、頭白き老法師、

斯くばかりさやけく照れる夏の日に我が頭の雪ぞ消えせぬ

と云ふも、物を思ひ知るにやと哀れなり。東の大門に立ちて東の方を見れば、水の面の間も無く筏を差して、

有りけるを、尼上の御許に奉らせ給ふとて、其宮の數に、大納言殿書かせ給ふ。

明暮も見るべきものを玉章許ふたたび逢はん身にし有らねば

御堂に五月には三十講とて、いと尊とし。はかなうて六月にも成りぬれば、宮宮、殿ばら、いみじう急がせ給ふ。行幸、春宮の行啓なども有るべし。院の女御、殿の上なども、此度の物は御覽ずべければ、世の中の織物、綾師なども、方方に取り籠められて、爭ひを營ののしる。百五十人の僧の法服皆せさせ給ふ。此度の事には其請僧どもにも、皆宮宮より被け物あるべければ、大方いみじき日本の大事なり。田舍の人人、いみじき公の責をも捨てて、萬づの事を捨きて、皆上り混みて、此度の事は見はやさんとすと云ひ思へり。すべて云ふにも疎かなる度の御準備なり。いつしか其程にならば、若しも顯かばやと思へど、いと騒がしかるべければ、思ひも掛けずながら、あいなう四方の國の近隣の山人ども、是れをいみじき徳備にして、顔色の際、衣どもを染めかけて、縫ひ營むも哀れにをかし。御堂の結び幡、錦の幡、切り幡なども、世の人、心の暇、手の暇無し。四條大納言殿には、哀れなる御事どもを、歎きせず思さる。彼の姫宮の御手習どもの有りけるを、おはしましける折、失はせ給へりけるが、物の中より出で來たりけるを、女御殿より小二條殿に、尼上の御許に奉り給ふとて、

墨くしも見えぬなりけり數知らず落つる涙の玉に紛ひて

尼上の返し、

天王寺にて、姫宮の削らせ給ひし御髪の、物の中より出で來たるを見給ひて、尼上、

　あだに斯く落つと歎きしうばたまの髮こそ長き形見なりけれ

斯くて、枇杷殿には四月に御渡り有り。其夜に成りて渡らせ給ふに、一條殿遠からぬ程なれば四五町ばかりなり。其れに續き立ちたり。宮の御前御輿に奉りて、後に御乳母の典侍仕うまつり給へり。さて、ややおはします程に、姫宮の御前、唐の御車に奉りたり。御車には五の御方、土御門の御匣殿など侍ひ給ふ。次ぎ次ぎいと多かる事どもなれど、夜の事どもなれば知らず。さて渡らせ給ひぬ。上達部、殿上人などの御禄樣樣なり。此度は姫宮の御方裝備はせ給へり。綾に羅重ねたる紫の裾濃の御几帳ども、御帳の帷子も同じやうにて、紺裾濃の紐をして、紺青、泥などして繪書きたり。御帳いと小やかにをかしげなり。何事もいと美くし。大宮の御方は寢殿の東の方なり。其れはいと麗はしう裝飾はせ給へり。東の對は殿ばらの參り給ふ折の料なり。北の對は御乳母の典侍、また其女の五の宮の內侍、東宮亮登任朝臣の女なり。其局どもなり。西の一二の對は、御匣殿、五の御方、一品の宮の御乳母達など、唯だ女房の局なり。東の對の北の端、東面は侍にせさせ給へり。三日の程、めでたう打擧げ遊びて過ぎぬ。一品の宮の御方の童女、をかしき、優しき、小さき、幼なき、めでたきなど、樣樣附けさせ給へり。いと美くしう爲居ゑ奉りて、殊更めきをかしう見えさせ給ふ。來年は御裳着の事など有るべし。大御堂供養はこの七月とて、世の人いみじう準備ぎたり。四條大納言の御許には、姫宮の御果てなど爲させ給ひて、尼上小二條へ渡り給ひぬ。日頃有りて、姫宮の御髪の筥の

花は雪雪は花にぞまがへつる鶯だにも鳴かぬ春にて

大宮御返し、

鶯も花に紛ふる雪なれや行も分かれぬ春の聞ゆる

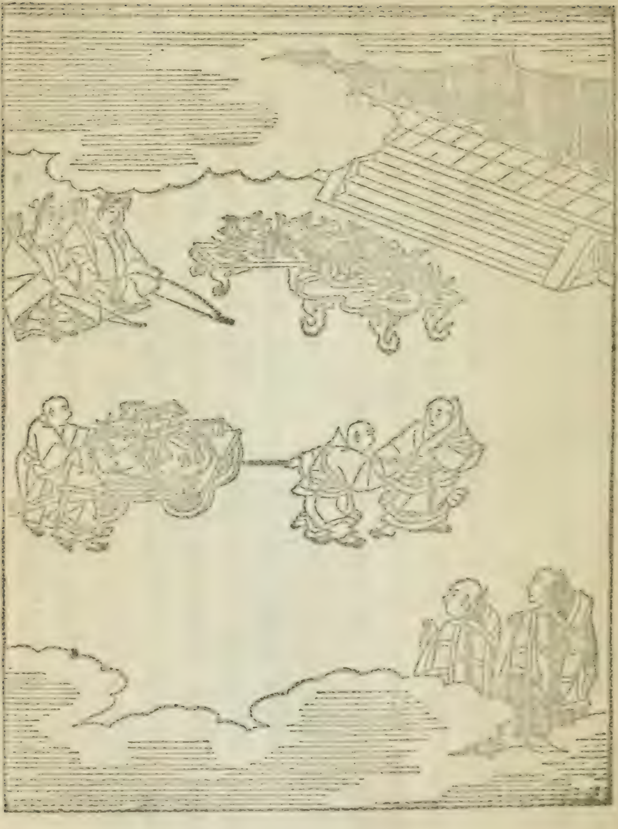
西條大納言には、女房、尼上、姫宮など、天王寺へ、二月に詣でさせ給ふ。忍びてと思し捨てしかど、事限り有れば、音聞り聞えぬ。さて三日ばかり候はせ給ひて、然るべき事ども何にも仕うまつらせ給ふ。僧にも物賜はせなどして、帰らせ給ひぬ。姫宮と聞ゆるは、此西條大納言の中姫君を、故女院の御子にし奉らせ給へりしなり。道より悩ましう侍ましげにおはしますとて、殿も上も、心許なげに思し亂れたり。猶あだなる御心地とこそ思召ししか、げに苦しうて、頼もしげ無く見えさせ給ふにも、故宮のいみじきものに思ひ聞え給へりしものを、如何にとのみ萬づに祈請させ給へど、三月二十餘日の程に亡せ給ひぬ。大納言殿も尼上も疎かに思さんやは。いみじう思し歎きたり。姉の君も折しも御嶽に詣で給ひにしかば、さまざま哀れに思し歎きて、然りとてやはとて後後の御事ども物し聞え給ふ。いみじう哀れなり。四條の宮の萬づの御寶、唯だ此君に譲り聞え給へりしをも、其後の御事どもに、殊更に思し捨てたり。北の對に僧は住ませ給ふ。寝殿に女御殿と此宮と住ませ給ふなりけり。大納言の御前に撫子をいと多く栽ゑさせ給へり。枯れたるを御覧じて、大納言殿、

露をだに當てじと思ひて朝夕に我がなでしこの枯れにけるかな

聞ゆ。また兒どもの講堂するども見えたり。さまざま哀れにらうたき聲どもの、ひ細く細く美くしげに聞かまほしき事、片生の聲とも無く、迦陵頻伽の聲も斯くやと聞えたり。是れを疎かに思ひて、宮宮に御覽ぜさせずなりぬる事と、殿の御前も、上の御方にも、返す返す口惜しがらせ給ふ。上達部、殿ばら、殿上人、また斯かる事なん見給へざりつる、世に無う珍らしく美くしき事と聞え給ふ。夜罷かで給ふをだに口惜しく思して、後夜に參り合ひ給ふ。是れは誰れが子ぞ、彼れは其れがぞなど、殿の御前や此殿ばらなど問はせ給へば、此師達、其れは其れ、彼れは彼れがなど皆申し給ふ。其親ども召して、善き子を持たりけるかなと褒めのたまはせて、師達にも、善き弟子なり、能く能く仕立て給へなどのたまはすれば、各、師達、親達など面目ありて思へり。また殿の女房、宮の女房などの子にて御覽じ思したるは、やがて上の御局に召し入れて、裝束賜はせなどすれば、傍の小法師ばら羨ましげに思へり。はかなう三日過ぎぬれば、各、祿賜はりて退かづるも、誰も名殘惜しう思しのたまはす。其頃の事には唯だ此御物語のみ有り。やがて此御堂に、然るべきやんごとなき僧ども住し侍らひ給ふ。斯くて、上の御前、東殿に歸らせ給ひぬ。何事につけても世に珍らかなる事どもを爲出でさせ給ふ。天竺震旦の事も遙かに隔たりたれば知らず、是れは猶いと有樣めでたし。殿の御願、來年の大御堂の供養の事を今より思召したり。治安二年に成りぬ。正月には公事繁くて過ぎぬ。枇杷殿燒けて後六年に成りぬ。造り出でたれば四月に渡らせ給ふべしとて、宮には其御準備あり。正月雪の降る日、皇太后宮より大宮に聞えさせ給へり。

緋掛けさせ給へり。北の方に御座は繧繝にせさせ給へり。諷誦七僧、百僧せさせ給ひて、七僧には法服賜らせ給ふ。其事果てて、猶やがて三日三夜、不断の御念佛せさせ給ふ。山の念佛の樣を移し行はせ給ふなりけり。念佛の僧どもは年十五を限にて、十二三四までを擇り召したり。山の西塔、東塔、横川、山階寺、仁和寺、三井寺などに、各召し集めたる法師なれど、其人の子ならぬは參らせず、然るべき上達部、四位、五位までの子どもをぞ參らする。仁和寺の僧正いみじう裝立て給ひて、十人ばかり參らせ給へり。三井寺より僧都君同じくし給へり。山階寺の別當僧都いみじう手を盡したり。扶公僧都同じ事し給へり。山には座主、法性寺の座主、院源僧都など、めでたくし給へり。横川より法住寺の僧都、裝立てて參らせ給へり。御法事果てて、御念佛始まるに、此僧どもの參り集りたる、いみじう美くしう、をかしげなる事限り無し。一番に十五人をぞ結ばせ給へる。此小法師ばらは、皆容貌姿なり。其樣の裝束をぞ殿よりも賜はせける。御念佛始まりて、讀み誦むさま、哀れに尊し。此圓居達、皆聽衆諸衆にて中座に候ふ。僧綱達も各の前淸くしと美みまけて見えたり。裝束どもは、或は紫の織物の指貫どもを濃紫、薄紫にて、身長に二尺ばかり餘みしだき、薄鈍の綱張などの綾、無紋、或は堅紋の織物、また此今樣のつやつやなど云ふをぞ、六つばかりづつ綿薄らかにて着せたる、羅の衣ども、或は、薄鈍、紫、香などしても染めたり。香の香ばしき事限り無し。裳に引かれて歩るき舞ふ程、いと揺動げなり。頭には花を插り、顏には紅白粉を附けたらんやうなり。哀れに美くしう尊き樣、小さき地藏菩薩は斯くやおはすらんと見え、また尼見などの物云ひて動くとも

事惜しげになん。手いと善く書き給ふ。繪などもいとをかしう書き給ふ。男君いと甲斐ある樣に思して、出で入り通ひ給ふ程に、五節に成りぬれば、其頃の御有樣など、花花と爲立て給へり。御堂にも目安く思し見奉らせ給ふ。五節の果つる夜、此大納言殿に火出で來て燒けぬ。雨のどかに降りて、氣濃り立ちけるに、三位中將殿も、大納言殿も、五節なれば皆内におはしける折しも有る事にて、萬づあさましう、殘り無くて止みぬ。心憂くあさまし。いみじとも世の常なり。早朝萬づの御訪らひども有り。御壻取りの後、此十餘日にこそは成りぬれ。折しも口惜しういみじ。是れも初め對に附けたりしを、賢う消たれにしを、また其後十餘日ありて、人の惱みたる程に、斯かるなりけり。いと怪しく、然るべき敵なども無きにと思しながら、漫ろに出で來たる火の樣なれば、猶如何なる事にかと、殿の内の上下思ひたり。一條の桟敷殿に渡り給ひぬ。斯かる程に、月頃御堂の戌亥の方に隔てて、上の御堂建てさせ給へり。皆樂士を爲籠めて、三間四面の檜皮葺の御堂、いと小やかに、をかしげに造らせ給ひて、北南西の方と、廊、渡殿造り續けさせ給ひて、十二月十餘日の程に御堂供養あり。御堂の有樣、佛いとをかしげにて、三尺ばかりの阿彌陀佛、觀音勢至おはします。佛具どもえも云はず美くしう爲させ給へり。御堂の造りざま、廂の方に廻りて、東廂の中床のやうに、疊一敷敷くばかりの程、長押の高さ四寸ばかり上げて造りて、其れに錦の端差したる長疊どもを西東北南と廻りて敷かせ給へり。佛の御前の高座の左右に禮盤立てさせ給へり。其廂の長押の下の方の板敷、影見ゆばかり磨かせ給へり。北の方には母屋の廂ぎはに御障子をいとをかしげに繪書きて立てさせ給へり。帽





當ども、宮の御前に御菓子參らする中に、えも云はず大きなる大螺に赤き網を附けて引き出だしたり。おどろおどろしう艶めしき事限り無し。大安寺の別當威儀師安奝が參らせたるなりけり。何にかと御覽ずれば、さまざまの菓子を皆物の形に造りなどして參らせたるなりけり。關白殿などもいみじう御覽じ興ぜさせ給ひて、是れ許か損ひ過たで、京に參らすべき由仰せ給ひて、國の守まさもとの朝臣に預け給はせつ。平かに事無くて還らせ給ひぬ。斯かる程に霜月に成りぬ。此頃の中宮の大夫とは法住寺の大臣の御子の大納言をぞ聞ゆる。年頃御子數多おはしぬべかりしを、皆失ひ給ひて、唯だ姫君一人をぞえも云はずかしづき立てて持たせ給へる、内にとぞ思し志して、三條院の宮達など、然樣に思ひ聞え給へりしかど、何かはと思し絶えたるに、今の帝、いと若うおはします上、内にはまた中宮また限り無くておはしませば思し絶えたり。また東宮に御侍の殿侍らはせ給ふ。斯樣なるには如何でかと思す程に、此殿の三位中將殿獨りおはすれば、其れにやと思し立ちて、壻取り聞え給ふ。年頃は何事をかは、唯だ此御かしづきより外の事無く思したれば、御調度どもより初め、萬づの御具ども麗やくやうに、漢書の御屏風、文集の御屏風どもなど侍從の書かせ給ふなれば、げに内、春宮に參り給はんに堪へて見えたり。さて壻取り奉り給ふ。女房もとよりいと多かる殿なれば、心殊に撰ばせ給ひて二十人、童女四人、下仕同じ事なり。然ばかり物好みをし、昔より物華やかなる御心にて、いみじう修繕し給へり。男君十八にや成り給ふらん。女君は今少し增さり給へるべし。御容貌有樣調ほり果てて、いみじうめでたう貴やかに、美くしう艶めき給へり。御髮身長に多く餘り給へり。常人に見え給はん

に感じ給ふ。經は經藏に納めさせ給ひつ。女房、宮に參りて、今日の事ども啓すれば、甲斐ありて聞し召す。斯くて此御時、春日の行幸未だしかりつれば、此十月に爲させ給ふ。大宮も思召すやう有りて、一つ御輿にておはします。宮の女房の車など合せて二十餘りぞ有る。其有樣推し量るべし。參らせ給へれば、神寶や何やと、前前の御時には勝らせ給へり。舞人には殿ばらの君達仕うまつり給ふ。上達部、殿上人殘る無し。事どもいみじうめでたくて日も暮れぬ。此山の名をなん三笠山と申すと聞し召して、大宮の御前、

　みかさ山さしてぞ來つるいにしへの古き行幸の跡を尋ねて

とのたまはせけり。春日の禰宜、祝は爵賜はり、位賜はらせ給ひて、喜びども有り。山階寺には御堂の中、樣樣の事めでたき事ども爲設けて御覽ぜさす。此寺の別當、僧どもに皆祿賜はす。別當僧都林懷は、僧正に成させ給ふ宣旨下させ給ふに、畏まりながら奏するやうは、「自らは七十にまかり成りぬべし、限り無き位を賜はする、いとも畏き仰なれど、此永昭法師、數多の弟子の中に、昔よりいと愛しう思ひ給ふる者なり。是れを如何で生きて候ふ折、僧都に成して見給はんの本意なんいと深う候ふ。されば僧正の位を返し奉りて、此法師を僧都に成させ給はん」と有れば、ともかくも申すに由らせ給ふべしと、宣旨下りぬれば、此別當僧都を初めて、七大寺の僧ども、引きて喜び申したる程、云はん方無うめでたし。此僧都、今年ぞ三十四に成りける。まだ此奈良方の斯く若うて僧都に成りたる、是れなん始めなりける。別當僧都、同じ僧都なれど、此永昭僧都の前に居たる程、別當僧都の爲めに面目めでたし。國の守より初めて、然るべき寺の別

必ず忉利天に生る。如何に況んや此女房の、何れか法華經を讀み奉らざらん。兜率天に生れ給ひて、彌勒に快樂し給ふべし。況んや金銀、瑠璃、眞珠等を持て供養し給へる、あはれに貴き事なり。此志、須彌山よりも高く、四大海よりも深し。只今の御身どもは、いろいろの花の枝を深く包はし奉り、紫磨黄金に沁みかへり、御顔はいろいろに彩色給ひて、鏡に映れる影を見給ひては、彼の金剛山の女人の、我言しと見けんにもあらず。九重の宮の内に座し給ふ事、彼の忉利天女の快樂を受けて、歡喜苑の内に遊戯するに劣らず。舞見の言に遊戯するにも勝る。新羅國の白玉の瑠璃に光し、尾張の蓮の池に浴し、四種の甘露を嘗め、五妙の音樂を聞くに、三十三天の微妙の天女に等しくおはする御身どもの、如何に思したるにか、春の花の散るを見て無常を悟り、秋の木の葉の落つるを見て悲しみ、籬の鳥の聲に涙を流し、朝の露の朝日に消え、夕の煙の積み少なく、入相の鐘の聲、今日も暮れぬと聞くを憐れみ給ひて、古への雅を思ひ出で、今の哀れを偲び給ひて、斯かる大事を起し給へり。且つには、積み化うまつり給ふ亀山太后宮、並に一品の宮の御菩提を祈り奉り、且つは私の二世の大願相徹ひ、一切衆生をして同じく兜率の内院、彼生の思ひ遂げしめんと思したり。妙法一乘の御輿、文字殊に存しかるべからず。總御經典、紺紙金字の御經、又實に一乘の玉を掛け給ひつ。決定して二世の大願相徹にじや」などぞ云ふ。哀れにめでたき事多かれど、損ねびやるべき方無し。事果てて、有りつる程ども包み、また錦どもなど添へ賜はりて、還り出づる僧、猶人より先に見ゆ。御堂の所司の者、猿名僧、皆禄得つつ立ちつ。様ぼらん、いみじう官の女房も心にくきもの

藏に納め奉らんとのたまはせて、具しておはしましぬ。女房疾く疾く參るべしとのたまはせければ、宮司の車ども四五召して、五の御方を初め奉り、三十人の女房乘りこぼれて御堂へ參る。斯かりける晴れの事に然るべき用意あるべかりけるものをと思へど、有りの儘の姿どもにて參る。此頃の薄紅葉を色色いみじう盡したりつる裝束どもなれば、殊更に斯うこそはと見えて、亂れ乘りて參りぬ。阿彌陀堂の廂に下ろさせ給ふ。上達部は東の簀子に、高欄に後ろを當てつつ並み居させ給へり。殿の御前、斯う斯うの事の有りつれど、いさや然ばかりぞ有らんと思ひ待りつるに、あさましう目も及ばずこそ見給ひつれなど、いみじう興じのたまはすれば、此殿ばらもいみじう感ぜさせ給ふ。女房の中に、をかしき樣にて菓物など入れさせ給ふ。殿ばらも物など聞し召し、宮司權佐、俊頼など女房の事執り行ふ。講師の前、題名僧の事などには、此度講師に任ぜん」、時信仕うまつれり。事ども儲立てたる際に講師參りたり。赤色の裝束いと目にしうて、めでたう尊り、香爐捧げて佛拜み奉る程、如何なる事を云ひ出でんとすらんと見えたり。高座に登りて、表白打ちて、事の趣申して、願文少し打讀みて、事の有樣、經の中の心ばへ、例の大意、釋名、入文、解釋より初めて、いみじう聞き善く珍らしう云ひもて行くに、殿の御前を初め奉り、いみじう感ぜさせ給ふ。無始曠劫より音聲聞に至るまで、説き續けたる程、女房の面目を稱め、宮の御有樣めでたし。「佛在世の時、菩提心を起す者千萬人有りしかど、未だ有らじ、女の身にて、契を結び事を語らひて、斯く菩提の心を起して、難行苦行入の法華經を書寫供養し、七寶をもて飾り奉れり。是れ希有の中の希有の事なり。法華經書寫供養の者、

ばかりなん候ふめる、と申せば、いと猛なる事にこそ有たれ、絹は五十ぞ講師には取らせて、殘りは僧名僧どもにこそ取らせめ。さても何時か、とのたまはすれば、今日明日の程にとなん、と聞えさすれば、明後日、佛にいと善き日なり、さらば御堂かき掃はせ、老法師の居所も掃はせ侍らん、若しおもと達の物笑ひし給ふ事耻かし、とのたまはせて、急ぎ掃らせ給ひぬ。御堂におはしまして、斯う斯うの事あり、阿彌陀堂に莊嚴し、其前の廂には女房の居所、然るべう親しき上達部など喚ばん、其日の參り物、御厨子所などにすべし女房の、喚物、菓物などすべし、とのたまはせて、準備がせ給ふ。宮の女房、殿の御前の聞し召しても事ないと耻かしう、如何に如何にと思ひ騷ぎたるなども、いみじう見えたり。阿彌陀堂に莊嚴いみじう爲させ給へり。殿、其日の早朝、宮に參らせ給へれば、經各今ぞ奉て參り合へる。經の御有樣えも云はずめでたし。或は紺青を地にして黄金の泥して書きたれば、金泥の經なり。或は綾の紋に下繪をし、經の上下に繪を書き、また經の中の事どもを書き現はし、涌出品の恒沙の菩薩の涌出し、壽量品の常在靈鷲山の有樣、すべて云ふべきに有らず。提婆品は彼の龍王の繪を書き現はし、或は白銀黄金の枝に附け、言ひ續け形容びやるべき方も無し。經とは見え給はず、然るべきものの集などを書きたらんやうに見えて、好ましうめでたう侍たり。玉の軸をし、大方七寶をもて飾れり。また斯うめでたき事見えず。經筥は紫檀の筥に、いろいろの玉を錢の紋に入れて、黄金の筋を、置口にせさせ給へり。唐の紺地の錦の小紋たるを、折立にせさせ給へり。あなめでた、同じくは斯樣にしてこそ持經にし奉らめと見えたり。殿の御前、返す返す感ぜさせ給ひて、經

「斯くはかなき世に、罪をのみ造りて過ぐすは、いみじきわざかな、いざ給へ、さるべき君達、諸共に契りて、經一品づつ書きて、申し上げん」と云ひて、「いと善き事なり」と語らひ合せて、御前に參りて、「斯う斯うの事をなん仕うまつらんと思ひ候ふ、如何が」と啓すれば、御前、「いと善き事なり、さらば忠實やかに儲出でよ」など仰せられて、然るべき人人三十人ばかり結緣すべし。先づ法華經の序品は五の宮方と定めさせ給ひて、方便品は土御門の右大殿などのたまはせつつ、今は一定に成りて、各如何がすべきなど、聞きにくきまで思ひ騷ぐ。夫持たる人人も、物はかばかしからぬは如何にせんと思ひ、泣いて然らぬ人は唯だ思ひ歎きて、然るべき殿ばら君達なども、皆とりどりに爲給ふべし。只今は斯樣の功德の事には覺えで、各營みわざのやうに見えて、なかなか罪造りに見えたり。斯く營み騷ぐ程に、十餘日に成りぬれば、九月の二十日の程なり。經の函は御前に設けさせ給ふ。さて如何ならんと思ふ程に、皆儲出で奉りつれば、同じうは、此月の中にと急がせ給ふ。講師には永昭僧都と志し給へり。其料には、綾羅の衣裝束一領、さては絹百ばかりぞ有りける。今は何處にてかと定めらるる程に、殿參らせ給へれば、宮、御物語のついでに、此處に侍る人人の、斯う斯うの事を儲出でて、何處にてかとなん申すなる、と聞えさせ給へば、否や、御堂より外には何處にてか仕うまつらん、と申させ給へば、「然らば然にこそは」と定めさせ給ひて、さても、講師には誰れをとか申す、講師の料には、何をか設けて候ふ、と申させ給へば、講師には永昭となん思ひて侍る。其れいと善き事に侍るなり。何をか設けたる、とのたまはすれば、典侍侍ひて綾羅の夜の裝束一領、絹百

斯くて日頃過ぎぬれば、堀河殿には世の中にてせさせ給ふ。中納言殿の御方々もやらずに渡り給ひぬ。させたり。堀河殿は
院にて経信など申し上げさせ給ひに、年頃此御方の御事すさびに聞え給へりける御文どもさせ給ひける。
斯くて御忌果てて、僧など皆出でぬれば、北の方、いとど悲しう思さる方多く、淋しう思さるべし。斯
かる程に、世の中いみじう騒がしうて、堀河の左の大臣殿、五月廿五日に失せさせ給ひぬ。哀れに心細き頃
事なり。されど皆人々言ひ合はぬばかりにて、萬づに思し捨てさせ給ふ。御宮々などをもてなし給ひに
るものにて、院おはしまさましかば如何にいとほしき御有様ならまし。女御は萬づに思しめど、思ひ出づる
べき事にもあらず。宮達は右衛門督の大納言殿が家に渡し奉らせ給ふ。御服の御衣は殿にせさせ給ふ。また
閑院の右の大臣の御子の、三位の侍従と聞ゆるも亡せ給ひて、右の大臣いみじう思し嘆かせ給ふも理かな
り。同じ侍従と聞ゆる中にも、いと若うおはして、人に譽められ給ひつるものをと、返す返す心憂く、あさ
ましう哀れなる事どもなり。大方何ふ人の多かる事ぞいみじかりける。其年の十月に、國司の司召ありて、
此頃ぱらの世の有様皆變りもて行く。年頃は左大臣にては此堀河の大臣、右大臣にて閑院の大臣、内大臣に
ては関白殿こそおはしましつるを、左大臣には関白殿、右大臣には小野の宮の右大將、内大臣には大殿の左大
將、太政大臣には閑院の大臣成らせ給ひぬ。八九月にもなりぬれば、木末の木の葉も猶に色付きて、山の錦
吹き亂る風ひ知り顔に、吹く風の音も哀れ多く、世間の常の有様も何事もなき様、耳に留まりて、嵐山の頂もい
とど涙月に思ひ遣られ、萬づ哀れに心細き多事。堀河殿の大臣達、御心にて、已かども打捨らる。

寺へにも出で立ち給へど、入道殿の御忌の日なりければ、大納言殿男に止め奉り給ひて、我れ一人ぞおはする。北山に萬づの御誦經ども遣びて、装飾ひ獻ぐ奉り給ふ。大納言の御心地云ふにも愚かなれば、え移寄はず。萬づに営為して、其寺の僧どもに、御果てまで念佛すべく置かせ給ふ。然るべき様の物遣ひ置かせ給ふ。女君は十二、男君は十五にてこそは此御事の初めの年、其後四年と云ふに斯く貴らせ給ひぬるぞかし。哀れに口惜しう悲しき御有様なり。女君の御年の程よりはいと美くしく勝りて、御手をかしう、歌を詠み給ひつるさま、驚きもせず思さる。然らぬ人だに、今はと思ふにはいみじきわざぞ、況して是れは道理にいみじや。此大臣君は、斯くいと物騒がしき紛れに、ともかくもおはせずかし給に、北南の御院の上のおはする所に渡り給ひにけり。御忌の程哀れに悲しき事多かり。中將の君、思ひ寝に見給へる夢に、女君の見え給ひければ、中將殿、

　夢の中の夢の宿りに宿りして我身は知らず人ぞ戀しき

　死ぬばかり戀しき人を戀ふるかな渡り河にて苦しと言ふやと

北の方、

　ながへても君に見せばや見るほどもなくたく消ゆる夢の悲しき

是れを聞きて、尾張の權守、

　別れ路に誰の事ぞと思へども後れ先だつ程ぞ悲しき

えものたまはで、唯だ御涙のみこぼるべかめれば、男君、御直衣の袖を御顔に押し當てて、いみじう泣き給ふ。此有様のいみじさに、北の方物も覺え給はで、隱れたる方にて水浴み給ひて、四方の御神を拜みて泣き給ふ。其程、姫君は「母は何ら何ら」と求め奉り給へば、執心無く急ぎおはして、御懷につと抱き奉り給ひて、唯だ「觀音、觀音」とのみ申し給ふ程に、姫君の御氣色の唯だ變りに變り行けば、「や、是は如何にするわざぞ」と宣ひ給ふに合せて、人人どよみて泣きののしる程の有樣、ゆゆしう悲し。御乳母、君の御足をつと抱きて、譫言に泣き惑ふ。やがて斯くてやと思して、戒受けさせ奉れ給ふて、大納言、御耳のもとにて、我が御代りに「持つ持つ」と宣ひ泣き給ふに、萬づ哀れに甲斐無ければ、然は此御事より外の事思ひ侍らざりつ、今は甲斐無き事なりけりと、物も覺え給はぬままに、何事をかと思し惑ふ。中將の君、いみじう若うをかしげなる男の、烏帽子、直衣なるが、物も覺えず泣き惑ひ給へるさま、哀れに悲しげに見え給ふ。今はあさましく甲斐無く見成し奉りて在れど、唯だ例の人の寢入りたるやうにもてなさせ給へり。然るべき人人立ち去らず泣き戀ひ奉る。斯かれど七日有りて生き出でたる例どもを、人人言ひ聞ゆるままに、山山寺寺に御祈りども頼りたり。中將の君の御後ろめたさに、御堂よりも高松殿よりも頻りに御消息有りけれど、隱し召し入れず。斯くて日頃に成りぬれば、色も變り給ひぬるぞいと哀れに悲しかりける。さて七八日ばかり有りて、北山なる所に靈屋と云ふ物造りて、夜さり率て奉らんとて、早朝より其御設をせさせ給ふにも、涙のみ盡きせぬものにて、日暮れぬれば、今はとて率て出で奉る程、誰かは安からん。中將の君

るべければ、宿世に任せてと思し立つも、涙ぐましき折折多かり。年頃大殿の御子のやうに思ひ聞えさせ給へりければ、御方方に皆內外し給へる中にも、皇太后宮には權大夫にて、年頃やがて同じ宮の中などに侍ひ給へれば、此頃も御前に參りつつ心細げに物を申し給へば、御前にも御心苦しう、如何にと思し聞かせ給ふに、年頃の君達の母北の方は故右衞門督の御女なりかし。小野の宮大將の御同胞なりしが、御女の亡せ給ひにしかば、獨身にて此君達をば、一つ懷に抱だき生し立て給へるに、斯く遙遙と思し立ちたれば、其れも如何でかは獨はと思して、故北の方の御弟の物し給ひけるをぞ迎へ給ひける。さて諸共にと思して、三月十餘日の程に急ぎ立ちて下り給ふ。世の中いと騷がしうて、皆人いみじう死ぬれば、遙かなる程にては如何がなど云ひ思ひて、留まる人多くぞ有りける。哀れにて下り給ひぬ。侍從の大納言の御姬君、一日頃よりいみじう煩ひ給ひて、限り限りと見え給へば、大納言も北の方も靜心無く思し惑ふ。三位の中將若き御心地にいと哀れに思し立ち、いみじう賴もしげ無くおはすれば、限りにこそはと思し惑ひて、萬づの物を佛神に取り集め誦經にと爲果てさせ給ふ。大納言も母北の方も物も覺え給はず。大納言殿は年頃賴み奉りつる不動尊、仁王經、助け給へ助け給へと額を著き惑ひ給ふ。中將の君、母屋の柱の下に面杖を附きて、いといみじう歎きたるに、此姬君見やりつつ、いと物聞えまほしげに思したれば、常はいと恥かしきものに思ひ聞え給へるに、如何に思すにか、近う寄らせ給へと人人も聞ゆれば、中將の君、泣く泣く近う寄り給ひて、御髮を掟へ給ひて、何事か思召す、のたまふべき事や有る、など聞え給へば、物は云はまほしと思しながら、物は

じうめでたし。殿、此度たん讃ひするなどのたまはせて急がせ給へるに、御乳母の小式部の君の心ばへ何れの御乳母にも勝りて、君の御事をいみじきものに思ひ仕うまつる事ぞ限り無き。宰相も謹厚なれば、殿の上の候させ給へる事どもをば然るものにて、女房にも皆然るべき事ども賜わたしたり。御侍の殿は御年十五ばかりにおはします。春宮は十三にぞおはしますに、いみじう目安き程の御中らひにおはします。麗、登華殿に渡らせ給ひて御覧ずれば、御匣殿より初めて萬づにめでたきに、御侍の殿は華やかにをかしげにおはしまして、御髪身長に一尺ばかり餘らせ給へり。御心もいと御流をかしうおはしませば、いと事の外に物華かしげにもおはしまさず、春宮をばあなづらはしげにぞ思ひ申させ給へる。春宮もいみじうをかしう、御艶やかに美くしげにおはします。さし並ばせ給へる程、いと目安く見奉る人人、はかなき御遊び、雙六、扁附かせ給ふなど、諸共にせさせ給ふ御中らひ、造り合せたるやうにめでたし。若き人人見奉り、仕うまつる甲斐ありて思へり。上、十餘月ばかり見奉らせ給ひて、今は心安く里に出でさせ給ふ。さて同じ月の晦日に御本意遂げさせ給ひつ。かねて皆萬づを掟かせ給へりければ、山の座主参りて、皆然るべきさまやうに申させ給ふ。殿の御出家の折、源三位も成り給ひにけり。宮も有りて、高松殿の上も渡らせ給ひにしに、此御前は御侍の殿の御参りを過ぐさせ給ひつる程になん有りける。斯くて有り過ぐしもて行く。世の中いと騒がしかるべしと云ひ喧騒る程に、帥の中納言三月に下り給ふべき準備をし給ひつつも、さすがに物のみ心細く覚え給ひて、いみじう侘しう思ひ亂れ給へど、さりとて又障せんも、物狂はしう、人換ねのやうな

たり。頼光もいみじう口惜しう心憂き事に思へり。若き人に老い給へりと知りながら合せ奉りて、心から我が女を傷損ひつる歎きを爲けり。彼の侍從中納言、大貳辭し給へれば、源中納言經房の君成り給ひぬ。故源帥の流され給ひし時、童にて御供におはしたりける君なり。十一月廿九日にぞ成り給ひぬる。同じ日、侍從中納言は大納言に成り給ひぬ。左兵衛督の代りの別當には故法性寺の大臣の御子の公信の宰相成り給ひにけり。斯く云ふ程に年暮れぬ。年號換りて治安元年とぞ云ふ。元三日の程、公私事繁く、今めかしうて過ぎもて行く。七日の敍位に、上達部數數御位増さりなどしつつ、樣樣めでたし。二月には、尚侍の殿、東宮へ參らせ給ふべければ、其御準備を爲ののしる。女房などいみじう撰り調へさせ給ふ。大人、童女など、前前の御參りに異ならず、いみじう例の玉を磨かせ給へり。さて二月十餘日に參らせ給ふ。此度は大殿萬づにいみじう覺束なく、心もとなく思召されつつ、關白殿の御女とてこそは中宮も后には居させ給ひしかば、此度も同じ事せさせ給ふなりけり。さて參らせ給ひて、登花殿に住ませ給ふ。東宮は梅壺におはしませば、殊更に近き殿をと思召すなりけり。斯くて參らせ給へれば、心慌ただしきまで、疾く疾くと慫慂かしのたまはする程も、殿の上、あさましう物恥もせさせ給はぬよと、をかしう思召すに、やや夜更けて上らせ給へるに、いつしかと甲斐甲斐しう、むげに世慣れたる男の有樣におはしますも、あさましう上の御前は見奉らせ給ふ。御衾は例の上の御前參らせ給ふ。さて鷄など度度鳴けば、御迎の人人參りたれど、頓に許し聞えさせ給はぬ程ぞ優しきや。然樣にて日頃過ぐさせ給ひ、御乳母達に贈り物などせさせ給へり。此御參りいみ

じう思し惑ひたり。一條院の御事などは、いみじながらも疎疎しうて、久しう成らせ給ひにし中に、御子などもおはせざりしかばこそ有れ、是れは世に類ひ無う思さるるにも、道理と見えたり。大臣は騒がしき世の中に此處の騒らひめる事と、むづかり給ふを、女御心憂くあさましと思すべし。後後の御事などせさせ給ふに、此君達も皆御前に候ひ給へば、わりなく思し亂れたり。御法事などせさせ給ふに、殿おはしまして、此度をば、院の宮達おはしますに、因因しく有べい事にもあらずと、言葉にも亂れさせ給はねば、女御の御乳母子の普賢僧都の家にてぞ爲させ給ひける。殿あさましう老い耄け給ひて、此女御の御達の事、あやにくに思しのたまふは、堀河の院の御事をぞ今に論ぜさせ給ひける。是れは燒けたりしかば、故一條院の御時して造らせ給へりし院なれば、女御は我れ領すべしと思したれど、大臣の、家をば故女御などに奉り給ひてければ院にぞ候ふなる。此女御の御方には大宮ぞ候はせおはしまして、此女御の得給はんことは道理ならめ、などのたまはすれば、大臣、此事をえ達しうと思し定めぬなるべし。斯くて侍從中納言下り給ふべき日々、取返し取返し給ふに、今年も暮れぬれば、帥殿を越え奉るやうなりとて、かたはらいたう思して、轉轉たるやうなれど辭してんと思し成りぬ。其れも此宰君のいといみじう常に憎み給へば、斯く思すなるべし。斯かる程に、帥の殿いみじう惱み給ひて、限り限りと聞えつつ程經ぬれば、如何に如何にと聞き奉る程に、十月十三日法師に成り給ひぬと聞ゆれば、殿なども、哀れに思しながら、遂へなん、目安き事なめりと聽かせ給ふ程に、さて二三日ありて亡せ給ひにけり。哀れなる世の中なり。北の方いみじう思し歎き

あやにめでたく忝なくて、車より下りなど爲給ふ程、如何でか疎かには有らん。兵衞督の御位も短く、命もえ進へ給ふまじく、云ふ方無き御有様なるに、唯だ此北の方參りて、哀れに忝なきさまに、泣く泣く聞ゆる程ぞ此世の御有様めでたかりける。然て、いと弱げにおはすれば、煩はしうて、泣く泣く出で給ひぬと云へば忝なしや。小野の宮には、姫君一所おはしける程に、大將殿添ひ居させ給ひて、心もとなく後ろめたう思されけるに、此北の方歸り參り給ひぬれば、いと嬉しく思して、車より下り給ふを、我れ抱だきて下ろさせ給ふ程の有様、世の中の古へより、今までの世の幸ひ人に、是れはこよなう勝れたりと見えたり。姫君などの御有様殊にめでたく美くしきや。されど戯れに御子もおはせぬ殿なれば、是れをいみじきものに思ひ聞え給ふ程に、母北の方の世にめでたき事云はん方無し。式部卿の宮の女御の御折に此殿に仕うまつりけるを、女御も亡せ給ひければ、此殿に仕うまつり附きて在りける程に、自ら此姫君の生れ給ひにければ、今は北の方にて在るなりけり。此大將殿、同じき殿ばらと聞ゆれど、世に心にくく、やんごとなきものに思ひ「はれノ誤寫カ」給ひけり。今日明日の大臣がねにておはするが、小野の宮をえも云はずめでたく造りたてさせ給ひて、寢殿の東面に此姫君をかしづきたてて住ませ奉り給ふ。其御前に、我も人もと着飾れて見え奉り給ふ。いみじき后がねとかしづき聞え給ふ程、他事無く唯だ母北の方の幸ひ世にめでたく「しノ誤寫カ」と見えたり。斯くて、兵衞督の御心地を如何に如何にと、使を殿頻りに奉り給ふぞ道理なる。男どもを召し集めつつ、封立てさせ給ふ程ぞ猶いと珍らかなりける。兵衞督又の日亡せ給ひにけり。女御いといみ

大貳も、同じくは此御堂の供養の前にと思し急ぎければ、此頃上り給ひて、いみじき唐の綾錦を多く入道殿に奉り給ひて、御堂の飾にせさせ給ふ、めでたき御堂の會と喧しけれども、世の人只今は、此宰相に何事も讓えられ樣なり。此宰相は大貳の御供に筑紫より來たるとこそは云ふめれ。あさましく樣樣にいみじう煩ひて、やがて亡くなる類ひも多かり。いみじう哀れなる事多かり。斯かる程に、故式部卿の宮の御定の左兵衞督、此四月二十餘日に、檢非違使の別當兼け給ひつ。されど此月頃心地例にもあらずおはしけるを、如何なるにかと思し煩ひて、此喜びも未だ申し給はざりけり。院の女御も亡せ給ひにし後、殿のいとほしう心細げにおはしければ、此春、堀河殿に渡り給へれば、大臣も少し氣色好くなりて目安かりつるに、斯く惱み給へば、如何に如何にと思したり。憂たてゆゆしき頃なれば、外へもやなど思せど、猶斯くて過ぐし給ふ程に、又瘡病さへ發して惱み給へば、四方八方の藥師を集めて、夜晝つくろはせ給へど、むげにあさましう頼み少なき御有樣なれば、別當辭し給ひつ。關白殿の上の御伯父におはすれば、萬づに訪らひ聞え給ひ、度度參り給ふ物など多かり。いみじき事どもせさせ給へど、いと暑き程にさへ成りぬれば、哀れに心細く思さる。六月九日、法師に成り給ひぬ。女御の御腹の御若達の御有樣を、哀れに如何に如何にと思したから、我も不覺に成り給ひにたれば、爲べきやう無し。其御氣色も世にわりなく堪へ難く思されて、女御も尼に成り給ひぬ。殿、物も覺え給はねば、何事もせさせ聞え給へる、思しのままなるも、道理に見えさせ給ふ。哀れなる事多かり。御訪らひに小野の宮の今北の方參り給へり。殿の御心地をば然るものにて、殿の內の男女、目も

なる程の御心掟ての迂闊なるべし。後後の御法事など皆せさせ給ひて、萬づいと心のどかに、徒然暮さりて、哀れにて過ぐさせ給ふ。院は宮達見奉らせ給ふに、下の宮におはしますままにぞ寄らせ給ひける。あさましく廣く面白き所に、此殿と一二の宮のみぞおはします。さては、氏忠など云ふ人の劣らぬ程の婦もいみじう哀れなれば、院は此宮達をいと哀れに心苦しう見奉らせ給ひて、はかなき御菓子なども、夜夜中分かず奉らせ給ふ。斯くて九月ばかりに、大殿の上、一條殿の尼上をば淨菁寺と云ふ所にこそは納め奉らせ給ひしか。其れを此頃とかく僞奉らせ給ひて後は、忌ませ給へば、おはしまさで、木幡の僧都の中河の家に渡らせ給ひておはします。其程にも哀れにをかしき事ども多かり。斯かる程に、大貳の隆家辭書度度奉り給へば、望む人數知らず多かるに、侍從の中納言、三位中將の御競ひの心もとなさに、望み給へば、二言無く成り給ひぬ。其後は筑紫より物など持て參りなどして、いと華やかにもてなし聞え給ふに、姫君の御心掟の、ともすれば例ならぬをぞ後心無く思さるる。はかなく年も復りぬ。世の中も今めかしきに、今年は疫癘と云ふもの起るべしとて、筑紫の方には、舊年より皆病みけりなど云ふ事聞ゆれば、初め病みけるより後、此二十餘年に成りにければ、初め病まぬ人のみ多かりける世なれば、公私いとわりなく、恐ろしき事に思ひ騒ぎたり。入道殿は御堂の西に寄りて阿彌陀堂建てさせ給ひて、九體の阿彌陀佛造らせ給ひて、此三月には供養せさせ給ふべしとて、いみじう準備ぎ喧騒りて、宮宮などもおはしますべければ、國、國、莊、山吹などと云ふ織物どもを、爲騒がせ給ふ。斯くて此疱瘡京に來にたれば、いみじう病む人人多かり。誰の

て、若き御子に七十餘にて後れて、奉らせ給ひける程ぞ、げに世の中の哀れは知られける。御忌の程も哀れに心細くて過ごさせ給ふ。院、萬づに哀れと思召す。殿は少し物思し鎮まる折は、此宮達を見奉り、愛くしみ奉らせ給ひては、斯ばかりの事を思ふに、我が命はこよなう延びぬらんかし、我が宮達の御後見を仕うまつべき事かは、とのたまはせ、情張らせ給ふも、哀れに見奉る。御忌果てなば此宮達を迎へ奉らんと思す。北の方も中宮の御方に然るべき所奉らせ給へれば、打渡り給ひにしかば、哀れに心細くて過ごさせ給ふ。やうやう御法事の程も近う成りもて行けば、院、何事も思し急がせ給ふ。殿の御封なども、斯かる折だにもと召させ給へど、只今の受領どもは、唯だ御堂の事を先にとする程に、少少の所の御事をば何とも思ひたらねど、斯く院のおはしませば、其れを萬づに頼み聞え給ひて、我は兒のやうに過ぐさせ給ふも、いみじう哀れなり。此宮達の斯く老い著けておはする大臣一所を頼はし、いみじきものに思ひ聞え給へる程ぞ、御祈世哀れに心憂きまで見えさせ給ふ。殿は、折折は法師に成らんと思へど、此宮宮の御有様見果てんの本意あり。今の帝、東宮、まだいと若うおはしませば、宮達を扶け給ふべきにもあらず。此院の宮達ぞ其の次の世には必ず立ち出で給はん。但し其御時の攝政關白は我れ祖父なり。其れを置きて、いみじからん今の攝政の大臣、内の大臣、若しは大織冠などや立出でて心附かん。其等はいと易し、など云ふ、あらまし事をのたまひ明し暮らさせ給へば、僧などは、己がどち忍びて打笑ふべし。其れは宮達の御事の證がましきには有らで、七十餘にて斯ばかり萬づを思し紛れて、阿彌陀佛なども申し給はで、いつと無く騒か

て、今幾ばくも有らざりける御有樣を、などてつらしと覺えられ奉りつらんと、年頃の本意無く哀れなるわざかなと思されて、やがて下の宮に渡らせ給ひて、斯う斯うの事なん侍る、哀れにいみじき事、此無き人人如何がし侍らんずらん、大臣は今は亡くなられぬらん、いと不覺なる樣にこそ聞き侍りつれなど、萬づに哀れにのたまひ續けて泣かせ給ふ。此殿は、おはせぬ人を、つと抱だきて、萬づに云ひ續けて泣かせ給ふも、いみじう悲し。斯かる思ひにや人は法師にも成るらん、とのたまはするを、御前なる人人、心の中に微笑まれけり。源宰相は、いと心苦しき殿の御樣を見捨て奉り給ふも、事の初のいと情無かりし御心の、思ひ忘れ給はぬなりけり。斯くて院渡らせ給ひて、陰陽師召して 然るべき事ども、皆定めのたまはせ、萬づに扱ひ聞えさせ給ふ程も、又いとめでたし。殿の哀れに思召したるも、此宮宮の御扱ひを任させ給ふ。後後の御事ども、皆世の常の樣に思し掟てさせ給へり。其日に成りて、早朝院おはしまして、夜さりの事ども準備がせ給ふ。院の殿上人 下人も、年頃とり分き睦まじう思召すは、殘り無く皆參るべく掟て仰せらる。我れ添ひて纔かに見奉らせ給はぬばかりなり。下の宮には餘り親しくなおはしましそ、など聞えさせ給ふも道理にて、事の掟ども、委しうせさせ給ひて、歸らせ給ひぬ。さて夜さり率て出で奉れば、宮達、母の御供に我れも往なん往なんと慕ひ泣かせ給ふに、許多の僧俗、泣き哀れがり聞えぬ無し。殿、杖に掛からせ給ひて御送ひ、人拉へ奉りつれど えおはしまし遣らねば、夏の夜もはかなく明けぬべければ、猶いと見苦しき御事なり、御車にて速やかにおはしまさん、と聞えて、道にて御車奉りぬ。さて夜もすがら、とかく扱ひ奉り

寛仁三年四月ばかりに、堀河の女御、明暮涙に沈みておはしませばにやおはしけん、御心地も浮き、たふべうも思されで、例ならぬ様にて在り過ぐさせ給ふ程に、いと悩ましう思されければ、御堂にやとて、出でさせ給ひて、迎上らせ給ふままに、御口、鼻より血溢えて、やがて消え入り給ひぬ。大臣御衾を差上げて泣き喚り給へど、何の甲斐あらん。七十余に成りぬる己れを召せ、若く盛りなる人の行末遠かなるをば、返し給へ返し給へ、と泣きののしらせ給へど、斯かる道は無理無きわざなりければ、え止め奉らせ給はずなりぬ。いとあさましうて果てさせ給ひぬれば、院聞し召して、舎渡らせ給へれど、今は斯くと聞し召して、御簾に御直衣の袖を押当てて立たせ給へるより、御涙のつくづくと漏り出でたる程、「本の雫や」と、哀れに疎かならず。今は上らせ給ひても甲斐無かるべければ、土に立たせ給ひて、宮宮抱き出で奉らせ給ひて、一の宮の御乳母の夫、左近大夫致行を召して、殿に物も覚えさせ給はざめり、此宮宮、彼の東の対に渡し奉れ、あなかしこ、有様近く見奉れなど、返す返す仰せられ泣き給ひて、今は云ふ甲斐無ければ、今また来ん、殿にもえ対面せず成りぬる事、とて出でさせ給ひぬれば、道雅君には、此御事斯くののしれば、はかなき物をだにえ取り敢へで、女御諸共に、外へ渡り給ひにけり。　一の宮のいみじう泣き給へるも哀れに思され

には聲絶えて、迦葉は鐘の聲に傳へ、憍梵婆提は四偈を唱へて、水と流れなどして、哀れなる末の世に、斯く佛を造り堂を建て、僧を問らひ、力を傾ぶけさせ給ふ。佛法の燈火を掲げ、人を喜ばしめ給ひて、世の親とおはします。我が御身一つにて、三代の帝の御後見をせさせ給ひて、六十餘國の殺生を六齋の日に止めさせ給ふ。善き事をば勸め、惡しき事を止めさせ給ふ。斯かる程に、衆生界盡き、衆生の劫盡きん世にや此御世も盡きさせ給はんと見ゆ。年頃爲集めさせ給へる事どもを聞えさする程に、涌出品の疑ぞ出で來ぬべき。其故は、殿の御出家の間未だ久しからで、爲させ給へる佛事は、數知らず多かるは、彼の品に、成佛を得てより已來、四十餘年に化度し給へる所の涌出の菩薩量り無し。父若うして子老いたり、世擧りて信ぜずと云ふ事の喩のやうなり。されど御代の初めより、爲集めさせ給へる事どもを記ろす程に、斯かる筆も有りぬべし。世の中に有る人、高きも卑しきも、事と心と相違ふものなり。植木靜かならんと思へども風止まず。子孝ぜんと思へども親待たず、一切世間に生ある者は皆死す。壽命無量なりと云へども、必ず盡くる期あり。盛なる者は必ず衰ふ。會ふ者は離別あり。果報として常なる事無し。或るは昨日榮えて今日衰へぬ。春の花、秋の紅葉と云へども、春の霞たなびき、秋の霧立ち籠めつれば、こぼれて匂ひ見えず。唯だ一わたりの風に散りぬる時は、庭の塵、水の泡とこそは成るめれ。唯だ此殿の御前の御榮華のみこそ、開け初めにしより後、千歳の春の霞、秋の霧にも立ち隱されず、風も動き無くして枝を鳴らさねば、香り勝り、世に有り難くめでたき事、優曇華の如く、水に生ひたる花の青き蓮の世に勝れて、匂ひ並び無きが如し。

たゞ天王寺に参らせ給ひては、太子の御有様哀れに思さる。妹子が大臣の持て奉りたる御経は、御前に有る様に置かせ給へり。我が取りにおはしましたりけるは、亡せ給ひける日、やがて先だたせ給ひにけり。常井の水に御手を清まして拝み奉らせ給ふ。高野に参らせ給ひて、大師の御入定の様を覗き見奉らせ給へば、御髪青やかにて、奉りたる御衣の聊か塵ばみ汚れず鮮かに見えたり。御色合などぞ珍らかなるや。唯だ眠り給へると見ゆ。哀れに、彌勒の出世、龍華三會の朝にこそは驚かせ給はめと見えさせ給ふ。大師、承和二年三月廿一日、仁明天皇の御時の程、百八十餘年ばかりにや成らせ給ひぬらん。斯く思し至らぬ隈無く、哀れにめでたき御有様の程、世の例に成りぬべし。六波羅蜜寺、雲林院の菩提講などの折ふし、迎講などにも思し掟かせ給ふ。大方此事のみかは、我が御殿の内にせさせ給ふ事ども、形容び奉すべき方無し。或時は法華經を造らせ給ひ、或時は七佛藥師を造らせ給ひ、或時は八相成道を描かせ給ひ、或時は九體の阿彌陀佛を造らせ給ふ。また十齋の佛を等身に造らせ給ひ、或時は百體の釋迦を造り、或時は千手觀音を造り、或時に一萬體の不動を造り、或時はまた金泥の一切經を書き、供養せさせ給ひ、或時は大般若を書き、供養せさせ給ふ。また八萬部の法華經を書かせ給ふ。是等も法界衆生の爲めと思召す。是れに添へて、懺法の讀み怠らせ給はず。御堂の御念誦も、終日に夜もすがら怠らせ給はず。年月を經て修せさせ給ふ事、佛の御許に有らずと云ふ事無し。世の中、像法の末に成りて、天竺は佛の現はれ給ひし界なれども、今は鷄足山の古き道には竹茂りて、人の跡も見えず。給孤獨の昔の庭には薄伽梵亡せて、人も住まず成り、鷲の峰には思ひ理はれ、鶴の林

哀れに思されて、萬づの事ども準備がせ給ふ。四月、比叡の舍利會は、慈覺大師の唐土よりもて渡し給ひて、貞觀二年より始め行ひ給へり。是れに附けても、彼の香姓婆羅門が留め置きけん程、いと哀れに思されて、例の殘る事無く爲させ給ふ。長谷寺の菩薩戒に參らせ給ひて、御帳より初めて、萬づの佛具めでたく爲させ給ひて、別當法師に喜びを爲させ給ふ。樣樣品品に附けて、被け物賜はせて、彼の「沙彌得道、釋尊威力、自然湛佛」の額も、哀れに思召す。六月會に山に登らせ給ひては、傳教大師の御忌日を勤め行はせ給ふ。七月、奈良の文殊會に參らせ給ふ。八月、山の念佛は慈覺大師の始め行ひ給へるなり。中の秋の風涼しう月明かなる程なり。八月十一日より十七日までの七箇日が程、公の政、私の御營みを除きて、籠りおはしまして、やがて御修法行はせ給ふ。九月には、東寺の灌頂に參らせ給ひて、道俗、加持の香水をもて、法身の御頂に濺がると思召す。十月、山階寺の維摩會に參らせ給ひては、萬づを爲させ給ふ。其れが中に、是れは固より藤氏の御初め、不比等の大臣の御建立の所なれば、代代の一の人の知り行はせ給ふ中にも、此殿いみじう思し至らぬ事無く爲させ給ふ。是れは此世の例と、爲置かせ給ふ事ども多かり。維摩居士の衆生の罪を思し惱みけん程も、いつと無く哀れに思さる。十一月、山の霜月會の内論義に遇はせ給ひては、小法師ばらの論義の劣り優りの程を定めさせ給ひて、優るには物を被けさせ給ひ、御衣を脫がせ給ふ。劣るには、「今また參りて爲んとす、善く學問をすべし」と云ひ勸めさせ給ふ程も、佛の御方便に爲させ給へり。十二月、公私の御佛名、御讀經の營み、疎かならず思召さる。此隙隙には、山の御社の八講行はせ給ふ。ま

く思し召らざりけんと見えたり。殿の御前、僧の御前にて、三昧の火を打たせ給ふ。「我が此大願の力に由りて、此山に骨を埋み、墓を點し給へらん人人、我が先祖より初め奉り、親しき疎き分かず、過ぎにし方より今行末に至るまで、菩提佛果を證し、且つは自らの二世の願願ひぬべくは、此火一度に出でて、今日より後消えずして、我が當の人人、是れを同じく勤め、三昧の燈火を消たず掲げ續くべくは、此火一度に疾く出づべし」とのたまはせて、打たせ給ひしに、此火一度に出でて、此井倍年未だ消えず。其日の御願文、式部大輔大江匡衡朝臣仕うまつれり。多く書き續けたれど、氣色ばかりを記るす。初めの有様も聞かまほしくぞ。願文の詞ども假名の心得ぬ事ども交りて有れば、是れにてえ寫し取らず。其折は、左大臣にてぞおはします。此寺の名をば淨妙寺とぞ附けられたる。事ども果てて、殿の御前を初め奉り、藤氏の殿ばら、皆復書寫せさせ給ふ。僧ども禄賜はりて退かり出でぬ。大方此事のみならず、年頃言葉めさせ給へる事、數知らず多かり。正月より十二月まで、其年の中の事どもに、一事外れさせ給ふ事無し。此折ふし、準備き儲りたる、點るべき僧綱、寺寺の別當、所司を初めとして、限無く喜びを成し祈り申す。正月の御齋會の講師仕うまつるとて、八省に有る講師を誘らひ合へり。山には四季の懺法に參らせ給ひて、佛供燈明までの事を盡させ給ふ。二月には山階寺の涅槃會に參らせ給ひて、萬づの事ども殘り無く知り行はせ給ふ。新く人の譏など、すべて一つ缺くる事無し。彼の鎌田明神の宣ひけん言も哀れに思さる。三月には志賀の舊都會に參らせ給ふ。是れは天智天皇の御寺なり。天平勝寳八年、兵部卿正四位下橘朝臣奈良麻呂が行ひ始めたるなり。いと

の御祈と成させ給ふ。或るは宮宮の御祈り、御讀經の事を申し附けさせ給へば、斯かる御世に逢ひたるを空しくすべからずと思ひて、劣らじ負けじと、其方を勤め行ふ。斯かる程に、法の燈火を掲げ、佛法の命を續がせ給ふに成りぬれば、嬉しく明かなる御世に遇ひて、冥きより冥きに入れる衆生ども、此御光に照されて喜びを成す。また木幡と云ふ所は、關白基經の大臣、後の御諱昭宣公なり。其大臣の點じ置かせ給へりし所なり。藤氏の御墓と思し掟てたりける所に、殿の御前、若くおはしましける時に、故殿の御供などにおはしまして、思しけるやう、我が先祖より初め、親しき疎き分かず 如何で皆是れを佛と成し奉らんと、思しける御志、年月經けるを、此折にこそと思召しけり。何れの人も、或るは先祖の建て給へる堂にてこそ、忌日にも、說教說法をもし給ふめれ。御骨の御身を斂められ給へる此山には、唯だ標ばかりの石の卒都婆一本ばかり建てたれば、また參り寄る人も無し。是れいと本意無き事なりと思して、我世に成らせ給ひて後、此山の頂を平げさせ給ひて、高き所をば削り、短き所をば土を置きなどして、やがて三昧堂を建てさせ給ふ。僧坊を左右に建てさせ給ひ、中に馬道を明けて、十二人の僧を住ませ給ふ。別當、所司を定めて、夏冬の衣服を賜ひ、やがて其邊の村、一つ里と成させ給ひて、水清く澄み、煙絶えずして、事の便りを聞はせて、育み顧みさせ給ふ程に、萬づの人競ひ住み住す。御堂の供養、寛弘二年十月十九日より、法華經百部、其中に、我が御手づから書きて、一部讀ませさせ給へり。七僧百僧など請させ給ひて、法服美はしくして賦らせ給ふ。其日藤氏の殿ばら且つは隨喜の爲め、隨聞の故に殘り無く集ひ給へり。前前の人など、斯

に、劣り優りの程を聞し召し知り、此聴く人人、僧達の才の程を定め、此方知り給へる殿ばらは、さし出でてのたまひなどして、打笑ひ給へる程、めでたうも恥かしげにも見ゆ。「月の夜、花の朝には、物の音を吹き合せ調べ、此殿ばら、僧達、經の中の心を歌に詠み、文に作らせ給ふ。或るは百千萬劫の菩提の種、八十三年の功徳の林、又願はくは今生世俗文字の業、狂言綺語の誤りをもて翻して、當來世世の讃佛乘の因、轉法輪の縁とせん」など、誦し給ふも貴く面白し。況いて御戒受け、あまた度に成りぬれば、御衣の袖に一乘の玉を掛けて、御氣色ども明かに成り増さる。皆經の心を讀み給ふ。四條大納言の御歌、中にも世に傳はり、興を留めたり。壽量品の常在靈鷲山を、

出で入ると人は見れども世と共に鷲の峰なる月はのどけし

また普門品を、

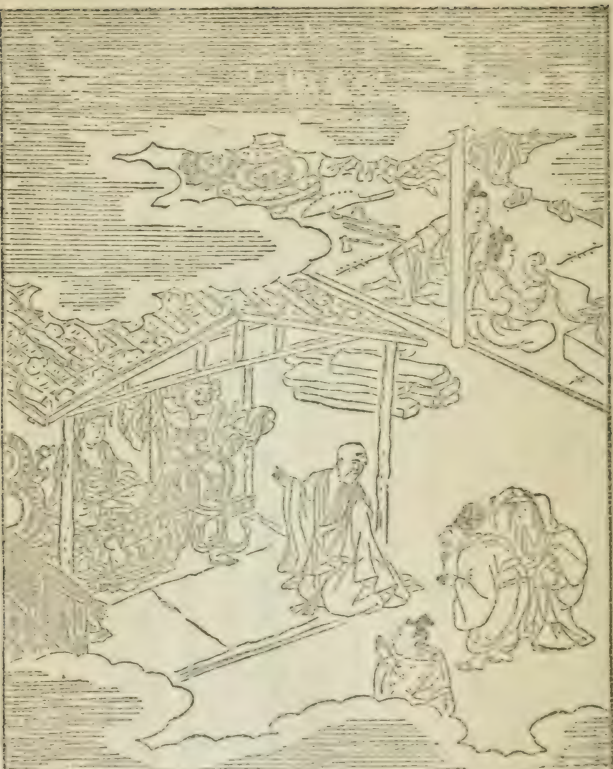
世を救ふ中には誰れか入らざらん遍ねき門を人し鎖さねば

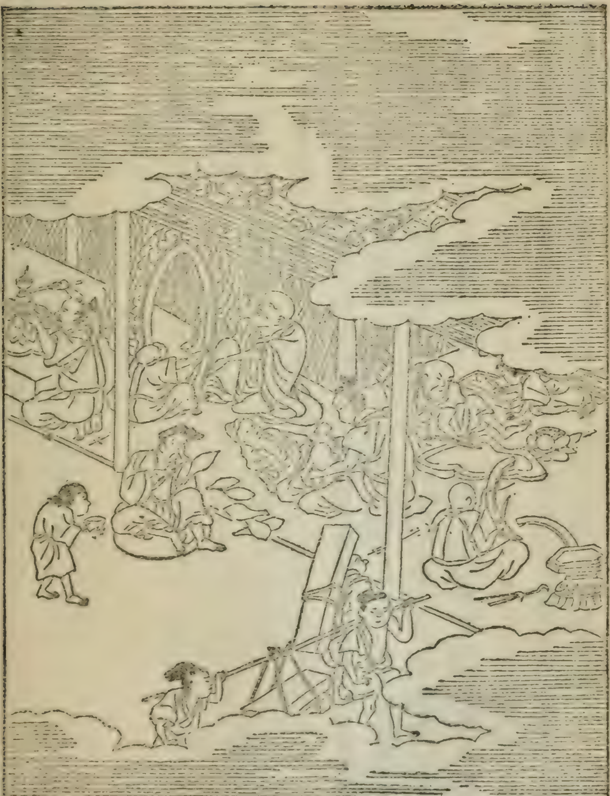
是れを集りて誦し給ふも、げにと聞えたり。さても同じ心一筋なれば書かず。或るは供養法の御時經とて、眞言の心ばへ有りと聞し召すをば、世に出でたるをも、山に籠り、寺に籠り居たるをも、尋ね召し出づれば、此方を立つる人人は、いとど戒律を守りて、鉢の油を傾けず、眞言を磨きて瓶の水を寫し、萬づに習立てて召し入れられては、眞言の趣、深さ淺さの程を分き聞し召しては、彼の僧達どもに、定めのたまはせて、其方に眞に深うして、顯密ともに明かなるをば、彼れ進まねど、阿闍梨の解文を放たせ給ひ、公私

ども多かり。我が御堂も斯樣にせんと思召す。斯くて、還らせ給ふとて、寺の僧どもに、品品被けて、喜び賜はす。只今は、法皇の御幸にも斯くこそあらめ、如何でか是れよりの外の事はと見ゆ。山階寺の僧ども、堂童子まで、被け物など賜はす。山には來年ぞ御受戒あるべく思ほしめす。大方思し掟てたる御有樣、形容び盡すべからず。我世の初めより法華經の不斷經を讀ませ給ひつつ、內、春宮、宮宮に、皆此事を同じく勸め行はせ給ふ。次ぎ次ぎの殿ばら、攝政殿を初め奉りて、皆行はせ給ふに、其親類はにめでたし。是れを見給ひて、此御一類の外の殿ばら、皆或るは不斷經、或るは朝夕に勸めさせ給ふ。時の受領どもも、皆此樣れを爲つつ、國の中にても、不斷經讀ませぬは無し。斯かる程に、此法を弘めさせ給ふに成りぬれば、御功德の程思ひ遣るに限無し。此經を斯く讀ませ給ふのみに有らず、御世の初めよりして、年每の五月には、やがて朔日より晦日まで、無量義經より初めて普賢經に至るまで、法華經廿八品を一日に一品を當てさせ給ひて、論義を爲させ給ふ。南北二京の僧綱、凡僧、學生、數を盡したり。やんごとなく大人なるは、僧正、或るは聽衆二十人、講師三十人召し集めて、侍はせ給ふ。論議の程など、いとはしたなげなり。許多の上達部、殿上人、僧どもの聽くに、山にも奈良にも、學問に形取れるをば、老いたる若き云はず召し集むれば、只今は是れを公私の交らひの初めと思ひ、召さるるをば面目にし、然らぬをば口惜しき事に思ひて、或るは學問をし、或るは燈火を挑げて經論を習ひ、或るは月の光に出でて法華經を讀み、或るは暗きには空に浮べ誦んじなどして、終日に、夜もすがらに營み習ひて、參り合ひたるに、經を誦んじ論義をする

りけんも、斯くや有りけんと見ゆるを、冬の霙、夏の「霰ノ字疑カ」合異なり。斯かる御勢に添へて、入道せさせ給ひて後に、いとど増さらせ給へりと見えさせ給ふにも、凡夫ならざりける御有様かなと、近う見奉る人は頼み、遠う見奉る人は遙かに拝み参らす。今は此御堂の池の木草とも成らんと思へる人のみ多かり。其方ざまに傾けば、池の浪もやはらかに立ちて、此御堂の物を持て遊ばせ、河も水澄みて、快く浮べ持て參ると見ゆ。總なべて此世の事とは見えさせ給はず。先づは、先年に、長谷寺に在る僧の御祈りをいみじうして寝たりける夢に、大に厳めしき男の出で來て、何か斯く殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の佛法興隆の爲めに生れ給へるなりとぞ見えさせ給ひける。また天王寺の聖徳太子の御日記には、王城より東に佛法弘めん人を我と知れとこそは、書き置かせ給ふなれ。何れにても疎かならぬ御事なり。御出家の年の十月、奈良にて御受戒あり。おはします程、萬づを削がせ給はんと思せど、上達部、殿ばらに、然るべき限り殘り無し。或るは御車、位淺き上達部、君達は皆馬にて仕うまつり給ふ。或るは直衣、或るは狩衣にておはす。殿上の君達、樣樣の裝ども、指貫、心の限り盡したり。然るべき僧綱、凡僧撰り立てて仕うまつれり。をかしげなる人の子どもなど、御供に侍ふ。世の人、見物にして、車、棧敷など隙無く立てたり。京出でさせ給ふより、内、東宮、宮宮の御使つづき立ちたり。山階寺の御設け、國の守などの仕うまつりたる程など、推し量るべし。御受戒、東大寺にてせさせ給ふ。奈良の都は、そのかみだに斯かる事は有らめやと見えたり。心のどかに三日おはしまして、御堂、堂、御倉など開かせて御覽ずるに、目も及ばせ給はぬ事

らせ給ひて、廊、渡殿数多く造らせ給ふ。鷄の鳴くも久しく思され、寝殿の御行ひも怠らず、安き寐も大殿籠らず、唯だ此御堂の事のみ深く御心に知らせ給へり。日日に多くの宮達、大臣、上達部、然るべき人人、参り詣で立ち混む。然るべき殿ばらを初め奉りて、宮宮の御封、御庄どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るも、人の数多かる事をば、賢き事に思し立ち、國國の守ども、地子官物は遅なはれども、只今は此御堂の夫役、材木、檜皮、瓦など、多く参らするわざを、我も我もと競ひ仕うまつる。大方、近きも遠きも参り混みて、品品方方、邊邊に仕うまつる。或所を見れば御佛仕うまつるとて、佛師ども百人ばかり並み居て仕うまつる。同じくは是れこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、匠ども二三百人昇り居て、大きなる木どもには太き綱を附けて、聲を合せて、「えささきさ」と引き上げ騒ぐ。御堂の内を見れば、佛の御座造り輝やかす。板敷を見れば、木賊、椋の葉、桃の核などして、四五十人、手毎に並み居て磨き拭ふ。檜皮葺、壁塗、瓦作なども、数を盡したり。また年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を、心に任せて、切り調ふるも有り。池を掘るとて四五百人下り立ち、山を疊むとて五六百人昇り立ち、また大路の方を見れば、力車に、えも云はぬ大木どもに綱を附けて、叫び喧騒り、引き持て上る有り。賀茂河の方を見れば、筏と云ふものに榑、材木を入れて、棹さして、心地よげに歌ひののしりて持て上るめり。大津、梅津の心地するも、「西は東」と云ふ事は是れなりけりと見ゆ。磐石と云ふばかりの石を、はかなき筏に載せて、率て来れど沈まず。すべていろいろ様様云ひ盡し、形容び遣るべき方無し。彼の須達長者の祇園精舎造





殿の御歌を聞きて、和泉式部が、大宮に參らせたる、

脱ぎ更へんことぞ悲しき春の色を君が裁ちけるころもと思へば

大宮の宣旨、返し、

たちかはる憂き世の中は夏ごろも袖に涙も留まらざりけり

同じ頃、殿の泉を觀て、詠み人知らず、

水の面に浮べる影は斯くながら千代まで住まんものにやは有らぬ

御前の瀧の音を聞きて、右馬の中將、

袖のみぞかわく世も無き水の音の心細さに我れも泣かれて

斯くて世を背かせ給へれど、御準備は「浦吹く風」にや、今は御心地例ざまに成り果てさせ給ひぬれば、御堂の事を思し急がせ給ふ。攝政殿、國國まで然るべき公事をば然るものにて、先づ此御堂の事を先きに仕うまつるべき仰せ事のたまふ。殿の御前も、此度生きたるは他事ならず、我が願の協ふべきなめり、とのたまはせて、他事無く、唯だ御堂におはします。方四町を籠めて、大垣にして瓦葺きたり。樣樣に思し掟て急がせ給へば、夜の明くるも心もと無く、日の暮るるも口惜しう思されて、夜もすがらに、山を穿むべきやう、池を掘るべきさま、木を植ゑ並めさせ、然るべき御堂御堂、方方樣樣造り續け、御佛は、尋常のさまにやはおはします。丈六の金色の佛を、數も知らず造り並め、其方をば、北南と馬道を明けて、道を調へ造

り。此御惱みは寛仁三年三月十七日より惱ませ給ひて、同廿一日に出家せさせ給ひつれば、日長く思さるるままに、然るべき僧達、殿ばらなどと、御物語せさせ給ひて、御心地こよなうおはします。今は唯だ、いつしか此東に御堂建てて、靜かに住むわざせん、となん造るべき、斯くなん建つべきなど云ふ、御心巧み、いみじ。斯くて日頃に成るままに、御心地爽やぎて、少し心のどかに成らせ給ひて、昨日今日ぞ宮宮御方方へ渡らせ給ふ。殿の御前、今は怠りにて侍り、大宮、中宮、疾く內に入らせ給へ、寂寂しくおはしますらんと、慫慂し聞えさせ給へど、大宮には猶暫しと、心のどかに思されたり。中宮ぞ疾く入らせ給ふ。殿は御堂をいつしかとのみ思召す。此世の事は、今は唯だ、此御堂の事をのみ思召さるれば、攝政殿も、いみじう御心に入れて掟て申させ給ふ。皇太后宮は一條殿にぞ還らせ給ふ。斯くたゞ見奉らせ給ひて、各歸らせ給ふ御心地どもぞ聞えさせん方無う嬉しう思召す。此度の御惱み斯く怠らせ給はんものと、誰も思し掛けざりつる事ぞかし。世にめでたき事の例に思ひ申すべし。斯くて三月晦日に、例の宮宮の御衣更への物ども奉らせ給ふ事、今しも怠らせ給ふべき事ならずと、皆分ち奉らせ給ふとて、大宮に、唐の御衣の袴に添へさせ給へり。

　唐衣花の袂に脫ぎ更へよ我こそ春の色は斷ちつれ

大宮御覽じて、いみじう泣かせ給ひて、御返し、

　唐衣立ちかはりぬる世の中に如何でか花の色も見るべき

ん。唯だ彼かの事は、御侍を東宮に譲り、故太政大臣の一品の宮の御有様と、此二事をせずなりぬる事ぞあれど、大宮おはしまし、攝政の大臣在すれば、然りとも仕奉る事有りなんと、思ひ續けさせ給ふに、宮々、殿ばら、せき止め難う思され、僧俗も涙止め難し。上は更にも云はず、聞えさせん方無し。斯くて、今はとて、院源僧都召して、御髪下ろさせ給ふに、上も年頃の御本意なれば、やがてと思しのたまはすれど、御侍の殿の御事の後にと申させ給へば、いと口惜しと思し惑ふもいみじ。僧都の、御髪下ろし給ふとて、「年頃の間、世の固めにて、一切衆生の父として、萬づを子の如くはぐくみ、正法をもて國を治め、非道の政無くて過ぐさせ給ふに、限無き位を去り、めでたき御身を捨てて、出家入道せさせ給ふを、三世の諸佛達喜び給はんに、現世は御壽命延び、後世は極樂上品上生に上らせ給ふべきなり。三歸五戒を受くる人すら、三十六部の善神、恒河沙眷屬ども護るものなり。況んや、眞の出家をや」など哀れに尊き事限無し。宮宮、殿ばら惜み悲しび聞え給ふ事、道理にいみじう悲し。内、東宮より御使隙無し。斯くて後は、然りともと頼もしき方法はせ給ひぬ。御物の怪ども、口惜しがり、惜い妬む事限無し。其れをぞいと頼もしく聞し召す。さて日頃にも成らせ給ふままに、御物の怪の聲ども、やうやう薄らぎもて行きて、御心地こよなく宜しく成らせ給ひて、御菓子など聞し召す。如何でか佛の御顏見えぬやうはと、いよいよ頼もしく思さる。萬づよりも斯う成らせ給ふとて、年頃の御隨身どもを召し出でて、御前にて、聞し召させ給ひしに、御隨身ども涙を流して、庭に伏し轉び泣きしこそ、いみじう悲しかりしか。御祈りの僧達、いよいよ心を盡し、驗ありと思へ

とのたまはすれど、其れはつゆ此殿ばら聞し召し入れず。如何で疾く本意遂げなん、とのたまはするを、大宮聞し召して、猶今暫し、春宮の御代を待たせ給ふべく聞えさせ給ふを、心憂く、相思さぬなりけりと、恨み申させ給へば、如何に如何にとのみ思し歎かせ給ふ。御物の怪ども、いとおどろおどろしう、ゆゆしく云ふも例の事なれど、猶如何がと、公私の只今の大事、是れより外に何事かはと見えたり。仁和寺の僧正なども皆おはす。殿の御前、更に命惜しうも侍らず、前前世を知り政ち給へる人人多かる中に、己ればかり然るべき事ども侍る例は無くなん有る。内、東宮おはします。三所の后、院の女御おはす。只今内大臣にて攝政仕うまつる。次は大納言にて左大將兼けたり。また大納言或るは左衛門の督にて別當兼けたり。此男の位ぞまだいと淺けれど、三位の中將にて侍り。皆是れ次ぎ次ぎ朝廷の御後見仕うまつるべし。自ら太政大臣准三后の位にて侍り。此廿餘年の程、並ぶ人無く、身一つにして、數多の帝の御後見を仕うまつるに、殊なる難無くて過ぎ侍りぬ。己が先祖の貞信公、いみじうおはしたる人、我が太政大臣にて、太郎小野の宮の大臣左大臣、二郎九條右大臣、四郎五郎こそは大納言にてさし並び給ひにけれど、后立ち給はずなりにけり。近うは九條の大臣、我が御身は右大臣にて止み給ひにけれど、大臣の御腹の帝東宮、國母院、さし續きおはしまし、十一人の男子の中に、五人の太政大臣にて、三人攝政し給へり。今にいみじき御幸福なりかし。されど后三所、斯く立ち給へる例は、此國には未だ無き事なりなど、世にめでたき御有樣を云ひ續けさせ給ふ。今年五十四なり、死ぬとも更に恥あるまじ。今行末も斯ばかりの事は有り難くや有ら

き御祈り、限り無き御懺悔の驗に、斯くておはしませば、此度も據らせ給ひなんと申す人人も有り。其度の御惱みには、いみじき驗者どもの有りしかばこそ、いと頼もしかりしか。長谷の觀修僧正、觀音院の僧正などは、尋常ならざりし人人なり。觀修僧正はやがて殿の内に侍ひ給ひしに、僧都と聞え候ふを、此御惱み據らせ給へりとてこそは、一條院、僧正には成させ給へりしか。陰陽師どもは晴明、光榮など、いと神さびたりし者どもにて、いと驗殊なりし人人なり。所更へさせ給ひて宜しかるべき由申しければ、故關白殿の内侍の督の御家、土御門に渡らせ給ひ、據らせ給ひにしかば、其例を引きて、外に渡らせ給へなど、然るべき殿ばら申させ給へど、すべて更に行かんとも思ひ侍らばこそ有らめとて、聞し召し入れず、唯だ佛を頼み奉らせ給へり。年頃の本意、唯だ出家せさせ給ひて、此京極殿の東に御堂建てて、其處におはしまさんとのみ思されつるを、此度據らせ給へらば、限無き御有樣にてこそは過ぐさせ給はめ。されど如何がとのみ、親しき、疎き、ややましげに思ひ申したるも道理に見えさせ給ふ。宮宮など皆おはしまし集らせ給ひて、さし並び、萬づに扱ひ奉らせ給ふ。此世の御有樣、尋常ならずめでたくおはします。攝政殿にも、御修法三壇行はせ給ふ。さまざまの御讀經數を盡させ給へり。内、春宮より、大宮、皇太后宮、中宮、小一條院、また攝政殿、左大將など、皆御修法せさせ給ふ程の御有樣、思ひ遣るべし。殿の中は更にも云はず、其邊の人の家家大きなる小さき分かず、許多の僧ども入り居たり。斯からんには如何でかと見えさせ給ふ。御類、殿原など、云はん方無し。殿の御前、今は祈りはせで、唯だ滅罪生善の法どもを行はせ、念佛の聲を絶えず聞かばや、

疑

殿の御前、世を知り初めさせ給ひて後、帝は三代に成らせ給ふ。我が御世は廿三四年ばかりに成らせ給ふに、帝若うおはします程は攝政と申し、大人びさせ給ふ折は關白と申しておはしますに、此頃は攝政をも、御一男、只今の内大臣殿に讓り奉らせ給ひて、我が御身は太政大臣にておはしますをも、常に朝廷に還し奉らせ給ひ、辭せさせ給へど、朝廷更に聞し召し入れぬに、度度わりなくて過ぐさせ給ふ。御心には荒涼じう思さるる事限り無し。斯かる程に、御心地例ならず思さるれば、人人も夢騒がしく聞ゆるに、我が御心地にも宜しからず思召さるれば、此度こそは限なめれと物心細く思さる。殿ばら宮宮などにも、いと恐ろしう思し歎くに、おどろおどろしき御心地の樣なり。斯かれば、萬づにいみじき御祈りども樣樣なり。されど只今は驗も見えず、いと苦しうせさせ給ふ。さまざまの御物の怪、數知らずののしる中に、げに然もやと聞ゆるも有り。また事の外に有るまじき事どもも、物覺えぬ名告りをし、怪しき事どもをぞ申すめる。さても心のどかに世を保たせ給ひ、並び無き御有樣にて數多の年を過ぐさせ給へれば、世の人も、いと恐ろしき事に申し思ひたり。我が御心地にも有るべきやうにも思召されず、心細く思さる。我が御世の初め、六七年ばかり有りてぞ、すべていみじかりし御惱み有りて、斯う今までおはしますべくも見えさせ給はざりしかども、いみじ

罪もいみじき事に思し入りたるのみぞ此世は然るものにて、後の世の御有様も、いと心苦しう、我に由り身を徒らに成させ給へる事と、いみじういとほしう思さる。宮達成人げもておはしますまゝに、院の近うおはしまさぬを、いみじう思し屈したる御気色どもも、悲しう思し見奉らせ給ふ。斯くて三條院の四の宮は、まだ童にておはしませば、院の御子に為奉らせ給ひて、御元服など思召し掟てさせ給ふ程に、中務の宮の御為めに、院の御なさけ無う見えさせ給ふ事ありて、いみじう恨み聞えさせ給ひければ、是れを御覧じて、四の宮いみじう恨み奉りたる院の御心掟て、斯ばかりにこそおはしますめれど、心憂く思されて、忍びて仁和寺におはしましにけり。僧正の御許におはしまして、年頃出家の本意深う侍るを、成させ給へ、と聞えさせ給へれば、僧正、ともかくも聞えさすべきにも有らず、成し奉るばかり、院、宮などや便無う思召さんと聞えさせ給へば、其れは苦しう思さるべき事ならず、唯だ如何で、疾う成りたばやとなん思ひ侍る、とのたまはすれば、若き御心に斯うのたまはする事と、いみじう泣き給ひて、我が御衣どものまだ著給はざりけるを取り出でて奉り給ひて、成し奉らせ給ひてけり。此事ども聞えて、宮宮、然るべき殿ばら、皆参り籠みて見奉り給ふ。院もおはしまして、いみじう泣かせ給ふ。皇后宮には、さても如何に思し取らせ給ひて斯く、と悲しういみじう思して、泣く泣く御装束して奉らせ給ふ。いみじう哀れなる御事どもなり。皇太后宮よりも御装束して奉らせ給ふ。僧正、いみじきものに思ひ聞えさせ給へり。猶此寺に然るべきやんごとなき人の絶えさせ給ふまじきと、嬉しう思されけり。美くしかりし御髪を削がせ給ひてしこそ口惜しかりしかとぞ。

ねば、唯だ法興院にてぞ侍させ給ひける。何事も大宮、心もとなからず、推し量り訪らひ聞えさせ給へり。粟田殿の北の方尼に成らせ給ひて、今は中宮の姫君に、然るべき所奉らせ給へれば、其處に渡り給ひて、姫君の御扱ひをのみぞ爲給ひける。堀河の大臣は獨り住みにて、世の中の哀れに心細き事を思すべし。女御も渡り給ひて住ませ給へば、源宰相の出で入りし給ふこそ、頼もしき御有樣なめれども、固より御中宜しからざりしかば、御對面だにも容易からず、覺束なげにのみなん。此堀河の院をば、初めは此女御に奉り給へりけれど、宰相の事の後は、院の女御に奉り給へれど、一條院に知ろし召して造らせ給ひし所なれば、院の女御はえ侍り給はじと、大宮など心寄せ聞え給ふやうにぞ聞き侍りしかば、世の人、大宮の御心寄せなきぞ煩はしげに申すめりし。源宰相をも、いと事の外に思ひ聞えさせ給ふべき人かは。故式部卿の宮のいみじきものに思したりし中にも、只今の關白殿の尼上は御妹におはしませば、いと覺え有りてこそはおはすめれ。斜めにても有りぬべかりし御事どもの、餘り鮮明なりし程に、斯く此御中も有るなめり。院の御有樣の、事の外に成らせ給へるを、尋常なるよりは嬉しう思召さるべかめるも、人の御兄弟こそ心憂きものは有れとぞ、世人聞ゆめりし。南院には、御法事など過ぎにしかば、いと哀れに心細く思し殘す事無し。尼上の斯く徒然に物せさせ給へば、此式部卿の宮の大上も通ひておはします。堀河の女御殿は、唯だ「いつまで草の」とのみ、哀れに物を思して明し暮させ給ふ。院も疎かならず思し暮させ給ふ事も、暫しこそ有れ、男の御心は、やうやう月日頃隔たり行くままに、疎くこそ成り增さらせ給へ、今は如何がとのみ見えさせ給ふを、左大臣

掟はせ給ふになん。一品の宮も明暮の御對面こそ無かりつれど、萬づに頼もしき物に思ひ聞えさせ給へるに、心憂くあさましき事を思ほし惑はせ給ひて、我が御身をも有りと頼ませ給ふべうも有らず、御涙のみ隙無く思し歎かせ給ふ。南院の上、いみじう思し惑はせ給ふ。此宮もとより關白殿の御子に侍らせ給ひて、日頃も彼の殿におはしましつれば、よくぞ還り奉らざりけるとぞ思しのたまはせけるに、内にも若き御心なれど、いと哀れに聞き奉らせ給ふ。大宮はた、いみじう哀れに思し歎かせ給ふ。儀式の物ども、いと多く奉らせ給へり。斯うおはしますに附けても、大宮は此度の春宮の御事あらましかばと、返す返す心苦しう思ひ聞えさせ給ひて、歎かせ給ふも他事ならず。故院の御事を疎かならず思召し聞えさせ給ふに由り、此宮の御事をも斯く思召さるるなるべし。故院の私物に思ひ聞えさせ給へりしものを、哀れと思ひ出で聞えさせ給ふに附けても、いみじう哀れに思召されて、御涙止め難う歎かせ給ふも、猶有り難き御心の程の哀さをのみぞ。世のはかなさに附けても、殿は猶如何で本意を遂げなんと、尙侍の殿春宮に參らせ奉る事をせばやとのみ、世を危ふく思召す。宮の上は、やがて此御忌の程に尼に成りなんと思しのたまへば、關白殿の上も、只今然らでも有りなんと、制し申させ給ふ。尼上も有るまじき事に思したれば、口惜しう思さる。一品の宮如何に物心細く思さるらんとて、内よりも大宮よりも、常に御消息聞えさせ給ひつつ、今は内におはしまさせんとぞ思し宣はせける。はかなく年も暮れぬれど、宮の御事を上は盡きもせず思したり。二月御正日頃にぞ御法事あるべかりける。法興院に故關白殿の、別に建てさせ給へりし御堂も擴げにし後は、まだ造らせ給は

も白銀を盡させ給ふ御捧げ物、宮宮、殿ばら、いといみじう豫てよりせさせ給ふ。斯くて始めさせ給ひて、帶の斯かる御事どもの中にも、いみじう世の中響かせ給ふ。永昭いみじうめでたう仕うまつれり。御綱は御手づから書かせ給へればにや、いみじう珍らかなる事ども云ひ續けたり。此殿ばらいといみじう聞し召しはやし給ふ。「瑠璃の經卷は靈鷲山の曉の空よりも靑し、黄金の文字は上茅城の春の林よりも黄なり」など、いみじう篩ゐて行けば、殿の御前、御劍を御手づから賜はする程、覺え、有樣、云はん方無くめでたし。永昭の諍ひのいみじき事、是れにつけても人人のたまひ合ひける。五卷の日は御遊び有るべく、樂の樂など萬づ其御用意かねてより有るに、明日とての夕方、聞し召せば、式部卿の宮亡せ給ひぬと聞ゆ。あなあさまし、こは如何なる事ぞ、日頃惱ませ給ふなど云ふ事も無かりつるをとて、殿の御前先づ走り參らせ給へれど、なげに限りに成り果てさせ給ひぬと有れば、あさましういみじうて歸らせ給ひぬ。明日の御遊び止まりぬ。口惜しながら、日頃ありて御八講も果てぬ。返す返す、如何なりつる日頃の御有樣にかと思しのたまはすれど甲斐無し。あさましう心憂かりける人の御宿世かなと、萬づを數へ續け、いみじう耻かしげにのみ世人申し思へり。師中納言さへ遙かにおはする折、心憂く、と思しのたまはす。誰れ何事も細かに仕うまつるらんと、哀れに思ひ聞えさする人人多かり。源中納言ぞ一品の宮の御事も仕うまつり給へば、外ながらも然るべきさまに掟て仕うまつり給ふ。また關白殿ぞ上の御方の縁に、萬づ扱ひ聞え給ふ。若うおはしましつれど、御心のいと有り難うめでたうおはしましつる有樣に、斯く上の御方の緣とは云ひながらも、ゆゆしきまで思し

など然け有るにか、然ばかり骨々しき人をとぞ、思しのたまはせける。さて殿の御贈り物より初め、殿の内の男女、皆然るべきさまに賜ひつつ、殘り無く何事もせさせ給ひて、いみじうめでたし。其處に二日はおはしまして、夜さりぞ歸らせ給ふ。此飽かぬ事は、大上の尼におはしませば、添ひて渡らせ給はず成りにし事を、口惜しう思されたり。君達の御乳母、女房ども、いみじう仕立てさせ給へりけり。斯くて高松殿に、尚侍御産屋の事思し急ぎて、御祈りなどいみじかりつればにや、いと平らかに、えも云はぬ男御子生れさせ給へり。院の御心地にも、さまざまいと嬉しう思されたり。甲斐ありてめでたし。七日の程の御有様、帝がねといみじうかしづき聞えさせ給ふ。萬づめでたき御事ども推し量るべし。宮宮よりも、關白殿よりも、皆有るべき事どもいみじうせさせ給へり。女房の服装ども、いみじう好ましうて、七日も過ぎぬ。心のどかに思さるる程に、此今宮、御湯より上がらせ給ひて、俄かに唯だ消えに消え入らせ給へば、御物の怪にやとて、加持し擾り騒ぐ。萬づの物を御誦經に行難がせ給ふに驗無し。殿の御前も急ぎ渡らせ給へれども、すべてあさましう、露にて消え果てさせ給ひぬ。院の内あさましう、心憂き事に思し歎かせ給へど甲斐無し。まだ斯ら兒の中に敢へなき事無かりつるを、思し歎かせ給ふ。院もいと憂しと思召して、御歩りきも絶えて籠りおはしませば、堀河の邊いとど疎く成らせ給ふも、堀河の女御斯かる事を、尋常なるよりは苦しう聞かせ給ふべし。殿には、此度御八講せさせ給はんとて、萬づ此度は我が營ひてんとのたまはせて、いみじき事どもせさせ給ふ。院の御子の御事あれど、是れは然樣の事に思し障るべきならねば、準備がせ給ふ。家

消えかへりめづらしと見る雪なれば降りても溜りぬ心地こそすれ

斯くて尚侍の殿は此二月にこそ參らせ給ひしか。此頃后に立たせ給ふべき由、世にののしりたり。世の人、如何でか然のみは有らん、同じ大臣の御女、后にて二所ながら並ばせ給へる例だに無くて、此頃も、いみじき事に申すめるに、いさ、如何なるべき事にかは有らんと、打揺ぎ傾き思ひ云ふ人人、上下有るべし。然云ひしかど、吉き日してののしるものか。寛仁二年十月十六日、中宮藤原威子と聞えさす。居させ給ふ程の儀式有樣、前前の同じ事なり。今は中宮をば皇太后宮と聞えさせ、尚侍には今姫君成らせ給ひぬ。中宮大夫には法性寺の太政大臣の御子の大納言成り給ひぬ。權大夫には權中納言能信の君成り給ひぬ。次ぎ次ぎの宮司、前前のやうに競ひ望む人人多かるべし。今は古代の事なれど、斯くて三所后のおはします事を、世に珍らしき事にて、殿の御幸ひ、此世の事と見えさせ給はず。此御前達のおはしまし集らせ給へる程は、我目に見奉り餘らせ給ひては、只今物見知り、古への事覺えたらん人に、物の隙より猶見ませ奉らばやとまでぞ、のたまはせける。斯くて霜月に成りぬ。大將殿の大姫君は五つ、小姫君は三つに成らせ給ひければ、御袴着せ奉らせ給ふ。京極殿に渡らせ給ひて、西の對をいみじう裝飾ひせさせ給へり。殿の御前、御腰は結ひ奉らせ給ひ、時成りて殿渡らせ給へり。大姫君を見奉らせ給へば、御髮脊中半ばかりにて、いみじう氣高うをかしげにおはします。小姫君は御髮振分にて、御顏附らうたげに美くし。さまざま美くしう見奉らせ給ふ。大姫君は父も母も、誰も誰も我をのみこそ思ひ給へれ、小姫君をば思ひ給はぬぞかしと聞え給へば、

御の爪、紺の袴、御宿直所まで、すべて昔の内に、此御こそ惜けれと申しのたまふべきやうもなし。如何で斯う思ひ寄りけんとまで皆驚かるるぞ、いみじうめでたき。胡蝶、鳳凰、御前皿の料紙、硯、硯箱の蒔絵、置き口まで、珍らかなるまで仕うまつれり。如何で斯く為けんと、限り有るわざにて、限りあるいふこう端じ給ふ。三日の程、残りの殿ばら参り給ひて、打聞に遊び給ふ。殿上に何事ありとなく、何事にはは昔はさ給ふ。常の事と云ひたるも、目留められたり。殿の造り様、初めは古代に言通りなりしので、此の時いと始ら、打合はの事多かりしな、此度は、殿の御心の打合ふ限り書いたれば、常にいみじう目出たり。山の大きなる木どもも、早うこそ目出しき事なれど、今引き植ゑさせ給へる木の、行末遥かに見えて、様もしき所様多く、見所有りてぞ有りける。殿はそれにつけても、楊梅枝けたる所を御覧ずべし。今は昔れを急がせ給ふ。はかなく秋に成りぬれば、虫の音も哀れに心細きに、御前の女房、松風の音を聞し召して、

松風は色や緑にふきつらん物思ふ人の身にぞしみける

と仰せられければ、御前にて過ぎさせて行きて、御前にも奏りぬ。いつしかと初雪降りわたり、例になく寒いみじき事を、人人興じ思すに、二位中納言殿より一品の宮に、

雪のふる降りつるみ雪の初雪を見所たぬ人も有らせてしがな

と有れば、返し、命婦の乳母、

し準備がせ給ふ。爲奉らせ給ひて、姑の北の方見奉りに出で給ひて、何とも無く唯だ泣顔を造り給へば、侍ふ人人汙患がましくと笑ひ聞ゆるもをかしくなん。此殿唯だ此君の御扱ひより外に無きも道理に見えたり。大姫君、男君達などの御母、この今の北の方の姉に物し給ふ。女君二人、男君は民部大輔實經、尾張の權守良經の君、中の君は今は近江守經賴の北の方、大姫君は然樣にほのめかし聞ゆる人人あれど、中納言、是れは思ふやう有りと、惜み聞え給ふ程に、いたう盛り過ぎ行くに、此乳兒のやうにおはする君の御事を持て騒げば、故北の方の御物の怪出で來て、此姫君を敢て在らせ奉るべくもあらず、ゆゆしう常に云ひ言すめれば、靜心無く思ほされける。一條の宮には、四月晦日に御服脫がせ給ひてしかば、萬づ新たまり華やかなり。されど鮮やかなる色はまだ奉らず。五月五日、院より姫宮の御方にとて、藥玉奉らせ給へり。

　この頃を思ひ出づればあやめ草なかるる同じ音にやとも見よ

御返し、中宮、

　いにしへを掛くる袂を見るからにいとどあやめの音こそ泣けれ

九日は御正日にて、御經佛の事御覽ずるも、いと哀れなり。はかなうて六月にも成りぬ。京極殿は一昨年の七月に燒けにしを、其八月より夜を晝にて造らせ給へれば、出で來て、今日明日渡らせ給ふ。大宮は内におはしませば、殿の御前、上、尚侍の殿渡らせ給ふ。伊豫の守賴光ぞ殿の内の事すべてさながら仕うまつりたる。殿の御前の御調度ども、上の御具、尚侍の殿の御方も、すべて殘る物無く仕うまつれり。女房の曹子の

夕ぐれは待ち遠にのみ思ほえて如何で心の先づは行くらん

斯くて、暮るゝや遅きとおはしたれば、民部の大輔、尾張の權守など、脂燭差して入れ奉る。さて其夜は、殿も北の方も、何事か有らんと、氣近き程に聞し寝られで明させ給ふ。哀れに思し續けらる。さて曉に出で給ひて、即ち御文あり。

今朝はなどやがて寢暮し起きずして起きては妬たく暮るゝ間を待つ

と有り。殿の御前の御口號と誦く思さる。家業ぞ御使なりける。大輔の君出で逢ひてもてはやし給ふ。次に女房の祿、度度に成りたれば、いと増へ難げなり。女房の裝束に種の織物の裄添へ給ふ。

淺緑空ものどけき春の日に暮るゝ久しきものとこそ聞け

姫君いと恥かしう思いたれど、殊更に御手づからと思いて、北の方切に慫慂かし聞え給へば、わりなけれど、書き給へるを、大殿御覽ずるに、唯だ中納言の御手の若きと見えて、えも云はずをかしげたれば、あはれに御覽ぜらる。其後おはし通はせ給ふに、萬づ造り合せたるやうなる御中らひなり。女君いと稚くおはすれど、御心ばへばかりにて、容貌いと美くしうおはす。男君の、御中いと恥かしう思し慎みたるものから、あはれに淺からず思ひ交し聞え給へりけれど、まだ其れも稚うおはすれば、男君はやがて侍ひに御睦し給ふ。女君はやがて手習し給ふまゝに、筆執りながら寢入りなどし給ひければ、内にも外にも、人ぞ抱きて、御帳の内に入れ奉る折折多かりける。其年の祭の使に中將君出で給へば、大殿にも此殿にも更なり、攝政殿まで思

君無くて荒れ增さりつつ葎のみ鎖すべき門と思ひかけきや

三月二十日の程に、一條の宮に櫻を參らせて、道命阿闍梨、

如何ならん聞かばや死出の山ざくら思ひこそやれ君がゆかりに

と有れば、中將の乳母返し、

君ゆゑに悲しき今朝の匂ひかな如何なる春か花を折りけん

斯くて、殿の中將、此頃十五ばかりにておはするに、御貌いと美くしう、年頃殿の上の取り分き御子に侍奉らせ給ふ御覺えなども心殊なるを、只今いみじき人の御婿の程におはすれば、さやうに思ひ聞え給ふわたり多かるべけれど、え然しも有らぬに、侍從中納言の嫡妻腹の姫君十二ばかりなるを、又無う思ひかしづき給ふ。生れ給ひけるより心殊に思し掟てたりけるを、此中將の君を、さても有らせ奉らばやと思し成りて、然るべき便りして、殿の御氣色賜はらせ給へば、雛遊のやうにてをかしからん、などのたまはせて、悴げならぬ御氣色を傳へ聞き給ひて、殿も北の方も、いみじう嬉しう思して、俄かに準備き立ち給ふ。年頃幼きを御寶物に思いたりつれば、然るべき御調度どもは有れど、唯だ鮮やかに御帳、御几帳の帷子ばかりを準備がせ給ふ。然るべき若き人人など撰り調へて、三月二十餘日の程と思し定めたるに、其日岩清水の臨時の祭の使に此君おはすべかりければ、殿の御前、他人に差し替へさせ給ふ程の御心掟を、中納言は疎かならず思し喜びたり。萬づの事調へさせ給ひて、晝つ方中將殿より、

思すも哀れになん。其夜に成りて、二位宰相、頭の中將など參り集り給ふ。又昔より志ありて親しう思されし此れ彼れなど參れり。御迎へには大殿の御車をぞ率て參れる。其れに乘り給ふ。是れを御急ぎと思し急ぐにつけても、世の中の哀れぞ先づ知られける。さて參らせ給へれば、二條殿の御方とて、いみじう傅き据ゑ奉り給ひて、容易く殿の君達參り寄り給はず。いとやんごとなきものにもてなし聞え給ふ。此御參りをば然るものにて、御匣殿の姫君の御參り、哀れなる事ぞかし。すべて此殿の御族枝枝に、露かかり給はぬ人無く成り果て給ひぬ。「昨日の淵ぞ今日の瀨となる」と云ふ事と見えたり。一條の宮には、御前の櫻の遲き事を、御前より初め奉りて、心もと無き事に思しのたまはすれば、土御門の御匣殿、

辨の乳母、

咲き咲かずおぼつかなしやさくら花外の見るらん人に問はばや

辨の乳母、

大かたのさくらも知らず是れを唯だ待つより外の事し無ければ

辨の乳母、其頃里に退かづるに、三條の院の前を渡れば、木高かりし松の梢も少し色變りて、心地よげなるに、業士には何と無きもの、紫う這ひかかりたれば、いみじう哀れに、昔思ひ出でられて、江侍從の君の里に在るに云ひ遣る。車停めたる程も、風流しうをかし。

昔見し松のこずゑは哀れながら猶は門を鎖してけるかな

返し、江侍從の君、

北の方此事どもを聞え給へば、宰相打泣き給ひて、斯かる事なんいと苦しう侍る。「いたう取れば」と云ふらんやうに、故殿の御心掟てのやうにては、總べて思し掛くべきには有らねど、今の世の事の、いと様異に成りにて侍れば、斯く切に思させ給ふを、否とも侍らば、某などが爲めにこそ便無う侍らめ、此御有様の措くべき世とも見え侍らねば、人の爲め善き事は難う、惡しき事は易くなん、など聞え給へば、母北の方然る事なりと思し立ちて、有るべき事と定め給ふに、宰相、大人十人、童女二人、下仕へ然やうにて遣へ侍りなん、帥殿の御方、大宮に參り給ひし、然様になん聞き給へし、と申し給ひて、靡き聞え給ふ由の御返りごと聞え給ひつ。姫君を見やり奉り給へば、いと小さやかに美かしうて、枝垂髪だちて居給へり。御調度どもは故殿のさまざま儲設けさせ給へりし有めり、銀の御櫛の筥さへ有るにこそ、とて又泣き給ふ。世に限り無き御身かとこそ思ひ給ひけめ、とて又泣き給ひぬ。萬づ物語めき、いと哀れなる事どもかな。斯くて宰相出で給ひぬ。大殿には此返りを御覽じてければ、喜びながら、人の御身に要るべき物、様々おどろおどろしきまで奉らせ給へれば、然は斯うにこそはと、急ぎ立たせ給ふにつけても、また北の方、ともすれば泣目なる見どものやうに、打潜まり給ふ。堀河の大臣に、斯かる事なん有ると申し聞え給へれば、すべて麻呂に物なのたまひそ、何事も覺え侍らずと、云ふ甲斐無き御答へなり。斯くて故殿度度夢に見えさせ給ふ。物の怪にも出で給ひなんとすれど、然りとて思し止まるべき事にも有らぬを、姫君、いでや尼にや成りなましなど、人知れず思し亂るれど、信實やかなる御心などの有めるに、また今更に怪しらぬやうにやは、など

におはしますわざなめれ。御方に渡らせ給へれば、並び聞えさせ給へる程、事の外に如何にと見奉り、世人も申ししを、御侍の殿、固より細細やかに、人ざま若うをかしげにおはしませば、準らひにくう、美くしう見えさせ給ふ。上あさましう成長げさせ給へり。おはしまして、御櫛の箱の中より初め、萬づを探し御覽ずるに、いとをかしう見所ありて、御覽じ興ぜさせ給ふ。御調度どものめでたうをかしきをぞ明暮の御遊びに御覽じける。御侍の殿は猶いと恥かしう人目を思したれど、上はいと善う睦び聞えさせ給ふ程もをかしくなん。斯かる程に、故東門殿の姫君は、今はむげに大人に成りはて給ひにたれば、母北の方、如何で我が在る所に、頼もしう然るべき樣に見置き奉らんと思しのたまへど、然べき事の目安きが有るべきにもあらず、然りとて、尋常の事を有り有りて爲べきにもあらず、如何にせましと思し煩らふ程に、此御侍の殿より、頭に度度御消息聞えさせ給ふ。何かと思すべきにもあらず、徒然の慰めに語らひ聞えさせんとぞ有る。殿の上の御消息など聞えさせ給ふを、此北の方如何にせましと思し亂れて、姫君に、己が行末も殘り少なければ、如何にも如何にもして、如何で、後ろ安くと思ひ聞えさするに、彼の邊に、斯く切にのたまはすめるを、如何が思す、と聞え給へば、姫宮ともかくものたまはで、打俯みて居給へるを、見奉り給へば、御涙のこぼるるなりけり。北の方いとど歎きも敢へ給はず、吾が君や、是れを善き事とてには有らず、人の切にのたまふ事なれば、故殿の御物語を書き、御調度を仕設けて、待ち奉り給ひしかど、御顏をだにも見奉り給はず成りにし事、と云ひ續け泣き給へば、御前なる人人も、ゆゆしきまで泣き合へる程に、二位宰相參り給へり。

御一所を、世に顯ろしとは聞えさせたる。其中にも、此の御前達は、御貌こそ然もおはしまさめ、御心掟て、有樣などは、如何で斯う古代ならず、今めかしう、然りとて端近になどやはおはします。如何で斯う、樣樣めでたくおはしますにかと見え給ふ。況いておはしまし集らせ給へる折は、繪に書きたるも格なしき混りたり。是れは聞えさせん方無くおはしませば、殿も上も、御目外へ遣らせ給はず、注視り奉らせ給ふ。斯くて參らせ給へれば、御裝飾、有樣など、例のおどろおどろしう、玉を磨き立てさせ給へり。帝いと若くおはしまして、如何がと世の人聞え思へり。前前も覺束なからず見奉り交はさせ給へる御中なれど、尙侍の殿は差し並び奉らせ給はん事を、かたはらいたく思召して、帝は直道に耻かしう思召し交はす。漸漸に上らせ給へれば、夜の御殿に入らせ給ふ程、いみじう愼ましう、理無う思召されて、やがて動かで居させ給へれば、近江の三位參りて、あな物狂ほし、など斯うては、とて御帳の下におはしまさすれば、上起き居させ給ひて、御袖を引かせ給ふ程、尙侍の殿、むげに知らせ給はざらん御中よりも、眩ゆく耻かしく思召さるべし。さて入らせ給ひぬれば、殿の上おはしまして、御衾參らせ給ふ程、げにめでたき御有樣にて、道理に見えさせ給ふ。入らせ給ひて後の事は知り難し。御乳母達、御帳の邊に侍ふ。殿の御前、萬づに思し續くるに、ゆゆしうて御目拭はせ給ふ。曉には下りさせ給ふ。さて夜頃上らせ給ひて、吉き日して、有べい事どもなど物せさせ給ふ。御乳母達の贈物ども、上の女房達、女官まで物賜はすれば、喜び畏まりて、祈り申し續くるもをかしくなん。遲く上らせ給ふ折は、夜更くるまでおはしまして、待ちつけ奉らせ給ふ程などこそ、猶心殊

断う侍りしを、忘れて、今まで參らせ侍らざりける事、とて御前に參らせ給ふとて、やがて少し打吹き鳴らし給ふを聞きて、御匣殿、

前侍の此世を長く別れにし君がかたみの聲ぞ戀しき

淺綠

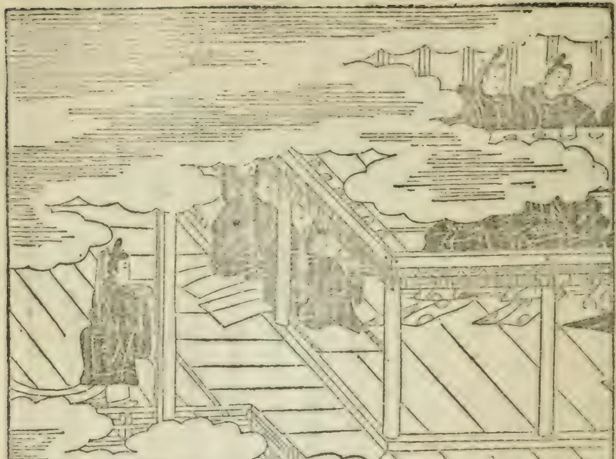
二月に成りぬれば、大臣の尙侍の殿内へ參らせ給ふ。萬づの事調へさせ給へり。大人四十人、童女六人、下仕へ同じ數なり。初めの宮宮、關白殿などに、皆人人參りて、今はえしもやと思召しつれど、何れも難無き人人、參り混みたり。童女は其夜の御車寄するまで、撰り調へさせ給へる程、推し量るべし。二宮の御參りの折折の事なぞ世語に人人聞えさすめるを、是れは今少し勝りたり。世の中の人の御心掟て、昨日に今日は增さりてのみ見ゆるわざなれば、萬づ其れに從ひてめでたし。宮の御有樣よりは、尙侍の殿こよ無く大人びさせ給へり。御樣、いみじうをかしげに愛敬づき、色合ひより初め、尋常ならず見えさせ給ふ。御髮いみじう艶やかにめでたくて、御丈に少しぞ餘らせ給へる。上の御前の御髮より初め、二宮の御髮、世に類ひ無う長くめでたくおはしますに、此御前のをぞ心もとなげに思召したるに、是れもいと美くしげにておはしますや。八重紅梅を濃かかりながら押し折りたるやうなる御匂ひなり。何れの物語にかは、人の御女、女

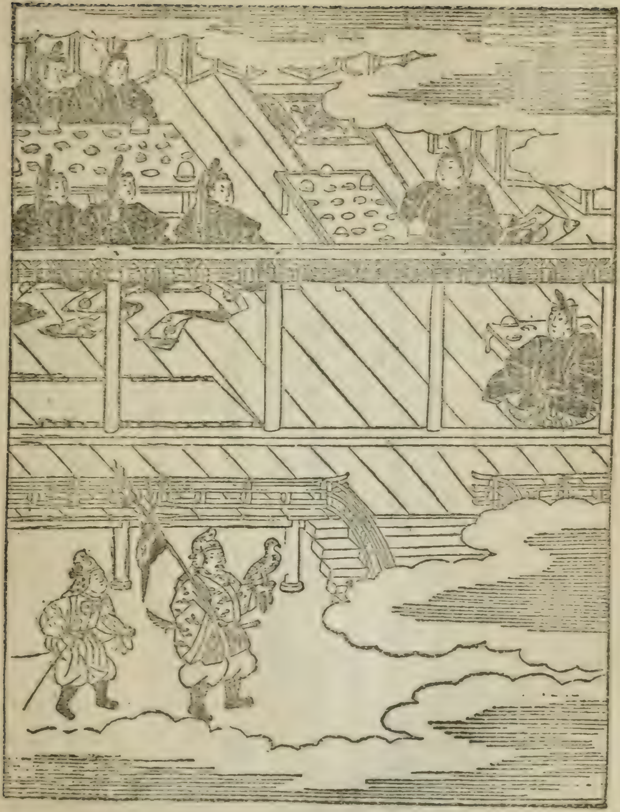
山里の紅葉見にとや思ふらん散り果ててこそ訪ふべかりけれ

いと多かれど書かず。大饗の日、寛仁二年正月廿三日なり。有樣云ふも疎かに、めでたし。尊者には閑院の右大臣殿ぞおはしましける。上の御有樣など、いと有らまほしくめでたき殿なり。式部卿の宮の姫君生れ給ひしより、やがて取り放ちて養ひ奉らせ給へれば、いと愛くしげにておはします。堀河院には、かの上陽人の、「春行き秋來たれども年を知らず」と云ふやうに、明け暮るるも知らせ給はず、あさましう思し歎きて、眺めつつ、安くも大殿籠らねば、「殘りの燈火の壁に背ける影」も心細く思さるるに、御前の梅の快う開けにけるも、是れを今まで知らざりけるよ、「我身世に經る」など詠めさせ給ひける。

いづこより春來たりけん見し人の絶えにし宿の梅ぞ匂へる

「鶯のうら若きは初音も遲はしければ、聞くを厭ふ」など有りけんも眞なりけりと思し知らる。萬づ變らぬ御有樣なるに、宮達の御衣ばかりをぞ鮮やげさせ給ひて、院の御捉ての有れば、宮達に御節供參れり。萬づ哀れなる世を、殿は小袿着て、足駄穿かせ給ひて、杖をつきて、道のままに歩りかせ給ひて、御前の小木どもの、生ひさき繕ろはせ給へば、一二の宮は人に抱かれさせ給ひて、覺き歩りかせ給ふ程も、哀れに悲げなり。高松殿の有樣を院如何に御覽じ比ぶらんと、御目移りの程も思ひ遣られて、恥かしう漫ろはしう思さるる御心の中も、道理ながら、又あながちなり。枇杷殿の宮には、故院の御笛を、此宮の權大夫と有るは、源中納言に、是れが違ひたる所繕ろひて、とて預けさせ給へりけるを、物の中より取り出でて、斯う





若の宮、卯杖を、

常磐山生ひつらなれる玉つばき君が栄ゆく杖にとぞ切る

大嘗したる所に、殿の御前、

君許と遣りつるつかひ来にけらし野辺の菘は摘みやしつらん

春日の使立つ所に、和泉、

春日野に年も経ぬべし神の在す三笠の山に来たりと思へば

山里に水ある家に、賓客の来たる、祭主輔親、

この宿に我れを留めなん流水の深き心に澄みわたるべく

五月の節、輔親、

くらぶべき駒もあやめの草もみな美豆の御牧に引けるなりけり

九月九日、殿の御前、

彭祖も尚を三人はしのびける菊に籠めて千代を匂へば

西宮大納言　家に二百首詠ませ給へり。桜の花見る女、車ある所、

桜の花秋の紅葉もいろいろに桜のみこそ一時に見れ

また紅葉ある山里に男来たり。

[illegible]　木綿四手

も、いと心憂し。高松殿におはしましたれば、譬へ無き事ども多かり。此度の絶間いとこよ無し。女御、今は唯だ此歎きは我身の無からんのみぞ斷ゆべきと、御心一つを、と成し斯う成し、「いつまで草の」とのみ思し亂る。粟田殿の北の方は、年頃此殿の北の方にておはすれば、此頃は上などの聞え給ふ事も、殿は聞き入れさせ給はず、いみじとのみ物を思したるが、いと哀れになん。晦日に成りぬれば、高松の殿には、やかて其れにて、院の御乳母達に、然べき事ども爲させ給ふ。裝束一領、織物の衣、また尋常の衣など添へさせ給へるに、院の御衣ども下ろし添へさせ給へるに、また或物も有るべし。一條の宮には、御荷前の事するにつけても、夢とのみ思召さる。夜の程に更りぬる空の氣色も、いと晴晴しく心のどかにて、うらうらとをかしげなり。萬づ物の映無き年なれば、例參り給ふ上達部、臨時の客など常の如し。されど女房などの出で入りも無く、引き入りたる御有樣も口惜しうぞ。高松殿には、女房の事も新ため心地好げなれど、院の御衣の色殊なれば、物の映無き事どもなり。萬づよりも帝の御年十一に成らせ給へば、正月三日、御元服の事あり。其程の有樣、思ひ遣るべし。此二十日餘りの程は、攝政殿の大饗あるべければ、其御屛風ども爲させ給へるに、然るべき人人に、皆歌配り給はするに、大殿、我れも詠まんと仰せられて、世の準備に御暇もおはしまさねど、ともすれば、端近く打詠めて、呻めかせ給ふ程、さまざまにめでたく、人の御身、御幸ひ、御心ざまも、常の事ながら、斯ばかり急がしき御心に、斯かる方をさへ思し忘れさせ給はぬ御心の程も、聞えさせん方無くおはします。すべて和歌八十首ぞ出で來たりつれど、入りたる限りをだに盡し書かず、大和守輔

はしませば、此宮も皆恥ぢけるものを、とて御涙を押拭はせ給ふも、いみじう哀れなり。女御の御衣の袖の方に、畳う紙のやうなる物の有るを、取りて御覧ずれば、思しける事どもをぞ書き給へると御覧ず。

過ぎにける年月何を思ひけん今しも物の歎かしきかな

打解けて誰れもまだ寝ぬ夢の世に人のつらさを見るぞ悲しき

千年経ん程をば知らず来ぬ人を待つは猶こそ久しかりけれ

憂しさもつらさも共に知らせつる人をば如何が憂しと思はぬ

疾くとだに見えずもあるかな冬の夜の片敷く袖にむすぶ氷の

など書かせ給へる、いみじう哀れなり。斯く物を思はせ奉る事、何どか時時は此宮にも留まらざらん。されど人のいみじうもてなし思いたる事の煩らはしければ、只今は如何でかは。今宵しも有りてこそは、など思すも、いと哀れなり。「結ぶ氷の」と書き給へる傍らに書かせ給ふ。

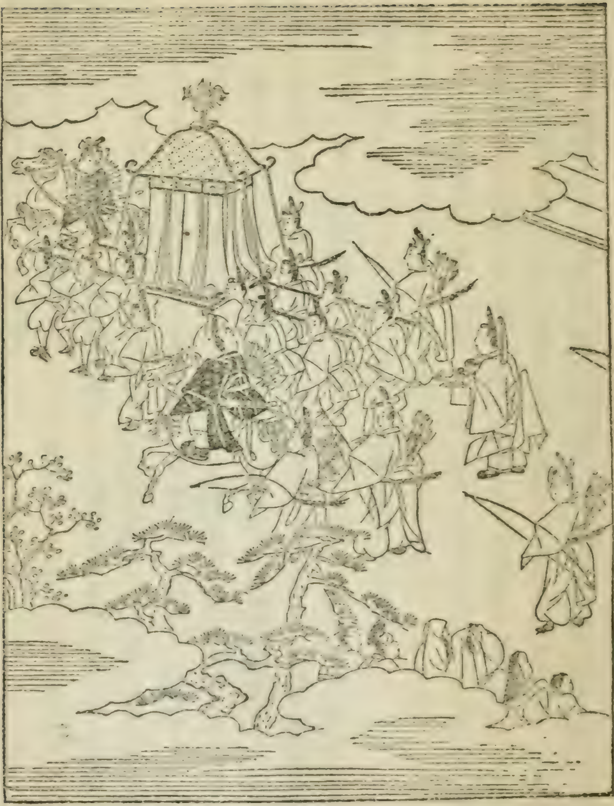
逢ふ事のとどこほりつつ程経れば解くれど解くるけしきだに無し

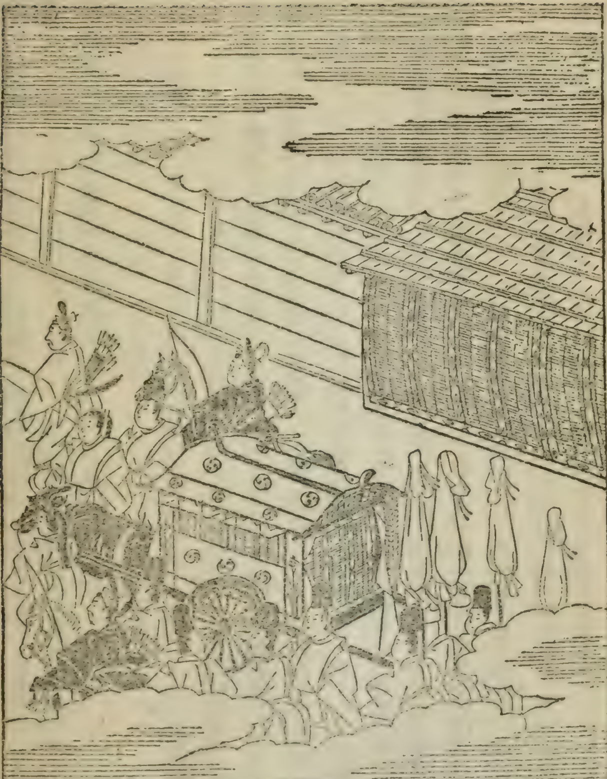
萬づに唯だ我が御命知らぬ事をのみ、えも云はず聞えさせ給ひて、出でさせ給ふに、宮達の立ち顧き見送り奉らせ給ふに、また御涙のこぼるれば、籠居させ給ひて、萬づに慰めさせ給ひて、御乳母ども召して、抱かせ奉らせ給ひて、殿の御方におはしまさせ給ひて、少し心安くて出でさせ給ふ路の心も無く、いみじう思さるべし。御供の人人も、留まらせ給はば如何に甲斐無からんと思ひけるに、出でさせ給へば、嬉しく思ひたる

し給へるに、一の宮おはしまして、大臣、やや、起きよ起きよ、馬にせん、と起し奉らせ給へば、我にも有らず起き上り給ひて、高匍ひして、馬に成りて乗せ奉り給ひて、匍ひ歩りかせ給へば、一の宮、例よりは動かぬ馬かなとて、御扇して、疾く疾くと打ち奉らせ給ふを、女御見やり奉らせ給ひて、いとど目昏るる心地せさせ給へば、いとど御心の闇も増さらせ給ひて、御衣を引き被きて臥させ給へり。いみじう哀れなる御有様どもなるに、女御は若うおはすれば、いと可しや、殿の御年は然ばかりなるに、如何に罪得させ給ふらんと、見奉る人人も哀れに悲しく心憂しと思ふべし。日頃ありて、院、堀河の院におはしまして御覧ずれば、わざと道も見えぬまで荒れたり。哀れと御覧じて、入らせ給へれば、女御殿は、御帳の前にぞ御硯の筥を枕にて臥せさせ給へる。御前に女房二三人ばかり侍ひつれど、おはしましつれば皆入りにけり。日安き人人侍ひしかども、此頃皆出で果てて、え然らぬ人人ぞ侍ひける。見奉らせ給へば、白き御衣ども五つ六つばかり奉りて、御腰の程に、御衾を引き掛けてぞ大殿籠りたる。御髪はいと麗はしくて、すそ細くて、長に一尺ばかり餘らせ給へる程なり。御容貌いと清げにて、只今は三十ばかりにおはしますらんかし。いみじう若う清げに見えさせ給ふ。納縒り難き御容貌なりかしと御覧じて、ややとおどろかし奉らせ給へば、何心も無く見上げさせ給へるに、院のおはしませば、あさましくて、御顔を引き入れ給へば、御傍に添ひ臥させ給ひて、萬づに泣きみ笑ひみ聞えさせ給へど、其れにつけても胸塞がりて、御涙のみ流れ出づれば、院は萬づに聞えさせ給へど甲斐無し。何ら、一の宮は、と聞えさせ給へば、おはしまして、打恥ぢらひてお

ゆくさまなり、笑ましくさすがに見ゆ。入らせ給へば、大殿油のやうに明きに、女房三四人五六人づつ打群れつつ、えも云はぬ有様どもにて、薫りたる扇どもを差し隠して、並み侍ふ程、いみじうおどろおどろしきものから、恥かしげなり。御装飾有様、輝くと見ゆ。院の御心地、年頃堀河の邊のありさま、玉を磨く御目移りに、先づ思し出でらるべし。斯くて御台参らせ給ふ。御まかなひは左衛門督仕うまつり給ふ。取り次ぎ給ふ事は、二位中將、三位中將など侍させ給ふ。御菓子参りての程に、大殿出でさせ給ひて、麗はしき御装束にて、御土器参らせ給ふ程など、云へば疎かにめでたし。院は御衣ども、御直衣などの色を、いとつつましう、かたはらいたう思せど、斯様の事は其れを忌忌しと思しのたまはせぬ事なれば、如何にぞや、やつれたるさまを恥かしう思召せど、なかなか其れしも夜目には御色の配合もてはやされて、氣ざやかにをかしう見えさせ給ふも殊更めき、斯くも有りぬべき事なりけりとぞ見えさせ給ふ。御けはひ匂ひなどぞ、沁みかへらせ給へる。御容貌は氣高く愛敬づき、をかしくおはしませば、今宵の御有様、必ず繪に書かまほし。御年卅三四ばかりにおはしませば、盛りにめでたく、髭なども少しけはひづかせ給へる、あな有らまほし、めでたやとぞ見ゆる御有様なめる。斯くて御供の人人の祿ども、例の作法に今少し増させ給へり。御隨身所、召次所、御車副、舍人ども、さまざま、いとおどろおどろしう思し掟てたり。大殿は斯くて歸らせ給ひぬ。院にや、御念誦の堂、御帳の中に差し入れておはしましぬる程、物忌すまじう哀れに見えさせ給ふ。斯くて、かの堀河の女御、そのままに胸塞がりて、つゆ御湯をだに参らで臥させ給へり。大臣も消え入りぬばかりにて臥

ほひ有樣、いと甲斐有りて思さるべし。其れにつけても、堀河の女御思ひ出でられ給ふも心苦し。彼の女御も御容貌好く、心ばせおはすれば、年頃いみじう思ひ聞えさせ給へりつれど、只今何事も新しうめでたき御有樣は、今少し端はしう思さるるも、我ながら道理知るさまに思さる。冬の夜なれど、はかなく明けぬれば、出でさせ給ふも、いと飽かぬさまに思さる。御供の御隨身、御車副、舍人まで、只今そのままにて位に即かせ給へらましよりも、めでたしと思ひたり。歸らせ給ひぬれば、女御の君、御帳よりも出でさせ給はず。院よりは、やがておはしましけるままにやと覺ゆる程に、御使あり。二位中將など出で會ひ給ひて、えも云はず醉はし給ふに、女房の杯さし出づる袖口などこそ目も彩なれ。御返り賜はりて、女の裝束に綺紐染の小袿添へて賜はりて參りぬ。さて日暮るるも心もと無くて、おはしましぬ。四五日ありてぞ御所顯露ありける。院、皇后宮に申させ給ふ。夜さり如何に恥かしう侍らんずらん。彼處にまかれば、二位中將、三位中將など待ち迎ふるに、いとすずろはしきに、今宵は餅の夜とか聞き侍りつる。大臣も物せらるべきやうにこそ聞き侍りしか、と聞えさせ給へれば、げに如何にと思召して、御裝束どもに、えならぬ香ども沁めさせ給ふ。さやうの方には、尋常ならぬ宮の御有樣に、心殊に恥かしう思召して爲立てさせ給ふ程、推し量るべし。斯くて御供に參る人人、隨身など、少しも益なしきは撰り捨てさせ給ふ。おはしまして入らせ給へば、左衞門督など例の君達參らせ給へれば、なますずろはしう思召されて、入らせ給ふ。殿上人の座には、懸盤の物ども、いみじう爲据ゑたり。御隨身所、召次所、數知らず机の物ども爲据ゑたり。もてなし給ふさま心





とぞ。さて院の御事、今日明日有るべしと囁聞るは實にやあらん。堀河の女御、此事に由りて、御胸塞がりて思し歎くべし。さて高松殿に東宮より渡らせ給ふべき。此頃、其御用意心殊なり。此御前をば月頃御匣殿とぞ聞えさせける。御装束有様、有べい限りおはします。御心ざまなどめでたしと云人は申すめる。然るべき人人撰り調へさせ給ふ。宮宮などに参り混みて、えしもやと見合しつれど、恥無き人人多く参り集ひたり。先づは故院に侍ひ給ひし権の三位の娘に、山の井の大納言の女と云はれ給ひし、大納言の君とて侍ひ給ふめり。何くれの宮、彼の殿どもの御女など名のり給ふ人人多かめり。すべて撰り調へたる限り二十人、童女、下仕四人づつなり。御装飾より初め、新しう磨き立てさせ給へれば、輝きてぞ見ゆる。其夜に成りて、院渡らせ給ふ。御前に、然るべう心寄せある殿上人を撰らせ給へり。また無かりつる御中らひの有様の程、世に有らまほしき事の例に成りぬべし。殿上人の氣色なども云へば疎かに、盛りなる人模などの心地したり。御車の後に、大蔵卿仕うまつり給へり。さておはしましたれば、此御兄弟の左衛門督、二位中将など、紙燭差して入れ奉り給ふ。殿はおはしますなれど、忍びて中の方にぞおはしますべき。殿の御前の御供は、御前の方に忍びやかに打群れて在るに、院の御供の人人、忍びさせ給へど、いと多くぞ侍ふ。御隨身どもの氣色えも云はず興ましう思へり。入らせ給へれば、大殿油有るか無きかに灰めき渡れど、匂ひ有様、昔日にも着るし。東宮にておはしましし折に参らせ給はましかば、例の作法にぞ有らまし。是れは今めかしう、氣近うをかしきものから、又いとやんごとなし。女君十八九ばかりにやおはしますらんと見えたる。御け

づを思しやるに、然るべき殿上人など參りたる次に、若き人出で逢ひて物語するもをかしきに、また殿の君達などぞ、今少し物濃やかなる事どもは語らせ給ふめる。賀茂の行幸まだ無かりければ、日除日ばかりに有るべければ、此一條殿の北の御門の前よりぞ渡らせ給ふべかなれば、宮の御前に侍ふ人人も、ゆかしがり思へど、物華やかならん人目つつましう思召されて、唯だ御門のもとよりは、幾らばかりかは御覽ぜられんなど、いと心もとながるを、日頃人人、いと聞きにくく申し思へる程に、殿參らせ給ひて、如何にぞ、行幸は御覽ぜんとすや、此北の御門よりこそは渡らせ給ふべかなれ、など申させ給へば、いさや、さやうに人人は云ふめれど、如何でかは、とのたまはすれば、怪しの事や、棧敷を造り、色めかせ給はばこそは人の譏りも有らめ、御前より渡らせ給はん事を、御門を塞がせ給ふべき事かは、など申させ給ひて、唯だ然りげ無く、北の築土を壞させ給ひて御覽ずべき由を申し置かせ給ひて、出でさせ給ひぬれば、若き人人喜び聞えさす。さて御覽ずるに、いみじうめでたし。大宮も御輿に奉りて、女房車えならずして、渡らせ給ふ程など、えも云はずめでたく御覽ぜらる。萬づ果てて後に、大殿渡らせ給ふ。あないみじやと見えさせ給ふ。次の日、此宮より、大宮に聞えさせ給ふ。

　行幸せし賀茂の河波かへるさに立ちや留まると待ち明しつる

大宮の御返し、

　立ちかへり賀茂の河波よそにても見しや行幸のしるしなるらん

いろいろの紅葉にもうつるとも都の外に長居すな君

御返し有りけんかし。是れは落ちたるなるべし。斯くて十月ばかりに、權亮の中將、日頃わづらひて亡せ給ひぬとののしる。大殿の上、哀れに聞し召す。故上のいみじきものに思したりしものをと思すなりけり。今は少將をこそは取り分き思ふべかめれとぞ、のたまはせける。世の中のはかなき樣も、哀れにのみなん。皇后宮には、前齋宮いとをかしげなる尼にて行はせ給へば、御持佛など、さまざまにて奉らせ給ふ。中將の乳母は、かの三位中將の御許にと聞し召ししかど、今は其處にも無かなれば、哀れに如何でか如何でかと、齋宮は人知れず思召されけり。皇后宮には、我こそ斯樣に有るべきに、此齋宮の世の中をいと心細げに思したるがいと苦しさに、え思し立たぬ事と、理無く思さる。二三の宮も未だ獨身にて、宮にさし奉らせ給へり。然るべき邊にのたまはするは情無く、またいでやなど思召すは、進み聞えざる程に、自ら月日過ぐるなるべし。御衣どもの色も、冬になるままに、いとどさし重なり、色濃さまさまに、さまざまおはしますを、此御樣も御目に當ればやとこそ哀れに見えさせ給ひけれ。一條の宮には、心のどかに思召さるるままに、御行ひがちにて過ぐさせ給ふ。後夜の鐘の音も、おどろおどろしく聞し召されければ、御格子を押開けさせ給ひて、御覽じて、

皆人の色かずのみ見るもみぢ葉をさそひにさそふ木がらしの風

とぞのたまはせける。斯かる程に、五節や何やとののしるなれど、此御邊には、有りし昔を思し出でつつ、寫

いみじう興有りと思へり。皇后宮、いと飽かぬ事に口惜しう思せど、また一院とて、年官年爵得させ給ふ。藏人、判官代、何くれの制あるにつけても、惡しくはおはしまさず。今めかしう御心を遣り、有らまほしげなる方は、月頃の御有樣に勝らせ給へり。然ば故院の御繼ぎは、斯くて止ませ給ひぬるにやと思す程ぞ、いと悲しかりける。東宮の御乳母達、終の御事ながら、忽ちの事とは思ひ掛けざりつるに、あさましく嬉しきに、爲ん方無し。東宮大夫には、大殿の高松殿腹の中納言成り給ひぬ。權大夫には、法住寺の大い殿の、兵衞督成り給ひぬ。傅には閑院の右の大い殿成り給ひぬ。宮司、帶刀などは、我も我もと望み申せど、大殿撰び成させ給ひつ。萬づ、あなめでたと見えさせ給ひ、帶刀ども、いと物淸き人の子どもを成させ給ひつ。猶大宮の御幸ひは、世にいみじくおはします。式部卿の宮、此方には、むげに思召し絕えにしかど、此度の際には必ず立ち出でさせ給ひぬべかりつるを、御宿世をば知らせ給はずとも、猶怪しうとは如何でか思召さざらん。世と共にはればれしからぬ御氣色も心苦しうなん。前の春宮の帶刀ども、手に据ゑたる鷹を逸らしたるなど云ふやうに思ふべし。今の東宮のを望み申す類ひども有べかめれど、事の外の事にて聞し召し入れず。其れも道理、げに忌々しく思されぬべき事なり。前の春宮は御年二十四に成らせ給ひにけり。今の東宮は九つにぞおはしましける。帝も東宮も御行末遙かにおはします御有樣につけても、いとめでたし。斯くて高松殿の姬君の御事あるべしとぞ世には云ふめる。さて其頃、殿の上、八幡に詣でさせ給へりければ、中宮より聞えさせ給ふ。

ば然るべきさまに仕うまつるべきにこそは候ふなれ。一院にておはしまさんも、御身はいとめでたき事におはします。世にめでたきものは、太上天皇にこそおはしますめれ、など能く御心のどかに聞えさせ給ひて、退かで給ひぬ。其ままに、やがて大宮に参らせ給ひて、斯う斯うの事をなん春宮度度のたまはすれど、更に承け引き申さぬに、召して仰せられつる様など、細やかに申させ給ふに、摂政殿もおはします。人の是れをとかく思ひ聞えさする事ならばこそ有らめ、我が容易く成らせ給へる御心なれば、一院とて、御心に任せて在らんと思召したるも、いと有らまほしき事なり。さても春宮には、三の宮こそは居させ給はめ、と申させ給へば、大宮、げに其れは然る事に侍れど、式部卿の宮などの然ておはせんこそ善く侍らめ、其れこそ帝にも据ゑ奉らまほしかりしかど、故院の怨させ給ひし事なれば、さて止みにき。此度は、かの宮居給はん。故院の御心の中に思しけん本意も有り、宮の御為めにも善くなん有るべき。若宮は御宿世に任せても有らばやとなん思ひ侍る、と聞えさせ給へば、大殿、げにいと有り難う哀れに仰せらるる事に侍れど、故院も他事ならず、唯だ御後見無きに由り、思召し絶えにし事なり。賢うおはすれど、斯様の御有様は、唯だ御後見からたり、帥の中納言だに京に無きこそ、など猶有るまじき事に思し定めつ。斯くて八月九日、三の宮、東宮に立たせ給ひぬ。初めの東宮をば小一条院と聞えさす。院いと思召すさまに、やさしく思召されて、十二人の御随身撰り調へさせ給ひ、奉るべき馬鞍まで清らを尽させ給ふ。故院の御随身どもの、世の中をいと敢なく思ひたりつるに、然るべう美美しきなどは、皆参り集りぬ。殿上人の然るべく使ひつけさせ給へる人人など、

有べき樣に窶据ゑ奉らせ給ひし御事をも、如何に思召して、やがて御跡をも繼がず、世の例にも成らんと思召すぞ、いと心憂き事なりなど、常には諫め申させ給ひて、御物の怪の斯うは思はせ奉るぞとて、所所に御祈りを爲させ給ふ。思し餘りては、若やかなる殿上人の申し憧がらすならんとて、いみじう召し仰せなど爲させ給ふ。されど、殿の御前に、然るべき人して、斯うやうになんと摸ねび申させ給ふ。殿の御前、いと有るまじき御事なり、然は故院の御繼は無くて止ませ給ふべきかは、いみじかりし世の御物の怪なれば、其れか然思はせまつるならん、とのたまはせて、聞き入れさせ給はぬを、如何で對面せんと、度度聞えさせ給へば、殿參らせ給へり。覺束無き世の御物語など聞えさせ給ひて、次ぎに納身の宿世の惡ろきにや侍るらん、斯く美はしき有樣こそいとむづかしけれ、如何で下り侍りて、一院と云はれて侍らん、と聞えさせ給へば、更にいと有るまじき御心掟てにおはします。故院の萬づに御後見仕うまつるべき由、仰せられしかば、皆然思う給へながら、え去らぬ事の多く侍れば、内にも當代いと幼なくおはしませば、萬づ暇無う候ひてなん。中につきて、此一品の宮の御爲めを思ひ給ふれば、御心のどかに、世をも思し倦たせ給ひておはしまさんこそ、賴もしく嬉しく候ふべけれ。唯だ是れは他事ならじ、御物の怪の思さするなめり、と申させ給へば、何でふ物の怪にか有らん、唯だ固より遊びの心のみ有り習ひにければ、斯くて在るがいとむづかしく覺えて、心に任せて有らんと思ひ侍るなり。其れに猶え有るまじう思されば、もとの本意も有り、然るべき樣にても在らんとなん思ふ、と申させ給へば、いと不便なる事なり、出家とまで思召されば、いと事の外に侍り。然ら

斯うだに思ひ掛けましやと、人知れず思さるべし。中宮は、一條院にて、唯だ明暮御行ひにて過ぐさせ給ふ。月日の過ぐるにつけても、姫宮のあわて歩りかせ給ふに、綾、羅なども奉らで、薄色などにて歩りかせ給ふ。御髮長くて、小さき童髮などのやうにておはしますも、哀れにいみじきものに思ひ聞えさせ給へりしものをと、御乳母達、掛け奉らぬ折無う泣ひ奉る。姫宮、蟋蟀聲きにせさせ給へる、「これ如何で貴の御許に奉らん」とのたまはするにつけても、郭公にや告げましなど、哀れに御覽ぜられけり。

一「あては、まろをば、戀しとは思さぬか、などか、いと久しく渡らせ給はぬ」など、書き續けさせ給ふも、浸潤め難う御前にも思召し、侍ふ人人も思へり。宮達なども覺束なからず渡り見奉らせ給ひ、東宮よりも、はかなき御遊び物ども奉らせ給ふ。殿の御前、一條殿の御徒然におはしますらんとて、我も常に御宿直せさせ給ふ。其殿ばらも、常に參らせ給ふべう申させ給ふ。院のおはしまさぬばかりこそ、有りしに變らせ給へれども、大方の御有樣は、殿のおはしませば、同じ事にのみなん。其折の殿上人、心寄せの殿ばらなどは、常に參り給ふ。斯かる程に、東宮、何の御心の催しにかおはしますらん、斯くて限り無き御身を何とも思されず、昔の御忍び歩りきのみ思されて、時時につけての花紅葉も、御心に任せて御覽ぜしのみ戀しく、如何で然樣にても有りにしがなとのみ思召さるる御心、夜晝念に思さるるも理無く、皇后宮に一生は難ばくも侍らぬに、猶斯くて侍るこそ、いと憚せく侍れ、然るべきにや侍るらん、古の有樣に、心安くてこそ有らまほしく侍れなど、折折に聞えさせ給へれば、宮は、いと心憂き御心なり、御物の怪の思はせ奉るならん、故院の

とぞ有りける。此院も御處分も無くて崩れさせ給ひにけり。冷泉院の御領の所々多く侍りしも、此院に撰りすぐりて領らせ給ひけり。又大入道殿の御孫の宮達の御中に、此院をいみじう又無きものに思ひ聞えさせ給へりければ、昔のも、又世を知らせ給ひし程の所をも、勝れたる所々をば、唯だ此院に奉らせ給へれば、前前の院よりも、此院はいみじうやんごとなきもの多くぞ候ひける。されば此頃ぞ殿の御前、御處分せさせ給ひける。おはしましし折も、姫宮を如何でと思ひ聞えさせ給ひて、斯くいと幼なくおはしますを、一品に成し奉らせ給ひしも、いと哀れに思ひ出で聞えさせ給ひて、此中宮の姫宮、東宮、皇后宮、今三所の宮、男宮、姫宮など、よく數へ立てて、さまざまに分ち奉らせ給ふ。御用意の有り難くおはしますと、人聞えさす。彼のおはしましし折の御用意の程を思し知りつつぞ、分ち奉らせ給ひける。其中にも、大入道殿より渡りたりし所々をぞ外様には爲させ給はず成りにける。其れも然るべき事に人申しけり。此三條院をば、一品の宮の御領にぞ其折より宮はせければ、爲させ給へれど、其處にはおはしますまじ。寢殿は寺に成させ給ひければ、御忘の程過ぎなば壞たせ給ふべしとぞ思召しける。中宮は御忌果てんまではなど思召しながら、此院の御物の怪なども、いと恐ろしければ、あいなし、何處にても疎かなるべき事かはとて、渡し有りて、一條殿に渡し奉らせ給ひてけり。御法事やがて此院にて六月二十五日に爲させ給ふ。其程の事ども、いといかめし。四の宮まだ童にておはしまして、斯かる折にやなど思召す事も有りけれど、大方いと長閑に大人しき御心にて、此折ならずとも、自ら心あわたたしきやうなりなど、思し愼しむるを、おはしまさましかば、

す。攝政にて世をまつりごたせ給へば、如何でかは萬づの大事どもの叢合ひたれば、いと本意無く思召せど、外ながらに萬づを知らせ給ふも、同じ事なり。十二月の末ぞ御讓位せさせ給ふ。一條院のおはしまし行幸にぞおはしましける。五月雨もいみじき頃にて、むづかしけれど、げに其れに障るべき事ならねば催させ給ふ。宮達の三所歩み續かせ給へるぞ、いみじう哀れに悲しき。東宮は萬づ物覺えさせ給はず。皇后宮も許多の年頃の御中らひなれば、聞えさするも疎かなり。御心地は、やんごとなけれど、外外におはします御身どもになん。限り無き御身なれど、同じ煙と成らせ給ふも、いみじう悲し。或人思ひ續け聞えさせて、獨言ちけれど、其人知らず。

　日の本を照しし君が岩蔭の夜半の煙となるぞ悲しき

斯くて事果てて歸らせ給ひぬ。此後は、御念佛などに、僧の然るべき限り、侍ひおはしましつる所所も拂ひて、佛掛け奉り、然るべき僧などの隱れ仕うまつる程も、いと忝し。然るべき所所の板なども放ちて、宮宮土殿におはしまし、中宮もさやうにておはします程、あさましう悲しとも疎かなり。御衣の色など皆濃く染り渡したるに、あさましき物などを宮宮奉りて、七日七日の御誦經を修させ給ふも、いみじう哀れに悲し。然るべき殿ばら、殿上人、皆哀れなるままに、歌ども詠みたれど、書きも留めず。道命阿闍梨のばかりぞ人書き留め置ける。

　あしびきの山ほととぎす此頃は我が泣く音をや聞きわたるらん

へり。皇后宮は外に聞かせ給ふ覺束なさを添へて、いみじう思し惑はせ給ふ。殿の御前もいみじう歎かせ給ふ。一院とておはしまさんに、堪へたる御心掟てを、口惜しう心憂く、返す返す思召せど甲斐無し。同じ院と申しながら、御心美はしく、物の映おはしましつるものを、姫宮などの大人びさせ給へらん程の御掟てもゆゆしかりつるをと、返す返す思し續けさせ給ふ。然は斯うても、平らかにだにおはしまさばなどぞ見奉らせ給ふ。御物の怪どもいと心あわただしき氣はひなれば、御命の方は、然りともと思さるるに、突然にや、少し輕ませ給ふやうなれば、打怠みて、誰も心のどかに思さるるも、道理に思さる。斯くて宮宮如何にと、哀れに夜晝惑はれ仕うまつらせ給ふぞ、いとめでたき。東宮にはいとゆかしく、御有様を常に聞かせ給ふにつけても、いみじう御胸塞がりて、悲しう思召さる。斯くて日頃の心のどかなるに、打怠ませ給へるに、寛仁元年五月九日の晝つ方、あさましく成らせ給ひぬ。院の中響動みて喧騷るとも疎かなりや。宮宮ぞ惜ませ給はぬに、中宮は御衣を引き被きて、物も覺えさせ給はず。橘三位も云ひ續けて、泣く泣く消え入りて臥し給へるも、いみじう珍らかなる悲しさなり。年頃の女房達、殿上人、云へば疎かに惑ひたり。一品宮の御齢五つにぞ成らせ給ふ。御髮は尺丈ばかりにぞおはします。世をいと心あわただしげに思召して、物の哀れに倚りて、御涙を押拭ひておはしますを、見奉る人人、御乳母など、遣らん方無く悲し。尋常の人などは何とも知らぬ程を、如何に思し分たせ給ふにかと、疎かならずなん。大人の泣き騷ぐに、一方は心あわただしう思さるるなるべし。殿の御前、いみじう思し歎かせ給ひて、御忌にも籠り仕うまつらせ給はぬ事を思召

る程の中々聞き過ふ。三位院(?)御有樣おどろおどろしうおぼしますを、殿も上も、いみじう思し歎かせ給ふと
ぞ。

木綿四手

斯くて中宮いと若き御心地に、此事聞きにくく思さるれば、如何にせんと人知れず思し歎かれて、御覽ぜし伊勢の海の千尋の底の空せ貝、戀しくのみ思されて、沙垂れ渡らせ給ふ。わりなき御有樣も心苦しきに、三位中將は跡絶えて、わりなくのみ思ひ亂れて、風に附けたりけるにや、斯くて參らせたり。

榊葉の木綿四手かけしそのかみにおしかへしても似たる頃かな

人知れぬ事ども多かめれど、世に聞えねば猜び難し。また高欄に結び附けたりける。

賢木の鏡臍の構や是れならん踏みみ踏まずみ心まどはず

宮は「布留の社の」などよ思されて、哀れなる夕ぐれに、御手づから尼に成らせ給ひぬ。又哀れに昔物語に似たる御事ともなり。皇后宮は聞きにくかりつる御事も、今又いみじう悲しう思さるる事も疎かなり。院は聞し召して、雄雄しき御心は通へ、なん、目覺ましかりつるよりはと思されけり。御惱み重らせ給ひて、院源僧都召して御髪下ろさせ給ふ程、中宮を初め奉りて、宮宮いみじう世に歎かしき事に思召して、淚に沈ませ給

なれど、世に斯く漏り聞えたるに、院の御氣色のいといみじきなり。彼の在五中將の「心の闇に惑ひにき夢うつゝとは世人さだめよ」など詠みたりしも、斯樣の事ぞかし。其れは又、まことの齋宮にておはせし折の事なり。されど是れは前の齋宮と聞えさすれば、あながちに恐ろしかるべき事にも有らねど、院のいと際猛く思し宣はするが、いとかたはらいたきになん。皇后宮いといみじう思し亂れたるに、宮宮の御氣色どもいみじきに、東宮も理無う心病ましげに思し亂るべし。斯る事無き年だにはかなく明け暮るるに、況いていみじき大事どもの有りつれば、年も復りぬ。今年をば寛仁元年丁酉の年とぞ云ふ。正二月は例の有樣にて過ぎもて行くに、三月には例の直し物など云ふ事あればにや、三月四日司召あり。大殿、左大臣を辭せさせ給へれば、堀河の右大臣、左大臣に成り給ひぬ。閑院内大臣、右大臣に成り給ひぬ。内大臣には殿の大將成らせ給ひぬ。斯樣に事ども變りぬると見る程に、同じ月の十七日に、大殿、攝政を内大臣殿に讓り聞えさせ給ふ。内大臣殿御年今年二十六にぞおはしましける。いと若うおはしますにと、恐ろしう思召しながら、我れおはしませば、何事も自らと思召すなるべし。我は只今は御官も無き定にておはしますやうなれど、御位は殿も上も准三宮におはしませば、世にめでたき御有樣どもなり。殿の御前の御幸ひは更にも聞えさせぬに、上の御前の斯く后と等しき位にて、萬づの官爵を得させ給ひなどして、年頃の女房は皆位階を得、或るは三位四位に成るも有り、樣樣いとめでたくおはします。斯くて四條の皇太后宮惱ませ給ひて、祭など果てて後に崩せさせ給ひぬと云ふ。分かるる方無く、萬づに四條大納言殿あつかひ聞えさせ給ふを、いと哀れな

新田の池、攝政、御屏風、

底清き新田の池の水の面は曇り無き世の鏡とぞ見る

斯樣に同じ心なれば、皆止めつ。豐明の夜、荒れたる宿に月の漏りたりければ、里人、誰れと知らず、

めづらしき豐の明りの光には荒れたる宿の中さへぞ照る

此度の御即位、大嘗會、御禊などの程の事ども、すべて珍らしくやんごとなきこと數知らず。年中行事の御障子にも書き添へられたる事ども、いと多くなん有なる。斯かる程に、前齋宮上らせ給ひて、皇后宮におはします。宮は猶しとて、又領らせ給ふ所にぞおはしまさせ給ひける。年頃にいと大人びさせ給へる御有樣も、いみじう疎かならず見奉らせ給へれど、外に暫しとておはしまさせ給ひける程に、帥殿の嫡君の三位中將道雅の君、如何がしけん、參り通ふと云ふ事世に聞えて、私語き騒げば、宮いみじう思し歎かせ給ふ程に、院にも聞し召してけり。他事ならず、齋宮の御乳母、やがて彼の宮の内侍に成させ給へりし、中將の乳母の所爲なるべしとて、院いみじうむづからせ給ひて、やがて長く遥かでさせ給ひつ。宮は皇后宮迎へ奉らせ給ひて、院には、いとどしき御心地に是れを聞し召ししより、いとど増さらせ給ふやうに思されて、宮達も隙無く御使にて、皇后宮と内との程の御消息、いみじう御文繁りなり。齋宮我にも有らずいみじう思召さる。中將の内侍は、やがて逐はせ給ひしままに、彼の道雅の君迎へ取りて、我が御許にいみじう傅はりて置きたりと聞し召す。皇后宮は目覺ましう思召されて、人知れずいみじう思し歎かせ給ひけり。眞、委細知り難き御有樣

にては大殿おはします。右大臣にては堀河の大臣、內大臣にては閑院の大臣おはします。何れの殿ばらも皆馬にて仕うまつらせ給へれど、大殿は萬づ果てて渡らせ給ひぬる際に、又更に御前など撰りすぐりて、華無くきららかなる限りを撰らせ給ひて、三四十人ばかり仕うまつりたるに、御隨身十二人、內舍人の御隨身なども馬に乘りて、御前えも云はず參りののしりて、我は唐の御車に奉りておはします程、すべて形容び聞えさすべきやうも無し。又さばかりめでたき事やは有りつる。いみじき見物なり。斯くて十月も過ぎぬ。霜月に成りぬれば、大嘗會とて、又人人ひびきののしる。五節も今年は今めかしさ增さりて、をかし。悠紀、主基の歌ども、例の筋同じ事なれど、片端をだにとて記るせり。悠紀の方の歌、備中國稻舂歌、內藏權頭慶滋の爲政、玉田の郡、

年得たるたまだの稻を刈り積みて千代のためしに舂きぞ始むる

主基の方、大內記藤原義忠の朝臣、

岩隈の橋踏み鳴らし運ぶなりそともの道のみつぎ豐かに

悠紀主基の歌ども、同じさまに斯樣なり。御屛風の歌、爲政、千屋野と云ふ所を、

秋草になびく千屋野の花すすき穗に出でて見ゆる君が萬づ代

玉の村菊と云ふ所を、是れも御屛風、義忠、

うつろはで庭おもしろき初霜におなじ頃なる玉のむら菊

菊の花おもひの外にうつろへばいとど昔の秋ぞ戀しき

さて程も無く、宮の御前は三條院に渡らせ給ひぬ。院のさま、わざと池、遣水無けれど、大きなる木ども多くて、木立をかしく、氣高う、尋常ならぬ樣したり。此度はいと心殊に造らせ給へり。入道一品の宮の年頃住ませ給ひし所なれば道理にぞ。昔とこそは云はめ。彼の宮のおはしましし時、四條大納言の權中將など聞えし折、月夜に參り給ひて、誰とも無くて、人を呼び寄せ給ひて、女房の御中に、斯く聞えさせよ「松か浦島來て見れば」と云ひかけておはしにける程など、思ひ出でられて、をかし。斯くて御禊に成りぬれば、いみじう常にも似ず、是れは何はの事も改めさせ給へり。殿ばら君達の御馬鞍、弓、胡籙の飾りまで、いといみじ。女御代には、高松殿の姫君出でさせ給へり。其車の袖口、數も知らず多く重なりて輝けり。帝、實におはしませば、大宮御輿に乘りたれば、其程形容びやらん方無くめでたし。大殿の御有樣など聞えさせんにも古代なり。度度年頃の御氣色に、こよなう立ち勝らせ給へり。思ひ成しにやとまでなん。只今の左大將には殿の太郎君こそはおはすれ。右大將には小野の宮の殿おはす。左大將の御若さ、いときびはにをかしきに、小野の宮は長び給へれば、其れはいみじう尋常ならぬ顏附に、打微笑み給へる口附こそ、猶締り離う、重篤りて見え給へと、物見車、棧敷など、昔の事覺ゆれば愛で聞えしが、左衞門督、右衞門督にては皆殿の君達おはします。御隨身府姿ども物華やかに、折に週ひたる御有樣ども、時の花の心地して、いとめでたし。宮の女房の車、内方のなど、女御代の御供のなど、えも云はぬ車四五十ばかり、曳き續きて押し凝りたり。左大臣

へり。彼處におはしましつる程、宮宮の御使、然るべき御使ども、數知らず頻り參りつるもめでたくぞ。さて歸らせ給ひぬ。又の日中宮に聞えさせ給へり。一條殿より、

あらし吹く深山の里に君を置きて心も空に今日は時雨れぬ

御衣の色もゆゆしければ、猶彼の御準備まではとて、小一條殿に渡らせ給はず。殿の御前、覺束なからず一條殿に渡らせ給ひつつぞ、萬づ聞えさせ給ひける。怪しう今年も猶世の中に火騷がしくて、また所所燒けぬ。人の口安からぬ世にて、一條殿と枇杷殿と燒くべしと云ひ喧騷れば、憂たてゆゆしう思されて、御愼みなど有りけれど、十月二日枇杷殿燒くるものか。あさましういみじとも疎かなり。然るべくものの云はするなりけりとも、今ぞ見ゆる。宮の御前も、院も、此枇杷殿いと近き所の、春宮亮業遠と云ひし人の家、大將殿に添りたりしにぞ、先づ渡らせ給ひぬる。院、宮、いとあさましき事なりや。萬づ今は斯かるべき事かは。おぼろげの位をも去り離れたるに、更に斯かるべきにもあらず、人の思ふらん事も恥かしと思召しけり。三條院も今は出で來ぬれば、麗しき儀式も無くて、夜を晝に急ぎて渡らせ給ひぬ。宮は其院いと近き程に、讃岐守濟政の朝臣の家に渡らせ給ひぬ。枇杷殿の燒けし折のままに、命婦の乳母、里より菊に挿して參らせたる。

いにしへぞいとど戀しきよそよそにうつろふ色を菊につけても

と有れば、辨の乳母返し、

しましける夜しも燒けぬれば、つゆ取り出でさせ給ふ物無く、年頃の御傳はりの寶物ども數も知らず、土殿まで燒けぬ。徒然るべきなめりと思し歎かせ給ふに、此殿の山、中島などの大木ども、松の苔かかりていみじかりつるなど、大方一木殘らず成りぬ。あさましう、殊更にすとも、いと斯く燒くるやうは有り難げなり。いみじき家と云ふとも造り出でてん。銀、黃金の御寶物どもは自ら出で來、設けさせ給ひてん。この木どもの有樣、大きさどもぞ世に口惜しき事に思し歎かせ給ふ。大宮の御領の所なれば、其の御具ども、然るべき物ども、唯だ此殿にのみこそは置かせ給へりつれ。すべて珍らかなりとも疎かなり。殿は小一條殿に渡らせ給ふ。此殿はやがて八月より手斧始めさせ給ひて、來年の四月以前に造り出づべき由仰せ給ひて、國國の守、屋一つづつ當りて、夜を晝にて急ぎののしる。斯くて九月にぞ尼上、觀音寺と云ふ所におはしまさせ給ふ。上の御前も御送りにおはします。さて其處に然るべき樣にて斂め奉らせ給ふ。御果てまで御念佛仕うまつるべく、許多の僧どもに萬づを掟てさせ給ふ。いみじう嚴しきやうに忌ませ給へど、上の御前のおはしませば、大殿を初め、然るべき殿ばら、皆仕うまつらせ給へば、すべてえ忌み敢へぬやうに、おどろおどろしき御裝ひ、心ざしの程、唯だ推し量るべし。此度の事なれど、いみじかりける上の御葬ひかなと申し思はぬ人無し。後後の御事など推し量りて知りぬべし。御果てまでは、山の僧どもの山籠りしたるして、僧都の護摩、阿彌陀護摩など仕うまつらせ給ふ。丹波中將をば然る者にて、御殿の小少將いみじう思ひ聞え給へれば、上の御前、萬づに蘿育みのたまはす。觀音寺より又の日歸らせ給ふ心無し。哀れに悲しく淚を流させ給

かるべきにもあらず、唯だ本意無き事には、此御忌みに籠らずなど在るこそ有れ。其れも外外にて、然るべく掟て聞えん、唯だ同じ事なり。如何にぞ此中將少將の事は、と聞えさせ給へば、隙無く求め惑はし給ひつるは、猶御志いみじきなりと見つるなん哀れなる。年頃も哀れに見奉り、添ひ奉らざりつれど、おはすと思ひつればこそ有れ、限りの度と見奉るが、いみじう悲しき事、とて果ても敢へず泣かせ給へば、殿の御前も、哀れに古代なりつる御心こそ戀しかるべけれ、夏冬の衣更への折の御志の程、時につけて先づ思ひ出でられんとすらん、とて潮垂れさせ給ふ。其れは、昔より今に、御衣更への折の夜晝の御裝束二領を、必ずして奉らせ給ふ事の有りつれば、更に更に、今は斯かる事、止めさせ給へ、と聞えさせ給ひつるを、然ば何をか志とは見え奉るべき、とて爲させ給ひつるなりけり。傳の殿、今は賴光が家におはしませど、其れも同じ事にして奉らせ給ひける。斯くて、彼の尼上の掟てさせける事は、我が帝の御事始に斯く成りなん事の、折ふしも口惜しき事なれば、暫しは然るべき樣にて、山寺などに納めて置かせ給へ、雲煙とも此世の大事の後に、心安く爲させ給へ、と聞え置かせ給へれば、げに哀れに能くも思しのたまはせけるかなとて、然樣にぞ思し掟てさせ給ひける。長月ばかりにぞ然樣におはしますべかりける。其程は入棺と云ふ事してぞおはしまさせ給ひける。明暮の御物參り、御手水など、昔のさまの事どもするも、いみじう悲しく思召さるる程に、七月二十餘日に火出で來て、土御門殿燒けぬ。大方その邊の人の家殘り無くて、四五町が程燒けぬれば、差し次ぎ法興院も燒けぬ。上の御前は、斯かる御思ひにて、一條殿におはしまし、大宮も、殿の御前も、内におは

おはしまして、殊に今年不安にて過ぐさせ給ふべき御祈りを、よくよく爲させ給へ、いみじき大事有るべき年なれば、いとこそ恐ろしけれ、など種々聞えさせ給ふをば然るものにて、斯う心細く頼み少なき御氣色を悲しく思召して、壽命經の不斷の御讀經など爲させ給ふ。普賢經、御修法數を盡したり。權少將、丹波中將、衛所去らず、聊かも立ち離るれば、何ら何らと求めさせ給ふ御志のいみじきと、上はいと心苦しう覺えさせ給ふ。念佛、懺法など聞かま欲しう爲させ給へば、然るべき僧どもして、隙間なく行はせ給ふ。いみじう尊し。然らぬだに斯かる事は尊きを、況して年老い頼もしげなき御有樣なるに、哀れに尊き事どもに、上の御前、いとど涙を流させ給ふ。法性寺の座主、日日に御戒授け奉らせ給ふ。其程の說教、いみじう尊く悲し。大原の入道の君も、年頃里に出でさせ給はざりつるを、此度さへは如何でかと、聞き過ぐし難く思されて、參り給ひて、唯だ御枕上にて、念佛を聞かせ奉り給ふ。傅の殿も常に參り給ひつつ、明暮侍は由を驚かせ給ふ。遂に空しく成らせ給ひぬれば、扱ひ聞えさせ給へる甲斐無く、悲しと思し惑はせ給ふ。大殿聞し召して、急ぎおはしまして、上の御前立ち退かせ給へと聞えさせ給へど、物も覺えさせ給はぬ程なれば、聞え煩はせ給ひぬ。とかく聞えさせて、上の御前出でさせ給へれば、殿は土に立たせ給ひて、一家に取りては、げに哀れに悲しき御事なり。されど世間を見思ふに、是れ必ず有るべい事なり。其が中に、何時も同じ事とは云ひながら、己が侍らざらん世などには、いと口惜しからまし。斯く平安に誰もおはします程に斯く成り給ひぬる、いとめでたき事なり。唯だ折ふし便無しなど云ふは、餘りの御事なり。彼の大事の程などに、斯

へ參らせ給へとのみ有れど、前前のやうに思ひの儘にては如何でかと、思しやすらふめるに、大殿の御許に成らせ給ふべしと有る事の世に聞ゆるにも、堀河の院には、斯樣の事に由り押返し物を思すべし。院には猶御心地いと惱ましう思されて、物心細く思召さる。今年は御禊、大嘗會など有るべき年なれば、今年ともかくもおはしまさずもがなとのみ思召しけり。殿の御前公事のさまざま繁きにも思し紛れず、院の御事を思し扱はせ給ふ。枇杷殿におはしませば、宗像の御祟りもむづかしければ、三條院を夜を晝に成して急ぎ造らせ給ふと有るは、入道一品の宮のおはしましし所なりけり。はかなう五月五日にもなりにければ、大宮より、姬宮にとて、藥玉奉らせ給へり。其れに、

　底深く引けど斷えせぬあやめ草千年を松の根にや比べん

御返し、中宮より、

　年ごとのあやめの根にも引きかへて此はたぐひ無の長きためしや

今年は大事ども有るべき年なれば、今より若公達、はかなき壺胡籙の飾り、乘り馬の鞍の事を思し準備させけるも、をかし。斯くて六月も立ちぬ。七月朔日には、法興院の御八講など準備がせ給ふ。斯かる程に、一條殿の尼上、日頃御心地例ならず思さるれば、殿の上渡らせ給ひて見奉らせ給ふに、此御事、例の御惱には似させ給はず、物心細き樣に思しのたまはせ、はかなき事どものたまはせ思したるも、道理の御事なれど、いと哀れに如何に如何にと靜心無く思し歎きて、さまざまの御祈りども、數知らず爲させ給ふ。殿も特別に

じうおはしますめる。院、春宮の御事をさへ申しつけさせ給へれば、御前もおはしませど、萬づ扱ひ聞えさせ給ふ。堀河の院には、昔に聞く御有様を、本意無く思し歎かるれど、承香殿の、今は宰相の斯く物し給ふれ、口惜しく見奉らせ給へど、今は此女御の御有様にぞ萬づ思し慰めける。宰相の御子など出で來給へれば、彼の水の新思し出でられて心憂し。式部卿の宮も同じき宮達と聞えさすれど、御心も容貌もいみじう清らに、御才なども深くて、やんごとなくめでたうおはしませば、御宿世の惡ろくおはしましけるを、世に口惜しきものに申し思へり。大殿の大將殿、此宮の御事を、いと違はしきものに思ひ聞えさせ給ひて、常に參り通はせ給ふと見し程に、大將殿の上の御弟の中の宮に、此宮を婿どり奉りてんと思し心ざしたるなりけり。さて婿どり奉らせ給ふ。大人二十人、童女四人、下仕同じ數なり。我が御女のやうに、萬づを準備ぎ立たせ給ひて騷がせ給ふ程、上一所を思ひ聞えさせ給ふ故にこそと見えさせ給ふ。有るが中の弟宮は、三條の入道一品の宮の御子に爲奉らせ給ひし、まだ十ばかりにやおはしますらん。此度の御宿世に居させ給ひぬ。其御扱ひも、唯だ此大將殿萬づに爲させ給ふ。式部卿の宮いと甲斐ありて、もてなし聞えさせ給ひけり。一品にておはしましかば、御有様などいとめでたきに、今はいとど、大將殿御後見せさせ給へば、御封など、何れの國の司かは疎かに思ひ申さんと見えて、いとどしき御有様なるに、大宮よりも、常に何事につけても聞えさせ給ふ。大將殿の御志、院などのおはしまさましにも、斯ばかりの事をこそは爲させ給はましかとのみ見えさせ給ふ。程無く、尋常ならず成らせ給ひけり。いと哀れになん。東宮には、堀河の女御參らせ給

長和五年正月廿九日御讓位、春宮には式部卿の宮立たせ給ひぬ。二月七日御卽位なり。帝は九つに成らせ給ひ、東宮は二十三にぞおはしましける。こよなき程の御長年なり。下り居の帝をば三條院と聞えさす。下りさせ給へれど、內裏の燒けにしかば、猶枇杷殿におはしましつれば、其儘におはします。中宮は一條院におはしましつれば、さておはします。式部卿の宮は、斯く東宮に立たせ給ふべしと云ふ事ありければ、年頃女御の御許に、堀河の院におはしましつるを、皇后宮おはしまして、我が住ませ給ひし舊の宮の東の對に假かに渡し奉らせ給ひてしかば、堀河の大臣も、女御も、如何なるべき事にかと思して、「なかなか嬉しき事にも」と云ふらんやうに、事の始に、むづかしく思し亂るべし。斯様の事を、宮には聞し召して、物心づき無う思召すべし。式部卿の宮とは一條院の帥の宮をぞ今は聞えさすめる。若し此度もやなど思しけんこと音無くて止ませ給ひぬ。東宮を道理に世人は申し思ひたれど、此宮には、あさましう事の外にも有りけるかなと、打返し打返し我が御身一つを怨みさせ給へど、甲斐無げなり。御卽位に、大極殿に帝渡らせ給へるに、御髮結はせ給へる程、いみじう愛くしうめでたくおはします。春宮の御有様の、やんごとなくめでたくおはしますにつけても、皇后宮は、あはれ大將殿おはしまさましかば、如何にめでたき御後見ならましとのみ、御心の中に思し續けさせ給ふも、いみじければ忍ばせ給ふ。大殿は、世は變らせ給へど、我が御身はいとど榮え增さらせ給ふやうにて、「河ぞひ柳風吹けば、動くと見れど根は强し」と云ふ古歌のやうに、動き無くておはしますも、えも云はずめでたき御有樣なるに、猶また此度は、今一入の色も、心殊に見えさせ給ふぞ、いとどいみ

きたりけるに、入らせ給ひて、一月にだに成らぬに、斯かる事は有るものか。是れにつけても、帝、世の中を心細く思召さるる事限り無し。皇后宮も、在り在りて参らせ給へるに、斯かる事の有るを、いみじう思し歎かせ給ふべし。上は下りさせ給はんとて、斯く夜を晝に急がせ給ひしかども、すべて心憂く、斯かる事の有るをぞ、「脱文アルベシ」内の燒くる事は度度になりぬ。一條院の御時など度度なりしかど、此度のやうに、あへなきやう無し。殿の御前なども、いみじう思し歎かせ給ふ。帝は枇杷殿へ渡らせ給ひぬ。さても中宮の入らせ給はずなりにしを、返す返すめでたき事に世の人も申し思ひけれ。中宮は、京極におはします。返す返す珍らかなる事を、上は萬づの事の中に、いみじく思召さるべし。下りさせ給はん事も、内など急ぐ造りて出でられれば、例の作法にてと思召しつるに、返す返す口惜しく、さりとて又造り出でんを待たせ給ふべきにあらず。來の世の例にも成りぬべき事を思召すも道理になん。斯かる程に、御心地例ならずのみおはします。内にも、物の兆なども轉たて有るやうなれば、御物忌がちなり。御物の怪も尋常ならぬ樣にしおはしませば、宮の御前も、物騒がしうなど思されて、心よからぬ御有樣にのみおはしませば、殿の御前も、上も、是れを又安からず歎かせ給ふ。年は幾ばくにも有らねば、心あわたゞしきやうなるに、いと惱ましくのみ思召さるるにぞ、如何にせましと思しやすらはせ給ふ。師走の十餘日の夜、月のいみじう明きに、上の御局にて、宮の御前に申させ給ふ。

心にも有らで浮世に長らへば戀しかるべき夜半の月かな

なりし事どもにかと怪しう思されて、唯だならましよりは、いみじう口惜しう思さるべし。其れも身の御心の憎きなるべし。上はいと物恥かしう思さる。御乳母無くば、などか然も有らざらんと、憎からぬ事なり。猶心賢からん御乳母は、人の御爲めに、太切の者にぞありける。然て後にはいみじき事ありとも甲斐あらましやは。また大宮に山の井の四の君と云ふ人參りたりしを、此大將殿物など時時のたまはせけるを、尋常ならぬ樣に成りにければ、如何にも如何にも然だにも有らば如何に嬉しからんと思されけるに、其程になりて出で居て、いみじう祈りなどし、殿も物など遣はして、いと好き事に思召し掟てさせ給ふに、其氣色有りて、萬づに騷ぎける程に、兒は生れ給ひて、母は亡せ給ひぬと喧騷る。哀れなる事かなと思しのたまはする程に、君は男にておはしければ、嬉しうもなど聞し召しける程に、二三日ばかり有りて、其れも亡せにけり。母いみじう老いて、子、孫多く失ふ中にも、此度の事を、いみじう増す事無く思ひけり。大將殿の御有樣、斯やうにて御子のおはしますまじきにやとぞ人人聞えさすめる。斯くて內裏造り出でて、十月に渡らせ給ふ。其程の有樣例の如し。中宮、兒宮入らせ給へ入らせ給へと有れど、頓に入らせ給はぬ程に、皇后宮ぞ入らせ給ふ。女二の宮の戀しうおはしませば、ゆかしく思ひ聞えさせ給ふなるべし。さて入らせ給ひて、日頃おはします程に、內の御物忌なりける日、皇后宮の御湯殿仕うまつりけるに、如何がしけん、火出で來て打燒けぬ。斯かる事は、さても夜などこそ有れ、晝なれば、いといみじうかたはらいたく、心あわただしき事多かり。東宮も入らせ給へりしかば、其れはやがて一條院に渡らせ給ひぬ。夜晝嚴しく仰せられて、急ぎ造り畢

らぬ身に侍れば、何事も皆見聞きてなん侍るを、此大將を、やんごとなき邊に召し入れられぬべく思し構ふめるを、日頃安からぬ事と思ひ侍れど、さばれ、唯だ任せ聞えて見んと思ひ侍るに、いと安からぬ事に覺えて、自ら聞えんとばかり思ひしに、いとほしく此君の斯くおどろおどろしく物し給へば、いと心苦しくてなん斯くも聞ゆる、とのたまはするは、故中務の宮の御けはひなりけりと、心得させ給ひつ。殿畏まり申させ給ひて、すべて、返す返す道理に侍れば、畏まり申し侍る。されど是れは、此男の怠りにも侍らず、又自らのする事にも侍らず、自ら侍る事なり、と申させ給へば、如何に、然は子は愛しく思すや思すや、と責めて、度度申させ給ふ。此事を長く思し絶えねとなるべし。殿の御前、好し、御らんぜよ、げに然侍る事なり、と道理の由度度申させ給へば、然は今は心安く退かり歸りなん。さりとも、宰相は大臣のたまはじとなん思ひ侍る。若し然らば怨み申すばかり、とて、然りぬべき法文の哀れなる所打誦じなどし給ふ。誠に諍ふ所無くて、暫し打聞きて、飽かぬ名殘も無く、御心地爽かにならせ給ひぬれば、殿の御前、上など、いみじう嬉しと思召されたり。此御物の怪を、邪氣にて、さまざま有るにこそ有りけれ、是れ失りぬれば、かき醒まし有もせず。御修法さまざま猶いみじう爲させ給ふ。さてもあさましかりける御心地にも有るかな、かねて斯かる事の有るは、いと嬉しき事なり、さて後に斯樣の事あらましかば、誰が御爲めにも、便無からまし、とのたまはするものから、いと口惜しうなん思されける。斯くて帝は、猶御心地苦しう、久しうも保つまじきなめりと思召すに、內裏のえ出で來まじき事を世に口惜しき事に思召し歎かせ給ふ。彼の大將殿は、さても如何

とに出り、この上の御乳母などの、其れを申させたる程に、自ら神の御心は、斯く煩はしく聞え給ふなりけり。上いと聞き苦しく思召さるれど、如何がはせさせ給はん。大殿いとあぢきなき事かなと思し聞かせ給ひて、如何がすべきなど思す程に、大將殿、唯だ消えに消え入らせ給ひて、いとゆゆしく見えさせ給へば、多數の御讀經、御修法、何くれの御祈りの僧ども集りて加持參り、萬づに驗ののしれど、あさましくておはすれば、殿の上、物も覺えさせ給はず、急ぎ渡らせ給へり。いとどゆゆしう見え給へば、唯だ御顏に御顏を當てて、涙を流しておはしますに、殿の御前、許多の年頃仕うまつりつる法華經助けさせ給へ、此世界に道弘めさせ給ふ事、多くは某仕うまつれる事たり。此折だに驗を見奉らず、恩を被らでは、何時をか待たんずる、と云ひ續けさせ給ひて、泣く泣く壽量品を讀ませ給ふに、大將殿打身じろぎ給ひて、打頰笑はせ給ふ。殿いよいよ涙留め難くて、讀み入りておはします。御物の怪、御前近く侍ふ女房の、日頃斯かる事無かりつるに移りぬ。御物の怪、いと氣高くやんごとなき樣子にて、いみじうたん僧達皆誦ありて侍ふに、大將殿には御湯など參らせ給ひて、上の御前、唯だ兒のやうに抱き奉らせ給ひて、いみじう思召したる事限り無し。御物の怪、殿の御前を、近く寄らせ給へと申せば、寄らせ給へれば、己れは世に侍りし折、いと痴れたりなどは人に覺えずなん侍りし。また淡淡しく人中に出で來て、斯樣に物など聞ゆる、いと怯懦しく、有る事なれど、子の愛しさは、自ら大臣も知り給へればなん。此大將を己が世に侍りし折、志ありて、如何でなど思ひ給へしかど、命絕えて、斯くて侍るにこそ有れと、天翔りても、此邊を片時去り侍らず、いと罪深か

程に如何がしけん、大將殿、日頃御心地惱ましく思さる。御風などにやとて、御湯ゆでせさせ給ひ、朴聞し召し、御讀經の僧ども、番僧かず仕うまつるべくのたまはせ、明尊阿闍梨夜毎に參り、夜居仕うまつりなどするに、御心地更に怠らせ給ふ樣ならず、いとど重らせ給ふ。光榮、吉平など召して、物問はせ給ふに、御物の怪や、又畏き神の氣や、人の呪咀など、さまざまに申せば、神の氣と有らば、御修法など有るべきにあらず。又御物の怪など、有るに任せたらんもいと恐ろしなど、さまざま思し亂るるに、唯だ御祭、祓頻りなり。大殿猶心無く急がしう歩りかせ給ふ。上の御前も、安き心無く思されて、渡らせ給はんとのみ有れど、此の御前、己が在る、同じ事なれば、只今はと聞えさせ給ふ程に、猶此殿は小くより風重くおはします人とて、風の治どもを爲させ給ふ。日頃過ぐるに、更に怠らせ給はねば、今は術無しとて、御修法五壇始めさせ給ふ。五日ばかりに、その驗けざやかならず、御物の怪ども出で來てののしる。大殿にも、さまざま出で來る例の御物の怪どもとぞ云ふ。などてか、其れ斯うしも惱まし奉るべき。物の怪は然ぞ云ふ、など申して、例の驗ある心譽僧都、觀効律師など云ふ人人、さばかり忠實に加持し奉るに、更に此の御物の怪、露と顯はること無し。斯くて一七日過ぎぬ。今七日延べさせ給へり。此度ぞいと氣恐ろしげなる聲したる物の怪出で來たる。是れ此日頃惱まし奉りつる物の怪なめるとて、喝り掛かりて加持しののしりて、假り移したるけはひ、いと猛たて有り。如何に如何にと思す程に、早や貴船の現はれ給へるなりけり。此にはなど斯かるべき。此殿あだたるわざ爲させ給ふ事も無かりけり。更に覺えぬ事なりと、能く尋ぬれば、彼の内邊より聞ゆるこ

御覽じて、男子は妻は一人のみやは持たる。痴れの樣や。今まで子も無かめれば、とてもかくても、唯だ子を設けんとこそ思はめ。此邊は、さやうにもおはしましなん、とのたまはすれば、畏まりて立たせ給ひぬ。大將殿、我が御殿に歸らせ給ひて、上を見奉らせ給へば、いみじうめでたく裝飾ひたる御帳の前に、短き几帳を引き寄せておはします。御衣の裾に、御髮の溜まりたる、御几帳の側より見ゆる程、唯だ繪に書きたるやうなり。二の宮の御髮の有樣は知らず、げに斯く恥かしげに、やんごとなからん方は、えしもや勝らせ給はざらんと、御心の中に思されて、常よりも心好う御物語聞え給ふに、打解けたらぬ御氣色を、例の事ながら、有りつる事仄聞えたるにやと、御心の鬼に苦しう思さるるに、人知れず御胸騷がせ給ふも、怪しう雄雄しからぬ御心なりや。其れも御志の限り無きなるべし。何事も世の御物語哀れにもをかしうも聞え給ふに、ます宮の御直衣姿もをかしうて、出で入り紛れ給ふを、殿唯だ我が御子のやうに愛くしう見奉らせ給ふ。内には、人知れず御用意ども有りて、作物所に、御調度の事、心殊に仰せらる。皇后宮にも内内にはいみじう思召し準備がせ給ふを、此事如何でか漏り聞えけん、上聞かせ給ひて、唯だともかくも思しのたまはせで、唯だ御心の中にこそは思すらめ。上の御乳母は俊遠が妻なり。是れを聞きて、いとあさましう思ふ。例の人よりは、心樣はかばかしう臈臈しく、心賢くも有る人にて、え忍び敢へず、時時くねくねしき事など打云ふを、上いとかたはらいたき事に思す。さばれ斯う云はで在れかしなど、制しのたまはする程なども、尋常ならぬ御心なりかし。さて皇后宮と内とより、頻りに御消息通ひ、宮達など急がしう出で入らせ給ふ。斯かる

涼しさは生の松原まさるとも添ふる扇の風な忘れそ

斯くて、我は陸行より、北の方は船にて下らせたまふ。一品の宮を、世に心苦しう思ひ聞えさせ給ひながら、斯う遥かに見し立ちぬれば、宮もいみじう哀れに、心細く思さるべし。源中納言に高う宮の御事聞え附けて下り給ひぬ。あさましう哀れなる世の有様なりかし。おはする程など、前前よりはこよ無しなど、人褒め聞ゆるさへ哀れなり。殿の大納言をば今は左大將と聞ゆ。帝の御物の怪ともすれば起らせ給ふも、いと恐ろしく思すに、皇后宮の御女一の宮は齋宮にておはしましにき。女二の宮を兒より取り分きていみじう愛しくし奉らせ給ふに、我が御身だに心のどかにおはしまさば、如何にも如何にも有るべき御有様なれど、ともすれば、今日か明日とのみ心細く思召したれば、如何でか此御爲めに、然るべき樣にと思召すに、只今すべて思召しかけさせ給ふべき事無ければ、此大殿の大將などにや是れ預け奉りてまし。御妻は中務の宮の女ぞかし。其れは如何はかりか有らん、然りとも、此宮にえ勝らざらん、また我が斯くて在れば、え疎かならじと思し取りて、大殿の參らせ給へるに、上此事を氣色だち聞えさせ給へば、殿、ともかくも奏すべき事にも侍はずと、いみじう畏まり申させ給ひて、退かでさせ給ひて、大將殿を呼び奉らせ給ひて、斯う斯うの事をこそ仰せられつれば、ともかうも申さで畏まりて退かでぬ、早う然るべき用意して、其程と仰せ事あらん折、參るばかりぞかし、とのたまはすれば、大將殿、ともかくものたまはで、唯だ御目に涙ぞ浮きたるは、いみじう上を思ひ聞えさせ給へるに、此事はた免るべきにもあらぬが、いみじう思さるるなるべし。殿その御氣色を

う侍させ給ふ。帝、初花殿におはしませば、やがて其殿にて有るべし。内などにて有らぬを口惜しく思召さるれど、御乳母より初め宮の女房達、いみじう準備ぎたり。斯く云ふ程に、哀れにあさましき事は、帥の中納言の御兄弟の僧都の君こそ、はかなく煩ひて亡せ給ひぬと云ふめれ。今は此中納言と此君とこそは殘り給へりつれ。心憂くゆゆしき事に世の人も聞ゆ。一品の宮、帥宮なども、いみじう思し歎くべし。あさましう心憂かりける殿の御有樣をぞ、いでや殿方は世に然しもおはしまさじ、母北の方の御方ゞ如何になど有れど、さて山の井の大納言、頼親の内藏頭などは、皆異腹の君達ぞかし。其れは然ば如何なるぞと有るに、げにと聞えたり。さるは故關白殿の御心ばへなど、いと貴に寛濶にて、斯く御末など無からんとも見えさせ給はざりしものをと、心憂し。帥の中納言、僧都の君の御事に、世の中いと心憂く思されて、また如何にせんと思し亂れけれど、又辭せんも物狂ほしければ、萬づに思し亂れけり。さてのみやはとて下り給ふ。賀茂祭の又の日と思して、いみじう準備がせ給ふ。内には、四月一日、姫宮の御袴着なり。大殿もいみじく御心に入れて準備がせ給ふに、内はた何事をもと思召して、えも云はずめでたく率る。三日の程、萬づいとめでたし。上はともすれば御心地あやまりがちに、御物の怪繁う起らせ給へば、靜心無く思召されて、内を夜を晝に準備がせ給ふは、下り居させ給はんの御心にて、内裏を造り出でざらんが、いと口惜しき事に思召すなるべし。斯くて帥の中納言、祭の又の日下り給ふべければ、然るべき處々より、御餞、別の御裝束ども有る中に、中宮閤より御心寄せ思ひ聞えさせ給へりければ、然べき御裝束せさせ給ひて、御團に、

に、此藤家の中納言は月頃日をいみじう煩ひ給ひて、萬づ治し盡させ給ひけれど、猶いと見苦しうて、今は殊に御交らひなども給はず、あさましうて籠り居給ひぬ。然るは大殿なども、明年の御禊の前驅に思し、憎からぬ樣にもてなし聞えさせ給ふに、いみじく心苦しくいとほしき事に思されけり。斯かる程に、大貳の辭書と云ふ物朝廷に奉りたりければ、我も我もと望みののしりけるに、此中納言、さばれ、是れや申して成りなましと思し立ちて、然るべき人人に云ひ合せたどし給ひけるに、傍の人はいみじう月ごろたゞ治療ひ侍るなる、さておはしまして治療はせ給へなど、然るべき人人聞えさせければ、内にも奏せさせ給ひ、中宮にも申させ給ひければ、いと心苦しき事に誰も思されけるに、大殿も眞にだに申さば、他人に有べき事ならずとて、成り給ひぬ。霜月の事なれば、然は成り給へれど、今年などは思し立つべきにあらず。いみじう哀れなる事に世の人も聞ゆ。この九月、殿の上、宇治殿におはしましたりけるに、其れより、いみじき紅葉に附けて聞えさせ給へりし。

見れど猶あかぬ紅葉の散らぬ間はこの里人に成りぬべきかな

と聞えさせ給へりければ、中宮より御返し、

ここにだに淺くは見えぬもみぢ葉のふかき山邊を思ひこそ遣れ

とこそ聞えさせ給へりけれ。月日も過ぎて、年も返りぬ。正二月、例の世の有樣にて過ぎもて行く。今年は姫宮の御年三つに成らせ給へば、四月に御袴着の事あるべし。今より作物所などに、小き御具ども、いみじ

今年春宮七つに成らせ給ふ。長和三年とぞ云ふ。御書始の事あり。學士には大江匡衡が子の、一條院の御時の藏人仕うまつりし擧周をぞ成させ給へる。其頃大殿は左大臣にておはします。堀河のをば右大臣、閑院のをば内大臣と聞ゆ。殿の君達、太郎は大納言にておはします。二郎は左衛門督に檢非違使別當、高松殿のを二位中將など聞ゆべし。餘の上達部、さまざま多かれど記さず。斯樣にて過ぎもて行くに、左衛門督殿の上、月頃尋常ならず物せさせ給ひける。七八月に當らせ給へりければ、四條の宮にて惡しかるべしとて、殿人の三條に家持たるが許に渡らせ給ひける。さて八月十餘日に、いと平かに、いみじう美くしき女君生れ給へり。大殿よりも、宮よりも、喜びの御消息餘りなるまで頻りに聞えさせ給ふ。大納言殿、尼上などの御氣色思ひ遣るべし。御産屋の程の有樣、更なれば書き續けず、三日の夜は本家に爲させ給ふ。五日の夜は大殿より、七日の夜は大宮よりとぞ。中宮、尚侍の殿よりは、兒の御衣などぞ有りける。中宮より御衣に添へて、

雛鶴の白たへごろも今日よりは千年の秋に立ちや重ねん

などぞ仄聞き侍りし。斯くて日頃、有るべき限りの御有樣にて、四條の宮に歸らせ給ふ。登任に樣樣の物被けさせ給ふをば然るものにて、大殿、斯く平かにせさせ給へる事とて、加階をせさせ給ふ。斯くて四條の宮に渡らせ給ひて、いつしか、やがて吉き日とて、見奉らせ給ふに、えも云はず美くしうおはしませば、始めたる事にこそとて、年頃の然るべき物どもの中に、昔の手本どもなどを御贈り物にせさせ給ふ。只今は限り無う、愛護き聞えさせ給ふも道理なり。大納言殿には嬉しく聞し召すべし。はかなう月日も過ぎもて行く

せ給にじとて、おはしませと申させ給へば、唯た掬かれに掬かせ給へば、あな嬉しやとて、抱き奉らせ給ひて、いみじう愛くしみ奉らせ給ふ。今は長く侍るべきにこそあれ、此宮の斯く抱かれ給ふ。兒の抱かれぬは、只むとこそ聞き侍れ。如何で此御方方の、斯く斯かるに往給はんを見奉りことこそは思ひ給へれば、とのたまはするを、上にはいと哀れに見奉らせ給ふ。さて御気色も、いみじく妙に成らせ給ふ。上の御前も、心のどかに御物語など聞えさせ給ひて、又の日ぞ帰らせ給ふ。御帰り際には、此年頃の中にも知らせ給はで侍りたせ給へりける、若宮の御一具に、昔のえも云はぬ香どもの、今は世にも聞えぬや、其折の薫香などの、いみじきどもの数を盡させ給へり。また道風が本など、いみじき物どもの、銀黄金の筥に入れたるなどをぞ奉らせ給へる。斯かる女宮もや出でおはしますとて、捜て侍りつるなり、とて探し奉らせ給ふ。御気色達には、皆然るべき様の装束ども、又衣など添へて贈はせ給ふ。唯常の女房達にも、様様いみじく盡させ給へり。飽かずと、如何に戀しくと、聞えさせ給ふ。斯くて帰らせ給ひぬれば、獨り笑みして、戀しう思ひ聞えさせ給ふままには、あいなきことと、少将や、此方にやと、いとど愛くしう思召しまはすも、汗臙おましうぞ見えさせ給ひけるとぞ侍りし。

玉のむら菊

げんとす。おほやけ事は、殊なるものなりけり、殊なるものなりけりと、見あざみ思ふべし。斯かる程に、三月二十餘日に、石淸水の臨時の祭に、若宮の御乳母、内にえ侍ふまじき事や有りけん、俄かに出だし奉らせ給ふ。殿の上添ひて率て奉らせ給ふ。南殿にぞおはします。御乳母達然るべき女房五六人ぞ仕うまつれる。出でさせ給ひて、又の日、内より中宮の御方より聞えさせ給へる。風の心あわたたしかりければなるべし。

もろともにながむる折の花ならば散らす風をも怨みざらまし

是れを御覽じて、殿の御返し、

心して暫しな吹きそ春風は共に見るべき花も散らさで

とぞ。斯かる程に、一條殿の尼上、大宮の宮達見奉りしに、我命はこよ無う延びにたり、今は中宮の姫宮をだに見奉らでは、となんのたまはすれば、とて、殿の上の御前、然るべき際を思召しければ、斯う斯う、此宮なん此頃此處に出でさせ給へる、善き折なり、率て奉らんと、一條殿に聞えさせ給へれば、いと嬉しき事なりとて、俄に御設けし準備がせ給ふ。姫宮の御乳母どもには、上の御前見えさせ給はねば、上の御車宮をば乗せ奉らせ給ひて、御乳母達、他女房、車一輌して、尋常の人人、大方の車三つばかりにて渡らせ給ふ。尼上いみじうしつらひて、我もいみじく心懸想せさせ給ひて、待ち聞えさせ給ふ程に渡らせ給へり。上の御前、抱き奉らせ給へり。見奉らせ給へれば、いみじう美くしげにて、唯だ笑ひに笑はせ給ふを、あた美くし、是れを抱き奉らばやと思へど、泣きや爲させ給はんと、煩はしくて、とのたまはすれば、などてか、よも泣か

松に雪の氷りたるを、

春くれど過ぎにし方の氷こそ松に久しくとどこほりけれ

と有れば、宮の御返し、

千代経べき松の氷は春くれど打解けがたきものにぞありける

晦日に成りぬれば、司召とて嬉しきも然らぬも有り。彼の四條大納言の御姫君は、去年より常ならぬ御氣色なりければ、大納言も、尼上も、いみじう思して、さまざまの御祈りどもいみじ。男君に、いみじう思ひ聞え給へれど、猶いと心づき無く、ともすれば、御隠れ遊びの程も、童げたる心地して、其れを飽かぬ事にぞ思されたる。斯くて内裏住めでたくて過ぐさせ給ふ程に、火出で來て燒けぬ。帝も宮も、松本と云ふ處に渡らせ給ひぬ。何れの御時にも、斯かる事は有れど、心のどかにしも思召されぬに、斯かる事を、いといと口惜しく思さるべし。三日ありて、やがて内裏造るべき事思し掟てさせ給ふ。其の折の修理の大夫にては、皇后宮の御兒人の通任の君、南殿造るべく仰せらる。木工の頭には、此宮の御乳母の男、中務大夫周頼と有りし君を、此司召に成させ給へりしかば、清涼殿をば其れ造る。他殿をば唯だ受領各皆仕う奉るべき宣旨下りて、官の使部ばら國國に分かれぬ。此四月御生の日より手斧始して、來年の四月以前に造り出ださざらんをば、官を奪り、國を召し返しなど爲させ給ひ、其程に造り終へたらん有らば、任を延べ、位を増させ給ふべき由の宣旨下りぬ。斯く厳しく仰せられしかば、先づ近き國國の守は、南殿、清涼殿などは、皆四月に棟上

はしき事どももさし交るべし。然るべき朝廷の御政をも思し紛れず、上、中宮の御方に渡らせ給へり。えも云はずめでたき御直衣に、尋常ならず輝くばかりなる御衣どもを、重ねさせ給へり。御貌有樣をかしう、﨟﨟しう恥かしげにおはします。宮の御前は萠葱の御几帳に、側隱れておはします。紅梅の御衣を七八重にも過ぎて幾つとも無く奉りたる上に、浮紋の色濃かなるを奉りたるに、同じ色の御扇の、片端の方に、大きなる山書きたるを、わざとならずさし隱させ給へる御有樣、なべてならず恥かしげに、氣高うおはします。御髮のあさましう長く、處狹げにおはします程、如何で斯くと見奉らせ給ふ。織物に髮みだるるなど云ふ事は、髮の輕びれ少なき時の事なり。やがて麗しく縫りて、隙も無くめでたくおはします。上、何らは若宮は、と問はせ給へば、命婦の乳母抱き奉りて參る。御劍、辨の乳母持て參る。御髮を削がせ給へれば、押し返し今こそ見なりけれとて、其れに附けても、あな愛くしと見奉らせ給ひて、抱き取り奉らせ給ひて、御鏡見せ奉らせ給ふとて、聞きにくきまで祈り祝ひ續けさせ給ふ事どもを、御前に侍ふ人人は、え念ぜず、自ら打私語き、卯杖祝おひなど云ふ心地こそすれとて、忍びやかに笑ふを、如何に如何にと仰せらるる程も、漫ろにめでたく覺えさせ給ふ。御乳母達、我も我もと花を折りて仕うまつる程も有らま欲しげなり。宮と御物語せさせ給ひて、打笑ませ給ふなども聞ゆ。若き人人、押し凝りたる御几帳の際など、繪に書かま欲し。大納言殿參らせ給へれば、昔し御物語など有りて、やがて御供に仕うまつらせ給ひぬ。四の宮の御髮長うて、御直衣姿も、雛を作り立てたらんやうに見えさせ給ふ。事ども齊ら果てて、心のどかに成りもて行きて、上より、

にて侍ひしは、園菜殿の御侍の御同胞なるべし。又正光の大藏卿の女、源頼の御中の君の腹の女参り給へり。其れも御同胞に成させ給へり。此外の然べき人の女など、數いと多く參り給へり。すべて此頃の事には、然べき人の妻子皆宮仕に出で果てぬ。籠り居たるは醜ろげの卿、片端づきたらんとぞ云ふめる。さてもあさましき世なりや。太政大臣の御女も、斯く出で交らひ給ふ。いみじき事なり。今昔し有らば、何の陰大臣の御後も出で給ひなんやかめりなどぞ、人申すめる。斯くて参らせ給ひぬれば、若宮を上の御前、御乳母の頃ひ無く、明暮抱き持てあつかはせ給ふ。餘りかたはらいたし。今よりは、はかなき御具ども、何事をか殊さんと思召したり。はかなく年も返りて、長和三年になりぬ。正月一日より初めて、新しう珍らしき御有樣なり。新玉の年立ち返りぬれば、雲の上も晴晴しう見えて空を仰がれ、夜の程に立ち變りたる春の霞も、紫に薄く濃くたなびき、日の氣色うららかに、光さやけく見え、百千鳥も囀り増さり、萬づ皆心ある樣に見え、枝に無かりつる花も、いつしかと紐を解き、垣根の草も青みわたり、朝の原も、森の梢際かき霞ひ、春日野の飛火の野守も、萬づ代の春の初めの若菜を摘み、氷解く風もゆるく吹きて枝を鳴らさず、谷の鶯も行末はるかなる聲に聞えて耳留り、稲岡の子の日の松も、いつしかと君に引かれて、萬づ代を經んと思ひて、常磐堅磐の緑の色深く見え、醉の邊の竹葉も、末の世はるかに見え、階の下の薔薇も夏を待ち顔にたどして、さまざまめでたきに、朝拜より初めて、萬づにをかしきに、宮の御方の女房の裝ども常だに有るに、況いて物あざやかに、香り深きも道理と見えたり。殿上人は後取と云ひて、煩たく醉ひののしりて、うたてく賑が

今日明日の程にと、返す返す聞えさせ給ひて、出でさせ給ひぬ。斯くて左大將召して、此家の子の君達の位階し、殿の家司どもの加階せさせ、また此若宮の御乳母の位階得べき事など書き出でさせ給ひて、宮の御前に啓せさせ給ふ。殿はやがて御前にて舞踏し給ふ。若宮の御乳母位階は、近江の内侍は加階をぞ爲させ給へる。斯くて御贈り物、上達部、殿上人などの贈り物、例の事ども思ひ遣るべし。萬づあさましくめでたき殿の有様なり。此土御門殿に幾そたび行幸ありて、數多の后出で入らせ給ひぬらんと、世のあえものに聞えつべき殿なり。是れを勝地と云ふなりけり、是れを榮華とは云ふにこそ有れと、卑しの者どもの、下を限れる品種どもも、喜び笑み榮えたり。げにこそ善き事を見聞くは、我身の事ならねども嬉しうめでたし。惡しき事を見聞くは、爲ん方無く、いとほしきわざなれば、此殿ばら宮宮の御有様を、何れの民も愛で喜び聞えたり。帝還らせ給ひて後は、若宮を御心に附き、戀しう思ひ聞えさせ給ひて、唯だ疾く疾くとのみ、御使頻りに參れども、猶例ならずのみ思されて、のどか氣なる御氣色なり。されど内より聞きにくきまで申させ給へば、十一月十日の程にぞ參らせ給ふべき。五節、臨時の祭など打しきれば、女房の裝など、あまた襲ねの御用意あるべし。月頃久しくなりにける御里居、若き人人、猶心殊に今めくめり。若宮の御乳母今二人參り添ひたり。一人は阿波の守順時の朝臣の女、辨の乳母と云ふ。今一人は伊勢の前司隆方の朝臣の女、中務の乳母と云ふ。月頃さまざま參り集りたる女房の數など多かるべし。此度は、法住寺の大臣の五の君、やがて五の御方とて侍ひ給ふ。故關白殿の御女、對の御方の腹の君、此帝の東宮におはしまし時の御匣殿

こそいみじけれとて、見奉らせ給へば、御額髪に瀉りたる程、ことよく気高げに見えさせ給へば、怪しく見苦しき子持の御髪かな、古手持などは、髪のすそ細う、色青びれなどしたればこそ見苦しけれ、いと物狂はしき御有様かな、此兒宮も母の御有様に似たるにこそ有めれ、など聞えさせ給ひて、何ら乳母は、と問はせ給へば、殿の御前、御乳母はいたく里び、物恥ぢをして、え参り侍らざめりとて、又抱き居て奉らせ給ひぬ。御帳の中に入らせ給ひて、月頃の御物語など、心のどかに聞え給ふ。斯く愛くしき人を、今まで見ざりつること、猶めでたき事なれど、此身の有様こそ苦しけれ。いみじく思ふ人のとも斯くもおはせんを、端にも見ぬ事いみじく口惜しかし、など萬づに聞えさせ給ひて、いざ、兒迎へて、中に臥せて見ん。いみじく愛くしきものかな。此宮達の見なりしをこそ、愛くしう見しかど、猶其れは例の有様なり。是れはことの外にをかしく見ゆるは、髪の長ければなめり。猶猶疾く疾く入らせ給へ。内にては乳母入るまじ、麻呂、乳母にて侍らん、など聞えさせ給へば、物狂ほしとて、少し忍びやかに笑はせ給ふ。斯かる程に日も暮れぬれば、上達部の御遊夜に入りぬるが、いみじくなつかしく面白きに、中嶋の物の音など物遠かに聞ゆるに、波の音松の風なども、さまざまにいみじや。端に出でさせ給ふまじき御気色なれば、疾く入らせ給ひて、夜に入り侍りぬ、斯ばかり面白き遊ども御覧ぜさせんと申させ給へば、いと面白しと聞き侍り、楽の聲は聞くこそ面白けれ、見るはをかしうやは有る、さまざまの舞どもは皆見侍りぬと、いとのどかに宣はすれば、すげなくて出でさせ給ひぬ。むげに夜に入りぬれば、慫慂かし申させ給へば、しぶしぶに起きさせ給ふとて、猶疾く入らせ給へ、

ふ。御産屋の折も、御五十日にも、內の女房の然るべき限り皆參りたり。帝の御乳母の紀の三位の女、源典侍を初め、宰相少將なども然るべき人人は、皆宮の御簾に附きたるども、覺束なからず參り退かづめり。九月にも成りぬれば、行幸の事、今日明日の程に準備がせ給ふ事いみじ。宮の女房の裝いみじきに、尚侍の殿の御方、殿の上の御方、我も我もと喧騷る事いみじ。船の樂など、いみじく調へさせ給へり。行幸の有樣、皆例の作法たれば書き續くまじ。大宮の東宮の生れさせ給へりし後の行幸、唯だそのままの御有樣なり。殿の有樣いみじく面白し。中嶋の松の蔦の紅葉など、常の年はいと斯うしも有らねど、世の氣色に從ふにや、いみじく盛りに、いろいろめでたく見ゆるに、笑ましう漫ろ寒し。上の御覽ずるに、御目も及ばずめでたう思召さるるに、船の樂どもの舞ひ出でたるなど、大方此處の事とは思召されず、いみじく御覽ぜらる。松の風琴を調ぶるに聞え、萬づ面白く吹き合せたり。御簾ぎはの女房の裝、云へばえ成らぬ匂ひどもなり。入らせ給ひて、何時しかと、若宮を何らはと申させ給へば、殿の御前抱き奉らせ給ひて侍はせ給へれば、抱き取り奉らせ給ひて見奉らせ給へば、豐よかに美くしうおはしまして、御髮振分におはしますを、御覽じ驚かせ給へて、如何になど聞えさせ給へば、御物語を聲高に候させ給ひて、打笑みせさせ給へば、あな美くし、知り給へるにこそ有めれ、まだ斯かる人をこそ見ざりつれ、うたて餘りゆかしき御髮かな、今年過ぎば居丈にも成りぬべかめれ、など仰せられて、いみじく愛くしげに聞えさせ給ふ。宮の御前も見奉らせ給へば、唐の綾を白菊にて押し重ねて奉りたり。されば白き御裝ひと見えてめでたきに、如何にぞ暑き程の御事は、御髮の爲め

せ給へるめる。此頃殿ばら殿上人の参る有様、三位より初めて六位まで、唯だ大宮の御時の有様なるべし。

藤宮ただ御乳聞し召す程なれば、内侍候ふ参るべき御消息ありたり。御乳母に参らんなど申す人々数多かるを、心もとなく思召す程に、故関白殿の御子と云はるる中務大輔周頼の君の妻の若僧都が妻なり。御乳母に伊勢の守の女ぞ参りたるに、やがて夜の中に御乳聞し召させて、内侍は内裏へ参りぬ。然べき贈り物など、いとおどろおどろしう思し掟てさせ給ひて、御乳附にしもあらず、やがて御乳母の中に入れさせ給ひつ。若宮の御髪あさましく長く、頭分に生ひさせ給へり。やがて斯くて生し聞えさせんと定め有り。何事もいとめでたし。いみじう美くしげにおはしますを、内にも聞し召して、何時しかと、ゆかしく思ひ聞えさせ給へり。此頃は少し心長閑にて、殿の御前、夜も昼も分かず、若宮の御扱ひに渡らせ給ふに、誰もわびしく若き程に、打解けたる寝ね姿ども、いとかたはらいたし。今参りたる御乳母も、いとど物恥かしげなり。内にも、いとゆかしげに思ひ聞えさせ給へれば、九月ばかりに行幸あらせんと、殿の御前思し心ざしたり。宮の御前、共に悩ましげにのみおはしませば、頓にも参らせ給ふまじ。行幸の事を此頃は殿の内準備ぎ騒ぎ、萬づ繕はせ給ふ。御産養十日を常は内にてなど思し宣はすれど、宮のえ参らせ給はねば、里にて聞し召す。殿より萬づに修繕させ給ひて、内、東宮、大饗所など、萬づに大宮まで待て参り騒ぐ、様様の折櫃物、小物など、物を讃して儲させ給へり。又内より如何でか思し掟てさせ給ひけんと見ゆるまで、萬づ細かにめでたく儲させ給へり。八月二十餘日の程なれば、女房の装ども、いみじう侍たるに、又立たん月の行幸の事を準備ぎ立たせ給

女にておはしますにやと見えたり。殿の御前、いと口惜しく思召せど、さばれ、是れを初めたる御事ならばこそ有らめ、又も自らと思召すに、是れも悪ろからず思召されて、今宵の中に御湯殿あるべくののしりたり。内には、気ざやかに奏せさせ給はねど、自ら聞し召しつ。御劔いつしか持て参れり。例は女におはしますには御劔は無きを、何事も今の世の有様は、前前の例を引かせ給ふべきに有らねば、ことの外にめでたければ、是れを始めたる例に成りぬべし。御使の禄、夜目にも気ざやかに見ゆる鶴の毛衣の程も、心殊なり。御乳附には、東宮の御乳母の近江の内侍を召したり。其れは御乳母達あまた侍ふ中にも、是れは殿の上の御乳母子の、数多の中の其一人なる、大宮の内侍なりけり。さて日頃侍ふべきに、宮の御湯殿の儀式有様、思ひ遣り聞ゆべし。五位六位御弦打に廿人召したり。五位は蔵人五位を撰ばせ給へり。女におはしませば、内にも今少し心殊に掟て聞えさせ給ふ。唯だ同じくはと誰れも思さるべし。されど春宮の生れ給へりしを、殿の御前の御初孫にて栄華の初花と聞えたるに、此御事をば、蕾み花とぞ聞えさすべかめる。是れは只今こそ心もとなけれど、時至りて開けさせ給はん程めでたし。白い御調度など大宮の御例なり。御乳母に人人いみじく参らまほしう案内申すべし。宮の内の女房達、然るべき君達の御子生みたるなど、我が物に頼み申したりけれど、如何にも如何にも、唯だ余所人の新しからんをなどぞ、宮の御前思召し志したなる。女房の白き衣ども、然ばかり著き程なれど、萬づを為盡し、如何で珍らしき様にせんと思ひたる様ども、心心にをかしうたん。御産養ひ、三日の夜は、殿為させ給ふ。五日の夜は宮司　七日は朝廷より、九日は大宮よりぞ為さ

させ給ひて、為信大納言の大炊御門の家におはしまいて、月頃に成らせ給ひぬれば、其處にて御子生れ給ふべきにやなど思ふ程に、其頃土御門殿に渡らせ給ひぬべければ、家主人の殿、何わざをと思し準備かせ給ふ。其れも初めは東三條院に出でさせ給へりしを、其處の儲けにしかば、此方に渡らせ給へるなりけり。さて土御門殿に渡らせ給ふに、宮の御贈り物に、何わざをして参らせんと思しけるに、何事も珍らしげ無き世の有様と成りにためれば、なかなかなりとて、村上の御時の日記を、大きなる草紙四つに繪に書かせ給ひて、詞は佐理の兵部卿の女の君と、延幹の君とに書かせ給ひて、麗はしき箱一具に入れさせ給ひて、然べき御手本など具して奉らせ給ひければ、宮は、萬づの物に增さりて嬉しく思召されけり。女房の中には、大いなる檜破子をして、白銀の籠に薫物などを入れて出だし給へりける。斯くて渡らせ給ひて、其處にて御祈りどもを、大宮の御祈の事どもみな皆せさせ給ふ。いとわりなき程の有様にて、いと恐ろしく、如何に如何にと思し騒がせ給ふ。まことや、彼の大納言の御許に、然るべき宮司成り、殿、位など增さらせ給ひけり。いと面目ある御様なり。斯くて、如何に如何にと御心を盡し、念じ聞えさせ給ふ程に、長和二年七月六日の夕方より、御氣色ある様におはしませば、御祈りの僧ども聲を合せてののしり、御持参り、散米し騒ぐ。内にも聞し召して、御使頻りに参る。御讀經の程いみじく鳴り合ひたり。月頃いみじかりつる御祈りの驗にや、戌の時ばかりに、いと平らかに御子生れ給ひぬ。今一しきりの騒音の程、あさましきまでおどろおどろしきに、僧などいと苦しからぬ程に事成らせ給ひぬ。世に無くめでたき事たるに、唯御子何と云ふ事聞え給はぬは、

殿には、中宮の御事眞に成り果てさせ給ひて、御心地なども苦しう思されて、內の御使日に二度など參り、はかなう明け暮るるにつけても、何時しかとのみ、いみじう疎かならぬ御祈りどもなり。

つぼみ花

一條院崩せさせ給ひて後、女御、更衣の御有樣ども、さまざまに聞ゆるに、承香殿の女御に、故式部卿の宮の源宰相賴定の君、忍びつつ通ひ聞え給ふ程に、右の大臣聞き給ひて、眞事空事見露はし聞えんと思しける程に、御門に眞事なりけりと見給ひてければ、いみじうむづからせ給ひて、然ばかり美くしき御髮を、手づから尼に成し奉り給ふに、憂き事數知らず見えたり。あさましう怪しき事に、世の人も殿の內にも云ひ騷ぐ程に、其後も猶忍びつつ通ひ給ひければ、此度は、何地も何地もおはしねと有れば、女御の御乳母子の許と有るは、宮菩倍都と云ふ人の車宿りなり、其家に渡り給ひぬ。宰相も然るべきにこそと思ひつつ、疎かならず通ひ聞え給ふ程に、自ら御髮なども目やすく成りもて行く。怪しう聯儲しき事に、世の人も思ひ聞えたり。同じき若君達と云へども、是れは村上の四の宮源帥殿の御女の腹なれば、いともの清く物し給ふを、あやにくに此殿の斯くのたまふをぞ、返す返す怪しき事に人聞ゆめる。又藏部屋の女御と聞えしには、母の藤三位、今の宮耀殿の御同胞の、修理の大夫をぞ婚せ聞えためる。斯くて中宮も只常におはしまさねば、出で

此左衛門の督の君をと思ひ聞えさせ給ひて、ほのめかし聞え給ひけるに、心よげなる御氣色なれば、思し立ちて準備がせ給ふ。内、東宮などにこそは、斯かる人の御かしづき女は參り給ふ、例の事なれど、内には皇后宮、年頃宮の御掟にておはします。又中宮はた、とも斯くも人の申すべきに有らねば筋無し。東宮はた、三つ四つばかりにおはしまして、御遊びをのみしつつ歩りかせ給ふに、内、東宮放ちては、まは如何が。此宮の君達の事のみこそは、人のいみじき事には思ひ申したためれと思し立つ。げにと見えたり。有べい事ども急ぎ立てさせ給ひて、四條の宮の西の對にて、壻どり奉らせ給ふ。寢殿にてと思せど、宮の御前などおはしまし著きたれば、今更になど思召すなるべし。宮もろともにし奉らせ給ひて、壻どり奉らせ給ひつ。姫君十三四ばかりにて、御髮いと總やかにて、御長に足らぬ程にて、髮末などいとめでたし。御顏附きなど、いみじう美くしげにおはすれば、男君、思ふさまにいと嬉しう思さる。萬づの事用意深く、心にくき御あたりの有様なれば、思ひ遣るべし。さて日頃ありて、御所顯はしなど、心もと無からず待させ給へり。宮もとよりいみじう物清らかにおはしますに、此頃の有様、する事どもを聞召し合せて、殿も宮も聞え合はせ給ひつつ待させ給へる事ども、いと尋常にあらず。大殿も、いと目やすきわざなめり、彼の大納言はいと恥かしう物し給ふ人なり、思ひのままにふるまひては、いとほしからん、など常に諫め聞えさせ給ふべし。日頃ありて、御乳母の内侍の命婦の許に、はかなき御衣の下ろしなどに、萬づ有るべき事どもなど添へさせ給へり。四條の宮は如何で我が在る時、此姫君の御事を、とも斯うもとぞ思されける。月日過ぎもて行きて、東三條

ど常に聞えさせ給へば、思召し立ちて參らせ給ふ。御輿など新しくせさせ給ひて、いと有るべき限り、麗はしくしたてて參り給ふ程も、一夜の御退出にこそ似ねど、儀式有樣は同じ事なり。姬宮は絲毛の御車にぞ奉りける。御輿には、致仕の大納言の御女、大納言の君仕うまつり給へり。女房もとより侍ひしに、また參りて、いと目やすく心にくき御有樣なり。男宮達三所引き連れさせ給へるに、四の宮は御髮は肩過ぎて程ばかりなり。御顏附など、斯ばかりの童もがなと見えさせ給ふ。其れも御直衣奉りたる御有樣などは、さは云へど、並並の世の常なる人人の君達には似させ給はず。おはしましぬれば、年頃珍らしき御物語ども推し量るべし。御前に火焚屋かき据ゑて、大床子たどの程のけはひ、上の御前に御覽ずるも、斯うてこそは見奉らんと思ひしか、自らよりは、斯うては思ふ如したることそ嬉しけれ、など哀れに語らひ聞えさせ給ふ。姬宮の十二三ばかりにて、いと美くしうおはしますを、明暮見奉らぬことを口惜しう思召したり。斯かる程に、大殿の左衞門の督を、女おはする殿ばら、氣色だち給へど、思し定めぬ程に、四條大納言の御女、二所を、中姬君は四條の宮に生れ給ひけるより、とり放ち聞え給ひて、姬宮とてかしづき聞え給ふ。大い君をぞ大納言世に無き者とかしづき聞え給ふ。母上は村上の先帝の九の宮、まちをさ君と云ふ入道少將高光の御女の御腹におはする女宮の、いみじうめでたしと云はれ給ひしを、粟田殿取り奉りて御子にして、この大納言の婿どり奉り給へりしなり。斯かれば、母上さばかり物淸くおはします。されど年頃尼にておはしませば、大納言殿は、眼のやうにておはすれど、外心もおはせねば、唯だ此姬君をいみじきものに思ひ聞えさせ給へるに、

御見奉らせ給ふに、御涙止めさせ給はず。許多の殿ばら、いみじう哀れに見奉らせ給ふ。殿の御前、さても如何に思ひ立ちし事ぞ。何事の憂かりしぞ。我をつらしと思ふ事や有りし。官位の心もとなく覚えしか。又如何でかと思ひ掛けたりし女の事や有りし。ことごとは知らず、世に在らん限りは、何事をか見捨てては有らんと思ふに、心憂く、斯く、身をも我をも思はで、斯かる事、とのたまひ続けて泣かせ給へば、いと心あわただしげに思して、我も打泣き給ひて、更に何事をか思う給へん、唯だ幼く侍りし昔より、如何でと思ひ侍りしに、然様にも思召し掛けぬことを、斯くと申さんもいと恥かしう侍りし程に、斯うまで待たさせ給ひにしかば、我にも有らで歩りき侍りしなり。誰にも誰にも、なかなか、斯くてこそ仕うまつる志も侍らめ、と申し給ふ。さてやがて、其庭におはしますべき御心掟、有るべき事どものたまはす。宮宮の御使など、すべていと物騒がし。殿の御前、泣く泣く下りさせ給ひぬ。御装束準備して奉らせ、さまざまの物ども奉らせ給ひ、高松殿の上、泣く泣く御衣の事準備がせ給ふ。殿ばら宮宮の奉らせ給ひつるは、清らなりとて、皆天台の僧どもに賜はせ給ふ。高松殿より奉らせ給へる御衣をぞ、御身にはせさせ給ひける。いでや、今は御をこそとまでぞ思召しける。殿よりも宮よりも、皆御誦經て奉らせ給ふ。哀れにいみじう有り難き御出家になん。斯かる程に、皇后宮参らせ給へと有れば、如何がと思し慎ませ給ふに、御心の程をも推し量り聞えさせ給ひけん、殿の御前、など皇后宮は参らせ給はぬにか、諸共に侍はせ給はんこそ善きことなるべければ、一所おはしまさんは悪しき事なり、と聞えさせ給へば、其れにつけて、猶狭く思し立て、大臣も斯様に、な

おはして、我れ法師に成し給へ、年頃の本意なり、とのたまひければ、聖、大殿のいと貴き者にせさせ給ふに、必ず勘當侍りなん、と申して聞かざりければ、いと心ぎたなき聖の心なりけり、穩便無しとのたまはせんにも、斯ばかりの身にては苦しうや覺えん、惡ろくも有りけるかな、此處に成さずとも、斯ばかり思ひ立ちては止まるべきならず、とのたまはせければ、道理なりと打泣きて、成し奉りにけり。聖の衣取り着させ給ひて、直衣指貫、さるべき御衣など、皆聖に脫ぎ賜はせて、綿の御衣一つばかり奉りて、山に無動寺と云ふ所に、夜の中におはしにけり。横川の聖、卑しき法師一人をぞ添へ奉りける。其れを御供にて登り給ひぬ。此大德などや云ひ散らしけん、月の出づる程に、此殿失せ給へりとて、大殿より、多くの人を分かちて、求め奉らせ給ふに、横川の聖の許にて出家し給へりと云ふ事を聞し召して、哀れに悲しういみじと思召して、横川の聖を召しに遣はしたるに、畏まりて、頓にも參らず。いと有るまじき事なり、參れ參れ、と度度召されて、參りたれば、殿の御前、泣く泣く有樣問はせ給へば、聖申ししやう、のたまはせしさま、斯う斯う、いと不便なる事を仕うまつりて、畏まり申し侍る、と申せば、などてかともかくも言はん、聖成さずとも、然ばかり思ひ立ちては、止まるべき事ならず、いと若き心地に、許多の中を捨てて、人知れず思ひ立ちける、哀れなりける事なりや、我心にも勝りて有りけるかなとて、山へ急ぎ登らせ給ふ。高松殿の上は、すべて物も覺え給はず。殿おはしませば、幾その人人舁き負ひ登り給ふ。何時しかおはしまし着きて、見奉らせ給へば、例の僧達には、綺の程けおめ見えでこそ有れ、是れは然も無くて、哀れに美くしう貴とげにておはす。

召さぬに、常ならぬ御心地にやと思召すに、御乳母の典侍、怪しう、さもあらぬ月、覺束なくて止ませ給ひにし、常ならぬ御事などのおはしますにやと申し給ふに、誠に常ならぬ御氣色におはします。殿の御前にも、内にも、いと嬉しき事に思召して、殿の御前、何か、物聞し召さずとも、おはしましぬべき御心地なりとて、吉き日して、樣樣の御祈りども始めさせ給ふ。何事にも變りぬ。年の中、心あわただしう、内より初め、宮宮の御佛名にも、例の佛名經など誦する聲もなかしきに、降る白雪と共に消えなんなども哀れなり。はかなく暮れぬれば、晦日には、元日の朝拜より初め、樣樣にめでたし。殿上の方には、後取と云ひて、いと正無う傾たきけはひども聞えたり。朔日より初め、華どもいみじう榮ければ、樣樣節會どもにて暮れぬべし。正月にぞ宮の御前出でさせ給ふべき。其日な房の裝束など、あざやかに儲けさせ給へる。さて其夜に成りぬれば、儀式有樣など思ひ遣るべし。常の行啓せさせ給ふめでたしと有りつれど、斯うやは見えさせ給へる。御輿の紺より初めて、萬づいみじう、さやかにめでたし。京極殿は、方塞がれば、えおはしまさで、東三條院に出でさせ給ひぬれば、内にも御志いとあやにくなるまで、覺束なくぞ思ひ聞えさせ給ふ。宮には殿おはしまして、吉き日して、大般若、觀音經、藥師經・壽命經などの御讀經、各不斷に初めさせ給ふ。法華經は初めよりせさせ給へばなりけり。年頃山に籠りて里へも出でぬ僧どもを尋ね召し出でて、この御讀經に侍はせ給ふ。朝廷よりは、長日の御修法初めさせ給ふ。樣樣の御祈りどもいみじ。斯かる程に、殿の高松殿の二郎君、右馬頭にておはしつる、十七八ばかりにやとぞ。如何に思しけるにか、夜半ばかりに、横川の聖の許に

數知らぬさざれ石山今年より巖と成らん程は幾世ぞ

同じ日のまかで音聲、千年山、

動き無き千とせの山にいとどしく萬づ世添ふる聲のするかな

巳の日の樂の破、とみつき山、

君が代はとみつき山の次ぎ次ぎに榮えぞまさん萬づ代までに

同じ日の樂の急の歌、ながむら山、

萬づ代をながむら山の長らへて盡きず運ばん貢物かな

同じ日のまゐり音聲、とみの小川、

天の下とみの小川の末なれば何れの秋か潤はざるべき

同じ日のまかで音聲、ちぢ川、

濁り無く見え渡るかなちぢ川の初めて澄める珠の明りに

此同じ折の御屛風の歌など有れど、同じ筋の事なれば書かず。去年よりして、いみじくののしりつる事ども果てて、内には心のどかに思召さるるにも、麗景殿、淑景舍などの、おはせましかばと、思し出でさせ給ふ。斯くて、中宮、如何なるにか、例ならず惱ましう思されけり。殿の御前思し歎かせ給ふに、何せさせ給ふ事、立ちゐる月、此月、さも有らで過ぎぬ。如何なるにかと、人人覺束なくのみ聞えさするに、物などいと聞し

樂の破の歌、清水、

よし水のよき事多く積めるかな大藏山の程遙かにて

樂の急の歌、

ゆふしでの日蔭の葛縒り掛けて豐の明りのおもしろきかな

まかで音聲、安良の里、

諸人の願ふ心の近江なるやすらの里の安らけくして

主基の方、いなつき歌、大藏山、兼澄、

二葉より大藏山に運ぶ稻年は積むとも盡くる世も有らじ

御神樂歌、長尾山、

君が齢代々ながをの山の若葉を八十氏人の挿頭にはせん

辰の日の樂の破の歌、玉松山、

天つ空朝に晴るる初めにはたままつ山の蔭さへぞ添ふ

同じ日の樂の急の歌、稻ふさ山、

年作り樂しかるべき御世なれば稻ふさ山のゆたかなりけり

同じ日參入音聲、小石山、

ど思召して、歌の方に然も有るべき人どもを當てさせ給へるなるべし。

悠紀の方の稲舂歌、坂田の郡、韓埼、

山のごと坂田の稻を拔き積みて君が千歳の初穗にぞ舂く

御神樂の歌、同じ人、

大八洲國知ろしめす始めより八百萬づ代の神ぞ護れる

參入音聲、高御座山、

萬づ代は高御座山うごき無きときはかきはに仰ぐべきかな

樂の破の歌、しき地、

大宮のしき地ぞいとど榮えぬる八重の組み垣造り重ねて

樂の急の歌、かた山、

金山にかたく根ざせる常磐木の數に生ひ増す國の富草

退出音聲、野洲川、

すべらぎの御代を待ち出でて水澄める野洲の河波のどけかるらし

又次の日の參入音聲、長柄の山、

あめつちの共に久しき名に由りてながらの山の長き御代かな

三の宮のいみじう美くしう、紛れ歩りかせ給ふにぞ、少し思し慰めける。はかなく秋は過ぎて、冬にもなりぬれば、黄櫨染には、中宮の御方の衣更などの有様も、物騒がしかに、月日の行き交ふ程も知られて、めでたかりける。立たん月の大嘗會、御禊など、いみじう世に準備ぎ立ちにたり。内にも、御服立ちぬる月に設かせ給ひて、冷泉院の御果ても過ぎさせ給ひて、今は此事を、いみじき事にののしらせ給ふ。女御代には、大殿の内侍の督の殿出でさせ給ふ。女御代の御車二十輛ぞ有るを、先づ大宮より三つ、中宮より三つ、東より初めて、いといみじうののしらせ給ふ。此度の物見には、皇后宮の御車なん、有べきとののしれば、何時しかと人待ち思へるに、今は其日になりて、女御代の御車の有様より初め、あさましきまで候させ給へり。其車の有様、云へば疎かなり。或るは屋形を造りて檜皮を葺き、或るは唐土の船の形を造りて、乗り人の袖より初めて、其れにやがて合はせたり。袖には置口にて蒔繪を付たり。山を畳み、海を湛へ、筋を遣り、すべて大方引き渡して行く程、月も輝きて、えも見分かずなりにしが、車に乗る人の衣の數すべて十五ぞ着たる。或るは唐錦などをぞ着せさせ給へる。此世界の事とも見えず、照り満ちて渡る程の有様、推し量るべし。殿ばら君達の馬車、弓胡簶までの有様こそ、世に珍らかに、また見聞えぬ事どもなりけれ。過ぎにし方は云はじ、今行末も、如何でか斯かる事はと見えたり。冬の日もはかなく暮れて、大嘗會の準備せさせ給ふ。されど其日は、唯だ美はしうぞ有る。歌ども、悠紀の方は、大中臣能宣が子の、祭主輔親仕うまつる。主基の方には、前加賀守源兼澄なり。この人人、輔親は能宣が子なればと思召したり。兼澄は公忠の辨の孫なりな

人も殊に無きにや、さやうの氣色や聞し召しけん、故關白殿の出雲の中納言成り給ひぬ。宮司など、前のやうに競ひ望む人無く、物華やかになどこそ無けれ、萬づ唯だ同じ事なり。是れにつけても、あなめでたや、女の御幸ひの例には此宮をこそし奉らめなど、聞きにくきまで世には申す。先づは大殿も、誠にいみじかりける人の御有樣なり。女の幸ひの本には、此宮をなんし奉るべき。親などにも後れ給ひて、我が御身一つにて、年頃に成り給ひぬるに、又怪しからず便無き事爲出で給はず。先づは許多多くおはする宮達の御中に、痴れ者の混らぬにて決めつかし。いみじき村上の先帝と申ししかど、彼の大將の妹の宣耀殿の女御の生み給へりし八の宮こそは、世の痴れ者のいみじき例よ。其れに此宮達五六人おはするに、すべて痴れ頑なしきが無きなり、などこそは申させ給ふに、況いて世の人は聞きにくきまでぞ申しける。今は小一條、如何で造り立てんと思召す。帝も、今ぞ御本意遂げたる御心地せさせ給ふらんかし。斯く萬づにめでたき御有樣なれども、皇后宮には、唯だ覺束なさをのみこそは、盡きせぬ事に思召すらめ。同じ御心にや思召しけん、内より、

打はへておぼつかなさを世と共におぼめく身とも有りぬべきかな

と有る、御返しに、

露ばかり哀れを知らん人もがなおぼつかなさをさても如何にと

萬づの中にも、姫宮の御ゆかしさをぞ思召しける。大宮には、院の御服なども果てにたれば、盡きせずのみ思し歎かせ給ふ。春宮の美くしう成長げさせ給ふを、明暮見奉らせ給はぬも、哀れに口惜しう思さるるに、

唯だ、後の世の有樣のみこそ理無けれなど、物まめやかに仰せらるれば、然こそ有れ、德高の僧まぜ給へれば物の哀れ有樣をも知らせ給はぬと、實しうぞ聞えさせける。斯かる程に、大殿の御心、何事もあさましきまで、人の心の中を酌ませ給ふに由り、内にしばしば參らせ給ひて、許多の宮達のおはしますに、宮達の斯くておはします、いと不便なる事に侍り、早う此御事をこそ疾くせさせ給はめ、と奏せさせ給へば、上、此度にも然は思ふを、此殿上の男どもの昔物語などし、各言ふを聞けば、内舍人などの女も、昔は后に居けり、今も中頃も、納言の女の后に居たるなん無きなど云ふなれば、如何かはすべからんとこそ聞け、と宣はすれば、其れは無言に侍ふなり、如何でか、さらば故大將をとこそは贈大臣の宣旨を下させ給はめ、と奏せさせ給へば、さらば然べきやうに行ひ給ふべし、と宣はすれば、承らせ給ひて、宮に仰せ言聞えさす。然べき神事あらん日を放ちて、宜しき日して、小一條の大將業の朝臣、贈太政大臣に成して、彼の墓に宣命讀ますべし、とのたまはすれば、辨受け給ひぬ。四月に然べき所所の祭果てて、吉き日して、彼の大將の御墓に勅使下りて、宰かて修理大夫副ひて物すべく有れば、彼の君も出で立ち參り給ふ。善き御子持給ひて、故大將の斯く榮行き給ふをぞ、世の人めでたき事に申しける。彼の御妹の宣耀殿の女御、村上の先帝のいみじきものに思ひ聞えさせ給ひけれど、女御にて止み給ひにき。男宮一人生み給へりしかども、其宮賢き御中より出で給へるとも見え給はず、いみじき痴れ者にて止ませ給ひにけり。其小一條の大臣の御孫にて、此宮の斯うおはします事、世にめでたき事に申し思へり。さて四月二十八日后に居させ給ひぬ。皇后宮と聞えさす。大夫などには望む

御匣殿参らする、まかなひ取りつぎなどして、愛たて思しき事どもを云ひ思へど、つれなくもてなしたるも、いとをかしげなり。宮の御前、白き御裝ひにて、大床子に、御髪上げておはしまし、御帳の前の獅子狛犬の顏附も恐ろしげなり。御前の御髪上げさせ給へる程は、いとこそめでたうおはしましけれ。もとより御面様の麗らかに、をかしげにおはしますものから、世にめでたくぞおはしましける。然るべうおはしますなりけりとこそは見奉りけれ。御年十九ばかりにぞおはしましける。参らせ給ひて、三四年ばかりにぞ成らせ給ひぬらんかしとぞ、推し量り参らする人人ありけり。大宮は、十二にて参らせ給ひて、十三にてこそ后に居させ給ひけれ。されど此御前は、少し大人びさせ給ひにけり。御前に火焼屋すゑ、陣の屋造り、吉上のことごとしげに云ひ思ひたる御氣色より事起りて、侍の長ども成させ給ひ、様々ことごとしげに見えたり。やがて大饗いと疾うせさせ給ふべし。大夫には大殿の御同胞の萬づの兄君の大納言成り給ふ。大方、宮司など皆撰り當させ給ふ。斯くていとめでたう、一所さし續きておはしますを、世の例に珍かなることに聞えさす。内には、今は宣耀殿の女御の御事を、如何でと思召せど、すがやかに殿には申させ給はぬ程に、宣耀殿には何とも思召したらぬ程に、大方の女房の、縁縁に附きて、里人の思ひのまゝに物を云ひ思ふにも、如何に如何に御前に思しおぼしますらん、あさましき世の中に侍りや、是れは然べき事かはなど、いと惜し顏に、訪らひ参らする人人など有るを、此文をも、又斯うなん其れ彼れは申し侍るなど語り申す人を、女御殿に、何どか斯うむづかしう云ふらん、たとひ云ふ人ありとも、語らでも有れかし、此處には萬づ思ひ絶えて、今は

逢ふことも今は泣寢の夢ならで何時かは君を又は見るべき

とて、いとど御淚せき敢へさせ給はず。内には尚侍の殿の后に居させ給ふべき御事を、殿に度度聞えさせ給へれど、年頃にも成らせ給ひぬ、宮達も數多おはします、官職こそ先づ然樣にはおはしまさめ、尚侍の御事は自ら心のどかに、など奏せさせ給へば、いと興無き御心なり、此世を過はしからず思ひ給へるなりなど、御じ宣はすれば、然は吉き日してこそは宮司も下させ給ふべかなれ、と奏して出でさせ給ひて、俄かに此御事どもの御用意あり。何事も其れに隨ひ、日など延べさせ給ふべき御世の有樣ならねば、二月十四日に后に居させ給ひて、中宮と聞えさす。急ぎ立たせ給ひぬ。其日になりぬれば、常の事ながらも、いみじくやんごとなくなん。もとの中宮、皇后宮に上らせ給ふ。御年廿五。年頃の女房達、上中下の程などの分き難う、思ひ思ひ成りつる程、妬たがりつる人人など、今日の刻に恥かしげなる事ども多かり。何事も心苦しげに、中中實案ましげなりつる人も、事限り有れば、織物の唐衣を著、年頃めでたら僞たり顏なりつる人も、俄かに平絹などにて、いと心病ましげに思ひたるもをかしきに、然は云へど、大宰帥の君など云ふ人をば、大臣など云ひつけ給ひ、指をさし云ひつれど、いと氣ざやかに、えも云はぬ葡萄染の織物の唐衣などを著て侍ふに、何くれの人も心にくく思はれ、我はと思ひたりつるも、然しも有らずなど、品品分き給へる程など、實に公と成らせ給ひぬるは、殊なるわざなりけり。心には誰れも安からず云ひ思へど、とも斯くもえ啓せで、心の中にのみ咽びわたる程も苦しげなり。又然べき五位の女などの、恥無き程なりつるを、藏人などにて、

み云ふは、尙侍の殿にや、又宣耀殿にやとも申すめり。斯かる程に宣耀殿に、內より、

　春霞野邊に立つらんと思へどもおぼつかなさを隔てつるかな

と聞えさせ給へれば、御返し、

　かすむめる空の氣色は其れながら我身一つの有らずもあるかな

と聞えさせ給へれば、哀れと思召さる。中宮には年さへ隔たりぬるを、盡きせず哀れに思召されて、唯だ御行ひにて過ぐさせ給ふ。正月十五日、一條院の御念佛に、殿ばら皆參らせ給へり。月のいみじう澄み昇りてめでたきに、事果てて出でさせ給ふとて、殿の御前、

　君在さぬ宿には月ぞひとり住む舊き宮人立ちも留まらで

との給はすれば、侍從中納言、

　去年の今日今宵の月を見し折に斯からんものと思ひ掛けきや

はかなくて司召の程にも成りぬれば、世には司召と喧騷るにも、中宮世の中を思し出づる御氣色なれば、藤式部、

　雲の上を雲の外にて思ひやる月は變らず天の下にて

哀れに盡きせぬ御事どもなりや。宮の御前、返す返す思し歎かせ給ひて、大殿籠りたる曉方の御夢に、院の仄かに見えさせ給ひければ、

有様ども、塵などのやうに見えて哀れなり。萬づ物の興無く、口惜しとも疎かなり。一天下の物歎きに為したり。萬づ夜居して、今はになる程に、斯かる事の出で來たるを、いといみじき世間の大事なり。はかなく月日も過ぎて、年號變りて、明くる年長和元年と云ふ。元三日の有様、例年ならましかば如何にめでたからまし。一品の宮あて、殿上にも出でさせ給はず、歎き沈ませ給ふ。いと口惜し。御侍の殿は、上の御局におはしませど、中宮は宮居して籠居させて、渡らせ給はず。宮達も參らせ給へる御有様、いといとめでたし。上への女房達、さまざまの世の儀に引き出て聞えさせて、中頃となりては、殿様に宮達おはしますやうも無し。村上の先帝こそ、宮達多くおはしましたなど、をかしう、女房も朝夕用意したりけれ。寛平の御時なども、猶をかしき事ども有りけれ。先づは弘徽殿の御子達、いみじう好色をかしうおはし在さひて、斯く、

来や来やと待つ夕暮と今はとて歸る朝と何れ勝れり

と云ふ歌を、知り通ひ給ひける所々に遣はしたりければ、本院の侍従と云ふ人、斯くぞ聞えたりける。

夕暮は頼む心になぐさめつ歸るあしたは消ぬべきものを

とか。是れぞ、有るが中に、をかしく思されけるなど、昔事を云ひ出でつつ、宮宮の御有様を聞え合へり。猶この御中に、式部卿の宮は、心殊におはしますかしなど聞ゆれば、さて中務の宮は稚くやおはします。兵部卿の宮は幼くしうおはしますなど、各思ひ思ひに聞えさするをかし。御侍の殿の女房、常よりも人目繁き心地して、例のやうにも聞えさせずぞ有める。さて世の中には、今日明日、后立たせ給ふべしとの

ぬ。內裏に參らせ給ひて、おはしましつる事どもを申させ給ひて、猶如何がとこそ見奉り侍りつれ、折しもいみじかるべき事かな、天下の大事にこそ侍らめと申させ給へば、とまれ斯うまれ、參りて見奉らで有べき事にもあらず、吉き日して、今日明日の程に、行幸あるべき由を仰せらるれば、大殿、其れ實にさぶらふべき事なれど、すべて行幸は思し掛けさせ給ふべきに有らず、御物怪いといと恐ろしう見奉らせ給ふとも、御心地の例におはしまさばこそ有らめ、など申させ給ふにつけても、哀れに思召されて、打泣かせ給ふも、いみじき道理の御有樣なり。斯かりとて、御禊の事ども、思し急ぎまず準備がせ給ふ。御禊の女御代には、宣耀殿の出でさせ給ふべき御定ありて、準備がせ給ふ。斯かる程に、十月廿四日、冷泉院崩せさせ給ひぬ。哀れに悲しなど聞えさするも疎かなり。內にいみじう思し歎かせ給ふ。然べき宮達も皆亡せ果てさせ給ひて、唯だ此帝のみこそはおはしますぞいみじう。おはせぬ宮達をば何にかせん、年頃もこそおはしましつれ、斯く御位に即かせ給ひて後しも、斯うおはしませば、御禊、大嘗會の急ぐ方こそ有れ、崩せさせ給ひぬる院の御穢りもいみじう、當代の御爲にも、いとさまざま哀れに見えさせ給ふ。然るに年頃は、司召にも、先づ卑しき國をも、院分と撰り奉らせ給へれば、我が御代にだに、如何で善きをとこそ思ひつれ、口惜しく哀れに思召さる、此大事ども、明年にこそは有らめ、先づ御葬送の事など、萬づに大殿のみぞ掟て仕うまつらせ給ふ。內には我が御代りと思召して、宮宮に、御送りせさせ給ふ可う、掟て申させ給ふも、いみじう哀れにめでたし。續後の御事どもも、哀れにめでたくせさせ給ふべし。世の中皆諒闇になりぬ。殿上人の橡の袍の

榮華物語　中卷

日かげのかづら

寬弘八年六月十三日御讓位、十月十六日御即位なり。前前は見ねば知らず、此度はいみじうめでたし。帝もいみじう整ひ調ほり、雄雄しうめでたくおはします。大殿などを、並べてならず、いみじうおはしますと見奉り思ふに、事限り有りければ、御輿の後に歩ませ給ひたるこそ、あぢきなき事なりけれ。さるは、御有樣などは、何ぞの帝に、斯ばかりめでたき御有樣にこそと、見奉り思ふに、口惜しうこそ。忠實には、多數の上達部、殿上人、御送り仕うまつり給ひて、御輿の捧げられ給へる程こそ、猶限り無き十善の王におはしますめれ。斯くて、今は御禊、大嘗會など、公私の大きなる事に思し騒ぐに、折しも有れ、此頃、冷泉院惱ませ給ふと云ふ事こそ出で來たれば、世にいみじき事なり。常の御有樣なれば、然りとも怪しうはおはしまさじなど、思し急めど、猶覺束なしとて、殿の御前參らせ給ひて、見奉らせ給へば、いみじう苦しげなる御氣色におはしますを、如何に如何にと見奉らせ給ふ程に、聲をぞ放ち上げて、歌はせ給ひける。珍らしき事ならねど、あないみじのわざやと見えさせ給へば、猶御氣色なども例の御有樣には違らせ給ふと、殊に見えさせ給へば、いと憂たて覺えさせ給ふに、さすがに見知り奉らせ給へるも、恐ろしうて、急ぎ出でさせ給ひ

「附記、右の挿繪は出雲寺屋版の古抄八册本「榮華物語」から撮影に適したるものだけを撰んで複製した。」

挿繪目次

榮華物語中卷目次

栄花物語

日本古典全集刊行會板

日本古典全集

與謝野寛
正宗敦夫 編纂
與謝野晶子 校訂

榮華物語 中卷